

第 III 部 2008-2009 年度における各教員の活動

01 言語学

教授 **上野 善道** UWANO, Zendo

1. 略歴

- 1970年 5月 東京大学文学部言語学専修課程 卒業（文学士）
- 1973年 3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程 修了（文学修士）
- 1973年 9月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程博士課程 中途退学
- 1973年 10月 東京大学文学部助手 採用（言語学研究室）
- 1975年 4月 弘前大学人文学部専任講師 昇任（国語学研究室）
- 1976年 10月 金沢大学法文学部専任講師 併任（言語学研究室）
- 1977年 4月 金沢大学法文学部専任講師 転任（言語学研究室）
- 1979年 4月 金沢大学法文学部助教授 昇任（言語学研究室）
- 1980年 4月 金沢大学文学部助教授 配置換（言語学研究室）
- 1981年 4月 東京大学文学部助教授 併任（言語学研究室）
- 1982年 4月 東京大学文学部助教授 配置換（言語学研究室）
- 1994年 4月 東京大学文学部教授 昇任（言語学研究室）
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 配置換（言語学研究室）
- 2004年 4月 国立大学法人 東京大学教授 大学院人文社会系研究科（言語学研究室）
- 2009年 5月～ 2009年 9月 英国 オックスフォード大学東洋学部 客員研究員
- 2010年 3月 東京大学 定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学，日本語学，方言学。特に音声学，音韻論。

b 研究課題

琉球諸方言を含む日本語全体のアクセント研究。

現地調査による各地のアクセント体系の解明と、多量の語彙を含む種々のアクセント現象の記述を目的とし、その成果を論文と資料集の形で公にすることを自らに課している。（ただし、機会を見ては発表を続けているものの、入力に割く時間が年々取りにくくなり、多量の手書き調査資料が入力の目処の立たないまま残っている点が問題。）

また、数年前から世界の諸言語のアクセント研究への貢献も課題の一つと考え、海外での会議・学会に参加しては、方言と文献資料の両面で長い歴史をもつ日本のアクセント研究を紹介し、さらに自分の研究成果やアクセント観も発表している。

【研究課題の解説】

日本語のアクセントは、全国的な分布と平安時代からの歴史が一通り分かっていると言われるものの、実は2拍名詞を中心とする範囲に過ぎず、長い単語を含む全体的な体系は不明の点があまにも多い。とりわけ琉球諸方言のアクセントは、一般言語学的に見て興味深い現象が多々あるにもかかわらず、アクセント体系などの基本的な事柄さえまだ一部しか分かっていないのが現状である。その一方で、方言自体が全国的に消滅の危機に瀕している、という現実がある。

このような現況を踏まえ、毎年全国各地の方言の現地調査を実施してそのアクセント体系を解明するとともに、重要地点では万単位の語彙を調べ、機会のある限りそれを公表してきた。その結果、多くの地点で従来の報告を大幅に訂正・増補したにとどまらず、これまで知られていなかった独自の体系の存在をいくつも明らかにし、それらを組み込んだアクセント史の書き替えも行なっている。

最終的な目標は、これらすべての資料と文献資料とを合わせて日本語アクセントの全体的な歴史を再構成すること、および、アクセントを含む日本語の韻律特徴の特質を明らかにして世界の諸言語の中にしかるべく位置付けることにある。

c 主要研究業績

(1) 論文

「通時的にしか説明できない共時アクセント現象——句頭の上昇と語音の関係——」、『月刊言語』、38/2、74-81 頁、2009.2

「服部音韻論の再評価」、『東京大学言語学論集』、28、219-246 頁、2009.9

「句頭の上昇は語用論の意味による」、『月刊言語』、38/12、84-85 頁、2009.12

(2) 啓蒙

「母は昔はパパだった、の言語学」、大津由紀雄編『ことばの宇宙への旅立ち 10 代からの言語学』、ひつじ書房、31-72 頁、2008.2

(3) 研究報告書

「青森市方言後部 2 拍複合名詞のアクセント規則——資料編(3)——」、『日本海域研究』39、101-116 頁、2008.3

「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(7)」、『琉球の方言』32、1-40 頁、2008.3

「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(8)」、『東京大学言語学論集』27、267-307 頁、2008.9

「青森市方言後部 2 拍複合名詞のアクセント規則——資料編(4)——」、『日本海域研究』40、155-168 頁、2009.3

「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(9)」、『琉球の方言』33、99-123 頁、2009.3

「琉球与那国方言のアクセント資料(1)」、『琉球の方言』34、1-30 頁、2010.3

「青森市方言後部 2 拍複合名詞のアクセント規則——資料編(5)——」、『日本海域研究』41、99-113 頁、2010.3

(4) 学会発表

「"The Accent System of the Yonaguni Dialect of Japanese"」、13th Methods Conference、University of Leeds、Great Britain、2008.8.6

「服部四郎の音研究から何を学ぶ」、服部四郎生誕 100 年記念シンポジウム、東京言語研究所主催、東京大学言語学研究室協賛、工学院大学、2008.8.30

「日本語における句頭の上昇について(On the Phrase-initial Rise in the Accent of Tokyo Japanese)」、12th International Conference of the EAJIS、2008.9.21

「通時的にしか説明できない共時的アクセント現象」、日本語学会公開講演、岩手県公会堂、2008.11.2

「服部四郎の言語研究と音韻論」、関西音韻論研究会、神戸大学文学部、2008.12.20

「"Accentual Changes in the Yonaguni Dialect of Japanese"」、2nd International Conference on Literature、Languages & Linguistics、Athens、Greece、2009.7.14

「標準語アクセントのとらえ方」、英国日本語教育学会(BATJ)、シェフィールド大学、2009.8.28

「"On the reconstruction of Japanese Accents"」、International Workshop on "the History & Reconstruction of Japanese Accent"、INALCO、Paris、2009.9.7

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本語学会」、役員・委員、会長 2008.4~2009.3、顧問・評議員 2009.4~2010.3

「日本語学会」、役員・委員、理事 2008.4~2009.5、評議員 2008.4~2010.3

「日本音声学会」、役員・委員、理事 2008.4~2009.3、評議員 2008.4~2010.3

(2) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「文部科学省」、科学技術・学術審議会専門委員 (学術分科会)、2008.2~2009.1

「人間文化研究機構」、日本語科学研究・大学共同利用機関構想懇談会メンバー、2008.2~2008.3

「人間文化研究機構」、大学共同利用日本語研究機関次期所長選考会議委員長、2008.4~2008.5

「人間文化研究機構」、大学共同利用日本語研究機関設置準備委員会委員、2008.4~2009

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営諮問委員会委員 2008.4~2010.3

東京言語研究所運営委員会委員 2008.4~2010.3

日本学術会議連携会員 2008.4~2010.3

金田一京助博士記念賞選考委員 2008.4~2010.3

「NHK 放送文化研究所」、『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員、2008.5~2010.3

「人間文化研究機構」、大学共同利用日本語研究機関準備室員、2008.6~2009

「坂口国際育英奨学財団」、審査委員、2009.3~

教授 熊本 裕 KUMAMOTO, Hiroshi

Personal web site : <http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/~hkum>

1. 略歴

- 1974年 3月 東京大学文学部言語学専修課程卒業 (文学士)
- 1974年 4月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程入学
- 1976年 3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了 (文学修士)
- 1976年 4月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程入学辞退
- 1976年 4月 東京大学文学部助手 (言語学研究室)
- 1976年 8月 東京大学文学部助手 休職 (海外研究のため) ~1979年 8月 (休職期限につき退職)
- 1976年 9月 米国ペンシルヴェニア大学大学院東洋学科博士課程入学
- 1982年 12月 米国ペンシルヴェニア大学大学院東洋学科博士課程修了 (哲学博士)
- 1983年 4月 四天王寺国際仏教大学文学部助教授 ~1989年 3月
- 1989年 4月 東京大学文学部助教授 (言語学)
- 1994年 6月 東京大学文学部教授
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (言語学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

イラン言語学、特に中央アジア出土の中期イラン語であるコータン・サカ語文献の解明。

b 研究課題

中央アジアの遺跡(いわゆるシルクロード)から発掘されて、20世紀に初めて解読された言語の一つであるコータン・サカ語の研究に従事し、過去十数年、世界各地の博物館や研究所に保存された写本を調査し、そのうちのいくつかは初めて解読し出版した。90年代は主としてペレストロイカ以降ようやく外部に解放されたロシア所蔵の写本を対象に、現地の研究者と共同研究を行った。現段階では、現存するコータン・サカ語文献の全体像がようやく明らかになったといえる。すなわち、今の段階で欠けている、この言語の総合的な文法と辞書のための作業の土台が、ようやく整いつつある。この作業と平行して、かつて断続的に出版した、パリのフランス国立図書館所蔵のコータン・サカ語文書(Paul Pelliot 蒐集)の研究を改訂して、*Saka Documents Text Volume II* として準備中である。

c 主要業績

(1) 論文

“Sino-Hvatanica Petersburgensia, Part 2”, *Iranian Languages and Texts from Iran and Turan: Ronald E. Emmerick Memorial Volume*, edited by Maria Macuch, Mauro Maggi and Werner Sundermann, pp.147-159, Wiesbaden: Harrassowitz, 2008.12

“The Injunctive in Khotanese”, *East and West. Papers in Indo-European Studies*, ed. By Kazuhiko Yoshida and Brent Vine, pp.133-149, Bremen: Hempen, 2009.5

“Paul Pelliot and the Deśanā-parivarta of the Suvarṇabhsa-sūtra”, *Bulletin of the Asia Institute* 19, pp.79-84, 2009.12

“A St. Petersburg Bilingual Document and Problems of the Chronology of Khotan”, *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 3, pp.79-84, 2009.12

教授 林 徹 HAYASI, Tooru

1. 略歴

- 1977年 3月 東京大学文学部言語学科卒業 (文学士)
- 1979年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程 (言語学専攻) 修了 (文学修士)

1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（言語学専攻）単位取得退学
1984年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
1989年7月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 併任
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野：言語学，チュルク語学

b 研究課題：ユーラシア周辺部チュルク諸語の記述研究

中国新疆ウイグル自治区南部のエイヌ語、中国甘粛省のサリグ・ヨグル語、そして、ドイツ・ベルリン市でトルコ系移民の話すトルコ語を主な対象とし、現地調査によって収集したデータによりながら、小規模な言語共同体が周囲の言語から導入した要素によって新たな用法を生み出す過程を明らかにしたいと考えている。

c 主要業績

(1) 著書

編著、梶茂樹・中島由美、「事典世界のことば141」、大修館書店、2009.4

(2) 論文

「トルコ語指示詞 *şu* の特徴」、東京大学言語学論集、Vol. 27、217-232 頁、2008.9

「Is Eynu a mixed language, a borrowed lexicon, or something else?」、Turcological letters to Bernt Brendemoen, edited by E.A. Csato, Gunvald Ims, Joakim Parslow, Finn Thiesen, and Emel Turker (Oslo: Novus Press)、pp.121-132、2009.2

「トルコ語指示詞の選択における話者の判断のばらつき」、東京大学言語学論集、Vol. 28、267-282 頁、2009.9

「指示詞の選択から見たイスタンブルとベルリンのトルコ語」、東京大学言語学論集、Vol. 29、17-28頁、2010.3

(3) 予稿・会議録

「Nativization in the phonology of Chinese loanwords into Modern Uyghur」、Essays on Turkish linguistics: Proceedings of the Fourteenth International Conference on Turkish Linguistics, August 6-8, 2008, edited by Sila Ay et al. (Wiesbaden: Harrassowitz Verlag)、pp. 393-402、2009.

(4) 監修

(5) 学会発表

「交差する言葉、葛藤する人々：ベルリン・クロイツベルクに暮らすトルコ系住民の言語生活」、グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文科学国際教育研究拠点」「コンフリクトの人文科学」セミナー、大阪大学、2008.3.8

「Nativization in the phonology of Chinese loanwords into Modern Uyghur」、The 14th International Conference on Turkish Linguistics, Antalya, Department of Linguistics, Ankara University、2008.8.7
招待講演、「個別言語の理解に繋がる言語学概論」という選択肢、日本言語学会第139会大会（公開シンポジウム）、神戸大学、2009.11.30

(6) 会議主催（チェア他）

「The 14th International Conference on Turkish Linguistics」、チェア、Antalya, Department of Linguistics, Ankara University、2008.8.6～2008.8.8

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京言語研究所セミナー、2009.4～2009.4

日本大学文理学部非常勤講師、2009.4～2009.9

(2) 学会

「日本言語学会」、役員・委員、会計監査委員、2009.4～

「社会言語科学会」、役員・委員、編集委員、2009.4～

1. 略歴

- 1984年3月 東京大学文学部英語英文学専修課程卒業
- 1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程入学
- 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻修士課程修了
- 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程進学
- 1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英文学専攻博士課程退学
- 1989年4月 実践女子大学文学部英文学科専任講師
- 1992年4月 東京大学教養学部助教授
- 1993年4月 東京大学大学院総合文化研究科専攻助教授
- 2004年4月 東京大学人文社会系研究科助教授 併任
- 2004年9月 東京大学人文社会系研究科助教授 (現在に至る)

2. 主な研究活動

- a 専門分野：言語学、意味論、認知文法
- b 研究課題：文法の意味的基盤

認知文法の観点からさまざまな文法現象の意味的な基盤を明らかにすることを目標として研究を進めてきた。これまでに分析の対象にしてきた主な現象は、日英語の使役構文、項構造の交替、文法関係などである。近年は認知言語学の分野でその遍在性、重要性が新たに注目されている換喩 (metonymy) の本質を解明し、それに基づいて従来別々に扱われてきた多くの文法現象を統一的に把握し直すことを目指している。

c 主要業績

(1) 論文

- 「Metonymy Underlying Grammar」、ENERGEIA (ドイツ文法理論研究会)、33、15-26 頁、2008
- 「換喩の認知言語学」、ことばのダイナミズム、71-88 頁、2008
- 「認知言語学と日本語」、日本語学、特集 言語理論と日本語、14-22 頁、2009

(2) 書評

「Steven Pinker『思考する言語 (The Stuff of Thought の和訳)』」、NHK 出版、2009、一般雑誌、『月刊言語』11月号、95 頁、2009

(3) 学会発表

- 「認知意味論から見た意義素論」、服部四郎生誕 100 年記念シンポジウム「意義素論の今日的意義」、工学院大学新宿キャンパス、2008
- 「ダイクシスと主観性」、文法学研究会 2008 年度連続公開講義、東京大学本郷キャンパス、2008
- 「言語研究のおもしろさ」、東京言語研究所 2009 年度春期特別講座、2009
- 「英語学 (言語学) 研究者は英語教育にどのように貢献できるか?」、日本英文学会第 81 回大会シンポジウム「英語? 英米文学研究を英語教育にどう活かすか」、東京大学駒場キャンパス、2009
- 「意味を構築する仕組みとしての文法」、文法学研究会 2009 年度連続公開講義、東京大学本郷キャンパス、2009
- 「文法と比喩」、日本フランス語学会 2010 年度シンポジウム「フランス語学と意味の他者」、早稲田大学早稲田キャンパス、2010

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京言語研究所理論言語学講座講師、2008.4~

(2) 学会

- 「日本言語学会」、評議員 2009.4~、大会運営委員 2008.4~2010.12

02 考古学

教授 今村 啓爾 IMAMURA, Keiji

1. 略歴

- 1970年 4月 東京大学文学部考古学専修課程卒業
- 1970年 5月 東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程修士課程入学
- 1972年 3月 東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程修士課程修了
- 1972年 4月 東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程博士課程進学
- 1974年 6月 東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程博士課程退学
- 1974年 7月 東京大学理学部人類学教室助手
- 1978年 4月 東京大学文学部考古学研究室助手
- 1991年 4月 東京大学文学部助教授
- 1994年 6月 東京大学文学部教授
- 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2010年 3月 東京大学大学院人文社会系研究科定年退職

2. 主な研究活動

- a 専門分野 日本とアジアの考古学
- b 研究課題

これまでの私の縄文土器関係研究論文を収録し、新たに5章の書きおろし部分を加えた『土器から見る縄文人の生態』を出版し、博士学位論文とした。土器のシステムティックな操作によって、文字に記されなかった人間の生き様と豊かな歴史像が読み取れることを示すことを基本的目的とする著作である。また、多くの研究者の協力によってこの視点をさらに発展させる『異系統土器の出会い』の出版準備を進めた。

そのほかヨーロッパの先史時代との比較などから縄文文化の本質について考える論文など、概括的な論考が多かったのは、定年退職を前にして広く研究を回顧する機会が多かったこととも関連する。

ベトナムで開催された2回の国際学会に出席し研究発表を行ったことも、これまでのベトナムでの調査研究のまとめという意味あいがあるが、2009年度より新たな課題で科学研究費補助金の交付を受け、南中国から東南アジアに分布する銅鼓研究の全面的再検討を開始するなど、さらなる展開を図っている。

c 主要業績

(1) 著書 (単著)

『土器から見る縄文人の生態』 519頁 2010年3月 同成社

(2) 論文

「縄文時代の人口動態」『縄文時代の考古学』10巻 63-73頁 2008年4月 同成社

「縄文文化論—ヨーロッパのクリとクルミは栽培植物」『考古学ジャーナル』594号 31-34頁 2009年12月

「ヨーロッパ考古学における時代区分と縄文時代」『比較考古学の地平』57-67頁 2010年2月 同成社

「縄文文化論—縄文土器と芸術的創造」『考古学ジャーナル』597号 1-3頁 2010年2月

The distribution of bronze drums of the Heger I and Pre-I types: temporal changes and historical background. 『東京大学文学部考古学研究室紀要』24号 29-44頁 2010年3月

「縄文時代観の形成」『縄文時代の考古学』第1巻 (比較文化論による相対化) 33-49頁 2010年6月 同成社

(3) 学会発表

Maritime diffusion of a pottery tradition in prehistoric Japan: A referential aid for research into the origin of the Sa-huynh culture. Conference on “100 year-Discovery and Study of San Huynh” (ベトナムクアングアイ市) 2009年7月24日

Pitfall hunting in the Upper Palaeolithic and Jomon periods in Japan. 19th Indo-Pacific Prehistory

Association Congress. (ベトナムハノイ市) 2009年11月29日-12月5日

3. 学外での主要な活動

駒沢大学非常勤講師 2008、2009年度
史学会理事 2008、2009年度

教授 **大貫 静夫** ONUKI Shizuo

1. 略歴

1971年3月 千葉県県立千葉高等学校 卒業
1971年4月 東京大学文科3類 入学
1975年3月 東京大学文学部考古学専修課程 卒業
1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程修士課程修了
1984年6月 東京大学大学院人文科学研究科考古学専門課程博士課程退学
1984年7月 東京大学文学助手 (東京大学遺跡調査室)
1986年5月 東京大学文学部附属北海文化研究常呂実習施設に配置換え
1994年4月 東京大学文学部助教授 (考古学)
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (考古学)
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (考古学)

2. 主な研究活動

a 専門分野 東北アジア考古学

b 研究課題

日本列島を含む環日本海の定着的食料採集社会の成り立ち、およびその変容過程を考古資料によって明らかにすることを主な研究課題としている。そのために考古資料からだけでは限界のある極東の先史社会復元を目的とした北方少数民族の伝統的な生業および居住形態の研究を最近おこなってきた。昨年度からは、変容過程を考える際に重要となる中国中原勢力の東方進出を考古学的に明らかにする作業を始めた。日本列島の弥生時代の開始年代の見なしもこれと連動して再考している。

c 主要業績

(1) 論文

「双房型壺を副葬した石棺墓の年代」、新弥生時代のはじまり第3巻、90-113頁、2008.5

「挾婁の考古学」、国立歴史民俗博物館研究報告、151、129-160頁、2009.3

(2) 予稿・会議録

一般講演、「東シベリアとアムール下流域との先史狩猟採集民間にみられる交渉関係史の解明」、日本考古学協会2008年度総会研究発表会、東海大学、2008.5.25、「日本考古学協会2008年度総会研究発表会発表要旨集」、2008.5

招待講演、「中国考古学における「文化」と「類型」」、第32回韓国考古学全国大会、韓国・春川市、2008.11.7、「第32回韓国考古学全国大会発表資料集」、2008.11

一般講演、「シャバラフ・ウス遺跡群の再検討」、東京大学、2009.2.21、「第10回北アジア調査研究報告会」、41-44頁、2009.2

一般講演、「マラヤガバニ遺跡における考古学的調査(2008年度)」、東京大学、2009.2.21、「第10回北アジア調査研究報告会」、5-8頁、2009.2

(3) 書評

「甲元真之『東北アジアの初期農耕文化と社会』」、同成社、2008.8、学術論文誌、『季刊考古学』、106、108頁、2009.2

(4) 啓蒙

「『文化』のある国と『文化』のない国」、学術論文誌、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、21号、19-24頁、2008.3

「幻の報告書」、学術論文誌、『史学雑誌』、118 編 3 号、31-33 頁、2009.3

3. 主な活社会活動

(1) 他機関での講義等

明治大学非常勤講師、2008.4～2009.3

教授 **佐藤 宏之** SATOU, Hiroyuki

1. 略歴

- 1982 年 3 月 東京大学文学部考古学専修課程 卒業
- 1982 年 4 月 財団法人東京都埋蔵文化財センター調査員
- 1988 年 4 月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程入学
- 1991 年 3 月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程修了
- 1991 年 4 月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程入学
- 1994 年 3 月 法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻博士後期課程修了、博士(文学)取得
- 1994 年 4 月 財団法人東京都埋蔵文化財センター副主任調査研究員
- 1997 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 1997 年 5 月 東京大学文学部附属北海文化研究常呂実習施設助教授
- 1999 年 4 月 東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授
- 2003 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
(新領域創成科学研究科助教授併任、2004 年 3 月まで)
- 2007 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 研究活動

a 専門分野

先史考古学、民族考古学、人類環境史

b 研究課題

- (1) 日本列島および東アジアの旧石器時代における石器技術論、行動論、遺跡形成論的研究。
- (2) 生業・居住形態等に関する民族考古学的研究。
- (3) 民俗知の環境論的研究。

c 主要業績

(1) 著書

編著、「縄文化の構造変動」、六一書房、2008.9

編著、「環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動」、総合地球環境学研究所、2008.11

編著、「日本列島北部の更新世/完新世移行期における居住形態と文化形成に関する総合的研究」、東京大学大学院人文社会系研究科、2009.3

共編著、高橋啓一・出穂雅実編著、「北海道忠類ナウマンゾウ産出地点の再調査報告」、化石研究会、2010.3

(2) 論文

「日本列島における東北地方の考古学的位置」、東北芸術工科大学東北文化研究センター紀要、7、25-31 頁、2008.3

「東アジアにおける後期旧石器時代の形成」、異貌、26 号、2-15 頁、2008.5

「Ethnoarchaeology of trap hunting among the Matagi and the Udehe, traditional hunting peoples living around the Sea of Japan」、Senri Ethnological Studies、72、pp.25-46、2009.1

「地考古学が考古学に果たす役割」、第四紀研究、48 巻 2 号、77-83 頁、2009.4

「東アジア型ハンドアックス石器群の展開」、物質文化史学論聚、45-55 頁、2009.6

「東アジアにおける前期旧石器時代から後期旧石器時代開始期までの研究の現状と展望——東アジア世界の成立——」、九州旧石器、13 号、1-7 頁、2009.12

- 「東アジアにおける削片系細石刃石器群の伝播」、比較考古学の地平、895-904 頁、2010.2
- 「Social complexity and organization in Paleolithic of Eurasia」、Al-Rafidan、Special Issue、pp.21-24、2010.3
- (3) 総説・総合報告
- 「北海道における考古学的黒曜石研究の現状と課題」、『旧石器研究』4、107-122 頁、2008.5
- 「民族考古学」、縄文の考古学、12 巻、13-23 頁、2010.1
- (4) 研究報告書
- 「環日本海地域における細石刃石器群の<伝播>と構造変動」、<伝播>を巡る構造変動-国府石器群と細石刃石器群、96-109 頁、2008.4
- 「野生動物の保護管理問題と科学の方法」、少子高齢化時代における持続的資源利用型狩猟システムの開発に関する新領域形成、18-20 頁、2009.3
- 「日本列島における中期/後期旧石器時代移行期の石器群と竹佐中原遺跡」、長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化 2、365-372 頁、2010.3
- (5) 学会発表
- 「サハラ中世遺跡の考古学的調査」、シンポジウム「中世総合資科学の実践 間宮海峡から琉球弧へ」、東洋大学、2008.1.12
- 「地考古学が考古学に果たす役割」、日本第四紀学会シンポジウム「考古遺跡から何がわかるか Geoarchaeology」、東京大学、2008.2.2
- 「旧石器時代に"部族"の可能性を探る」、特定領域研究公開シンポジウム「西アジア部族社会とビシュリ山系」、池袋サンシャインシティ、2008.2.16
- 「マラヤ・ガバニ遺跡における考古学的調査(2007 年度)」、第 9 回北アジア調査研究報告会、北海道大学、2008.3.15
- 「サハラ南部東海岸における中世遺跡の調査」、第 9 回北アジア調査研究報告会、北海道大学、2008.3.15
- 「2007 年度沿海州ハサン地区一般調査報告」、第 9 回北アジア調査研究報告会、北海道大学、2008.3.15
- 「環日本海地域における細石刃石器群の伝播と構造変動」、公開シンポジウム「伝播を巡る構造変動」、東京大学、2008.4.27
- 「東シベリアとアムール下流域との先史狩猟採集民間にみられる交渉関係史の解明」、第 75 回日本考古学協会総会、東海大学、2008.5.25
- 「Landscape evolution and culture changes in Upper Paleolithic of northern Japan.」、International Symposium "The Current Issues of Paleolithic Studies in Asia and Contiguous Regions"、Russia, Altai、2008.6.26
- 「北海道、忠類ナウマンゾウ産出地点における地質調査」、「日本列島における人間——自然相互関係の歴史的・文化的検討」全体集会、総合地球環境学研究所、2008.12.6
- 「マラヤガバニ遺跡における考古学的調査(2008 年度)」、第 10 回北アジア調査研究報告会、東京大学、2009.2.21
- 「教科書改訂への提言 旧石器時代——小学校 6 学年 社会科(歴史)教科書を考える」、第 75 回日本考古学協会総会、早稲田大学、2009.5.31
- 「The process of Jomonization: correlation between prehistoric human cultures and environmental change in Pleistocene-Holocene transition in Japan」、International Symposium "Environment Development of East Asia in Pleistocene-Holocene、Vladivostok, Russia、2009.9.14
- 「民族考古学からみた縄文文化の構造変動——狩猟採集民の定住行動——」、日本考古学協会 2009 年度山形大会シンポジウム、東北芸術工科大学、2009.10.17
- 「Interim report on the excavation of the Yoshiizawa site in Hokkaido, northern Japan」、International Symposium on Paleoanthropology in Commemoration of the 80th Anniversary of the Discovery of the First Skull of Peking Man、古脊椎動物与古人類研究所、2009.10.21
- 「東アジアの土器の始まり——ロシア極東を中心に——」、シンポジウム「世界の土器の始まりについて」、古代オリエンタ博物館、2009.10.31
- 「Social complexity and organization in Paleolithic of Eurasia」、部族社会の形成-シリア、ユーフラテス河中流域の総合研究、池袋・サンシャインシティ文化会館、2009.11.21
- 「東アジアにおける前期旧石器時代から後期旧石器時代開始期までの研究の現状——東アジア世界の成立と

展開——」、第 35 回九州旧石器文化研究会鹿児島大会、指宿市考古博物館、2009.12.5

「Tephrochronology and human activities of Late Pleistocene in Kyushu Island, Japan」、Indo-Pacific Prehistory Association, 19th Conference、ベトナム社会科学院考古研究所、2009.12.5

「2009 年度クニャーゼ・ヴォルコンスコエ 1 遺跡の調査について」、第 11 回北アジア調査研究報告会、石川県立歴史博物館、2010.3.13

「Ethnoarchaeological research of the hunter-gatherer cultures in Russian Far East and its relationship with Jomon culture」、Japanese-Russian Joint Research Project “Cultural Adaptation in the Forest Areas in the Russian Far East” The First International Workshop、国立民族学博物館、2010.3.22

(6) 会議主催 (チェア他)

「日本第四紀学会シンポジウム『考古遺跡から何がわかるか Geoarchaeology』」、実行委員長、東京大学、2008.2.2

「シンポジウム『伝播を巡る構造変動』」、主催、東京大学、2008.4.27

「日本植生史学会第 23 回大会シンポジウム『環境変動と人間活動による植生の形成を読み解く』」、オーガナイザー、2008.11.15

「第 10 回北アジア調査研究報告会」、実行委員長、東京大学、2009.2.21～2009.2.22

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

立正大学非常勤講師、2008.4～

早稲田大学非常勤講師、2008.4～

(2) 学会

「日本考古学協会」、役員・委員、理事、2008.5～

「史学会」、評議員、2002.4～

「日本第四紀学会」、評議員・幹事、2007.8～

(3) 学外組織委員 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「北海道北見市」、常呂遺跡史跡整備専門委員会委員、1998～

「長野県埋蔵文化財センター」、竹佐中原遺跡等調査指導委員会専門委員、2000.9～2010.3

「群馬県みどり市」、岩宿文化賞選考委員、2008.7～

03 美術史学

教授 **小佐野 重利** OSANO, Shigetoshi

1. 略歴

1978 年 3 月 東京大学文学部美術史学科卒業 (文学士)

1978 年 4 月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学

1980 年 9 月 パドヴァ大学美術史学科専門課程 (Scuola di Perfezionamento)
(イタリア政府給費留学生) ～1982 年 10 月

1983 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (美術史学修士)

- 1983年4月 東京大学大学院博士課程 ～1985年4月15日
 1985年4月 東京大学文学部助手（美術史学科）～1987年3月
 1987年4月 多摩美術大学美術学部講師（西洋美術史）～1989年3月
 1989年4月 東京工業大学工学部助教授（一般教育等芸術）～1993年3月
 1993年4月 東京大学文学部助教授（美術史学科）～1994年6月
 1994年6月 東京大学文学部教授（美術史学科）～1995年3月
 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授に配置換え（文学部教授兼任）
 （1995年9月～12月 ジョン・ポール・グッティ財団グッティ美術史人文学研究所招聘研究者）
 2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部次世代人文学開発センター（先端構想部門）
 教授を兼任
 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科副研究科長（兼務）～2009年3月

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋近世美術史 イタリア中世・ルネサンス美術 アルプス南北の美術交流

b 研究課題

- ①イタリア中世末、ルネサンス期の美術を特に絵画史の観点から、古代美術および同時代のアルプス以北の美術との影響関係をも検討しながら幅広くかつ詳細に研究すること。
- ②西洋美術作品における身振り言語の機能に関して、隣接研究分野（文化史、民俗学、文化人類学、考古学、社会学、記号学）の先行研究成果も踏まえ、再検討を加え、新しい様式学および図像学的研究のモデルを模索研究すること。
- ③美術の展開に果たした芸術家の旅行の意義に関する包括的研究。
- ④ヴェローナの画家一門バディーレ家（14-16世紀）の包括的な作品現地調査・資料収集研究の継続。
- ⑤1880年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討 ——写真家アドolfo・ファルサーリとブルボン家エンリコ・バルディ伯爵の随臣アレクサンドロ・ツイレーリ伯爵の研究（研究代表者：平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）。
- ⑥国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化史的研究（研究代表者：平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）

c 主要業績

(1) 著書

編著、木下直之と共編、『死生学[4] ——死と死後をめぐるイメージと文化——』、東京大学出版会、2008.9

(2) 学術論文

「ウフィッツィ美術館所蔵《受胎告知》とフランドルの風景表現」、『文化交流研究』21、95-102頁、2008.3
 「ジョットとその遺産をふり振り返りみる」、『ジョットとその遺産展—ジョットからルネサンス初めまでのフィレンツェ絵画—』（展覧会カタログ）、18-28頁、2008.7

「ルネサンスにおける古代への憧憬—15世紀メディチ家の古代彫玉コレクションをめぐる—」、『カメオ展 宝石彫刻の2000年 ——アレクサンダー大王からナポレオン3世まで——』（展覧会カタログ）、33-39頁、2008.9

「国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化的研究（平成20-22年度科学研究費補助金「基盤研究（B）」の中間報告（1）」、『美術史論叢』25、146-158頁、2009.3

「The Present and Future of Research on Yokohama Photography: Insights Gleaned from the Latest Study of Adolfo Farsari」、『古写真研究 Old Photography Study』第3号、63-71頁、2009.5

「アントニオ・パッツィ自画像コレクションの実態——ウフィッツィ美術館自画像コレクション形成史との関係で——」、『美術史論叢』26、153-184頁、2010.3

「小説になる／ならないルネサンス画家——レオナルド・ダ・ヴィンチの場合——」、『文化交流研究』23、29-57頁、2010.3

(3) 監修

ブルーノ・サンティと共に、「ジョットとその遺産展——ジョットからルネサンス初めまでのフィレンツェ絵画」（展覧会監修）、アートプランニング、2008.7

(4) 解説

「ジュリオ・マンチーニ『絵画に関する諸考察』第10章」、『美術史論叢』24、130-110頁、2008.3

「ボッティチェルリの絵画鑑賞への誘い」、辻邦生『春の戴冠4』、467-477頁、2008.10

(5) 啓蒙

「はらかな都市——描かれた都市のユートピア——」、『地中海学会月報』306(2008/1)、5頁、2008.1

「美術史家の覚書 <1>あきめくら」、『西洋美術研究』No.15、244-245頁、2009.12

「静かに晴れわたるヴェネツィアの絵画」、『地中海学会月報』326(2010/1)、4頁、2010.1

(6) 研究報告書

『1880年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討——写真家アドルフォ・ファルサーリとブルボン家エンリコ・バルディ伯爵の随臣アレッサンドロ・ツイレーリ伯爵の日本での活動——』、平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書(課題番号17320025)(研究代表者 小佐野重利)、3-5、11-37、59-61、132-133頁、2008.3

(7) 学会発表

(8) 会議主催(チェア他)

鹿島美術財団主催 第38回東京美術講演会 総合テーマ『建築と景観——庭園からランドスケープへ——』、チェア、鹿島建設K Iビル、2009.10.28

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

イタリア文化会館特別講演、2008.9.13

東北大学大学院文学研究科・文学部非常勤講師(集中講義)、2009.7

ブリヂストン美術館地中海学会秋期土曜講座、2009.10.17

北見市・北見市教育委員会・東京大学文学部常呂実習施設「北見公開講座」、2009.12.11

(2) 行政

「文部科学省」、大学設置審議会分科会専門委員 2008.4~2010.3

「秋田県教育庁」、新県立美術館基本計画策定委員会委員、2008.7~2009.1

(3) 学会

「地中海学会」、常任委員、事務局長 ~2008.6

「国際美術史学会 CIHA」、一般会員、国内委員会事務局長、~2009.2

「国際美術史学会 CIHA」、委員、国内委員会代表、2009.2~

「美術史学会」、学会代表委員・常任委員、2009.6~

(4) 学外組織(学協会・省庁を除く)委員・役員

「鹿島美術財団」、選考委員、1999.4~

「独立行政法人国立美術館 国立西洋美術館」、評議委員会評議委員、2001.4~

「大塚美術財団」、評議員、2008.6~

「美術ファンクラブ」、理事、2009.1~

「損保ジャパン美術財団」、評議員、2009.3~

教授 **佐藤 康宏** SATO, Yasuhiro

1. 略歴

1973年4月 東京大学教養学部文科三類入学

1978年3月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業

1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程(美術史学専攻)入学

1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程(美術史学専攻)修了

1980年4月 東京国立博物館学芸部資料課に勤務(文部技官)

1981年4月 文化庁文化財保護部美術工芸課に出向

1989年10月 同上 絵画部門文化財調査官
1994年10月 東京大学文学部に出向（助教授）
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美術史学）
2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（美術史学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本美術史を専攻する。主たる分野は絵画・版画の歴史。

b 研究課題

室町時代末期から江戸時代初期にかけての風俗画、江戸中期の若冲・蕭白と浮世絵、中後期の南画をおもな研究領域としているが、近年は平安・鎌倉時代の絵巻や近代の洋画も論文の主題にするなど、論及の対象は拡大した。いわゆる<新しい美術史学>が提起した記号論、社会史、精神分析などの観点を日本絵画の解釈に生かすとともに、作品と文献史料の双方で絵画史研究のための基礎資料を整備することに努めている。

c 研究業績

(1) 著書

共著、*The History of Painting in East Asia: Essays on Scholarly Method*, Rock Publishing International, Taipei, 2008

単著、『日本美術史』、財団法人放送大学教育振興会、2008.9

(2) 学術論文（雑誌掲載および編著収録）

「蕪村が謝寅になるまで」、MIHO MUSEUM 『与謝蕪村一翫めぐる創意』（展覧会カタログ）、258-267頁、2008.3

「若冲の鶏」、秋篠宮文仁・西野嘉章編『鳥学大全』（東京大学総合研究博物館）、304-316頁、2008.3

「小林清親の東京名所図——《海運橋》を中心に」、『美術フォーラム21』、18号、55-59頁、2008.11

« Les peintres de Kyoto au XVIIIe siècle ou la peinture à l' époque de sa reproductibilité technique » , MIURA Atsushi ed., *Génétiq ue de la peinture: Actes du colloque international*, UTCP Booklet 16, pp.25-45, 2010.3

「若冲・蕭白とそうでないもの」、『美術史論叢』、26号、1-35頁、2010.3

(3) 書評

「塚本鷹充『崇高なる山水——中国・朝鮮、李郭系山水画の系譜』、大和文華館（展覧会カタログ）、2008.10、『國華』、1370号、51-52頁、2009.12

(4) 解説

「江戸美術の畸人たち」、『美術史論叢』、24号、17-45頁、2008.3

「浦上玉堂筆 山水画帖」、『國華』、1359号、27-29頁、2009.1

「黒田の身体 日出男の肖像」、『黒田日出男『王の身体 王の肖像』（ちくま学芸文庫）』、411-419頁、2009.2

「与謝蕪村筆 秋景山水図」、『國華』、1362号、20-23頁、2009.4

「菊池容齋筆 呂后斬戚夫人図」、『國華』、1370号、32-34頁、2009.12

(5) 啓蒙

「日本美術史不案内1 空間読めよ」、『UP』、439号、24-25頁、2009.5

「日本美術史不案内2 代理=表象」、『UP』、440号、26-27頁、2009.6

「日本美術史不案内3 トランジスタ・ラジオ」、『UP』、441号、28-29頁、2009.7

「日本美術史不案内4 交渉する画家」、『UP』、442号、32-33頁、2009.8

「日本美術史不案内5 世界の中心で、六甲嵐を叫ぶ」、『UP』、443号、18-19頁、2009.9

「若冲・蕭白だけじゃない 日本人の知らない日本美術の名匠」、『文藝春秋 special』、10号、160-165頁、2009.10

「日本美術史不案内6 ガラスのかげら」、『UP』、444号、28-29頁、2009.10

「日本美術史不案内7 美術史が新しくなったころ」、『UP』、445号、24-25頁、2009.11

「日本美術史不案内8 最古の洛中洛外図」、『UP』、446号、20-21頁、2009.12

「日本美術史不案内9 達磨」、『UP』、447号、26-27頁、2010.1

「日本美術史不案内10 真理なんてどうでもいいわけ?」、『UP』、448号、32 - 33頁、2010.2

「日本美術史不案内11 演技する精神」、『UP』、449号、26-27頁、2010.3

(6) マスコミ

新聞、「池大雅の「比叡山真景図」」、『東京新聞』・『中日新聞』、2008.2.16

インターネット、「俵屋宗達《風神雷神図屏風》——鉢巻をした雷神に見る聖と俗の美」、影山幸一「アート・アーカイブ探究」、2009.4.1

雑誌、「若冲との遭遇」、『電通報』、株式会社電通、2010.2.1

新聞、「『若冲屏風』は本人の作?」、『朝日新聞』朝刊、2010.5.1

(7) 学会発表

「18世紀京都の画家たち——複製技術時代の絵画」、シンポジウム「絵画の生成論」、東京大学駒場キャンパス数理科学科研究棟地階大講義室、2009.11.15

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

愛知県美術館特別講演、2008.2

社団法人如水会特別講演、2008.3

MIHO MUSEUM 特別講演、2008.5

板橋区立美術館特別講演、2008.5

放送大学委嘱教授、2008.10～

東京大学文学部特別講演、2009.8

和歌山県立博物館特別講演、2009.11

群馬県立館林美術館特別講演、2009.11

九州大学非常勤講師、2009.12

大東文化大学大学院特別講演、2010.1

(2) 行政

「文化庁」、文化財買取、文化財買取評議会委員、2008.1～2008.11

「文化庁」、文化財保護行政、国宝・重要文化財の指定などに関する審議、文化審議会専門委員（文化財部会）、2009.2～2010.2

「文化庁」、文化財買取、文化財買取評価委員、2009.9～2009.9

「文化庁」、文化財保護行政、国宝・重要文化財の指定などに関する審議、文化審議会専門委員（文化財分科会）、2010.2～2011.2

(3) 学会

「美術史学会」、役員・委員、査読委員、2008.1～2008.2

「美術史学会」、役員・委員、常任委員、2008.6～2012.6

「美術史学会」、役員・委員、査読委員、2009.1～2009.2

「美術史学会」、役員・委員、学術雑誌編集委員、2009.6～2011.6

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「國華編輯委員会」、編輯委員、2008.4～

「國華賞選衡委員会」、選衡委員、2008.4～

「倫雅美術奨励基金」、倫雅美術奨励賞候補者推薦委員、2008.4～

「鹿島美術財団」、推薦委嘱者、2008.4～

准教授 **秋山 聰** AKIYAMA, Akira

1. 略歴

1986年 3月 東京大学文学部卒業（文学士）

1989年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（文学修士）

1997年 2月 フライブルク大学哲学部 Ph.D

1997年 4月 電気通信大学電気通信学部助教授 ～1999年 3月

1999年4月 東京学芸大学教育学部助教授 ～2006年3月
2006年4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月～ 同上准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋美術史

b 研究課題

デューラーを中心とした中近世ドイツ美術、聖遺物と美術との相関性、イメージ（像）の生動性、比較宗教美術史

c 主要業績

(1) 著書

編著、with Kana Tomizawa (Kitazawa), *The Interrelationship of Relics and Images in Christian and Buddhist Culture*, Tokyo 2009.3

単著、『聖遺物崇敬の心性史 西洋中世の聖性と造形』、講談社 2009.6

編著、with Kana Tomizawa (Kitazawa), *Miraculous Images in Buddhist and Christian Culture*, Tokyo 2010.3

(2) 論文

「デューラーがケルンで見た絵：ケルン大聖堂、三王祭壇画について」、*SPAZIO*、67、ウェブ版、2008
「バンベルクの聖遺物展観とそのカタログーハンス・マイアー刊バンベルク聖遺物書を中心に」、*美術史論叢*、24、1-27頁、2008.3

“Boasting Line and Speed”, in: *LINEA F: Grafie di immagini tra Quattrocento e Cinquecento*, Padova 2008.10

“Comparative Art History in Japan: Present and Future”、*文化交流紀要*、20、2009.3

「西洋中世における像の生動性をめぐって」、*美術史論叢*、25、2009.3

“Interrelationship of Relics and Images in Christian and Buddhist Culture”, in: *The Interrelationship of Relics and Images in Christian and Buddhist Culture*, 2009.3

「聖遺物とイメージの相関性 東西比較の試み」、*死生学研究*、Vol.11、355-363頁、2009.3

「聖なる欠片からモノ（造形物）へ、あるいはその逆——初期中世の視覚文化における聖遺物とイメージ」、*死生学研究*、Vol.11、399-417頁、2009.3

「黄金の肌、光を放つ骨——中世の知覚における聖遺物と聖遺物容器の融合」、*死生学研究*、Vol.11、381-398頁、2009.3

「聖と俗のあわい——教会宝物を一例として」、*西洋美術研究*、15、8-15頁、2009.12

「礼拝像と奇跡 東西比較の試み」、*死生学研究*、12号、267-274頁、2009.12

「空間的イコン コンスタンティノポリスにおけるホデゲトリア・イコンによる奇跡の儀式」、*西洋美術研究*、15、40-63頁、2009.12

「中近世ヨーロッパにおける奇跡像——芸術と信仰のはざままで」、*死生学研究*、12、172-189頁、2009.12

「ヨーハン・ケーニヒ作『蠅のとまる紙片を持つデューラー』をめぐって」、*美術史論叢*、2010.3

(3) 予稿・会議録

一般講演、「Human Remains and Figurative Images: A Comparison between Buddhist and Christian Practice」、*Dialogue on Death & Life: Views from Egypt*, Bibliotheca Alexandrina, Alexandria, Egypt、2010.10.3、「International Symposium Dialogue on Death & Life: Views from Egypt」、pp.6-7（アラビア語および英語）、2010.9

(4) 啓蒙

「芸術家の神話学 19～38」、一般雑誌、『フェーマス』、2008年4月号～2010年3月号

「ルネサンス・バロック期の都市と美術」、『ルネサンス バロック 音楽大系 ～優美な旋律 華麗なる色彩の世界～』、12-17頁、2008.5

(5) 研究報告書

「聖遺物顕示とそのカタログについての美術史的観点からの包括的研究」、2009.2

(6) 学会発表

「礼拝像と奇跡 東西比較の試み」、公開・国際シンポジウム 礼拝像と奇跡 東西比較の試み、東京大学、2008.5.31

「Interrelationship of Relics and Images in Buddhist and Christian Traditions: Comparative and Performative Aspects」、*Spatial Icons: Textuality and Performativity*, Russian Academy of Arts, Moscow, 2009.6.23

「Human Remains and Figurative Images: A Comparison between Buddhist and Christian Practice」、*Dialogue on Death & Life: Views from Egypt*, エジプト、アレクサンドリア図書館、2009.10.3

(7) 会議主催 (チェア他)

「美術史学会第 61 回全国大会」、実行委員長、東京大学本郷キャンパスおよび駒場キャンパス、2008.5.30～2008.6.1

「公開・国際シンポジウム 礼拝像と奇跡 東西比較の試み」、実行委員長、東京大学本郷キャンパス法文 1 号館 1 番大教室、2008.5.31

(8) 受賞

「サントリー学芸賞 (社会・風俗部門) (第 31 回)」、聖遺物崇敬の心性史 西洋中世の聖性と造形、サントリー文化財団、2009.12.10

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

NHK 青山文化センターその他、2008.2

青山学院大学文学部非常勤講師、2008.4～2010.3

山形大学人文学部特別講演、2008.10

国立民族学博物館特別講演、2009.10

朝日カルチャーセンター新宿校その他、2009.12

一橋大学如水会セミナー、2010.2

(2) 学会

「美術史学会」、役員・委員、常任委員、2008.4～2010.3

「国際美術史学会 (C.I.H.A.)」、役員・委員、国内委員会委員、2009.8～2010.3

「地中海学会」、役員・委員、常任委員 2008.4～2010.3

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「Art in Translation」、Advisory Comitee Member、2010.2～2010.3

04 哲学

教授 **天野 正幸** AMANO, Masayuki

1. 略歴

1975年 9月 東京大学人文科学研究科博士課程 (哲学) 中途退学

1975年10月 山形大学人文学部講師 (倫理学)

1981年 4月 山形大学人文学部助教授 (倫理学)

- 1985年 4月 東北大学文学部助教授 (哲学)
1989年 4月 東京大学文学部助教授 (哲学)
1993年12月 東京大学文学部教授 (哲学)
1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (哲学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学, 特にギリシャ哲学

b 研究課題

プラトンの哲学および倫理思想の研究

3. 主な社会活動

(1) 学会

「哲学会」、役員・委員、理事、1989.4～

教授 **高山 守** TAKAYAMA, Mamoru

1. 略歴

- 1973年 3月 東京大学文学部卒業
1977年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
1982年 4月 南山大学文学部助教授
1988年 4月 東京大学教養学部助教授
1990年 4月 東京大学文学部助教授
1994年 4月 東京大学文学部教授
1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授、現在に至る
2001年 3月 京都大学博士 (文学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

ドイツ近代哲学

b 研究課題

概要

1) 因果必然性を理由必然性に解消することにおいて、必然性、偶然性、および、人間の自由というものの関係性を確定し、それぞれのあり方を明確化する。

2) とりわけ、人間が自由であるということの内実を浮き彫りにし、その自由論を家族論へと展開する。人間のもっとも基本的な自由のあり方を、家族というあり方のうちに見いだそうと試みる。家族なるものの崩壊が、人間の自由というものの、ひいては、人間のもっとも重要なあり方の崩壊につながりうるのではないか。

(以上、二つの課題遂行の基盤は、いずれもヘーゲル哲学である。)

c 主要業績

(1) 著書

単著、『因果論の超克——自由の成立に向けて——』、東京大学出版会、2010.1

(2) 論文

「Was ist die Zukunft der Geschichte? Ein Erdbeben für Hegel」、『Prognosen über Bewegungen』所収、2009.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等
東京芸術大学非常勤講師、2008.4～2009.3

(2) 学会

「日本哲学会」、役員・委員、会長、2008.4～2011.3
「哲学会」、役員・委員、理事、2008.4～2011.3
「日本フイヒテ協会」、役員・委員、委員、2008.4～2009.3
「日本ヘーゲル学会」、役員・委員、理事、2008.4～2011.3
「日本シェリング協会」、役員・委員、理事、2008.4～2011.3

教授 一ノ瀬 正樹 ICHINOSE, Masaki

1. 略歴

1981年 3月 東京大学文学部第一類哲学専修課程卒業
1984年 3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程修了
1988年 3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程単位取得満期退学
1988年 4月 東京理科大学工学部非常勤講師（～1991年3月）
1991年 4月 東洋大学文学部専任講師
1994年 4月 東洋大学文学部助教授
1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1997年 11月 東京大学より博士（文学）の学位を取得
2002年 7月 英国オックスフォード大学客員研究員（～2003年7月）
2007年 1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

概要と自己評価

古典イギリス経験論や現代英米哲学における知識と行為の問題を手掛かりにしつつ、因果性や人学概念についてテーマ研究を進めている。総じて、知識がそのつどいわば即興的に生成してくる場面に注目し、そこで「人格」による知識の所有が生じている次第を解明しつつ、こうした「人格」をこそ知識成立の「原因」と捉える、ただしそうした「人格」の他律的あり方も同時に射程に入れていく、という方向で議論を展開している。また、そのように即興的に生成してくる知識を「音楽」としても押さえ返すことで、新しい認識論の可能性も探っている。近年は、そのような新しい認識論構築の道程として、「意思決定理論」における因果概念と確率概念の絡み合いについて研究を進めている。そして、そうした研究の文脈に沿って、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」事業推進担当者としての活動の形で、医療的意思決定の問題にも研究領域を拡張している。さらには、死刑論や安楽死論にも議論を及ぼし、死を差し出す、自分の死を決定できる、という想念に巣くう「死の所有」の観念を指摘し、その構造の解明を試みていいる。

この二年間については、2008年11月から12月にかけて、イギリスに出張して、ロンドン大学LSE、ダラム大学、オックスフォード大学において講演を行い、多様な反応を受けたことが研究の面では大きかった。また、大学院での演習で「生物学の哲学」を主題として扱い、それに基づいて生命現象と偶然性・決定性概念との関わりについて長い論文を書くことができたことも特筆できる。これらの成果は、2011年に刊行された『死の所有』、『確率と曖昧性の哲学』という二つの単著に反映されている。また、2009年度の最後に、放送大学のテキストとして『功利主義と分析哲学——経験論哲学入門——』も上梓することができた。これは、テキストではあるが、これまで研究成果に基づいて、死刑論や確率・曖昧性などの不確実性の問題についての解説も加えて、学術的な意義も持たせた。今後は、因果論三部作の最後となる『原点と責任の迷宮』の完成に向けて、自由を規定する他行為可能性に対する条件文分析の手法の適用などを研究していくと同時に、「音楽化された認識論」のさらなる展開も目指したい。

c 主要業績

(1) 著書

単著、『功利主義と分析哲学——経験論哲学入門』、日本放送出版協会、2010.3

編著、『死生学 [5] 医と法をめぐる生死の境界』、東京大学出版会、2008.11

共著 『岩波講座哲学02 形而上学の現在』、岩波書店、2008.8

(担当部分・「曖昧性のメタフィジックス」、pp.187-212.)

共著 『生命科学と死生学の共働』、東京大学大学院人文社会系研究科、グローバルCOEプログラム

「死生学の展開と組織化」シンポジウム報告論集、2008.10

(担当部分・「はしがき：「氏」と「育ち」など)

(2) 論文

「個人と人格との相克 —— 刑事責任に見る近代の自律的人間観の陥穽とその超克」、論集、第26号、2008.3

「生命現象における決定性と偶然性 —— 遺伝子決定論から自然選択／遺伝的浮動の対比」、哲学研究論集、第5号、2008.10

「Wittgenstein and Meaning as Cause: A Philosophically 'Uncertain' Investigation」、Philosophical Studies、vol.27、2009.3

「Plato on Moral Dilemmas: On Schofield's arguments in his 'The Rule of Knowledge」、Philosophical Studies、vol.27、2009.3

「The Paradox of a Dead Person」、The Journal of Applied Ethics and Philosophy、vol.4、2009.7

「Freedom and Subvaluationism」、科学研究費補助金基盤研究(B)(118320005)研究成果報告書『知識・行為・制度をめぐる「因果性」と「志向性」の哲学的解明』、2010.3

「生命現象に基づく「自由」理解についての一考察」、哲学研究論集、第6号、2010.3

「Counterfactuals and Degrees of Truth」、Philosophical Studies、vol.28、2010.3

(3) 学会発表

「Vagueness of Free Will」、The XXII World Congress of Philosophy、Seoul, Korea、2008.7.31

「Plato on Moral Dilemmas: Comments on Professor Schofield's arguments in 'The Rule of Knowledge」、ギリシア哲学科研費研究会・M. Schofield先生を招いて、東京大学、2008.10.1

「An Epistemology of Responsibility: A Probabilistic Approach」、Lecture Series: Philosophy and Public Policy, London School of Economics、London School of Economics、2008.11.17

「A Dilemma over Mentally Disordered Offenders」、Research Seminars, Department of Philosophy, Durham University、Durham University, UK、2008.12.4

「Uncertainties over Medical Diagnoses of Mentally Disordered Offenders」、2008 Carnegie Uehiro Oxford Conference、St Cross College, Oxford, UK、2008.12.11

「Ontological Vagueness and Metaphysics: A Case of Free Will」、Interdisciplinary Ontology Forum in Japan 09、Keio University, Japan、2009.3.1

「戦争をめぐる事実と規範」、死生学ワークショップ「戦争と戦没者をめぐる死生学」、東京大学、2009.6.6

「Hume's Determinism Undetermined」、the Lectures of Distinguished Scholar, Seoul National University BK21 Group for Philosophical Education and Research、Seoul National University, Korea、2009.7.17

「Counterfactuals and Degrees of Truth: Comments on Professor Timothy Williamson's arguments in 'Knowledge of Counterfactuals」、The 14th International Meeting of Hongo Metaphysics Club, The University of Tokyo、2009.10.2

「エピクロスの死無害説からする死刑論再考」、「ギリシア政治哲学の総括的研究」科研費研究集会、首都大学東京、2009.10.4

「殺人の被害者とは誰か —— 死のメタフィジックスの断面——」、第19回白山哲学会、東洋大学、2009.10.24

「バークリの視覚論から数学論へ」、哲学会第48回研究発表大会シンポジウム「感覚・知覚論再考——バークリ『視覚新論』300年——」、東京大学、2009.11.1

「Ontology and Ethics of Killed People」、The 4th BESETO Conference of Philosophy、Seoul National University, Korea、2010.1.7

3. 主な社会活動(2008-9年度)

(1) 他機関での講義等

東洋大学大学院文学研究科、2007.4～

(2) 行政

大学院教務入試制度委員会委員長 2009.4～

(3) 学会

「日本哲学会」、委員、2005.5～

「日本科学哲学会」、役員・委員、評議員・編集委員、2000～

「哲学会」、理事 1995～、理事長 2008～

准教授 **榊原 哲也** SAKAKIBARA, Tetsuya

1. 略歴

- 1983年3月 東京大学文学部第1類哲学専修課程卒業
- 1986年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専門課程修士課程修了
- 1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程退学
- 1988年4月 東京大学文学部助手
- 1992年4月 立命館大学文学部助教授
- 2001年4月 立命館大学文学部教授
- 2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
- 2009年9月 東京大学より博士（文学）の学位を取得

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門はドイツ現代哲学。とりわけフッサール、ディルタイ、ハイデガー等によって展開された現象学・解釈学に関する歴史的・体系的研究を行っており、これまで積み重ねてきたフッサール研究については、1冊の書物にまとめたものを、2009年11月に公にした。また近年、現象学的哲学の応用の可能性のひとつとして、現象学を用いて「看護」という営みを哲学的に基礎づける試みも行っている。

c 主要業績

(1) 著書

共著、『哲学の歴史』第10巻「危機の時代の哲学」、2008.3

単著、『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開——』、東京大学出版会、2009.11

(2) 論文

「Struktur und Genesis der Fremderfahrung bei Edmund Husserl」、Husserl Studies、Vol. 24, No. 1、pp.1-14、2008

「看護ケア理論における現象学的アプローチ——その概観と批判的コメント——」、フッサール研究、第6号、97-109頁、2008.3

「Husserl on Static and Genetic Theories of Experience of the Other: In View of Nishida's Thought on I and Thou」、論集、第26号、54-73頁、2008.3

「Husserl on Expression and Phenomenological Description」、哲學與文化(UNIVERSITAS: Monthly Review of Philosophy and Culture)、No. 419 (Vol. 36 no. 4)、pp.51-69、2009.4

「看護ケア理論における現象学的方法——ナミン・リー「現象学と質的研究の方法」に寄せて」、死生学研究、第12号、35-48頁、2009.10

「The Experience of Illness and the Phenomenology of Nursing」、知識・行為・制度をめぐる「因果性」と「志向性」の哲学的解明(平成18～21年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書、pp.49-57、2010.3

(3) 解説

「手本を示す気遣い——渡邊二郎先生を偲んで——」、学術論文誌、『理想』、第682号、142-145頁、2009.2

「解説 渡邊哲学の真髓、『渡邊二郎『自己を見つめる』』、放送大学叢書 6、左右社』、296-297 頁、2009.9
「フッサールそのものへ！——『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』刊行に寄せて」、『UP』、
第 39 卷第 2 号（通巻 448 号）、34-39 頁、2010.2

(4) 研究報告書

『フッサール研究』、第 6 号、2008.3

『「いのち・からだ・こころ」をめぐる現代的問題への応用現象学からの貢献の試み』、2009.3

(5) 学会発表

「自己と他者、そして世界——フッサール・ハイデッガー・西田」、日独哲学交流シンポジウム「西田幾多郎
と M. ハイデッガー：自己—世界。西洋の〈思惟の経験〉と東アジアの〈経験の思惟〉(Selbst — Welt:
Abendländische ‚Denkerfahrung‘ und ostasiatisches ‚Erfahrungsdenken‘)」、石川県西田幾多郎記念哲学
館、2008.3.23

「Phenomenology in a different voice」、The XXIIth World Congress of Philosophy、Seoul National
University, Seoul, Korea、2008.8.3

「Phenomenology in a different voice — Husserl and Nishida in the 1930's」、The conference on the
occasion of the 150th anniversary of Edmund Husserl's birth “Phenomenology — Sciences —
Philosophy”、Husserl-Archives Leuven, Leuven, Belgium、2009.4.3

「The Experience of Illness and the Phenomenology of Nursing」、The international conference “Space
of Phenomenology: to the 150th Anniversary of Edmund Husserl”、Russian State University for the
Humanities, Moscow, Russia、2009.5.26

「Phenomenology in the Theories of Nursing」、The 3rd PEACE International Conference
(Phenomenology for East-Asian Circle): “The Applied Phenomenology”、Seoul National University,
Seoul, Korea、2009.9.21

「Husserl on Intuition and Expression」、The 4th BESETO Conference of Philosophy: “The Future of
Philosophy in East-Asia”、Seoul National University, Seoul, Korea、2010.1.8

「育むということ——現象学的哲学の視点から」、文化看護学会第 2 回学術集会、千葉大学看護学部、
2010.2.13

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

日本赤十字看護大学大学院、2008.7

朝日カルチャーセンター・横浜非常勤講師、2009.6～2010.2

東京大学医学部付属病院講演、2009.10

高知大学医学部講演、2009.10

九州大学大学院人文学府・文学部非常勤講師、2009.12

社会福祉法人 三井記念病院講演、2010.1

(2) 学会

「日本哲学会」、役員・委員、事務局幹事、2009.6～

「日本現象学会」、役員・委員、委員、2000.11～

「実存思想協会」、役員・委員、理事、2001.6～

「Deutsche Gesellschaft für phänomenologische Forschung (ドイツ現象学会)」、一般会員、1996.10～

准教授 **鈴木 泉** SUZUKI, Izumi

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部哲学専修課程学士・文学士

1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士・文学修士

1990年10月 東京大学教養学部助手（～1993年3月）

1993年4月 神戸大学文学部助教授（～2006年3月）
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 主要研究業績

(1) 著書

共著、中畑正志他、『岩波講座哲学 02 形而上学の現在』、2008.10

(2) 論文

「非人間主義の哲学——ピエール・モンテベロの仕事をめぐる」、死生学研究、第9号、82-96頁、2008.3
「力能と「事象性の度合い」——スピノザ『デカルトの哲学原理』第一部定理7に関する覚書」、論集、26号、74-90頁、2008.3

「スタイルとリトルネロ——メルロ＝ポンティとドゥルーズ」、思想、2008年11月号、256-274頁、2008.11
「リトルネロ/リフの哲学 ドゥルーズ&ガタリの音楽論に寄せて」、現代思想、第36巻第15号、194-203頁、2008.12

「力能と人間——アントニオ・ネグリ『野生のアノマリー』をめぐる」、別冊情況、第三期第一〇巻第七号、171-180頁、2009.6

「ドゥルーズと発生の問題」、現代思想 総特集フッサール、第37巻第16号、364-372頁、2009.12

(3) 書評

「久米博・中田光雄・安孫子信『ベルクソン読本』」、法政大学出版局、2006、学術論文誌、『フランス哲学・思想研究』、第13号、146-152頁、2008.8

「アントニオ・ネグリ『野生のアノマリー』」、作品社、2009、学術論文誌、『思想』2009年第8号、71-85頁、2009.8

(4) 総説・総合報告

「ドゥルーズ/ガタリ研究・活用の現在」、その他、論文集、『ドゥルーズ/ガタリの現在』、698-717頁、2008.1

(5) 監修

小泉義之・檜垣立哉、「ドゥルーズ/ガタリの現在」、平凡社、2008.1

(6) 解説

ドゥルーズ、『哲学の歴史 第12巻 実存・構造・他者 【20世紀III】』、613-662頁、2008.5

(7) 学会発表

「〈La causalite immanente chez Spinoza et les scolastiques.〉」、SPINOZA ET LES SCOLASTIQUES Colloque international、パリ第四大学、2008.3.22

「Philosophy of Non-Humanism: Deleuze and Ritornello」、The third BESETO Conference of Philosophy “Philosophy in East Asian Context: Knowledge, Action, Death, and Life”、The University of Tokyo, Komaba、2009.1.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

「スピノザ協会」、役員・委員、運営委員、2006.4～

「日本哲学会」、役員・委員、学術雑誌編集委員、2005.7～

「日仏哲学会」、役員・委員、理事・学術雑誌編集委員、2004.9～

05 倫理学

教授 竹内 整一 TAKEUCHI, Seiichi

1. 略歴

1971年3月	東京大学文学部倫理学科卒業（文学士）
1974年3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程修了（文学修士）
1975年4月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程進学
1975年9月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程中途退学
1975年10月	東京大学文学部人文科学研究科倫理学科助手（1978年3月迄）
1978年4月	専修大学文学部人文学科専任講師（1980年3月迄）
1980年4月	専修大学文学部人文学科助教授（1986年3月迄）
1986年4月	専修大学文学部人文学科教授（1998年3月迄）
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授
2010年3月	定年のため退職

2. 主な研究活動

概要と自己評価

研究の基本は、近代日本の倫理思想を中心とした日本倫理思想史研究であるが、ここしばらくは、近世・中世の倫理思想研究にも遡っている。主たる問題関心は、人は如何に無常およびニヒリズム状況の否定をふまえながら肯定へと転じうるか、という、超越とそこでの倫理をめぐる問題である。

a 専門分野

倫理学原理論・日本倫理思想史

b 研究課題

日本思想の倫理学的考察

c 主要研究業績

(1) 著書

単著、『「はかなさ」と日本人——無常の日本精神史』、2007.3

単著、『「かなしみ」と日本人』、2007.3

単著、『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』、ちくま書房、2009.1

(2) 学術論文

「清沢満之における内在と超越」、親鸞と現代、12号、2007.6

「死の臨床と死生観」、『シリーズ死生学』第1巻、2008.5

(3) 評論・書評

「大峯顕・池田晶子『君自身に還れ』」、2007.3、『共同通信各紙』2007.5

「このかなしみを／よしとうべなうとき」、『春秋』、499、2008.6

(4) 総説・総合報告

「人間における徳」、学術論文誌、『思想の身体』、2007.3

「シンポジウム報告集 死の臨床をささえるもの」、COE「死生学の展開と組織化」、2008.3

「死生学特集号 東アジアの死生学へ」、COE「死生学の展開と組織化」、2009.3

1. 略歴

- 1974年3月 東京大学文学部倫理学科卒業（文学士）
1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程修了（文学修士）
1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
1979年4月 日本学術振興会奨励研究員（所属：東京大学倫理学科）～1980年3月
1980年8月 ドイツ学術交流会（DAAD）・ドイツ福音教会（DW）奨学生としてミュンヘン大学福音神学部旧約学科に留学 ～1985年3月
（その間、1981年10月～1985年3月はミュンヘン大学学術助手、1985年2月に博士号審査合格 [Dr. Theol.]）
1985年4月 北海道大学文学部助教授（宗教学）～1988年3月
1988年4月 東京大学文学部助教授（倫理学）～1994年6月
1989年6月 ミュンヘン大学より Dr. Theol. [神学博士] の学位を取得
1994年6月 東京大学文学部 [1995年4月より大学院人文社会系研究科] 教授（倫理学）～現在
1996年3月 東京大学より博士（文学）の学位を取得
1997年6月 大学入試センター研究開発部教授を併任 ～1998年3月
2000年4月 放送大学客員教授を併任 ～2004年3月
2004年3月 ウィーン大学およびエッセン大学で客員教授 ～同7月

2. 主な研究活動

概要と自己評価

西洋の倫理思想史の二大潮流の一たるヘブライズムに関して、旧約聖書に溯って、その解釈学的な解明と思想史的考察とを課題としている。その際、編集史、意味論、象徴の解釈学等の方法を用いつつ、一方ではヘブライ語原典の本文批判に基づく研究と、他方ではユダヤ・キリスト教思想、ギリシア哲学を中心とする西洋倫理思想全般との対比を目指している。この二年間は、応用倫理学の分野との共同研究や、スイスのチューリッヒ大学での古典と哲学をめぐるシンポジウム・講演の機会を与えられ、刺激と成果を得た。後者は、リュブリアナにおける国際旧約学会招待講演論文とともに、日本の聖書学の成果を諸外国に示す機会となり得たと自負している。それらを通して、また日独米のアスペン研究所の交流を通して、古典研究や教育のあり方について反省する機会を持った。

a 専門分野

西洋倫理思想史・旧約聖書学

b 研究課題

ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教倫理思想の研究

c 主要研究業績

(1) 著書

事典共編著、「応用倫理学事典」、丸善、2008.1

単著、「旧約聖書と哲学——現代の問いの中の一神教」、岩波書店、2008.6

(2) 論文

「モラルの再生に向けて」

青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究部編『モラル教育の再構築を目指して——モラルの危機とキリスト教——』教文館、2008年3月、15-43頁

「老いと死をめぐる」

『アスペン・フェロー』17号、2008年8月、9-13頁

「キリスト教学校におけるモラル教育——その基礎の哲学から考え直すと——」

『第16回青山学院宗教委員研修会講演記録』青山学院宗教センター、2009年3月、1-13頁

「宗教と倫理の相剋の時代に」

『宗教研究』361号、日本宗教学会、2009年9月、191-213頁

“Philosophical Interpretations of the Sacrifice of Isaac”

Congress Volume Ljubljana 2007(edited by André Lemaire) :Vetus Testamentum, Supplements, Vol.133, 2010, S.339-366.

「生の贈与と死にまつわる罪責 ——ヘブライズムの場合」

『倫理学年報』第 59 集、日本倫理学会、2010 年 3 月、35-45 頁

(3) 書評

「E.オットー (著)、山折哲雄 (訳)『モーセ 歴史と伝説』、一般雑誌、『本のひろば』、599 号、28-29 頁、2008.3

「佐藤研『禅キリスト教の誕生』、学術論文誌、『宗教研究』、358 号 (第 82 巻第 3 輯)、92-99 頁、2008.12

(4) 監修

「小学校道徳副読本 きみが いちばん ひかるとき」、光村図書出版、2008.12

「中学校道徳副読本 きみが いちばん ひかるとき」、光村図書出版、2008.12

(5) 啓蒙

「隠遁の夢」、『アスペン・フェロー』、No.16、12-13 頁、2008.2

「道徳の再生へ向けて」

『きみが いちばん ひかるとき 道徳副読本 小学校篇 中学校篇』光村図書出版、2008 年 12 月

「生の贈与と死にまつわる罪責 ——ヘブライズムの場合」

『日本倫理学会第 60 回大会報告集 大会共通課題「死生観」』2009 年 9 月、12-15 頁

「受賞と選考を思い起こしつつ」

『人間としてあること ——和辻哲郎文化賞 20 年記念誌』姫路文学館、2009 年 9 月、200-201 頁

(6) マスコミ

新聞、「一神教の神 何なのか 現代的メッセージ探る」、読売新聞、夕刊、5 面、2008.7.8

(7) 教科書

『きみが いちばん ひかるとき 道徳副読本 小学校篇 中学校篇』光村図書出版、2008 年 12 月

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

光村図書出版道徳副読本編集会議特別講演、2008.2

関西学院大学神学部・キリスト教と文化研究センター共催 春季学術講演会特別講演、2008.6

都立西高フォーラムその他、2008.6

青山学院大学宗教委員研修会特別講演、2008.10

朝日カルチャーセンター特別講演、2008.11

東芝ビジネス・スクール特別講演、2009.9

日本倫理学会第 60 回学術大会共通課題発表、2009.10

石川・日本アスペン・セミナー特別講演、2009.11

上智大学キリスト教センター特別講演、2009.11

スイス・チューリッヒ大学哲学部主催シンポジウム講演、2009.12

(2) 学会

「日本倫理学会」、評議員、1989～

「日本旧約聖書学会」、委員、1992～2009、会長、2009～

「日本宗教学会」、評議員、2000～

「和辻哲郎文化賞」、選考委員、2003～

「日本基督教学会」、理事、2005～

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「日本学術振興会」、特別研究員等審査会委員、2008.4～2009.3

「日本アスペン研究所」、モデレーター、2003.7～

「日本学術振興会」、特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員、2009.4～

1. 略歴

- 1979年3月 東京大学文学部倫理学科卒業
- 1981年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（倫理学）
- 1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学（～1985年3月）
- 1986年4月 東京大学文学部助手（～1991年3月）
- 1991年4月 東京大学文学部助教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2005年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授、現在に至る

2. 主な研究活動

概要と自己評価

和辻哲郎の日本倫理思想史の構想を、仏教・神道の両面から見直し、新たな日本倫理思想史の構築を目指している。近世以前の神道については、一応のまとめを得た。その過程で、近代の超越観や、言語と実在をめぐる諸問題が浮上しつつあり、現在著作にまとめる方向で考察を行っている。

a 専門分野

倫理学原理論・日本倫理思想史

b 研究課題

日本思想の倫理学的考察

c 主要研究業績

(1) 著書

単著、「日本の元徳」、日本武道館、2009.8

(2) 論文

「感覚・風景・性格——上田秋成の「近代性」をめぐる」、文学、10巻1号、181-195頁、2009.1

(3) 解説

「忠——普遍的価値への奉仕」、一般雑誌、『月刊武道』、494号、36-41頁、2008.1

「物凄いの修行」、一般雑誌、『本』、33巻1号、62-67頁、2008.1

「和——『憲法十七条』の精神」、一般雑誌、『月刊武道』、495号、60-66頁、2008.2

「円月相は丸くない」、一般雑誌、『本』、33巻3号、2008.3

「武士道の敵は『司馬遼太郎』」、一般雑誌、『Voice』、176-185頁、2008.3

「仏性は見えなくなるときあらわれる」、一般雑誌、『本』、33巻9号、62-67頁、2008.9

「身は真理の乗り物」、一般雑誌、『本』、33巻11号、62-67頁、2008.11

「植民地経営術のいやらしさ」、一般雑誌、『Voice』、372号、206-209、2008.12

「禅問答の畏」、一般雑誌、『本』、34巻1号、2009.1

「仏性は「モウモウ」と鳴く」、一般雑誌、『本』、34巻3号、62-67頁、2009.3

「異類の「中」」、一般雑誌、『本』、34巻5号、2009.5

「犬が修行する」、一般雑誌、『本』、34巻7号、2009.7

「無？それがどうした？」、一般雑誌、『本』、34巻9号、2009.9

「永久不滅こそが武道の可能性である」、一般雑誌、『月刊「武道」』、516号、2009.10

「日進月歩する錯誤」、一般雑誌、『本』、34巻11号、2009.11

「何度でも悟る」、一般雑誌、『本』、35巻1号、2010.1

(4) 啓蒙

「日本人にとって宗教心とは何か（一）」、一般雑誌、『飢餓陣営』、33号、2008.4

「日本人にとって宗教心とは何か（二）」、一般雑誌、『飢餓陣営』、34号、2009.4

(5) マスコミ

新聞、「内面の装備」、朝雲、朝雲新聞社、2009.4.2

新聞、「人情の世界戦略」、朝雲、朝雲新聞社、2009.4.30

新聞、「武人と教養」、朝雲、朝雲新聞社、2009.6.4

新聞、「女性の力」、朝雲、朝雲新聞社、2009.7.2
新聞、「若者の歌」、朝雲、朝雲新聞社、2009.7.30
新聞、「風動幡動」、朝雲、朝雲新聞社、2009.8.27
新聞、「武士の死生観」、朝雲、朝雲新聞社、2009.10.1
新聞、「紅葉の思い出」、朝雲、朝雲新聞社、2009.10.29
新聞、「対等な関係」、朝雲、朝雲新聞社、2009.11.26
新聞、「タバコのラッパ」、朝雲、朝雲新聞社、2009.12.24
新聞、「無駄遣い」、朝雲、朝雲新聞社、2010.1.28

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

フィレンチェ研究教育センター非常勤講師、2005.3～
総合研究大学院大学非常勤講師、2005.4～
東京女子大学非常勤講師、2002～
慶應義塾大学非常勤講師、1997～
神社本庁非常勤講師、2006.4～
人間学アカデミー非常勤講師、2007.4～
至誠館武学講座非常勤講師、2007.7～
長野県総合教育センター非常勤講師、2005.12～

(2) 学会

「日本神道史学会」、2002～
「鈴屋学会」、一般会員、1991～
「神道国際学会」、役員・委員、理事、2003.1～
「社団法人 日本弘道会」、特別会委員

教授 **熊野 純彦** KUMANO, Sumihiko

1. 略歴

1981年 3月	東京大学文学部第1類（文化学類・倫理学専修）卒業（文学士）
1983年 3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程終了（文学修士）
1983年 4月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程進学
1986年 3月	東京大学大学院人文科学研究科倫理学専攻博士課程単位取得退学
1986年 4月	跡見学園女子大学文学部非常勤講師 ～1989年 3月
1987年 4月	日本学術振興会特別研究員 ～1989年 3月
1989年 4月	専修大学文学部非常勤講師 ～1990年 3月
1990年 4月	北海道大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1995年 4月	北海道大学文学部人文科学科倫理学講座助教授（学部改組による）
1996年 10月	東北大学文学部哲学科倫理学講座助教授
1997年 4月	東北大学文学部人文社会学科哲学講座助教授（学部改組による）
2000年 4月	東北大学大学院文学研究科哲学講座助教授（大学院重点化による）
2000年 10月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年 10月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

概要と自己評価

主たる研究は、一方ではドイツ観念論から現代の現象学的・解釈学的哲学をはじめとする思想史的研究をふまえながら、他者、身体、言語といった問題系を倫理的に、すなわち「人のあいだ」に根ざし、「人の

あいだ」にかかわる問題群として思考することである。この数年は、主要には、レヴィナスを対話の相手として、そうした作業に従事してきたが、2001年度からは、レヴィナスの思考を潜り抜けたうえでの、倫理学的・体系的考察をめぐるみずからの思考を、徐々に公表しつつあるところである。

a 専門分野

倫理学原理論、近現代西欧倫理思想

b 研究課題

倫理学的諸概念の哲学的考察

c 主要研究業績

(1) 著書

訳書、「レーヴィット」、岩波書店、2008

単著、「和辻哲郎 文人哲学者の軌跡」、岩波書店、2009

編著、「現代哲学の名著」、中央公論新社、2009

編著、「日本哲学小史」、中公公論新社、2009

(2) 論文

「原型と変容」、岩波講座・哲学、第6巻、2008

「「現前」する他界」、シリーズ・死生学、第2巻、7-26頁、2008

「シェーラー」、哲学の歴史、第10巻、185-219頁、2008

「他性と超越」、岩波講座・哲学、第1巻、161-181頁、2008

「最後のマルクス——今村仁司『入門』を読む」、東京経学会誌、259、37-49頁、2008.3

「ある師弟関係をめぐって——ハイデガーとレーヴィットの場合」、文化交流研究、第22号、21-25頁、2009

(3) 解説

「哲学的思考とは何か」、一般雑誌、『大学授業がやってきた！ 知の冒険』、32-43頁、2008

「無限としての他者（レヴィナス）」、一般雑誌、『命題コレクション 哲学』、293-301頁、2008

「夢の通り路——本書を手にする読者のために」、『坂部恵『仮面の解釈学』』、ixi頁、2009

「西田の影のもとで——詩人哲学者の系譜について」、一般雑誌、『図書』、2010-2号、18-21頁、2010

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本倫理学会」、役員・委員、評議員、2001.4～

06 宗教学宗教学史学

教授 **島 蘭 進** SHIMAZONO, Susumu

1. 略歴

1972年3月 東京大学文学部宗教学宗教学史学科（文学士）

1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（宗教学宗教学史学）

1974年4月 東京大学博士課程単位取得退学（同上）

1974年4月 日本学術振興会奨励研究員

1977年4月	筑波大学哲学思想学系研究員（文部技官）
1981年4月	東京外国語大学外国語学部日本語学科助手（のち専任講師、助教授に昇進）
1984年8月	カリフォルニア大学バークレイ校留学（フルブライト奨学金） ～'85年7月
1987年4月	東京大学文学部宗教学宗教史学科助教授
1994年1月	東京大学文学部宗教学宗教史学科教授
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授 ～継続中
1996年3月	シカゴ大学宗教学部客員教授 ～'96年5月
1997年11月	フランス社会科学高等研究員招聘教授 ～'97年12月
2000年6月	テュービンゲン大学日本文化研究所客員教授 ～'00年7月
2005年4月	東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター創生部門（死生学）教授（兼任）
2006年2月	カイロ大学文学部、客員教授 ～2006年4月

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要と自己評価

(1) 死生学の諸問題について考察している。①死生観、死生学という概念・学知の歴史、②日本人の死生観と宗教の関わり、③生命倫理と人間の尊厳をめぐる諸問題、④死生学の方法論的・理論的枠組み、など。21世紀COEプログラム「死生学の構築」の拠点リーダーとして、新たに興隆しつつある死生学の基礎づくりが重要な仕事になってきている。

(2) 近代日本の宗教の歴史を総体としてとらえ、現代日本人の生活や思考において、宗教がどのような位置を占めているかを明らかにしようとしている。明治維新以降、また第二次世界大戦後の日本の宗教史を理解する鍵概念として「国家神道」があるが、この概念の意味するものを正確にとらえることを目標としている。

(3) 現代世界の中で宗教はどのように多様な形をとって広がっているかを調査研究を踏まえて研究し、現代人の精神状況について考察してきている。発展途上地域でのファンダメンタリズムを含めた救済宗教的な復興運動の強力な展開、先進国での従来の「宗教」という語に収まらないようなスピリチュアルなものへの関心の拡充などを統合的に理解することを目指している。

(4) 一九世紀から二〇世紀のはじめに確立してくる有力な宗教理論の意義について検討し、新たな宗教理論の可能性について考察する。これに関わって、(1)(2)のどちらの問題にも関わるが、そもそも「宗教」という概念がどのような背景をもったものであり、どれほど適切なものであるかを検討するという課題についても研究を進めている。

c 主要研究業績

(1) 著書

共編著、竹内整一、『死生学[1] 死生学とは何か』、東京大学出版会、2008.5

共編著、Gernot Bohme, William R. LaFleur, Susumu Shimazono, 「Fragwürdige Medizin: Unmoralische Forschung in Deutschland, Japan und den USA im 20. Jahrhundert, 」, Frankfurt/New York: Campus Verlag, 2008.7

単著、『宗教学の名著30』、286ページ、筑摩書房、2008.9

共編著、W. ラフルーア、G. ベーメ、『悪夢の医療史——人体実験・軍事技術。先端生命科学』（中村圭志・秋山淑子訳）、勁草書房、2008.10

(2) 論文

「宗教言説の形成と近代的個人の主体性——内村鑑三と清沢満之の宗教論と超越的普遍性」、季刊 日本思想史、72号（林淳・磯前順一編、特集——近代日本と宗教学：学知をめぐるナラトロジー）、32-52頁、2008.1

「“Individualization of Society and Religionization of Individuals: Resacralization in Postmodernity (Second Modernity)」、Pensamiento: Revista de Investigación e Información Filosófica、vol.64, no.242, pp.603-619, 2008.4

「国家神道はどのようにして国民生活を形づくったのか？——明治後期の天皇崇敬・国体思想・神社神道」、洗建・田中滋編（京都仏教会監修）『国家と宗教——宗教から見る近代日本』法蔵館、243-284頁、2008.7

「Contemporary Religions and the Public Arena」、Eileen Barker ed., The Centrality of Religion in Social

Life: Essays in Honour of James A. Beckford, Ashgate, 2008、 pp.203-213、 2008.8

「宗教史叙述の罣——神道史・国家神道史を例として」、市川裕・松村一男・渡辺和子編『宗教史とは何か』上巻(宗教史学叢書13)リトン、297-422頁、2008.9

「いのちの選別はなぜ避けるべきなのか?——出生前診断をめぐる日本の経験から」、死生学研究、第10号、32-60頁、2008.9

「State Shinto and Emperor Veneration」、Ben-Ami Shillony, ed., The Emperors of Modern Japan, Brill、 pp.53-78、2008.11

「日本の新宗教から見た宗教多元主義」、間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、152-166頁、2008.12

「“Reasons against the Selection of Life: From Japan’s Experience of Prenatal Genetic Diagnosis」、PrenJulian Savulescu and Nick Bostrom eds., Human Enhancement, Oxford University Press、 pp.291-313、2009.1

「わが国の死生学の現状」、近藤卓編『現代のエスプリ 499 いのちの教育の考え方と実際』至文堂、136-143頁、2009.2

「慎重論の論拠を求めて——エンハンスメント論争と抗うつ薬」、日本学報、第28号、3-20頁、2009.3

“State Shinto in the Lives of the People: The Establishment of Emperor Wotship, Modern Nationalism, and Shrine Shinto in Late Meiji”、Japanese Journal of Religious Studies、 Vol.36, No.1、 pp.93-124、2009.3

“Reasons against the Selection of Life: From Japan’s Experience of Prenatal Genetic Diagnosis.”、Julian Savulescu and Nick Bostrom eds., Human Enhancement, Oxford University Press、 pp.291-313、2009.6

“Bodhisattva Practice and Lotus Sutra-Based New Religions of Japan: The Concept of Integration, Dharma World” vol.36, July-Sept、2009.9

(3) 書評

「大岡信『『ひとの最後の言葉』、2009年3月』、筑摩書房、2009.3、その他、『ひとの最後の言葉』、243-251頁、2009.3

「釈微宗『『不干斎ハビアン』新潮選書』、2009.1、その他、『日本海新聞』、2009年3月8日号、2009.3

「谷川穰『『明治前期の教育・教化・仏教』、思文閣出版、2008.2、学術論文誌、『史林』、第92巻第3号、155-161頁、2009.5

(4) 解説

解説、『島菌進・高橋原・星野靖二編『日本の宗教教育論』第7巻、クレス出版』、巻末7-17頁、2009.11

3. 主な社会活動

(1) 行政

総合科学技術会議生命倫理調査会、委員、2007～

宗教法人審議会、委員、2004.4～

(2) 学会

「British Journal of Sociology (英国社会学会学術誌)」、編集顧問、2007～

日本宗教学会会長、2008.9～

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

「日本宗教連盟」、理事、2005.4～

「国際宗教研究所」、常務理事、2000～

「東京大学仏教青年会」、理事、2007～

「Japanese Journal of Religious Studies」、編集顧問、2007～

「Social Science Japan Journal」、編集顧問、2007～

「British Journal of Sociology (英国社会学会学術誌)」、編集顧問、2007～

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部宗教学・宗教史学科卒業
- 1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専門課程修士課程修了
- 1982年3月 東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専門課程博士課程単位取得退学
- 1982年4月 日本学術振興会奨励研究員（～1983年3月）
- 1984年4月 東京大学文学部助手
- 1985年4月 工学院大学工学部専任講師
- 1987年4月 工学院大学工学部助教授
- 1996年4月 工学院大学工学部教授
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2001年10月 東京大学より博士（文学）の学位取得
- 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

宗教学、西洋宗教思想

b 研究課題

(1) 近世西欧（とくにスペインとフランス）における神秘思想の研究を一貫して続けており、まずは16～17世紀のいわゆるスペイン神秘主義について、代表的人物の個別研究と一連の歴史思潮研究とが融合した体の著作を企画中である。近年中に上梓したい。

(2) 上の研究課題の鍵語である「神秘主義」という概念、およびその実質的内容について、近現代（19世紀末～20世紀の西欧と日本）における歴史的形成過程およびその意義についての研究を進めたい。とりわけ、19世紀以来の実証的宗教研究（いわゆる宗教学）の発想と知見を受け入れつつ「神秘主義」という概念を自らの宗教思想形成の重要な契機とした思想家、宗教者の研究を、やはり個別研究と歴史思潮の研究とを兼ね併せたかたちで遂行したい。

(3) これら宗教思想史上の研究成果に基づきつつ、宗教を巡るより一般的な議論も行っていきたい。

c 主要研究業績

(1) 著書

編著、島藺進、ヘリー・テル＝ハール編、「宗教——相克と平和：国際宗教学宗教史会議東京大会の討議」、秋山書店、2008.10

(2) 論文

「吉満義彦の「近代日本カトリシズム」」、季刊日本思想史、72号、2008.2

「西欧キリスト教史における「行と身体」の諸相」、宗教研究、355号、2008.3

「Les Deux Sources de la Morale et de la Religion dans l'histoire du mysticisme」、Bulletin of Death and Life Studies、Vol. 4、pp.71-81、2008.3

「神秘主義の歴史の中の『二源泉』」、シンポジウム報告論集『生の哲学の彼方』、83-97頁、2008.3

「フランシスコ・デ・オスナの「内的潜心」論」、東京大学宗教学年報、26、1-18頁、2009.3

「ミシェル・ド・セルトーの「宗教史」理解」、市川裕編『宗教史とは何か（下巻）』、57-80頁、2009.12

(3) 書評

「池上俊一『ヨーロッパ中世の宗教運動』」、名古屋大学出版会、学術論文誌、『クリオ』、22号別冊、19-23頁、2008.5

「宮本久雄『他者の甦り』」、創文社、その他、『創文』、510号、8-10頁、2008.7

(4) 解説

解説、「奥村一郎選集 第5巻『現代人と宗教』」、215-227頁、2008.4

(5) 学会発表

「近世スコラ学的神秘神学の成立——カルメル会の場合」、日本宗教学会第67会学術大会、筑波大学、2008.9.14

「パネル『宗教と人間』の統一的把握の地平を目指して」、日本宗教学会第 67 会学術大会、筑波大学、2008.9.14
『神秘主義』は『西欧キリスト教』的か」、東西宗教交流学会学術大会、京都パレスサイドホテル、2009.8.31
(6) 会議主催 (チェア他)
「第 51 回中世哲学会シンポジウム」、チェア、明治学院大学、2008.11.14～2008.11.15

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

早稲田大学非常勤講師、2008.4～2010.3

京都大学非常勤講師、2008.12

東北大学非常勤講師、2009.10

(2) 学会

「新プラトン主義協会」、役員・委員、研究奨励賞選考委員、2008.9～

「日本宗教哲学会」、役員・委員、理事、2008.12～

「日本宗教学会」、役員・委員、学会誌編集委員長、2009.10～

教授 **市川 裕** Ichikawa Hiroshi

1. 略歴

1976 年 3 月 東京大学法学部卒業 (法学士)
1978 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (宗教学・宗教史学)
1982 年 7 月 ヘブライ大学 (エルサレム) 人文学部タルムード学科特別生等 (1985.7.)
1986 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学
1986 年 5 月 筑波大学哲学・思想系文部技官 (～1990.8.) 同講師 (～1991.3.)
1991 年 4 月 東京大学文学部助教授
2004 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授 現在に至る
1998 年 10 月～11 月 ポストン大学人文学部客員研究員

2. 研究活動 (概要)

a. 専門分野

宗教史学・ユダヤ教

b. 研究課題

継続して以下の 3 つの主要な課題に取り組み、成果は講義において主として反映させるとともに、3 つの課題全体にわたって、2009 年に上梓した『ユダヤ教の歴史』(山川出版社)において、その成果を簡潔にまとめることができた。

(1) 宗教的想像力の比較宗教学の構想：聖書とタルムードの宗教を基盤とするユダヤ教の宗教思想の特徴を、自由の精神の意義に重点を置いて宗教と法の基礎理論を構築し、これをモデルにして、他の古典的宗教との比較考察を行う。

(2) 宗教学の観点から近現代を見直す作業：近代に遭遇したユダヤ教の葛藤と変容を研究の出発点として、近代の人間観、世界観を形成した啓蒙主義とロマン主義の今日的意義を考察し、現代世界の喫緊の課題の淵源とその解決のための枠組みを提示し、もって日本の近代の理念を再検討する。

(3) イエス時代のユダヤ人社会に関する宗教史的研究：「旧約時代・中間時代・新約時代」という歴史分割をせずに、ヘレニズム・ローマの影響下における古代地中海世界の宗教として、ユダヤ宗教文化の特徴を把握する試みを行う。

c. 主要研究業績

(1) 著書

共編著『ユダヤ人と国民国家』、岩波書店 (分担執筆「第一章 宗教学からみた近代ユダヤ人のアイデンティティ」2-22 頁)、2008.9

共編著『宗教史とは何か 上巻』(宗教史学論叢 13)、リトン(分担執筆「ギリシアとの相克としてのユダヤ教史」151-177頁)、2008.9

単著『ユダヤ教の歴史』山川出版社、本文280頁、付録65頁。2009.11

(2) 論文

「現代における祈り」(遊学館ブックス『祈りにみる山形』(財)山形県生涯学習文化財団所収)20-46頁、2008.3

「ユダヤ教メシアニズムに対するレヴィナスとショーレムの見解」、『宗教研究』355、226-228頁、2008.3
「ファリサイ派の救済思想に関する宗教学的的分析——神殿供犠とシユマアの朗読の関係をめぐって」、『聖書学論集41 経験としての聖書』日本聖書学研究所編、リトン、139-156頁、2009.3

「宗教史の枠組みにおける近代主権国家の意義」、『宗教研究』359 大会紀要号、238-239頁、2009.3
私の読書体験、東京大学新聞、2009.10

Interview 記事 “National Jewish Post & Opinion” アメリカのユダヤ新聞 2010.2、Vol.76, No.12, 24Feb.2009, pp 8-9

(3) 研究発表・講演

総合人間学パリコロキウム(2)(東京外国語大学・パリ人間科学館共催)で発表、“Modern Significance of the Traditional Common Sense: Case Study of Judaism and Buddhism” 於 Maison des Sciences de l’Homme (Paris)、2008.3.25-26

総合人間学パリコロキウム(3)(東京外国語大学・パリ人間科学館共催)で発表、“Is Buddhism Regarded as A Philosophical Enlightenment or Religious?— Religious Education for Enlightenment in Early Modern Japan —”, 総合テーマ “Formation of Consciousness, Change of Cognition”, 於 Maison des Sciences de l’Homme (Paris)、2009.4.2-3

日本聖書学研究所公開講演「エルサレム神殿の宗教現象学的意義—神殿供犠をめぐる神学論争」、2009.11

(4) 研究組織その他

2009.10 ニューヨークのイエシヴァ大学兼任准教授E・ホフマン氏を、日本学術振興会短期外国人研究者として招聘。1ヶ月滞在し、ユダヤ教の心理学的特長について、数回にわたって講演会を開催。その他、研究交流。

同志社大学—神教学際センター・共同研究員 2008, 2009

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京芸術大学非常勤講師 2008, 2009年度

東京女子大学非常勤講師 2008, 2009年度

立教大学非常勤講師 2008, 2009年度

創価大学非常勤講師 2008, 2009年度

朝日カルチャーセンター

(2) 学会

日本宗教学会理事

日本聖書学研究所役員

日本ユダヤ学会理事

京都ユダヤ思想学会

日本オリエント学会

日本法哲学会他

准教授 **池澤 優** IKEZAWA, Masaru

1. 略歴

1982年3月 東京大学文学部I類宗教学宗教学史学専門課程卒業

1982年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程入学
1984年3月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻修士課程修了
1984年4月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程進学
1987年9月	ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程 (カナダ・ヴァンクーバー) 入学
1990年8月	東京大学大学院人文科学研究科宗教学宗教史学専攻博士課程退学
1990年8月	筑波大学地域研究研究科文部技官、哲学思想学系準研究員就任
1993年4月	筑波大学地域研究研究科(哲学思想学系)助手昇進
1994年5月	ブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科大学院博士課程修了
1995年4月	東京大学大学院人文社会系大学院宗教学宗教史学研究室助教授転任
2007年4月	同准教授
2009年4月	同教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古代宗教研究、祖先崇拜研究、死生観研究

死者儀礼・祖先崇拜といわれる宗教現象を比較文化的視点から考察することを主たる目的とし、そのための基盤となる研究対象を中国古代に設定する。この問題関心は三層に分けることができ、まず、(A)古代中国の死ならびに死者(祖先)に対する観念と儀礼の背後にある宗教的宇宙観と救済論を明らかにし、(B)それを通して死ならびに死者にかかわる宗教現象の普遍的構造とメカニズムを理論化し、(C)更にそこから凡そ人間にとって死と死者が有する意味について、現代における状況を視野に含めて、考えることを目指している。

b 研究課題

具体的な研究課題は以下のように区分できる。

まず中国古代における祖先崇拜の研究(上記(A))にかかわる分野として

- (1) 中国の殷周春秋時代の宗教現象を出土文字資料(甲骨・金文)を用いて分析し、その意味を考える。
- (2) 戦国・秦・漢時代の出土文字資料(簡牘・帛書・鎮墓文・画像石)を用いて、殷周時代の祖先崇拜が戦国時代以降の死生観と他界観に変化していく様態を明らかにする。
- (3) 殷周～隋唐時代における祖先崇拜・死者儀礼・他界観を全体的な宗教的宇宙観の中に位置づけることにより、“死者であること(死者性)”の基本的な在り方と変化を把握する。
- (4) 儒家を中心とする諸典籍を資料として用い、殷周時代の祖先崇拜に内在していた世界観が「孝」として思想的に昇華され、それが中国の基本的価値観・人間観の一つとなったことを考察する。

祖先崇拜の比較研究(上記(B))の分野として

- (5) 中国古代の祖先崇拜と「孝」思想の分析によって得られた洞察を出発点として、祖先崇拜という宗教現象を比較文化的視点から検討する視座を用意する。
- (6) 世界中の諸文化に現れる祖先崇拜を具体的に検討することによって、祖先崇拜の本質的意味と可変性を明らかにする比較研究を行う。

死生観と死者性に関する研究(上記(C))として

- (7) 諸宗教の死に関する儀礼や考えが表明している人間観や価値観は何であるのかを抽象化し、比較研究を行った上で、

- (8) それを現代における死の状況や生命倫理と対照させ、現代の状況を客観的・批判的に捉える視座を用意する。

この内、(1)(2)(4)(5)は従来からの問題関心であるが、2001年度発刊の著書の中で系統的に見解を述べることができ、かなりの成果を挙げえた。(3)はその問題関心から派生してきた課題であり、現在最も中心的な活動になっている。また、この期間の研究の進展に伴い、上記(7)(8)という研究課題が次第に関心の中心を占めるようになってきている。

c 主要研究業績

(1) 著書

編著、アンヌ ブッシィ、「非業の死の記憶——大量の死者をめぐる表象のポリティックス——」、秋山書店、2010.3

(2) 論文

「後漢時代の鎮墓文と道教の上章文の文書構成——『中国道教考古』の検討を中心に」、渡邊義浩編『両漢儒教の新研究』、汲古書院、342-427 頁、2008.12

「中国における“死者性”の諸相と変遷——古代・中世の出土資料を中心に」、熊野純彦・下田正弘編『シリーズ死生学』第2巻、東京大学出版会、199～224 頁、2008.12

「生命倫理と文化・伝統——儒教的生命倫理の構築の試みを通して——」、『死生学研究 特集号』（日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」）、218～234 頁、2009.3

「生命倫理と文化・伝統——儒教的生命倫理の構築の試みを通して——」、『死生学研究 特集号』（日中国際研究会議「東アジアの死生学へ」）、218～234 頁、2009.3

「中国における生命倫理言説に見る宗教性——人間の尊厳と有徳の共同体」、宗教研究、361 号、1-24 頁、2009.9

(3) 学会発表

「生命倫理と文化伝統——建构儒教生命倫理的の試み」、東京大学文学部 COE プログラム・中華日本哲学会共催国際シンポジウム「中日“東亜生死学”国際学術研討会」、中国社会科学院、2008.2.19

「□□□墓文の文章構成——死者の排除から恩寵へ」、中国出土資料学会平成 19 年度第 3 回例会、東京大学、2008.3.15

「生命倫理という宗教性」、日本宗教学会第 68 回学術大会、京都大学、2009.9.13

「比較の視点から見た祖先崇拜と『孝』」、大東文化大学・成均館大学校・山東大学共催第 2 回東アジア三大学国際シンポジウム「東アジアにおける「家」——伝統文化と現代社会——」、大東文化大学、2009.9.16

「現代的宗教性としての生命倫理——中国の事例を題材に」、日台国際研究会議「東アジアの死生学へ」、台湾国立政治大学宗教学大学院、2009.10.30

(4) 会議主催（チェア他）

「東京大学 GCOE『死生学の展開』・フランス国立極東学院・トゥールーズ大学社会人類学研究所共催公開シンポジウム「非業の死の記憶——追悼儀礼のポリティクス」・ワークショップ「死者の記憶と表象のポリティクス」、主催、東京大学文学部、2008.9.19～2008.9.20

「出土資料と漢字文化研究会主催シンポジウム「戦国秦漢出土文字資料と地域性——漢字文化圏の時空と構造」、主催、日本女子大学、2009.9.19～2010.9.19

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

國學院大學非常勤講師、2004.4～

(2) 学会

「日本宗教学会」、役員・委員、理事、国際委員会委員長、2005.1～2008.9

「中国出土資料学会」、理事、1998.4～現在、会長、2006.4～2008.3

07 美学芸術学

教授 西村 清和 NISHIMURA, Kiyokazu

1. 略歴

- 1966年3月 兵庫県立尼崎北高等学校卒業
- 1971年6月 東京大学文学部（美学芸術学専修課程）卒業
- 1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）修士課程修了
- 1976年5月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専門課程）博士課程単位取得退学
- 1976年6月 岡山大学法文学部助手（美学美術史）
- 1977年6月 ドイツ連邦共和国・ミュンヘン大学へドイツ学術交流会（DAAD）奨学生として留学（～79年3月）
- 1979年7月 岡山大学法文学部講師
- 1983年4月 埼玉大学教養学部助教授（芸術論）
- 1990年4月 埼玉大学教養学部教授
- 1997年8月 アメリカ合衆国コロンビア大学客員研究員（文部省在外研究）（～98年4月）
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（美学芸術学）
- 2010年11月 博士（文学）学位取得（東京大学）

2. 研究活動

a 専門分野

美学

b 研究課題

カント、シェリング、ヘーゲル、ゾルガーを中心としたドイツ観念論・ロマン派美学の研究から出発したが、遊戯論を研究するなかで、芸術と遊びとを同型の論法で扱う結果遊びの独自性を取り逃がしてしまう近代美学の不備を認識するにいたった。そこでわたしはあらためて現代における美学の諸問題、また現代アートに胚胎する諸問題をあらたな観点から論じようとするようになった。その際近代ヨーロッパ大陸の美学とはべつの可能性を開くものとして、英米系の分析的な美学・芸術哲学へと接近した。また「美学」をひろく美的現象や美的経験の哲学的考察として捉えることで、美学があつかうべき対象領域をたんに伝統的な「芸術」に限定せず、現代のわれわれがそこに身を置いている、複製技術やマス・メディアに支えられた多様な美的文化現象にまで広げようとした。こうしてフィクション、現代アート、キッシュや悪趣味、広告、写真といった問題を、これまでとはちがうかたちで論じる可能性を追求し、いくつかの著書を公刊してきた。

2009年11月には、伝統的なエクフラシスやパラゴネともかかわることばとイメージの関係を体系的に考察した著書『イメージの修辞学——ことばと形象の交叉』を刊行した。これは、読書における想像力やイメージの関与、ことばによる小説を映画化する際の諸問題、ことばにおけるレトリックの中心的問題のひとつである隠喩が絵画や映像の形ではたして可能であるかどうか、さらにはミニアチュール挿絵やステンドグラス、壁画、歴史画、そして近代における小説の挿絵などの「物語る絵」のナラトロジー分析といった諸テーマをあつかったものである。

目下は、自然の分析美学や環境美学にかかわるさまざまな問題に取り組んでおり、このテーマでの著作の刊行をめざしている。

c 主要研究業績

(1) 著書

『イメージの修辞学——ことばと形象の交叉』、三元社、2009. 11

(2) 論文

- ・「自然の美的鑑賞」、『美学芸術学研究 26』（東京大学 美学芸術学研究室）、2008.3、pp. 134-158
- ・The Aesthetic Appreciation of Nature, *JTLA (Journal of the Faculty of Letters. The University of Tokyo. Aesthetics)*, vol. 32, 2008. 3, pp. 17-29

- ・「怪異の物語——修羅能と「場所の掟」」、『揺らぎの中の日本文化』(岡山大学出版会)、2009. 3、 pp. 125-142
- ・「香りと味わいの美学——風景の美学のために」、『美学芸術学研究 27』(東京大学 美学芸術学研究室)、2009. 3、 pp. 29-55.
- ・The Memory of Place and Ruins, *JTLA (Journal of the Faculty of Letters. The University of Tokyo. Aesthetics)*, vol. 33, 2009. 3, pp. 15-26.
- ・「場所の記憶と廃墟」、『美学』第234号、2009. 6, pp. 1-15.
- ・「プラスチックの木でなにがわるいのか?——〈美的〉と〈倫理的〉をめぐって」、『美学芸術学研究 28』(東京大学 美学芸術学研究室)、2010. 3、 pp. 141-177.
- ・On the Aporia of the Pleasure of Tragedy, *JTLA*, vol.34, 2010.3, pp.23-32.
- (3) 啓蒙
 - ・「エリート文化と大衆文化」「写真がもたらした文化変容」「電子メディアが開く美的文化の諸相」、笠原潔・西村清和編『世界の芸術文化政策』(放送大学教育振興会)、2008. 3、 pp. 90-128
 - ・「自然の美的鑑賞」、『創文』(創文社)、No. 516、2009. 1、 pp. 11-14.
- (4) 学会発表
 - ・「場所の記憶——廃墟の詩学」(美学会第59回全国大会、2008.10、同志社大学)
 - ・「美的なもの」の分析美学」(哲学若手研究者フォーラムシンポジウム、2009. 7、国立オリンピック記念青少年総合センター)

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

上智大学文学部非常勤講師、2008～

慶応大学文学部非常勤講師、2008～

沖縄県立芸術大学芸術学部非常勤講師、2008～

(2) 学会

「美学会」、会長、2007. 10～2010. 10

「日本シェリング協会」、理事、2008. 10 まで

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

「大学評価・学位授与機構」、運営委員会委員、2008～

「日本学術会議」、哲学委員会連携委員、2008～

教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi

1. 略歴

- 1972年3月 千葉県立千葉高校卒業
- 1977年3月 東京大学文学部第1類(美学芸術学専修課程)卒業
- 1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程(美学芸術学)修了
- 1983年7月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程(美学芸術学)単位取得退学
- 1983年7月 東京大学文学部助手(美学芸術学)
- 1986年4月 玉川大学文学部専任講師(芸術学科)
- 1991年4月 玉川大学文学部助教授
- 1992年4月 大阪大学文学部助教授(音楽学)
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(美学芸術学)
- 2001年7月 博士(文学)学位取得(東京大学)
- 2002年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 研究活動

a 専門分野

音楽文化論、音楽社会史

b 研究課題

音楽文化の伝承、受容、流用にかかわるプロセスとメカニズムを歴史研究によって解明することを課題としている。これまで、西洋芸術音楽の「近代化」とテクノロジー、西洋芸術音楽における演奏伝統の形成とその伝承メカニズム、日本近代の音楽文化におけるメディアや言説といったテーマを取り上げてきた。

ここ数年は、場所の表象や記憶の生成・変容のメカニズムやそれに関わる多様な文化的コンテクストの相互作用を解明し、その中で芸術作品や美的体験の果たす役割を考えることを課題としている。作品体験と現実の都市の表象とを媒介する場としての文学散歩、映画のロケ地巡りとといった営みの考察、廃墟趣味や路上観察の見直し等の試みを進めており、近年の「視覚文化論」、「聴覚文化論」などの進展とも連動しながら、狭義の「芸術」の枠組みにとらわれない「文化資源」という観点から、観光、保存・活用といった問題系をも取り込む展開を目指している。

c 主要研究業績

(1) 論文

「戦後体制と「国民文化」—宝塚歌劇の「日本民俗舞踊シリーズ」とその周辺—、美学芸術学研究、26、159-202 頁、2008.3

「寮歌の「戦後史」—日本寮歌祭と北大恵迪寮におけるその伝承の文化資源学的考察—、美学芸術学研究、27、57-94 頁、2009.3

「Building the body and mind of Japanese “Nationals”: Modern history of “Song (shōka)” in Japan」、International Yearbook of Aesthetics、13、189-208 頁、2009.10

(2) 解説

「歌は世につれ、世は歌につれ」、『アステイオン』、68、2008.5

「わかりやすい」話の陥穽——CD が売れないのは「不法ダビング」横行のため？、『アステイオン』、69、2008.11

バナナの叩き売りの口上はいかにして「芸術」になったか、『大航海』、70、86-93 頁、2009.3

レクイエムは音楽？ 典礼？、『アステイオン』、70、202-205 頁、2009.5

県歌《信濃の国》にみる「中央」と「地方」、『アステイオン』、71、132-135 頁、2009.11

(3) マスコミ

新聞、「考える耳」、毎日新聞夕刊、2008.4.17～2010.3.16

(4) 学会発表

「日本近代のなかの宝塚歌劇」、国際シンポジウム「戦間期(1918-1938)大阪の音楽と近代」、国際日本文化研究センター、2008.12.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義

「文化資源としての炭鉱 1」（第 68 回 Cafe Talk + Tadashi KAWAMATA、目黒区美術館）、ヒルサイドプラザ、2009.7.29

(2) 学会

「日本音楽学会」、参事、2007.4～

「文化資源学会」、一般会員、2004.4～

「美学会」、委員、1998.10～

教授 **小田部 胤久** OTABE, Tanehisa

1. 略歴

1977 年 3 月 東京教育大学附属高等学校卒業

1977 年 4 月 東京大学教養学部文科 3 類入学

1981年3月 東京大学文学部第一類(美学芸術学専修課程)卒業
 1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)修士課程入学
 1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)修士課程修了
 1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)博士課程進学
 1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科(美学芸術学専門課程)博士課程単位取得退学
 (その間 1987年10月～1988年9月 DAAD(ドイツ学術交流会)奨学生としてハンブルク大学に留学)
 1992年10月 東京大学大学院人文科学研究科において博士(文学)取得
 1988年10月 神戸大学助教授,文学部(哲学科芸術学専攻課程)
 (その間 1990年10月～1991年8月 ハンブルク大学で研究)
 1993年10月～ 神戸大学大学院文化学(博士課程)兼任
 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科(美学芸術学専門課程)助教授
 (その間 1999年6月～2000年9月 および 2005年5月～7月 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団奨学生としてハンブルクで研究)
 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科(美学芸術学専門課程)教授
 (その間 2008年10月～2009年9月 ドイツ連邦政府からの招聘により、ハンブルクとベルリンで研究)

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学・芸術学の基本概念の研究, 18世紀から19世紀にかけてのドイツ語圏を中心とする美学理論の研究、および20世紀前半におけるドイツと日本の美学交渉史の研究

b 研究課題

第一に、2001年に公刊した『芸術の逆説——近代美学の成立』(東京大学出版会)の姉妹編として、『芸術の条件——近代美学の境界』を2006年初旬に著した。これは、「近代美学」が自律化する際にその外部へと排除したものを主題化し、美学の内と外との関係を問う試論である。

第二に、2006年より美学史研究の一環として、西洋美学の基礎概念18を選んで、その影響作用史を考慮しつつ歴史的に再構成し、現代における美学の可能性を探る作業に携わり、『西洋美学史』を2009年に公刊した。

第三に、昨今の「間文化性」への関心の増大に応じつつ、19世紀末から20世紀前半における日本の西洋美学の受容を「間文化性」の問題として扱う可能性を探っている。

c 主要研究業績

(1) 著書

単著、「西洋美学史」、東京大学出版会、2009.5

(2) 論文

「Der Begriff des Fragments in Friedrich Schlegels Aesthetik」、Leben und Geschichte. Studien zur deutschen Geistesgeschichte des 19. und 20. Jahrhunderts., Lothar Knatz, Nobuyuki Kobayashi und Takao Tsunekawa (Hrsg.), pp.57-68, 2008.1

「「移行」論としての『判断力批判』——「美学」の内と外をめぐって——」、『カント哲学のアクチュアリティ——哲学の原点を求めて』、坂部恵・佐藤康邦編、88-119頁、2008.1

「M. P. G. de Chabanon et J. A. Hiller : les Observations sur la musique en Allemagne (1781)」、Musicorum 2007-2008, pp.291-311, 2008.3

「Die Idee von Europa - eine neue Mythologie」、19世紀学研究、1、pp.112-121, 2008.3

「Soetsu Yanagis Mingei-Bewegung im Hinblick auf die Interkulturalität」、JTLA, vol. 33, 2008.3

「「東方美学」的可能性——柳宗悦的「民芸」理論、『湖北大学学报』哲学社会科学版、Vol. 35, No. 5, 60-63頁、2008.5

「日本の美学確立期における東西交渉史——東洋の芸術をめぐる岡倉天心・和辻哲郎・大西克礼——일본의 미학 확립기에 있어서 동서교섭사(東西交渉史) —동양적 예술을 중심으로 본 오카쿠라 덴신・와 츠지 테츠로・오오니시 요시노리—(辛那昶訳)」、『美術・藝術学研究』、第27輯、197-265頁、2008.6

「To What Extent Are Japanese Aesthetics Asian? On the Self-Images of Modern Japan」、XVIIth International Congress of Aesthetics. Congress Book 1. Panels, Plenaries, Artists' Presentation, Ancara,

pp.103-108、2008.7

「ロマン主義における「ヨーロッパ」の理念」、『シェリング年報』、第16号、9-15頁、2008.9

「Making a Case for a Cultural Exchange of Aesthetics between Europe and Japan: The Three Stages of Cultural Globalization」、The Journal of Asian Arts and Aesthetics、2、7-14頁、2009

「Die Idee der "inneren Form" und ihre Transformation」、Prolegomena、8/1、5-21頁、2009

「木村素衛の文化論によせて」、美学芸術学研究、27、2009.3

「Friedrich Schlegel and the Idea of Fragment: A Contribution to Romantic Aesthetics」、Aesthetics, ed. by the Japanese Society for Aesthetics、13、pp.59-68、2009.3

「『世界的潮流』のなかの日本の芸術——和辻哲郎『古寺巡礼』の文明論に寄せて」、『哲学と文明』、2、74-86頁、2009.10

(3) 書評

「田中秀隆『近代茶道の歴史社会学』」、一般雑誌、『週刊読書人』、2月22日号、3頁、2008.2

「米澤有恒『カントの函』」、一般雑誌、『週間読書人』、1月22日号、4頁、2010.1

(4) 学会発表

「"Kata" als Habitus. Zur Theorie und Praxis des "Mingei" bei Soetsu Yanagi」、Humboldt-Kolleg Rikkyo 2008、2008.3.14

「美学から見た日独交渉史——グローバル化の三段階」、「グローバル社会における日独文化」における報告、DAAD 東京事務所開設 30 周年記念行事、2008.5.31

「The Three Stages of Cultural Globalization: Making a Case for a Cultural Exchange of Aesthetics between Europe and Japan」、The 6th International Conference of the Asian Society of Art、Taipei、2008.12.18

「Die Idee der "inneren Form" und ihre Transformation」、Aisthesis und Aesthetik. Journe d'etudes internationale、Ecole Normale Superieure, Paris、2009.5.7

「Die Rolle des Körpers im Selbstbewusstsein. Ein Aspekt der japanischen Asthetik」、Kulturelle Identität und Selbstbild、Museum Weserburg Bremen、2009.7.10

「Soetsu Yanagis Theorie der Volkskunst im Hinblick auf die Interkulturalität」、Identität - Differenz, Selbstheit - Fremdheit. Gesellschaft für Interkulturelle Philosophie、Universität Würzburg、2009.7.26

「歴史家としてのヴィンケルマン——バロックと古典主義の交錯するところ」、19 世紀学学会主催シンポジウム「近代とミュージアムの成立」、2010.1.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

早稲田大学大学院非常勤講師、2009.10～

早稲田大学文化構想学部非常勤講師、2009.10～

九州大学大学院芸術工学研究院非常勤講師、2009.10～

(2) 学会

「美学会」、役員・委員、2008.4～

「日本シェリング協会」、役員・委員、2008.4～

「日本18世紀学会」、役員・幹事、2008.4～、代表幹事（2008.4～2009.6）

「国際美学連盟委員」、役員・委員、日本美学会派遣委員、2008.4～2010.8

准教授 **安西 信一** ANZAI, Shinichi

1. 略歴

1979年3月 神奈川県立光陵高等学校卒業

1980年4月 東京大学教養学部文科□類入学

1985年3月 東京大学文学部（美学芸術学専修課程）卒業

- 1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）修士課程入学
 1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）修士課程修了
 1988年4月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）博士課程入学
 1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科（美学芸術学専攻）博士課程単位取得退学
 1995年1月 東京大学大学院人文科学研究科において博士（文学）取得
 1991年9月 広島大学総合科学部講師（地域文化研究）
 1995年4月 広島大学総合科学部助教授（地域文化研究）
 （その間、1995年7月～1996年4月、文部省在外研究員として、連合王国ロンドン大学、サセックス大学で特別研究員）
 2002年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授（地域文化研究）
 2007年4月 東京大学大学院総合文化研究科准教授（地域文化研究）
 2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（美学芸術学専門課程）

2. 主な研究活動

a 専門分野

美学芸術学

b 研究課題

第一に、観念連合主義や趣味など、近代イギリス経験論美学の歴史研究。その関連で、とりわけピクチャレスクの美学を包括的に扱ってきた。

第二に、イギリス庭園論の歴史研究。特に十八世紀に誕生したイギリス風景式庭園を、その背景の哲学・政治・経済思想などとあわせ、十七世紀および十九世紀から現代にいたる流れを視野に入れ研究した。最近ではコテージ・ガーデンについて、それが十九世紀的産物であることを、詳細に跡付けようとしている。

第三に、以上の歴史的事象の背景にある（広義の）美的イデオロギーの解明。たとえば、近代的イギリス経験論美学の中に残る共和主義的政治性・道徳性を、シヴィック・ヒューマニズムや公共性の視点から記述した。さらにイギリス庭園論や風景論を、いわゆるポスト植民地主義的・ジェンダー論的な観点から相対化した。

第四に、現代美学的関心から、庭園や環境設計、環境美学を、一般的に扱う試みも行っている。

加えて、いまだ緒に就いたばかりだが、十八世紀イギリス美学（庭園論・風景論を含む）にも影響の深い古典主義的なフランス絵画理論の研究を行っている。

c 主要業績

(1) 著書

単著、「ガーデネスクなガーデン——J.C.ラウドンの生涯と造園思想」、アティーナ・プレス、2007.11

共著、松井利夫、上村博「芸術環境を育てるために」、角川学芸出版、2010.3

(2) 論文

「JポップのMV——研究の端緒として」、『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要』、23、13-25頁、2010.3

「コテージ・ガーデン——内向するイングリッシュネス（1）」、『美学芸術学研究』、28、211-258頁、2010.3

(3) 解説

「グランドツアー」、「庭園」、「モリス」、「ポーブ」、「ラスキン」、日本イギリス哲学会編『イギリス哲学・思想事典』、研究社、2007.11

(4) 啓蒙

東京大学教養学部編『高校生のための東大授業ライブ』、東京大学出版会、2007.2

(5) 研究報告書

「黙示録と原爆——ジェローム・シャピロ『原爆映画』をめぐって」、大貫隆編『アブラハムの伝統の臨界——三大一神教の哲学、神学、政治論とその外部の地域文化的研究』、平成17-20年度科学研究費補助金報告書、125-141頁、2009.3

「古典主義絵画理論の射程——近世アカデミ的絵画論（特にデュフレノワ）の受容と変容」、平成16-18年度科学研究費補助金報告書、2010.6

(6) 学会発表

「Aestheticising the Globe」、東アジアの美学合同国際研究会、公開合同国際美術シンポジウム「東アジアに於ける自然と環境——藝術は何をどう表現してきたか」、2010.4

「地球を審美化する——日英庭園美学のはざまで」、アルス・ウナ芸術学会大会、2010.7

(7) 会議主催 (チェア他)

「Redrawing Other's Space」、表象文化論学会第2回大会、2007.7

「環境の美学——自然・都市・日常」、第60回美学学会全国大会・シンポジウム、2009.10

「趣=味 (taste, goût, gusto, Geschmack) ——味覚と美的判断力のアナロジー」、日本18世紀学会・第32回全国大会、共通論題、2010.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

武蔵大学人文学部非常勤講師、2002～

(2) 学会

「広島芸術学会」、役員・委員、2002.4～

「東北芸術学会」、役員・委員、2002.4～

「日本18世紀学会」、役員・委員、2003.6～

08 心理学

教授 **立花 政夫** TACHIBANA, Masao

1. 略歴

1972年3月 東京大学文学部心理学専修課程卒業 (文学士)
1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程 (心理学) 修了 (文学修士)
1975年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程 (心理学) 退学
1975年4月 慶応義塾大学大学院医学研究科博士課程 (生理学) 入学
1979年3月 慶応義塾大学大学院医学研究科博士課程修了 (医学博士)
1979年4月 岡崎国立共同研究機構生理学研究所・助手 (生体情報研究系)
1979年10月～1981年3月 ハーバード大学医学部 (神経生物学) 研究員
1985年1月～1985年4月 シカゴ大学 Visiting Assistant Professor
1985年5月～1985年8月 ノースウェスタン大学 Visiting Associate Professor
1988年10月 東京大学文学部助教授 (心理学)
1994年1月 東京大学文学部教授 (心理学)
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (心理学)

2. 主な研究活動

a 専門分野

視覚神経科学

b 研究課題

初期視覚情報処理機構の解析

c 主要研究業績

視覚を成立させる神経機構を、細胞レベル・神経回路レベル・行動レベルで神経科学的に研究している。この2年間において、以下の点が明らかになった。1) キンギョ網膜のオン型双極細胞 (Mb1-BC) は樹状突起間にギャップ結合を介する電気シナプスを形成しており、刺激によって Mb1-BC に Ca スパイクが発生するとこの電気シナプスを介して興奮が隣接する Mb1-BC s に伝えられ、時間遅れを伴って Ca スパイクを発生させること、2) マウス網膜のオン型双極細胞の樹状突起先端部に代謝型グルタミン酸受容体 mGluR6 と TRPM1 チャンネルが共存しており、視細胞から放出されたグルタミン酸によって mGluR6 が活性化されると G タンパク質の活性化を介して TRPM1 チャンネルが閉じることによって過分極性応答が発生すること、が明らかとなった。

(1) 論文

「TRPM1 is a component of the retinal ON bipolar cell transduction channel in the mGluR6 cascade」、Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America, vol. 107, no. 1, pp.332-337, 2010.1

(2) 学会発表

「Ribbon-free synapses in the mouse rod bipolar axon terminal (マウス杆体入力型双極細胞軸索終末における非リボン性シナプス)」、第85回日本生理学大会、東京、2008.3.26

「Properties of Electrical Synapses among Retinal Bipolar Cells」、FASEB Summer Research Conferences, Snowmass Village, Colorado, U.S.A., 2008.7.22

「網膜における一過性応答と持続性応答の発生機構」、日本生化学会大会・日本分子生物学会大会、大阪、2008.12.11

「網膜の双極細胞ネットワークにおける情報伝達」、大阪大学「生命機能コロキウム」、大阪、2009.9.9

「Synaptic transmission from bipolar cells to ganglion cells in the goldfish retina」、Workshop "Active Zones as Organizers of Neuronal Communication", Baeza, Spain, 2009.10.23

「網膜における情報処理と逃避行動」、日本基礎心理学会、東京、2009.12.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

常呂高校特別講演、2009.12

(2) 学会

「日本生理学会」、評議員、1981～

「日本神経科学学会」一般会員、1985～

「日本心理学会」、役員・委員、代議員、1988～

「日本動物心理学会」、一般会員、1988～

「The Society for Neuroscience (USA)」一般会員、1981～

教授 **佐藤 隆夫** SATO, Takao

http://www.l.u-tokyo.ac.jp/psy/sato_ind/index.html

1. 略歴

1974年3月 東京大学文学部心理学専攻卒業
1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程 (心理学)
1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程 ～1983年3月
1978年9月 ブラウン大学心理学部大学院 ～1982年10月
1983年6月 ブラウン大学心理学部大学院 Ph.D. (Experimental Psychology)
1983年4月 日本学術振興会奨励研究員 (東京大学文学部)
1984年4月 日本電信電話公社武蔵野電気通信研究所研究専門調査員
1986年4月 (株)国際電気通信基礎技術研究所 (ATR) 主任研究員

1987年4月 (株)国際電気通信基礎技術研究所(ATR) 主幹研究員
1990年11月 日本電信電話(株) 基礎研究所主幹研究員
1995年5月 東京大学文学部助教授
1996年12月 東京大学文学部教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

知覚心理学

b 研究課題

心理物理学的手法や誘発電位(脳波)を用いた実験, およびモデリングの手法を用いて, 視覚, 聴覚の比較的低位のプロセス, 特に運動視, 両眼立体視のメカニズムの研究を進めている。また, 顔の知覚, 視線の知覚, 指さしの知覚などの比較的高位のプロセスに関わる研究も行っている。さらに, インテリジェント・モデリング・ラボラトリーの大規模設備を使用したバーチャルリアリティに関する研究, 総務省の委託を受けたプロジェクトで映像情報の安全性に関わる研究なども行っている。

c 主要研究業績

(1) 論文

「技法習得を伴う創意発揮: 即興的音楽表現支援の試み」, 芸術科学会論文誌, Vol.7(2), pp75-84, 2008

「Relative quantity judgments by Asian Elephants (*Elephas maximus*).」, *Animal Cognition*, Vol. 12(1), pp193-199, 2008

「Quantifying the temporal cost of processing garden-path sentences.」, *The Japanese journal of psychonomic science*, Vol. 27(1), pp115-116, 2008

「Positional and directional preponderances in vection.」, *Experimental Brain Research*, Vol. 192(4), pp221-229, 2008

「初期視覚システムのベクシオンへの寄与.」, 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, Vol. 14(4), pp461-468, 2008

「The perception of facial expressions from two-frame apparent motion.」, *Perception*, Vol. 37 (10), pp1560-1568, 2008

「Effects of local motion information on motion binding.」, *The Japanese Journal of Psychonomic Science*, Vol. 28 (1), pp173-174, 2009

(2) 学会発表

「Motion of motion-defined pattern does not induce spatial mislocalization.」, *Vision Sciences Society (VSS) 8th annual meeting*, 2008

「Vection induction is determined by the world coordinate.」, *Vision Sciences Society (VSS) 8th annual meeting*, 2008

「The involvement of local motion adaptation in global motion aftereffect.」, *Vision Sciences Society (VSS) 8th annual meeting*, 2008

「Time-course of motion-defined contours revealed by masking and VEP experiments」, *Asia Pacific Conference on Vision*, Brisbane, Australia, 2008.7.19

「Virtual Depth Effects for Non-Stereoscopic Dome Images-The Estimation of the Depth Effects of the Dome Image by Psychophysics.」, *2008 Asiagraph*, 2008

「Perceiving the direction of walking.」, *31st European Conference on Visual Perception (ECVP)*, 2008

「Accuracy of time-interval production with context tones between trained and untrained people.」, *10th International conference on music perception and cognition*, 2008

「属性間仮現運動における運動対象の追跡.」, 日本心理学会 第72回大会, 2008

「知覚的位置ずれに対する運動速度と輝度コントラストの影響.」, 日本心理学会 第72回大会, 2008

「コミュニケーションにおける指差しと視線の相互作用.」, 日本心理学会 第72回大会, 2008

「運動視差における空間的対比効果.」, 日本基礎心理学会 第27回大会, 2008

「運動対象の追跡における低位運動処理の役割.」, 日本基礎心理学会 第27回大会, 2008

「Motion binding 知覚における局所運動の役割.」, 日本基礎心理学会 第27回大会, 2008

「長提示ガーデンパス文における理解低下の要因.」, 日本基礎心理学会 第27回大会, 2008

「能動的に操作したビーム光源の投影像からの奥行き知覚」、日本視覚学会冬季大会、2009
「bistable な仮現運動による運動対象追跡処理の時間特性の検討」、日本視覚学会冬季大会、2009.1
「局所的運動情報が Motion binding 知覚に与える影響」、日本視覚学会夏季大会、2009.7
「運動視差の運動情報源」、日本視覚学会夏季大会、2009.7
「Visual rather than proprioceptive information contribute more to shape-from-shading when the light-source was actively moved」、European Conference on Visual Perception, Regensburg, Germany、2009.8.25
「勝井三雄の魅力」、シンポジウム —— 「光と色と知覚の世界」(勝井三雄展——色光の紋章)、筑波大学、2009.10.28
「チラッと見ても相手は気付く —— 視線方向知覚と視線受信判断に対する提示時間の影響——.」、日本基礎心理学会 第28回大会、2009.12
「運動視差の運動情報源(2)」、日本基礎心理学会 第28回大会、2009.12
「大規模空間の習得におけるワーキングメモリの役割」、日本基礎心理学会 第28回大会、2009.12
「提示時間操作による構造的曖昧文解釈の変化」、日本基礎心理学会 第28回大会、2009.12
「情動刺激処理が低次視覚処理に及ぼす影響」、日本基礎心理学会 第28回大会、2009.12
「他者による指差しが示す領域の大きさの推定」、日本基礎心理学会 第28回大会、2009.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京大学学際情報学府兼担、2008.4～2010.3

東京大学情報学環（コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム）兼担、2008.4～2010.3

駒澤大学非常勤講師、2008.4～2008.9、2009.4～2009.9

東京大学教養学部非常勤講師、2009.10～2010.3

(2) 行政

科学技術政策研究所科学技術動向センター、専門調査委員、2008.4～2010.3

(3) 学会

「科学技術政策研究所科学技術動向センター」、役員・委員、専門調査員、2008.4～2010.3

「日本心理学会」、役員・委員、議員、2008.4～2010.3

「情報化委員会」、役員・委員、委員、2008.4～2010.3

「日本基礎心理学会」、役員・委員、常任理事、理事長、2008.4～2010.3

「日本視覚学会」、役員・委員、会長、幹事、2008.4～2010.3

「日本バーチャルリアリティ学会」、役員・委員、理事、2008.4～2010.3

「The 4th Asian Conference on Vision」、役員・委員、組織委員長、2008.4～2010.3

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「日本学術会議」、連携会員、2008.4～2010.3

教授 **高野 陽太郎** TAKANO, Yohtaro

1. 略歴

1981年9月 Cornell 大学心理学部大学院博士課程入学（フルブライト奨学生）
1985年6月 Cornell 大学心理学部大学院博士課程修了（Ph.D.）
1985年9月 Virginia 大学心理学部専任講師
1987年4月 早稲田大学文学部専任講師
1990年4月 東京大学文学部助教授
2003年4月 東京大学文学部教授

2. 主な研究活動

概要と自己評価

「日本人は集団主義的」という日本人論の通説に関して、実証的な国際比較研究に基づき、その妥当性を検証する研究を20年近く続けてきたが、その成果をまとめて、単著『「集団主義」という錯覚』（新曜社）として出版した。また、この研究に関連して先に発表した論文（Takano, Y. & Osaka, E., 1999. An unsupported common view: Comparing Japan and the U.S. on individualism/collectivism. *Asian Journal of Social Psychology*, 2, 311-341）に対して向けられた批判（Heine, S. J., Lehman, D. R., Peng, K., & Greenholtz, J., 2002）が誤っていることを立証した論文（Takano, Y. & Sogon, S., *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 2008）を発表した。

鏡像問題の研究に関しては、2006年に行なった認知科学会のシンポジウムを受けて、そのシンポジウムに参加した2名の物理学者と共に、それぞれの自説を紹介し、相互に批判を行なう誌上討論を「認知科学」誌に掲載した。

外国語副作用に関しても、言語処理のどのプロセスが思考に干渉するのかを調べるための新たな実験を開始した。

a 専門分野

認知心理学（人間が行なっている情報処理の研究）

b 研究課題

(1) 鏡像問題：この問題（「鏡に映ると左右が反対に見えるのは何故か？」という問題）は、プラトンの昔から議論されてきたにもかかわらず、未だに定説がない。1998年に、この問題に解答する理論を記した論文をアメリカの学術雑誌に発表した。2000年から2004年にかけて、3つの実験をおこない、その理論の妥当性を立証した。これらの実験の結果は、2007年に *Quarterly Journal of Experimental Psychology* 誌に発表した。現在、鏡像問題に関する単著を執筆中。

(2) 外国語副作用：不慣れな外国語を使用している最中は、一時的に思考能力が低下する。20年ほど前に、この現象を発見して、理論的な説明をおこない、実験によって立証した。2002年から2004年の科学研究費プロジェクトでは、この外国語副作用が外国語を使用する日常的な場面でも生起することを2つの実験によって確かめた。現在は、国際基督教大学の森島泰則教授と協力して研究を続行する一方、国際学会のシンポジウムなどを通じて、この現象の周知に努めている。

(3) 日本人論批判：「日本人は集団主義的で、アメリカ人は個人主義的」という日本人論の通説について、実証的な国際比較研究を組織的に調べたところ、実証データはこの通説をまったく支持していないことを発見し、論文として発表した。この論文はかなりの論議を呼び、通説の擁護者と議論を続けてきた。2004年には、カナダの研究者による批判の妥当性を調べるために同調行動の実験をおこない、この批判が事実と合致していないことを確認した。これらの研究の成果をまとめて、『「集団主義」という錯覚』と題する単著を出版したが、この著書に関連して、書評シンポジウムや講演を行なってきた。現在は、進化論的な視点も交えつつ、「文化とは何か」という問題に関する理解を深めるべく、研究を続けている。

この日本人論の通説に関連して、対応バイアス（人の行動の原因を推測する際、状況の要因を軽視して、性格等の内的要因に偏った推測をするという認知のバイアス）に関する実験的研究も行なった。「日本をはじめとするアジアでは、アメリカをはじめとする欧米に比べて、対応バイアスは存在しないか、あるいは、存在したとしても容易に消失する」という説の妥当性を検証するために、サンフランシスコ州立大学の David Matsumoto 教授などと共同で日米比較研究を行ない、日米間に明確な差異は認められないことを立証した。

(4) 因果的説明における価値のバイアス：20年近く前、本学に赴任してきたばかりの頃に、湾岸戦争直前の世論を利用して、社会的事象の因果的説明は、社会的対象に抱いている価値によって歪められることを実験的に示した。この研究は、病気のために長らく中断していたが、2004年に新しい実験をおこなって、最初に行なった実験の結果に関する別解釈を排除できることを確認した。

c 主要研究業績

(1) 著書

単著、『「集団主義」という錯覚』、新曜社、2008.6

共著、『心理学研究法』（西本武彦・大藪泰・福澤一吉・越川房子〔編著〕「現代心理学入門——進化と文化のクロスロード」第2章〕、川島書店、2009.5

(2) 論文

「Are Japanese more collectivistic than Americans?: Examining conformity in in-groups and the reference-group effect.」、Journal of Cross-Cultural Psychology、39(3)、pp.237-250、2008.5

「多重プロセス理論による鏡映反転の説明」、認知科学、15(3)、536-541 頁、2008.9

「小亀氏への回答：視点変換の必要性」、認知科学、15(3)、546-551 頁、2008.9

「多幡氏への回答：物理的原理と認知プロセス」、認知科学、15(3)、555-558 頁、2008.9

「小亀説への批判」、認知科学、15(3)、508-509 頁、2008.9

「多幡説への批判」、認知科学、15(3)、526-529 頁、2008.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2008.4～2010.3

(2) 学会

「日本認知心理学会独創賞選考委員会」、役員・委員、委員長、2008～2010

「日本認知科学会」、役員・委員、運営委員、2008～2010

「日本認知心理学会」、役員・委員、常務理事、理事、2008～2010

「日本心理学会」、役員・委員、代議員、2008～2010

教授 **横澤 一彦** YOKOSAWA, Kazuhiko

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~yokosawa/index-j.html>

1. 略歴

1979年3月 東京工業大学工学部情報工学科卒

1981年3月 東京工業大学大学院総合理工学研究科電子システム専攻修士課程了

1981年4月 日本電信電話公社(現NTT)入社

1986年9月～1990年2月 ATR 視聴覚機構研究所(出向)

1990年9月 東京工業大学より工学博士号授与

1991年11月～1992年12月 東京大学生産技術研究所 客員助教授

1995年6月～1996年6月 南カリフォルニア大学 客員研究員

1998年10月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

高次視覚の認知心理学、統合的認知の心理学

b 研究課題

高次視覚のメカニズムについて、認知心理学的研究を行っている。高次視覚とは、初期視覚特徴の抽出過程にとどまるのではなく、視覚系において抽出された特徴がどのように記憶や言語や概念と関わりあって、認知に至るのかを解明しようとする広範囲の研究を指している。特に、視覚的注意やオブジェクト認知の問題を中心に研究している。さらに、高次視覚の脳内プロセスの解明を目指し、fMRI を使った脳機能計測の共同研究にも取り組んでいる。感覚融合認知や共感覚に関する研究も開始した結果、研究分野は視覚だけに限らなくなり、扱っている研究課題は多岐に渡っている。

c 主要研究業績

(1) 著書

単著、横澤一彦、「視覚科学」、勁草書房、2010.2

(2) 論文

「Determining the orientation of depth-rotated familiar objects」、Psychonomic Bulletin & Review、15、1、pp.208-214、2008

「Attentional awakening: Gradual modulation of temporal attention in rapid serial visual presentation」、Psychological Research、72、2、pp.192-202、2008

「Contingent attentional capture occurs by activated target congruence」、Perception & Psychophysics、70、4、pp.680-687、2008

「The dynamic-stimulus advantage of visual symmetry perception」、Psychological Research、72、5、pp.567-579、2008

「Proofreaders show a generalized ability to allocate spatial attention to detect changes」、Psychologia、51、2、pp.126-141、2008

「Three-quarter views are subjectively good because object orientation is uncertain」、Psychonomic Bulletin & Review、16、2、pp.289-294、2009

「Viewpoint dependency in the recognition of non-elongated familiar objects: Testing the effects of symmetry, front-back axis, and familiarity」、Perception、38、4、pp.533-551、2009

「Effects of laterality and pitch height of an auditory accessory stimulus on horizontal response selection: The Simon effect and the SMARC effect」、Psychonomic Bulletin & Review、16、4、pp.666-670、2009

「触覚的角度判断に対する視覚手がかり効果」、心理学研究、80、3、232-237 頁、2009

「視覚的短期記憶における視覚情報の時間的統合に関わる神経基盤の検討」、基礎心理学研究、28、1、23-34 頁、2009

「Effector identity and orthogonal stimulus-response compatibility in blindness to response-compatible stimuli.」、Psychological Research、74、2、pp.172-181、2010

「Response-specifying cue for action interferes with perception of feature-sharing stimuli.」、Quarterly Journal of Experimental Psychology、63、6、pp.1150-1167、2010

(3) 学会発表

「Visual cue influence on three-dimensional haptic angle discrimination. 」、The eighth annual meeting of The Vision Science Society 、Naples, U.S.A.、2008.5.9

「Proofreaders show a generalized ability to allocate attention to detect changes. 」、The eighth annual meeting of The Vision Science Society 、Naples, U.S.A.、2008.5.9

「Three-quarter view is good because object orientation is uncertain. 」、The eighth annual meeting of The Vision Science Society 、Naples, U.S.A.、2008.5.9

「Failure of temporally separated visual information integration: An fMRI study. 」、The 49th Annual Meeting of the Psychonomic Society 、Chicago, U.S.A.、2008.11.13

「Sentence context processing prevails over constituent word processing. 」、The 49th Annual Meeting of the Psychonomic Society 、Chicago, U.S.A.、2008.11.13

「Effect of visuospatial cues on temporal order identification of sound sequences. 」、The 49th Annual Meeting of the Psychonomic Society 、Chicago, U.S.A.、2008.11.13

「A Simon effect with appearance and disappearance of visual and auditory accessory stimuli. 」、The 49th Annual Meeting of the Psychonomic Society. 、Chicago, U.S.A.、2008.11.13

「Frequent Shifts of a Scene Interrupt Change Detection. OPAM 16th Annual Meeting 、Chicago, U.S.A.、2008.11.13

「Cross-Cultural Differences in Color Preference: Japan vs. the USA. 」、The ninth annual meeting of The Vision Science Society 、Naples, U.S.A.、2009.5.10

「Object orientation In canonical and accidnetal views: An fMRI Study. 」、The 50th Annual Meeting of the Psychonomic Society 、Boston, U.S.A.、2009.11.19

「Sentence context representation activated by transposed phrases. 」、The 50th Annual Meeting of the Psychonomic Society 、Boston, U.S.A.、2009.11.19

「Regulatory factors of Japanese synesthetes in synesthetic perception. 」、The 50th Annual Meeting of the Psychonomic Society 、Boston, U.S.A.、2009.11.19

「The prevalence effect in the tumor search: Differences between experts and novices. 」、The 50th Annual Meeting of the Psychonomic Society. 、Boston, U.S.A.、2009.11.19

「Synesthetic colors for phonetic Japanese characters depend on sound qualities. 」、OPAM 17th Annual

Meeting (Boston, U.S.A.)

「Audio-visual localization and identification processes interact to solve incongruent information.」、
OPAM 17th Annual Meeting、Boston, U.S.A.、2009.11.19

「Does scene context always facilitate the retrievals of representations?」、OPAM 17th Annual
Meeting、Boston, U.S.A.、2009.11.19

(4) マスコミ

テレビ、「共感覚のミステリー」、ガリレオチャンネル、TOKYO MX テレビ、2009.11.29

(5) 受賞

「優秀論文賞」、Best Paper Award、校正専門家の高次視覚特性に関する検討、日本基礎心理学会、2008

(6) 教科書

「心理学の謎を解く——初めての心理学講義—— I 章 見ることを科学する——視覚の認知心理学」、医学出版、2008

2. 主な社会活動

(1) 学会

「日本認知科学会」、役員・委員、監査、2008.1～2010.12

「認知神経科学会」、役員・委員、評議員、2007～

09 a 日本語日本文学（国語学）

教授 **鈴木 泰** SUZUKI, Tai

1. 略歴

1971年6月 東京大学文学部国語国文学科卒業
1971年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門修士課程進学
1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門修士課程修了
1974年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門博士課程進学
1975年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門博士課程退学
1975年4月 山形大学人文学部国語国文学科専任講師
1979年2月 山形大学人文学部国語国文学科助教授
1981年10月 武蔵大学人文学部日本文化学科助教授
1986年4月 武蔵大学人文学部日本文化学科教授
1993年4月 お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科教授
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
2009年3月 東京大学大学院人文社会系研究科教授定年退職

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学・文法論・文法史

b 研究課題

古代日本語のテンス・アスペクト

古典語語彙の計量的研究

研究プロジェクト

『今昔物語集』および中世前期諸作品の語彙の計量的研究

『今昔物語集』の KWIC 作成の原理的問題とその意味・文法論的利用の可能性

c 主要研究業績

(1) 著書

単著、「古代日本語時間表現の形態論的研究」、ひつじ書房、2009.2

(2) 論文

古代日本語の形態論『日語学習と研究』《日語学習と研究》雑誌社（139号）2008.12

(3) 研究報告書

『今昔物語集』の KWIC 作成の原理的問題とその意味・文法論的利用の可能性、2009.3

(4) 学会発表

「古代日本語の形態論」北京日本学研究中心（2008.4）、北京大学（2008.6）

「現代日本語のテンス・アスペクト——中国語との対照も視野にいれて——」北京師範大学（2008.5）、
中山大学（広州）（2008.5）、洛陽外国語学院（2008.6）

「日本語文法研究の現状と課題」北京語言大学、大連理工大学、上海海事大学、杭州師範大学（2008.6）

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

日本大学非常勤講師、2008.4～2009.3

(2) 行政

大学評価・学位授与機構、文学・神学専門委員会委員、2008.4～2009.3

科学技術・学術審議会学術分科会学術研究推進部会「国語に関する学術研究の推進に関する委員会」委員
2008.12～2009.3

(3) 学会

「日本語学会」副会長、理事、評議員、2008.4～2010.3

教授 **尾上 圭介** ONOE, Keisuke

1. 略歴

1972年3月 東京大学文学部国語国文学専修課程卒業

1975年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了

1975年4月 東京大学文学部助手 ～1977年3月

1977年4月 神戸大学文学部助教授 ～1989年3月

1989年4月 東京大学文学部助教授

1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2006年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要と自己評価

(1) 言語表現の文法的構造とそれが結果として持つ意味、表現性との関係を論理的に明らかにすることを課題とし、具体的には、(イ) 助動詞を含む述定形式の文法的性格とその意味との関係(モダリティ、テンス、アスペクトを含む)、(ロ) 平叙文・疑問文・命令文・感嘆文の文の種類の本質とその表現性との関係、(ハ) 係助詞の文法的性格と文中での表現性との関係、(ニ) 主述関係を中心とする文の格的構造と文の表現的断続

構造との関係, などについて研究している。

(イ) に関しては, 現代語の個々のモダリティ形式の叙法的性格とそれらの全体組織について私なりの最終的な結論を得るとともに, 古代語のモダリティ形式についてもその叙法的性格の全体像をほぼ描くことができた。また, テンス・アスペクトに関しても独自の見解を(公開講義等で)発表することができた。これらに(ロ)に関する論文を加え, まとめて2001年に個人の論文集の形で刊行することができた。

(ハ) (ニ) に関しては, 1996年度と2000年度の講義で「受身・可能・自発」文の格的構造の特殊性を明らかにすることができ, これをもっていわゆる「ハとガの問題 —主語と題目語と現代語の係助詞の機能に関する問題—」全体についての最終的な見解を得ることができた。主語・題目語に関しては, 尾上編『朝倉日本語講座6巻文法Ⅱ』所収の論文「主語と述語をめぐる文法」において, 私の研究の現段階の全体像を概観的にまとめることができた。(ハ) (ニ) の領域に関する論文を全て含む論文集を2011年度に刊行する予定であり, 「受身・可能・自発」文の構造を多角的に分析した一書を刊行する予定である。

(2) 大阪方言のディスコースの特徴, 表現上の特徴という観点から, 大阪の文化のあり方を照射しようとしている。この問題に関しては, これまでの検討の結果をまとめて1999年3月に単行本として出版した。

c 主要研究業績

(1) 論文

「主語と主題(題目語)」、ヨーロッパ日本語教育12、2008

「動詞が述語になるとはどういうことか」、張威・山岡政紀編『日語動詞及相関研究』外語教学与研究出版社(北京)、2009.6

(2) 予稿・会議録

基調講演、「動詞が述語になるとはどういうことか」、北京清華大学日本語学国際フォーラム予稿集、2008.8

(3) 学会発表

「文の種類について」、中日理論言語学研究会、2008.7.27

「文法論で問うべきことは何か」、山田孝雄日本文法論刊行100年記念シンポジウム、2008.11.29

「存在承認と存在希求——文的意味成立の原理——」、ドイツ文法理論研究会、2009.5.31

「日本語教育と日本語研究」、第5回中国大学日本語教育研究国際シンポジウム、2009.12.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京言語研究所2008年度春期特別講座「日本語文法理論」、2008.4.20

北京第二外国语学院講演「主語と題目語(主題)の関係」、2008.8.9

北京日本学研究中心講演「主語述語発生の原理」、2008.8.9

北京大学講演「文の種類をどう見るか——述語を持つ文と持たない文——」、2008.8.10

文法学会2008年度連続公開講義(第4回)「述語のダイクシス」、2008.11.8

東京外国語大学集中講義、2008.12.24~2009.1.9

東京言語研究所2009年度春期特別講座「日本語文法のおもしろさ」、2009.4.19

NHKラジオ第2放送「私の日本語辞典」1~4回、2009.7.4.~7.25

文法学会2009年度連続公開講義(第2回)「主語と述語がなぜあるか」、2009.7.18

(2) 学会

「日本語文法学会」、『日本語文法事典』編集委員、2008.4~2010.3

「日本語文法学会」、会員、2008.4~2010.3

「日本語学会(国語学会)」、評議員、2008.4~2010.3

「日本言語学会」、評議員、2008.4~2010.3

「日本笑い学会」、理事、2008.4~2010.3

(3) 学外組織

金田一京助博士記念賞選考委員、2008.4~2010.3

1. 略歴

- 1977年3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
- 1980年3月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
- 1981年3月 東京大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
- 1981年4月 茨城大学人文学部専任講師（～1985年3月）
- 1985年4月 白百合女子大学文学部専任講師（～1987年3月）
- 1987年4月 白百合女子大学文学部助教授（～1992年3月）
- 1992年4月 東京大学文学部助教授（～1995年3月）
- 1995年3月 ドイツ連邦共和国ルール大学ボッフム交換助教授（～1996年1月）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2006年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語史

b 研究課題

漢文に日本語としての読みを記入した訓点資料の研究を課題としている。関心の中心は平安時代から鎌倉時代にかけての訓点にあり、学界未紹介の資料を公表し、また既に知られている資料も含め、その資料的性格を再検討して言語の特質や年代性を吟味することにより、国語史料としての訓点資料の新たな利用の方法を模索している。

c 主要研究業績

(1) 著書

共編著、月本雅幸・藤井俊博・肥爪周二「古典語研究の焦点」、武蔵野書院、2010.2

(2) 論文

「特集 2006年・2007年における日本語学界の展望 総説」、日本語の研究、4巻3号、1～4頁、2008.7
「古訓点の改変について——藤原頼長加点「因明論疏」をめぐる——」、国語と国文学、85巻8号、1～13頁、2008.8

「高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏卷第十五康和点訳文稿（五）」、平成二十年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、116～119頁、2009.3

「高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏卷第十五康和点訳文稿（六）」、平成二十一年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集、130～133頁、2010.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

文化審議会専門委員（文化財部会）2010.2～2010.3

人間文化研究機構国立国語研究所運営会議委員 2009.10～2010.3

(2) 学会

「日本語学会」機関誌編集委員長、2008.4～2009.5

「日本語学会」理事 2009.6～2010.3

「日本語学会」評議員、2008.4～2010.3

「訓点語学会」運営委員、2008.4～2009.5

「訓点語学会」運営委員長、2009.5～2010.3

准教授 **井島 正博** IJIMA, Masahiro

1. 略歴

1982年 3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業
1984年 3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1984年 4月 東京大学大学院人文科学研究科研究生
1985年 10月 防衛大学校人文科学研究室助手
1989年 4月 山梨大学教育学部専任講師
1991年 4月 山梨大学教育学部助教授
1992年 4月 成蹊大学文学部日本文学科助教授
1998年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本語学 古典語・現代語文法および言語理論

b 研究課題

言語理論および日本語文法の研究をテーマとしている。これまでに、格構造（受身文、使役文、可能文、授受動詞構文）、テンス・アスペクト構造、言語行為構造（推量文、疑問文）、談話構造、中でも情報構造・視点構造（テンス、授受動詞構文）・期待構造（否定文、数量詞、限定表現、条件文）など、日本語文法をできる限りグローバルにとらえられる枠組を求めて考察を進めてきた。

現在は、コミュニケーション行為構造の分析に力点を置きつつ、近年の有力な言語理論の批判的検討を通して、理論的全体像を模索している。また、テンス・アスペクトおよび推量を中心として古典語にも考察を広げている。

c 主要研究業績

(1) 論文

「近代文典におけるいわゆる推量助動詞」、日本語学論集、5号、51-92頁、2009.3

「中古語過去助動詞の意味解釈」、国語と国文学、86巻11号、84-94頁、2009.11

「ノダ文の機能と構造」、日本語学論集、6号、75-117頁、2010.3

「上代・中古語推量助動詞の疑問用法」、東京女子大学日本文学、106号、23-53頁、2010.3

(2) 書評

「名嶋義直『ノダの意味・機能——関連性理論の観点から——』」、日本語の研究、5巻2号、2009.4

(3) 教科書

『日本語概説』、沖森卓也編 井島正博ほか、朝倉書店、2010.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京女子大学非常勤講師、2008.4～2010.3

立教大学非常勤講師、2008.4～2010.3

(2) 学会

「日本語文法学会」、評議員 2008.4～2010.3

准教授 **肥爪 周二** HIZUME, Shuji

1. 略歴

1989年 3月 東京大学文学部国語学専修課程卒業

1991年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻修士課程修了
1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専攻博士課程中退
1993年4月 明海大学外国語学部日本語学科専任講師（～1996年3月）
1996年4月 茨城大学人文学部人文学科専任講師（～1997年9月）
1997年10月 茨城大学人文学部人文学科助教授（～2003年3月）
2003年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

国語学

b 研究課題

日本語音韻史・日本漢字音史・日本韻学史を専門としている。特に、古代日本における外国語研究の二本の柱、すなわち漢字音韻学（中国語学）・悉曇学（梵語学）の学史的な研究を、主要な研究領域とする。先人の残したさまざまな記録を元に、江戸時代以前の日本における、音声観察・音声分類の発達および変遷を解明することを目指す。これらの研究成果と連動させつつ、漢字音の日本化の問題、拗音分布の偏在性についての歴史的解釈、濁音の起源（連濁現象の起源）についての考察など、音韻史分野にも研究対象を拡張している。今後は、和語音、呉音・漢音系字音、唐音系字音、梵語音を総合する、日本語音節バリエーションの歴史を明らかにしていきたい。

c 主要研究業績

(1) 著書

編著、「古典語研究の焦点」、2010.1

(2) 論文

「拗音の分布からあぶり出す日本語音韻史」、文化交流研究、2009.3

「古典語の連濁——二つの未解決問題——」、古典語研究の焦点、2010.1

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

慶應義塾大学非常勤講師、2009.4～2010.3

國學院大學非常勤講師、2009.4～2010.3

(2) 学会

「訓点語学会」、委員 2008.4～2009.3、運営委員 2009.4～2010.3

09b 日本語日本文学（国文学）

教授 **多田 一臣** TADA, Kazuomi

1. 略歴

1973年3月 東京大学文学部国語国文学専修課程卒業

1975年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1975年4月 東京大学文学部助手
1980年4月 千葉大学人文学部講師
1981年4月 千葉大学文学部助教授
1994年4月 東京大学文学部助教授
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（～現在に至る）
1999年1月 博士（文学）（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

日本古代文学、とくにその前期にあたる上代文学を主たる研究対象領域とする。これまで神話・伝説・説話といった伝承性の色濃くあらわれた文学、記紀歌謡に代表される古代歌謡や『万葉集』などの韻文系の文学の研究に従事してきた。歴史的な客観性に基盤を置いた実証を重んじつつも、一方で発生論的視座に立つ表現論的な方法を積極的に取り入れようと考えてきた。本年、十年以上の歳月を費やした『万葉集』の全注釈である『万葉集全解』全七冊を完成させた。現在は、万葉語彙の語誌的研究、柿本人麻呂の伝記的研究、『古事記』の総合的研究に精力を傾注している。

c 主要研究業績

(1) 著書

『万葉集全解』1、2、3、4、5、6、7（筑摩書房、2009年3、5、7、9、11月、2010年1、3月）461、524、518、578、499、411、523頁。

『改訂新版 日本の古典—古代編』（藤原克己と共編著、放送大学教育振興会、2009年3月）298頁。

(2) 論文

「『歌経標式』から『古今集』へ」、『文学』、第9巻1号、29-38頁、2008.1

「景と心」、『古代文学』、第47号、2-8頁、2008.3

「大伴家持の「歌日誌」——「族を喩せる歌」を中心に——」『万葉集を読む』（古橋信孝編、吉川弘文館、2008年9月）、118～136頁。

「『歌経標式』の〈喩〉——「直語」「古事」「新意」——」『修辞論』（近藤信義編、おうふう、2008年12月）、169～183頁。

「東国の女浮舟『むらさき』第45輯（2008年12月）、紫式部学会、4～11頁。

「「近江二首」を読む」『論集上代文学』第31冊（2009年4月）、萬葉七曜会編、笠間書院、33～51頁。

「九州風土記を考える——『万葉集』から——」『風土記研究』第33号（2009年6月）、風土記研究会、1～20頁。

「越中国守大伴家持」『高岡市万葉歴史館紀要』第20号（2010年3月）、高岡市万葉歴史館、18～29頁。

(3) 小論等

「《座談会》八世紀の文学」『文学』第9巻1号（2008年1月）、岩波書店、2～28頁。（司会を担当、森朝男・岡部隆志・古橋信孝氏と）

「訓詁の学から表現論的な読みへ」『ちくま』第457号（2009年4月）、筑摩書房、12～13頁。

「山本家の狂言」（山本会別会プログラム、2009年5月）、8～9頁。

(4) 書評

「鉄野昌弘『大伴家持「歌日誌」論考』」、『国語と国文学』、85巻4号、2008.4

(5) 学会発表

「九州風土記を考える——『万葉集』から」（シンポジウム「九州風土記を考える」、風土記研究会研究発表会、別府大学、2008年9月6日）（荻原千鶴、荊木美行、橋本雅之（司会）氏と）

「古代日本人の時間意識」（駒澤大学国文学大会、駒澤大学、2009年12月）

3. 主な研究活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、1999.4～

千葉市民大学講師、1990～

(2) 学会

- 「古代文学会」、役員・委員、委員、1977.4～
「上代文学会」、役員・委員、常任理事・理事、1988～
「東京大学国語国文学会」、役員・委員、会長、2008.1～
「美夫君志会」、役員・委員、理事、2006.4～
(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員
「財団法人杉並能楽堂」、理事、2006.12～

教授 **長島 弘明** NAGASHIMA, Hiroaki

1. 略歴

- 1976年 3月 東京大学文学部国語国文学専修課程卒業
1979年 3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1979年 4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1980年 4月 実践女子大学文学部専任講師
1985年 4月 名古屋大学文学部専任講師
1986年 12月 名古屋大学文学部助教授
1993年 4月 東京大学文学部助教授（1993年4月～1994年3月、名古屋大学助教授併任）
1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（～現在に至る）
2000年 9月 博士（文学）（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

近世中期の上田秋成・建部綾足・与謝蕪村らの文人の文学を、伝記・作品論・思想論等の様々な面から考察する。新しい文学理念を掲げ、それまでになかった文学ジャンル・学問・絵画を生み出した文人の活動を、一人一人の個性・特殊性と、個人を越えた共通性との両面から明らかにすることを研究の目標とする。

この数年は上田秋成全集の編集と平行して、秋成の伝記的事実・作品書誌の調査を進めており、ほぼ全容を見通せるところまで研究を進めることができた。今後は、秋成の伝記研究をまとめたい。また、建部綾足については、物語と俳諧・国学の関係を中心に、作品論を試みたい。さらに蕪村については連句の注釈を刊行したが、引き続き作品論を深めていきたい。

c 主要業績

(1) 論文

- 「秋成伝記資料拾遺」、『秋成文学の生成』（森話社）、2008.2
「근세 명구 (近世名句) 의 오독」、日本研究、第9輯、2008.2
「秋成——テキストの生成と変容」、『テキストの生成と変容』（大阪大学大学院文学研究科）、2008.3
「「宮木が塚」考」、国語と国文学、2008.5
『「往生要集」と近世小説——日本における「地獄」イメージの流布——』、『死生学〔4〕 死と死後をめぐるイメージと文化』（東京大学出版会）、2008.9
「最晩年の秋成」、文学、第10巻第1号、2009.1
「《座談会》上田秋成」、文学、第10巻第1号、2009.1
「秋成と蕪村」、『蕪村全集』第9巻付録月報9、2009.9
「物語集としての『藤篋冊子(つづらぶみ)』——秋成における物語の生成——」、『日本近世文学・文芸の中心と周縁予稿集』（高麗大学校日本研究センター）、2009.9
「近世文学における「江戸」像——上方から見た「江戸」・江戸から見た「江戸」——」、『日本文学の中の江戸・東京表象研究』、2009.12
「上田秋成と朝鮮通信使」、Koreana、2009.12

「物語集としての『藤篋冊子(つづらぶみ)』——秋成における物語の生成——」、日本研究 (高麗大学校)、2010.2

「終わらない夢——『雨月物語』、国文学 解釈と鑑賞、2010.3

「江戸文学と南蛮菓子——カステラと金平糖——」、和菓子、2010.3

(2) 書評

「梅原章太郎『蕉風付合論』、国語と国文学、2008.8

(3) 学会発表

「怪異たちの「ことば」——『雨月物語』の場合——」、物語研究会シンポジウム「亡霊とエクリチュール」、2008.3.15

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、1999.4～

(2) 学会

「日本近世文学会」、役員・委員、常任委員、2000.6～

「日本文学協会」、役員・委員、委員、2003～

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「日本学術会議」、連携会員、2006.3～

教授 **藤原 克巳** FUJIWARA, Katsumi *論文署名は克己

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業
- 1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
- 1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学
- 1980年4月 岡山大学教養部講師
- 1984年4月 岡山大学教養部助教授
- 1989年4月 神戸大学文学部助教授
- 1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2001年5月 博士(文学) (東京大学)
- 2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (現在に至る)

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

菅原道真を中心とする平安朝の漢文学、古今集歌の詩的本質と普遍性の究明、源氏物語研究、の三つの課題を研究の中心に据えているが、菅原道真の漢詩と古今集歌風とは深い親縁性があり、また源氏物語の世界形成には、和歌・漢文学が深く関わっているため、この三つの課題は内的に深く関連しあっている。

菅原道真を中心とする平安朝の漢文学については、『菅原道真と平安朝漢文学研究』(東京大学出版会、2001年5月)にまとめた。また、古今集歌の詩的本質と普遍性の究明という課題に関しては、19世紀末のモダニズムの流れのなかで、古今集歌が西欧で注目され、そうした流れを受けて日本でも昭和にはいってから古今集が再評価されるようになったことを、「古今集の享受と評価の歴史」(藤原他編『古今和歌集研究集成』第3巻、風間書房、2004年4月)で論じたことで、一区切りがついたと考えている。

今後の課題は、漢文学・和歌・物語が深く内的に連関しあっている様相を浮き彫りにするような、立体的・動的な平安朝文学史を著述することである。この課題についても、すでに『日本の古典——古代編』(共著、放送大学教育振興会、2005年3月)で着手した。これをさらに練り上げてゆきたい。

なお、私は日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクトの「教養教育の再構築」に参加して以来、現代人にとって日本古典は教養としていかなる意味をもちうるかということを考えている。『菅原道真 詩人の

運命』(ウエッジ、2002年9月)もそうした問題意識から書いたものであるが、目下、『源氏物語』はその言葉の織物のなかに時代社会をどのように織りなしたかという視点を中心にすえて、世界文学としての『源氏物語』の普遍性を明らかにしてゆくという課題にも取り組んでいる。

c 主要研究業績

(1) 著書

共著、「源氏物語 におう、よそおう、いのる」、ウエッジ、2008.5

共著、「改訂版 日本の古典—古代編」、放送大学教育振興会、2009.3

共著、「2008年パリ・シンポジウム 源氏物語の透明さと不透明さ」、青簡舎、2009.9

(2) 論文

「源氏物語と能の浮舟」、『観世』、第75巻7号、26-34頁、2008.7

「三角洋一著「源氏物語の仏教語」、『源氏物語と紫式部 研究史篇』、紫式部顕彰会編、片桐洋一・角田文衛監修、角川学芸出版、361-374頁、2008.7

「源氏物語における〈愛〉と白氏文集」、『源氏物語と漢詩の世界——『白氏文集』を中心に——』、日向一雅編、青簡舎、9-44頁、2009.2

「平安朝文学史の試み——「あくがるる心」をめぐって——」、『平安文学史論考』、41-57頁、2009.12

(3) 啓蒙

「源氏物語の深さと美しさ」、一般雑誌、『図書(岩波書店)』、第710号、19-22頁、2008.5

(4) 学会発表

「薫と浮舟の物語——イロニーと不透明性——」、日仏源氏物語研究パリ国際シンポジウム、la salle des actes de l' ENS, Paris、2008.3.29

「源氏物語と宮廷風恋愛(アムール・クルトワ)」、明治大学古代学研究所共催国際シンポジウム《源氏物語と海外の宮廷文学》、明治大学アカデミーホール、2008.10.5

「薫を抱く光源氏」、源氏物語千年紀委員会主催《源氏物語国際フォーラムⅡ》、国立京都国際会館メインホール、2008.11.2

「日中文化交流史のなかの『源氏物語』」、第55回国際東方学者会議、日本教育会館(千代田区一ツ橋)、2010.5.21

「『虚幻の美』をめぐる中日比較文学的考察」、「中国三十年日本文学研究的成就与方法」国際研討会、北京大学英傑交流中心二楼第8会議室、2010.8.28

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学委嘱教授、2008～2009

上智大学文学部非常勤講師、2008～2009

朝日カルチャーセンター新宿、2008～2009

朝日カルチャーセンター横浜、2008～2009

(2) 学会

「和漢比較文学会」、役員・委員、常任理事、2008～2009

「紫式部学会」、役員・委員、理事、2008～2009

教授 **渡部 泰明** WATANABE, Yasuaki

1. 略歴

1981年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業

1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了

1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程退学

1986年4月 東京大学文学部助手

1988年4月 フェリス女学院大学文学部専任講師

1991年4月 フェリス女学院大学文学部助教授
1993年4月 上智大学文学部助教授
1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
1999年4月 博士(文学)(東京大学)
2006年10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(～現在に至る)

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

古代後期から中世にかけての和歌文学を主たる研究領域としている。これまでとはくに、古代社会の産物である和歌が、古代社会が解体してゆく中世において、どうして衰微することなく存在し続けたか、に焦点を絞って考察してきた。その成果として、1999年にはこれまでの研究成果をまとめる形で、著書を公刊した。歌人・歌壇の歴史的研究および歌書の書誌的研究の進展に比べて、表現史的研究の立ち遅れていた研究の現状において、一定の意味を持つものと判断されるが、1999年以降は、叙景歌などをも含んだ、風景表現を主眼とした和歌の表現史の分析や、本歌取りの通史的分析などに領域を広げている。2002年には、その両者に関わる論文を各一本公刊した。2004年度には、源経信の叙景歌の問題を扱う論考1本と、本歌取り論として2本、2005年度には新しい研究対象として源実朝の論考1本を発表した。実朝論は、全歌注釈と合わせ、源実朝研究としてこれをまとめる予定である。今後はさらに上代や近世の和歌へと視野を広げ、和歌史の全体像を論じることを目標としている。また、他のジャンルとの相関をも研究対象とすべきことが必要であると認識している。

c 主要研究業績

(1) 著書

単著、「和歌とは何か」、岩波書店、2009.7
共著、ジェイ・ルービン他、「1Q84 スタディーズ BOOK1」、若草書房、2009.11
共著、片山由美子他、「俳句を作る方法・読む方法」、角川学芸出版、2009.11
共著、蔦尾和宏・中野貴文・平野多恵、「大学生のための文学レッスン」、三省堂、2009.12
共著、「歌論歌学集成第七巻」、三弥井書店、2006.10

(2) 論文

「「しらべ」論の根拠」、古代文学、47、20-24頁、2008.3
「古今伝授の想像力——『古今和歌集両度聞書』・『古聞』を読む——」、文学 隔月刊、第9巻第3号、40-52頁、2008.5
「その後の万葉集 源実朝を例にして」、万葉集を読む、253-269頁、2008.9

3. 主な社会活動

(1) 他大学での講師等

駒澤大学非常勤講師、2006.4～

(2) 学会

「和歌文学会」、役員・委員、常任委員、1998～
「日本文学協会」、役員・委員、委員・選考委員、2002～
「中世文学会」、役員・委員、常任委員、2003～

教授 **安藤 宏** ANDO, Hiroshi

1. 略歴

学歴

1982年3月 東京大学文学部国文学専修課程卒業
1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了
1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程中退

- 1987年4月 東京大学文学部助手
 1990年4月 上智大学文学部専任講師
 1995年4月 上智大学文学部助教授
 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代文学

b 研究課題

太宰治の文学の自意識過剰の饒舌体と呼ばれる文体に注目するところから出発、そのような文体が育まれてゆく必然性を近代文学史の展開に即して考察して行く中で、書き手の表現意識が「私小説」というわが国独自の表現形式を生み出してゆく機構にあらためて着目するに至った。いわゆる作家論の一環として太宰治の文学の特質を解明して行く方向と、日本近代文学における「自己」表現の歴史的変容を解明して行く方向とを、同時並行的におしすすめて行くことを現在の研究課題としている。

c 主要研究業績

(1) 著書

分担執筆、「日高隆夫・野山嘉正編『展望 現代の詩歌 俳句Ⅲ』」、明治書院、2008.2
 編著、「展望太宰治」、2009.6
 編著、島内裕子、「日本の近代文学」、放送大学教育振興会、2009.9

(2) 論文

「太宰治『愛と美について』論」、東京大学国文学論集、第3号、1-19頁、2008.5
 「一人称の近代」、文学、第9巻第5号、32-45頁、2008.9
 「太宰治と東京」、東京大学国文学論集、第4号、189-204頁、2009.3

(3) 総説・総合報告

座談会「一人称という方法」、学術論文誌、『文学』第9巻第5号、2008.9

(4) 解説

川崎展宏、「飛高隆夫、野山嘉正編『展望現代の詩歌 11 俳句Ⅲ』(明治書院)」、37-52頁、2008.2
 「直筆で読む『人間失格』」、『集英社新書』、432-461頁、2008.11
 「該博である、ということ」、一般雑誌、『中学国語通信 道標』、2009.3
 「新資料・中畑慶吉保管文書より」、学術論文誌、『太宰治研究』、7号、250-266頁、2009.5
 「Dazai Osamu's Allure」、一般雑誌、『Japanese Book News』、60、1-2頁、2009.5
 「『太宰治ブーム』に思うこと」、一般雑誌、『日本近代文学館』、230号、2009.7

(5) 啓蒙

「総論」、『図録 太宰治 三鷹からのメッセージ—— 没後60年記念展 —— 』、2008.11
 「井伏鱒二」、一般雑誌、『東京人』、第262号、60-61頁、2008.12

(6) マスコミ

新聞、「新春座談会・太宰治生誕100年(齋藤環・川上未映子・安藤宏)」、毎日新聞、2009.1.5
 新聞、「私の太宰治—— その魅力12~14」、東奥日報、2009.2.12
 新聞、「論説空間 太宰治生誕百年と現代社会 単なる孤独の象徴にするな」、2009.5.5
 新聞、「16歳の原稿発見に寄せて 太宰文学 濃密な交遊から」、読売新聞、2009.6.30

(7) 学会発表

「太宰治と三鷹」、三鷹市・同芸術文化振興財団主催講演会、三鷹産業プラザ、2008
 「近代小説の表現機構」、東京大学高麗大学共催 日本語学・日本文学・中国文学国際シンポジウム、2008.2.19
 「表現機構としての私小説」、文学研究会、中国・北京・首都師範大学、2008.6.5
 「夏目漱石と近代個人主義」、日本文学総合講座、中国・北京・北京日本学研究中心、2008.6.12
 「太宰治の東京一風景としての〈私〉」、日本近代文学館主催「夏の文学教室」、有楽町・読売ホール、2008.8.1

3. 主な社会活動

(1) 他大学での講師等

放送大学非常勤講師、1999.4

金沢大学文学部非常勤講師、2006.9

(2) 学会

「日本近代文学会」、役員・委員、理事、2006～

「昭和文学会」、役員・委員、常任幹事、2006～

「日本近代文学館」、役員・委員、評議員、2000～

「日本文学協会」、一般会員、1991～

「東京大学国語国文学会」、役員・委員、評議員、1987～

10 日本史学

教授 **吉田 伸之** YOSHIDA, Nobuyuki

1. 略歴

- 1972年3月 東京大学文学部卒業
- 1973年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学
- 1975年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了
- 1975年4月 東京大学文学部助手
- 1979年4月 千葉大学教育学部講師
- 1981年1月 千葉大学教育学部助教授
- 1985年4月 東京大学文学部助教授
- 1992年9月 博士（文学）学位取得
- 1993年11月 東京大学文学部教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 現在に至る。

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近世史

b 研究課題

日本近世の三都を中心とする都市社会の社会＝空間構造について、民衆世界を中心に解明することをめざしている。また南信濃を素材として、山里の地域社会について調査・研究に取り組んでいる。

c 主要研究業績

(1) 著書

編著、『千葉県の歴史 通史編・近世2』、2008.3

編著、高澤紀恵 アラン・ティレ、「パリと江戸——伝統都市の比較史へ」、山川出版社、2009.6

編著、後藤雅知、「山里の社会史」、山川出版社、2010.2

(2) 論文

「江戸の武家屋敷と流通のしくみ」、歴史地理教育、731号、2008.8
「日本近世の地域史・論の視座から」、歴史学研究、846号、2008.10
『山口啓二著作集』第2巻の編集に携わって」、歴史評論、704号、2008.12
「御堀端」と揚場」、『パリと江戸』、157～171頁、2009.6
「伝統都市と社会=文化構造」、『文化遺産と都市文化政策』、81-101頁、2009.12
「山里社会の分節的把握——信濃国伊那郡清内路村を素材として」、『山里の社会史』、2010.2
「食類商人について」、『和菓子』、17号、2010.3

(3) 研究報告書

「滋賀県野洲市大篠原小澤家文書 現状記録調査報告書」、2009.4

(4) 学会発表

「"Les spectacles d'Edo: Public, Artistes, Entrepreneurs"」、フランス都市史学会主催講演会、Lycee Henre 4、2008.3.26

「"Marges sociales et espaces urbains: la societe des quartiers de plaisirs d'Edo"」、リセ・アンリ 4 世校主催講演会、Lycee Henre 4、2008.3.27

「新自由主義の時代と現代歴史学の課題——その同時代史的検証」、歴史学研究会大会全体会、早稲田大学、2008.5.17

「江戸時代に学ぶ循環型社会」、東京大学 AGS 戦略セミナー、東京大学、2008.8.22

「山里の分節構造——南信濃清内路村を事例として」、史学会大会、東京大学、2008.11.9

「単位地域の調査・研究・叙述」、佐賀大学地域学シンポジウム、佐賀大学、2008.12.6

「巨大都市江戸と燃料エネルギーの供給=消費構造」、AGS・2007年度研究報告会、東京大学、2008.12.17

「身分・身分的周縁の比較類型把握」、大阪市立大学国際円座「近世身分社会の比較史」、大阪市立大学、2009.7.19

「南信州山間部地域社会における燃料エネルギー（薪炭）の生産と流通構造」、東京大学 AGS・2009年度研究報告会、東京大学、2009.12.15

「文化創造力」と伝統都市」、大阪市立大学重点研究国際シンポジウム「都市の歴史的形成と文化創造力」、大阪市立大学、2010.1.9

3. 主な社会活動

(1) 学会

「史学会」、評議員

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「飯田市歴史研究所」、研究部長 2003～

教授 **村井 章介** MURAI, Shosuke

1. 略歴

1972年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業（文学士）
1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（国史学）
1974年4月 東京大学史料編纂所入所
1975年4月 東京大学史料編纂所助手（中世史料部）
1985年4月 東京大学史料編纂所助教授（中世史料部）
1991年4月 東京大学文学部助教授（国史学）
1993年3月 博士（文学）取得
1993年3月 ボッフム・ルール大学交換教授（1994年1月まで）
1994年4月 東京大学文学部教授（日本史学）
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本文化研究専攻）
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本文化研究専攻、韓国朝鮮文化研究専攻兼任）

2004年8月 北京日本学研究中心派遣教授(2005年1月まで)

2007年3月 韓国朝鮮文化研究専攻兼任を解かれる

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本中世史

b 研究課題

9～17世紀の日本列島およびその周辺の政治や文化や社会を、国家領域を超えた<地域>のなかでとらえなおす。その<地域>の担い手となる人間集団の行動、物や情報の動き、あるいは<地域>外集団との相互認識や境界の性格などを解明する。そのほか、政治史を中心とした通史叙述、地域論や対外関係とリンクさせた交通史、中世史料論などにも関心をもつ。これまでシンポジウム・講演などに向けて研究を進める形が多かったが、今後は、その着想を熟成させて、しっかりした著書・論文に結実させるための時間を確保したい。

c 主要研究業績

(1) 著書

編著、「中世東国武家文書の研究——白河結城家文書の成立と伝来——」、高志書院、2008.5

編著、「Studies of Medieval Ryukyu within Asia's Maritime Network」(『ACTAASIATICA』No.95)、東方学会、2008.8

単著、「東アジアのなかの中世韓国と日本(景仁韓日関係研究叢書6)」、景仁文化社、ソウル、2008.10

編著、「人のつながり」の中世、山川出版社、2008.10

編著、北島万次・孫承喆・橋本雄と共編、「日朝交流と相剋の歴史」、校倉書房、2009.11

(2) 論文

「中世における禅宗の輸入と「日本化」」、鈴木靖民編・古代日本の異文化交流、勉誠出版刊、97-122頁、2008.2

「中世日本と古琉球のはざま」、池田栄史編・古代中世の境界領域——キカイガシマの世界——、高志書院刊、97-112頁、2008.3

「朝鮮から見た倭城」、学習院史学、No.46、2008.3

「結城親朝と北畠親房」、村井章介編・中世東国武家文書の研究——白河結城家文書の成立と伝来——、高志書院刊、215-239頁、2008.5

「建武の新政」、歴史科学協議会編『天皇・天皇制をよむ』、東京大学出版会刊、140-143頁、2008.5

「終論」、鶴島博和・春田直紀編 日英中世史料論、日本経済評論社刊、313-324頁、2008.7

「松浦党の壱岐島「分治」と境界人ネットワーク」、村井章介編・「人のつながり」の中世、山川出版社刊、188-213頁、2008.10

「大内義隆の対朝鮮通交の一事例」、山口県史の窓、史料編中世4、1-4頁、2008.10

"Poetry in Chinese as a Diplomatic Art in Pre-modern East Asia", Edited by Andrew E. Goble, Kenneth R. Robinson, and Haruko Wakabayashi, "Tools of Culture-Japan's Cultural, Intellectual, Medical, and Technological Contacts in East Asia, 1000s-1500s-", Association for Asian Studies, INC. pp.49-69, 2009

「蒙古襲来と異文化接触」、韓日文化交流基金・東北亜歴史財団編「モンゴルの高麗・日本侵攻と韓日関係」、景仁文化社刊、3-55頁、2009.3

「尹龍赫「三別抄と麗日関係」への討論文」、韓日文化交流基金・東北亜歴史財団編・モンゴルの高麗・日本侵攻と韓日関係、景仁文化社刊、190-193頁、2009.3

「倭城をめぐる交流と葛藤」、北島万次・孫承喆・橋本雄・村井章介編「日朝交流と相剋の歴史」、校倉書房刊、144-158頁、2009.11

「“寺社造営料唐船”再探——以貿易、文化交流、沈船為中心——」、郭万平・張捷主編「舟山普陀与東亜海域文化交流」、浙江大学出版社刊、1-17頁、2009.11

「15世紀から16世紀の東アジア国際秩序と日中関係」、日中歴史共同研究第一期報告書、79-97頁、2010.1

「倭寇とはだれか——14～15世紀の朝鮮半島を中心に——」、東方学、119、1-22頁、2010.1

(3) 予稿・会議録

その他、「討論」、文部科学省科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」、九州国立博物館、「東アジア美術文化交流研究会編『寧波の美術と海域交流』」、2008

(4) 書評

「大山喬平編『中世裁許状の研究』」、学術論文誌、『法制史研究』、59、2010.3

(5) 総説・総合報告

「2007年の歴史学界 回顧と展望 ・総説」、学術論文誌、『史学雑誌』117-5、1-4頁、2008.6

「2008年の歴史学界 回顧と展望 ・総説」、学術論文誌、『史学雑誌』118-5、1-5頁、2009.6

(6) 解説

「世界観、地理」、『新編森克己著作集第3巻続々日宋貿易の研究』、439-451頁、2009.10

(7) 学会発表

"Monks Portraits in Japanese-Chinese interaction in the 13th-14th Centuries", AAS Annual Meeting, Hyatt Regency Atlanta [米国Atlanta市]、2008.4.4

「笑雲瑞訢と雪舟等楊——入明記と水墨画にみる明代中国——」、国際学術シンポジウム「東アジア文化交流——人物往来——」、杭州湾大酒店 [中国杭州市]、2008.7.26

「明代日中関係の連鎖構造」、明清史合宿 2008in 島根、ビッグハート出雲 [島根県出雲市]、2008.8.2

「鉄砲伝来研究の現在」、西之表市市制施行 50周年記念シンポジウム「鉄砲伝来 今よみがえる種子島」、西之表市民会館 [鹿児島県西之表市]、2008.8.23

「[実用風景画] 論——遣明使の旅と雪舟——」、[島根県益田市]、2008.9.21

"Who are Medieval 'Japanese Pirates'(Wako)?-On the polemic at the Japanese-Chinese joint research in history", International Conference "History Education and Reconciliation-comparative perspectives on East Asia", Georg-Eckert-Institut für Internationale Schulbuchforschung [ドイツ Braunschweig 市]、2008.10.15

「蒙古襲来と異文化接触」、韓日国際学術会議「蒙古の高麗・日本侵攻と韓日関係」、韓国国学振興院 [韓国安東市]、2008.10.25

「輸入文化としての喫茶——13～14世紀の文字史料から——」、茶道資料館シンポジウム「鎌倉時代の喫茶文化」、茶道資料館 [京都市]、2008.11.3

「倭寇と日本・アジアの交流史」、(財)東洋文庫 2009年度春期東洋学講座、2009.5.26

「古代末期の北と南」、法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究所「日本の中の異文化」総括シンポジウム「古代末期の境界世界——石江遺跡群と城久遺跡群を中心として——」、法政大学、2009.11.14

「15世紀朝鮮・南蛮の海域交流——成宗の椒種求請一件から——」、九州史学研究会朝鮮学部会シンポジウム「中近世の朝鮮半島と東アジア海域」、九州大学、2009.12.13

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学非常勤講師、2004.4～

法政大学大学院人文・社会科学部研究科非常勤講師、2005.4～

朝日カルチャーセンター横浜講師、2010.3 (4回)

(2) 行政

「日本学術振興会科学研究費委員会」、専門委員、2005.1～

「人間文化研究機構連携研究委員会」、委員、2005.4～

「日本学術会議」、連携会員、2009～

(3) 学会

「史学会」、役員・委員、理事長、2007～

「東方学会」、理事・セミナー常任委員、評議員、2003.9～

「日本古文書学会」、役員・委員、理事・評議員、2007～

「日本歴史学会」、役員・委員、評議員、2007～

「東洋文庫」、研究員、2003～

1. 略歴

- 1969年3月 千葉大学文理学部人文課程史学専攻卒業
- 1971年3月 東北大学大学院文学研究科修士課程修了(国史学)
- 1974年3月 東北大学大学院文学研究科博士課程中退
- 1975年4月 東京大学史料編纂所教務職員(編年第5部)
- 1976年4月 東京大学史料編纂所助手
- 1986年3月 東京大学史料編纂所助教授(近世史料部)
- 1990年6月 文学博士(東北大学)
- 1993年4月 東京大学史料編纂所教授
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(日本史学)
- 2010年3月 定年により退職

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

日本近世史・近世政治史

近世日本の歴史研究が社会経済史的研究を主流としてきた研究動向と異なり、社会史や経済史に還元できない政治史そのものの独自性を、その具体性において捉えながら近世史を再構成することは、研究史的に重要な意義を持つと考え、江戸幕府の政治を軸にして近世の歴史を政治史的に解明することを課題として研究してきた。そのさい、従来の研究が触書と社会経済史的な事実とを短絡的に接合して論じてきたのに対して、江戸幕府の法として現れる諸政策を、その立案・立法の過程から内面的に解明するという手法を一貫してとり、その政策の本質と推移を明らかにしてきた。また、幕末から近代の日本の歴史を見通したときに重要となるのが、天皇・朝廷と対外関係であることに着目し、ほとんど研究のなかった天皇・朝廷の動向や幕府との関係の変動、および対外的危機を一般的に論じるのではなく、鎖国を祖法とする対外関係の固定化や、攘夷策の成立過程の解明を中心に対外関係の動向を検討してきた。

概要

18世紀後半以降の政治史を、幕府の政治、対外的な関係、幕府と朝廷の関係から明らかにするという、従来からの課題に取り組んだ。対外関係では、近世後期の政治史とロシアを中心とする対外関係の歴史的意義を追究し、幕府と朝廷の関係では、科学研究費補助金基盤研究Cにより儀礼的關係についての検討を始めた。

自己評価

近世後期の対外関係と幕政の動向を、新たな史料の発掘を行いながら深めることができ、近く研究書にまとめ公表できる段階まできた。また、シンポジウムを組織して江戸時代の法を再検討し、近く論文集を刊行する。さらに、科学研究費補助金をうけ朝幕関係を儀礼的な面から検討する研究組織を作り作業を開始したことなどが前進した点である。

c 主要研究業績

(1) 著書

単著、「田沼意次」、ミネルヴァ書房、2007.7

(2) 論文

「鴉外歴史小説の「史料と歴史」、『文学』(岩波書店)、8巻2号、61-67頁、2006

「伊達家文書のなかの田沼意次」、論集きんせい、第28号、2006.6

「近世王権論と天皇」、大津透編『王権を考える』(山川出版社)、173-200頁、2006.11

「鴉外歴史小説の「史料と歴史」、文学(岩波書店)、第8巻2号、61-67頁、2007.6

(3) 書評

「佐々木潤之介『江戸時代論』」、吉川弘文館、2005、その他、『週刊読書人』2619号、2006.1

「関口すみ子『御一新とジェンダー』」、東京大学出版会、2005、学術論文誌、『総合女性史研究』第24号、86-90頁、2007.8

(4) 教科書

「新日本史B」、大津透 久留島典子 伊藤之雄、執筆、山川出版社、2006

(5) 監修

「街道の日本史」2007

「日本史講座」2007

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

お茶の水女子大学非常勤講師、2004～

未来塾講師、2004～

中央大学文学部非常勤講師、2006.4～2007.3

渋谷区千駄ヶ谷社会教育会館講師、2006.7～

千葉実年大学、2006.7～

中央大学非常勤講師、2007.4～

(2) 学会

「日本古文書学会」、評議員、2007～

「日本歴史学会」、評議員・理事、2007～

「史学会」、評議員・理事、2007～

「歴史学研究会」、役員・委員、委員長、2007.6～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「国立国文学研究資料館」、外部評価委員、2006～

教授 **佐藤 信** SATO, Makoto

1. 略歴

- | | |
|-----------|---------------------------------|
| 1976年 3月 | 東京大学文学部国史学専修課程卒業 |
| 1978年 3月 | 東京大学大学院人文科学研究科（国史学）修士課程修了（文学修士） |
| 1978年 12月 | 東京大学大学院人文科学研究科（国史学）博士課程中退 |
| 1979年 1月 | 奈良国立文化財研究所（平城宮跡発掘調査部）研究員 |
| 1985年 4月 | 文化庁文化財保護部（記念物課） |
| 1987年 7月 | 文化庁文化財調査官 |
| 1989年 4月 | 聖心女子大学文学部助教授 |
| 1992年 4月 | 東京大学文学部助教授（国史学） |
| 1995年 4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本史学） |
| 1996年 7月 | 東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本史学） |
| 1997年 7月 | 博士（文学）取得（東京大学） |

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本古代史

b 研究課題

古代都市、出土文字資料（木簡学）、古代国家財政、文化財学

概要と自己評価

日本史学研究の国際化に応じて、日本史学の国際発信に向けて自分なりに寄与した。日本文学・日本語学専攻の友人との共同研究成果などを出版することが出来た。史跡の保存・調査・研究・活用をめざす活動と合わせて、こうした諸成果を教育にも活かすよう努力した。しかし、やはり研究時間の捻出が最も大きな課題となっている。

c 主要研究業績

(1) 著書

共著、沖森卓也・矢嶋泉、「豊後国風土記・肥前国風土記」、山川出版社、2008.1

共著、沖森卓也・平沢竜介・矢嶋泉、「歌経標式 影印と注釈」おうふう、2008.10

(2) 論文

「日本古代の交通と出土木簡」、『資料学の方法を探る』(愛媛大学法文学部)、8号、60-67頁、2009.3

「下野薬師寺の古代史」、『栃木県立文書館研究紀要』、13号、1-12頁、2009.3

「陵墓と日本古代史」、歴史学研究、857、3-7、63頁、2009.9

「日本における漢字文化の受容と展開」、法政史学、72、1-21頁、2009.9

「古代日本の漢字文化受容」、歴史地理教育、754、70-77頁、2010.1

「出雲国造のクニと令制国出雲」、しまねの古代文化、17、62-70頁、2010.3

(3) 学会発表

「世界遺産から見た最上川」、山形県世界遺産シンポジウム(山形県・山形県教委・東北芸工大)、東北芸術工科大学、2008.1.12

「日本の寺院制度と国分寺国分尼寺」、シンポジウム「国分寺の創建を読む—思想・制度論—」(国土館大学)、国土館大学、2008.2.9

「古代寺院と地方豪族」、神奈川県立歴史博物館講演会、神奈川県立歴史博物館、2008.2.17

「古代の烽と東山道」、宇都宮市とびやま歴史体験館企画展講演会、宇都宮市とびやま歴史体験館、2008.2.24

「日本古代国家の外交と辺境支配」、新潟市歴史博物館館長講座、新潟市歴史博物館、2008.3.9

「出雲の古代史と古代国家」、国分寺市本多公民館歴史講演会、国分寺市本多公民館、2008.3.15

「史跡の保存・活用と埋蔵文化財保護行政」、平成20年度埋蔵文化財担当職員等講習会(文化庁・茨城県教委)、水戸市民会館、2008.9.3

「幻の宮齋宮と古代都城」、齋宮シンポジウム in 横浜、横浜市歴史博物館、2008.9.23

「国分寺造営と在地社会」、シンポジウム「国分寺の創建を読むⅡ—組織・技術論—」(国土館大学)、国土館大学、2008.10.5

「日本古代の交通と出土木簡」、愛媛大学「資料学」研究会公開シンポジウム、愛媛大学法文学部、2008.10.11

「陵墓と日本古代史」、歴史学研究会日本古代史部会「陵墓」問題シンポジウム、専修大学神田キャンパス、2008.10.18

「古代下野の地方官衙と社会」、しもつけ風土記の丘資料館特別展記念講演会、しもつけ風土記の丘資料館、2008.10.19

「下野薬師寺の古代史」、平成20年度栃木県立文書館歴史講演会、栃木県庁講堂、2008.11.4

「地方官衙と古代豪族—三軒屋遺跡と檜前部君氏を中心に—」、伊勢崎市三軒屋遺跡講演会、伊勢崎市緋の郷円形交流館、2008.11.22

「古代相模史と古代国家」、神奈川県教育委員会平成20年度考古学ゼミナール、神奈川県埋蔵文化財センター、2009.1.20

「世界遺産からみた城下町金沢」、城下町金沢の文化遺産群と文化的景観セミナー、2009.2.14

「出土文字資料からみた古代の中央と地方」、市民の古代研究会・関東、文京区シビックセンター、2009.3.22

「古代の相模と律令国家」、かながわ考古学同好会例会講演、神奈川県埋蔵文化財センター、2009.3.25

「なら時代の興福寺と阿修羅像」、東京国立博物館「国宝阿修羅展」記念講演会、東京国立博物館平成館大講堂、2009.5.9

「漢字文化の受容と古代の日本列島」、法政大学史学会、法政大学、2009.6.6

「古代官衙と交通」、群馬県埋蔵文化財調査事業団平成21年度調査遺跡発表会シンポジウム、前橋テルサホール、2009.6.7

「日本における漢字文化の受容と展開」、韓国東北アジア歴史財団国際学術会議、韓国国立古宮博物館、2009.6.10

「奈良の都平城京の実像」、国分寺市本多公民館歴史講演会、国分寺市本多公民館、2009.6.19

「鞠智城」、熊本県、砂防会館、2009.7.25

「古代日本における漢字文化の受容と展開」、北陸史学会、金沢大学、2009.9.3

「房総の出土文字資料」、私立市川考古博物館特別展記念講演会、私立市川歴史博物館、2009.10.3

「出雲国造のクニと令制国出雲」、第8回神在月古代文化シンポジウム、大社文化プレイスうらら館(出雲市)、2009.10.18

(4) 教科書

「詳説日本史」、笹山晴生・白石太郎ほか、山川出版社、2008

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

放送大学客員教授、2008・2009

國學院大學大学院文学研究科非常勤講師、2008・2009

法政大学大学院人文科学研究科非常勤講師、2008・2009

(2) 学会

「日本学術会議」、連携会員、2008～2008.9

「史学会」、理事・評議員、～2008・2009～

「日本歴史学会」、評議員、～2008・2009～

「木簡学会」、委員、～2008・2009～

「条里制古代都市研究会」、評議員、～2008・2009～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「文化審議会文化財分科会第三専門調査会」（文化庁）委員、2009

「古墳壁画保存活用検討会」（文化庁）委員、～2010.3

「陵墓管理委員会」（宮内庁）委員、2008・2009

「国立文化財機構外部評価委員会」、委員、2008・2009

「大学評価・学位授与機構学位審査会文学・神学専門委員会歴史学部会」、委員、2008・2009

「東京都文化財保護審議会」（東京都教育委員会）、委員、～2008.11

「群馬県埋蔵文化財調査事業団」理事、2008・2009

「奈良県立橿原考古学研究所共同研究員」2008・2009

「平泉遺跡群調査整備指導委員会」（岩手県教育委員会）委員、2008・2009

「史跡九戸城跡整備指導委員会」（二戸市教育委員会）委員、2008・2009

「史跡徳丹城跡調査指導委員会」（矢巾町教育委員会）委員、2008・2009

「多賀城跡調査研究委員会」（宮城県教育委員会）委員、2008・2009

「史跡鳥海山大物忌神社境内保存管理計画策定委員会」（山形県遊佐町）委員、2009

「史跡下野薬師寺跡保存整備委員会」（下野市教育委員会）委員、2008・2009

「史跡下野国分寺跡保存整備委員会」（下野市教育委員会）委員、2008・2009

「上神主・茂原官衙遺跡調査指導委員会」（宇都宮市・上三川町教育委員会）委員、2008・2009

「史跡上野国新田郡庁跡調査整備専門委員会」（太田市教育委員会）委員、2008・2009

「三軒屋遺跡調査検討委員会」（伊勢崎市教育委員会）委員、2008・2009

「史跡埼玉古墳群保存整備協議会」（埼玉県立さきたま史跡の博物館）委員、2008・2009

「史跡武蔵国分寺跡整備計画策定委員会」（国分寺市教育委員会）委員、2008・2009

「甲斐国分寺跡・国分尼寺跡保存整備専門委員会」（笛吹市教育委員会）委員、2008・2009

「斎宮歴史博物館運営専門委員会」（三重県教育委員会）委員、2008・2009

「島根県古代文化センター企画運営委員会」（島根県教育委員会）委員、2008・2009

「史跡出雲国府跡発掘調査指導委員会」（島根県教育委員会）委員、2008・2009

「松江市史編集委員会」（松江市教育委員会）編集委員、2009

「大宰府史跡調査研究指導委員会」（福岡県教育委員会）委員、2008・2009

「鴻臚館跡調査研究指導委員会」（福岡市教育委員会）委員、2008・2009

教授 **加藤 陽子**（戸籍名は野島陽子） KATO, Yoko

<http://www4.ocn.ne.jp/~aninoji/>

1. 略歴

1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業（文学士）

1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（国史学）

1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（国史学）

1989年4月 山梨大学教育学部専任講師（日本史学）

1991年4月	山梨大学教育学部助教授（日本史学）
1992年12月	文部省在外研究員として、スタンフォード大学東アジアコレクション、ハーバード大学ライシャワーセンター研究員
1994年4月	東京大学文学部助教授（日本史学）
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授（日本史学）
1997年2月	博士（文学）取得
2009年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（日本史学）

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

1930年代の日本の政治と外交

c 主要研究業績

(1) 著書（過去の主たる業績については上記ホームページ上の「プロフィールと研究活動の履歴」をご参照ください）

①『それでも日本人は「戦争」を選んだ』（朝日出版社、2009年7月）

(2) 論文

①「一九三〇年代の戦争は何をめぐる闘争だったのか」、岩波書店編集部『日本の近現代史をどう見るか』（岩波書店、2010年2月）。

②「戦死と遺族」、『死生学研究』第13号（2010年3月）。

③「基調講演 戦争研究と戦争展示」、『歴博フォーラム 戦争と平和』（東京堂出版、2010年3月）、pp.22-67.

(3) 書評、新刊紹介など

①「書評、小林英夫・林道生著『日中戦争史論 汪精衛政権と中国占領地』、『日本歴史』740号（2010年1月）

②「歴史の複雑さに斬りこむ人」、『出版ダイジェスト みすず書房の本』2186号（2010年3月10日）
ジョン・ダワー『昭和』（みすず書房、2010年）の紹介

(4) 史料編纂、史料紹介など

①『千葉県歴史 資料編 近現代3 政治・行政3』（千葉県、2008年3月）

②「史料紹介 森本州平日記（二）」、『東京大学日本史学研究室紀要』12号（2008年3月）。

③「歴史の教訓 日本近代史における歴史の誤用について」、小川千代子ほか編『アーカイブへのアクセス』（日外アソシエーツ、2008年9月）

④『千葉県歴史 通史編 近現代3』（千葉県、2009年）

⑤「史料紹介 森本州平日記（三）」、『東京大学日本史学研究室紀要』13号（2009年3月）

⑥「政党内閣期における普通選挙」、『史料で読む 飯田・下伊那の歴史 一 松尾大森本の家と周辺の社会』（飯田歴史研究所、2009年3月）

⑦「県史編纂事業を終えて」、「千葉県史のしおり」、『千葉県歴史 通史編近現代3』（千葉県、2009年2月）

⑧「十五分で読む日本近代史入門講義」『人文会ニュース』107号（2010年2月）

⑨「冷戦終結後に求められる歴史とは」、『学士会会報』882号（2010年3月）。

(5) 学会発表・講演会・司会など

①ワークショップ「アモイ大学所蔵未次資料」コメント（福建省アモイ大学、2008年7月30日）

①セッション「部会1 日本移民研究の再考」討論者（国際政治学会、2008年10月、筑波大学）

②日中歴史研究者フォーラム「軍事的側面から見た日中戦争史研究の現在」（2008年12月6日、慶應義塾大学）

③ワークショップ「蒋介石と近代中国」での報告「日中戦争初期段階（1937年7月～1938年12月）における政戦略—日本側研究の視点から」（2009年1月9日、浙江省杭州市浙江大学）

④ワークショップ「戦争と戦死者をめぐる死生学」（東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」、2009年6月6日、東京大学）で、第2セッション「戦死と遺族—死に場所を教えられなかった国とその戦後」

- ⑤シンポジウム、コメンテーター「日本における公文書の管理と公開の現状と問題点——法制度とその運用を中心に」（東アジア近代史学会、2009年6月21日、東京大学駒場キャンパス）
- ⑥特集講演「歴史的に見た日中戦争の特殊性」（飯田市第7回地域史研究会「アジア・太平洋戦争にいたる道」、2009年8月29日、飯田市）
- ⑦講演「『千葉県歴史』とともに学ぶ歴史の醍醐味——近現代の新史料からわかること——」（千葉県史全巻刊行記念講演会、2009年10月17日、千葉市）
- ⑧シンポジウム発表「軍保有資材と物資から見た敗戦と戦後」（史学会107回大会近現代史部会シンポジウム「軍事史研究の新潮流」、2009年11月8日、東京大学）
- ⑨シンポジウム蒋介石研究会高田会議「日ソ開戦への道」（新潟県高田市、2009年11月30日）
- ⑩講演「日本近代史研究の新潮流」（国立台湾大学歴史系、2009年12月17日、台北市）

3. 主な社会活動

- (1) 行政
内閣府「歴史的に重要な公文書に関する有識者会議」
- (2) 学会
「史学会」、『史学雑誌』編集委員
「日本歴史学会」、評議員

准教授 **大津 透** OTSU, Toru

1. 略歴

- 1983年3月 東京大学文学部国史学専修課程卒業
- 1985年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程国史学専門課程修了
- 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程国史学専門課程中退
- 1987年4月 山梨大学教育学部講師（歴史学）
- 1990年9月 山梨大学教育学部助教授（歴史学）
- 1994年11月 博士（文学）
- 1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2002年10月～2003年2月 スイス・ジュネーブ大学招聘教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要と自己評価

日本古代の律令制を東アジア世界の中で位置付けることを目的とし、それにともない古代天皇制の解明、敦煌吐魯番文書の研究、撰閔政治期の国制の解明を行っている。天聖令にもとづく律令比較研究についての論文集をまとめ、また学界の現状と課題を社会にわかりやすい形で提供することをめざし、日本古代史の研究入門的な書物を執筆した。

c 主要研究業績

(1) 著書

- 編著、『日唐律令比較研究の新段階』、山川出版社、2008.11
- 単著、『日本古代史を学ぶ』、岩波書店、2009.2
- 単著、『道長と宮廷社会』、講談社学術文庫、2009.2
- 共著、大隅清陽、ほか5名、『古代天皇制を考える』、講談社学術文庫、2009.3

(2) 論文

- 「日唐律令制的比較研究」、唐研究、14、北京大学出版社、121-138頁、2008.12
- 「吐魯番文書と律令制」、土肥義和編『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』東洋文庫、251-270頁、2009.3

(3) 解説

- 「解説」、網野善彦著『日本とは何か』、講談社学術文庫、343-351頁、2008.11

「解説」、関晃著『帰化人』、講談社学術文庫、230-240 頁、2009.6

(4) 学会発表

「日本令における式・別式・勅」、『天聖令』研究——唐宋礼法与社会学術研討会、中国人民大学、2008.6.15

「天聖令と日本律令制研究」、東洋史研究会大会、京都大学、2008.11.3

(5) 会議主催 (チェア他)

「第53回国際東方学者会議」、チェア、天聖令と律令制比較研究、日本教育会館、2008.5.16

「唐代史研究会夏期シンポジウム」、チェア、軍事と財政、強羅静雲荘、2009.8.24～2009.8.25

3. 主な社会活動

(1) 学会

「史学会」、理事・編集委員、2008.5～

「東方学会」、理事、2009～

准教授 **鈴木 淳** Suzuki, Jun

1. 略歴

1986年3月 東京大学文学部国史学科卒業

1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専攻博士課程修了

1995年3月 博士(文学)学位取得

1992年4月 東京大学社会科学研究所助手

1994年4月 東京大学教養学部助教授

1996年1～10月 ドイツ、ボーフム大学 (Ruhr-Universität Bochum) 客員教授

1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授 (大学院重点化による)

1999年10月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本近代史

b 研究課題

明治期の機械工業が元来の研究課題。新技術の導入が社会をどのように変えて行くのかという問題関心を中心に、明治・大正期の雑多な課題に取り組んでいる。

c 主要研究業績

(1)論文

「ものづくりと技術—断絶」、講座・日本経営史、2009

(2)書評

「David G. Wittner 『Technology and the Culture of Progress in Meiji Japan』」、Routledge、2008、学術論文誌、『Social Science Japan Journal』 Vol.12, No.2, pp.285-288、2009

(3)研究報告書

「1923 関東大震災報告書」、第2編、174-178,206-213,218-224 頁、2009.3

(4)教科書

「史料を読み解く 4 幕末維新の政治と社会」、西川誠・松沢裕作、山川出版社、2009

3. 主な社会活動

(1)他機関での講義等

慶應義塾大学文学部非常勤講師、2007.4～

(2)行政

「文化庁近代遺跡の調査に関する検討会」、委員、2000～

「横須賀市」、市史専門委員、2000～

「中央防災会議（災害教訓の継承）専門調査会」、委員、2003～

(3)学会

「史学会」、役員・委員、評議員、2007～

「史学会」、役員・委員、編集委員、2009.5～

「日本歴史学会」、役員・委員、評議員・理事、2007.7～

「日本産業技術史学会」、理事、2007～

「政治経済学・経済史学会」、役員・委員、編集委員、2009.1～

1 1 中国語中国文学

教授 戸倉 英美 TOKURA, Hidemi

1. 略歴

- | | |
|----------|----------------------------------|
| 1973年3月 | 東京大学文学部中国文学科卒業（文学士） |
| 1976年3月 | 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（中国文学）（文学修士） |
| 1981年3月 | 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（中国文学） |
| 1982年4月 | 宇都宮大学教養部非常勤講師（～84年3月） |
| 1983年4月 | 千葉大学教養部非常勤講師（～85年3月、86年4月～90年3月） |
| 1986年10月 | 東京学芸大学教育学部非常勤講師（～87年9月） |
| 1988年4月 | 東京都立大学人文学部助教授（～91年3月） |
| 1988年4月 | 東京大学教養学部非常勤講師（～91年3月） |
| 1988年10月 | 東京大学文学部非常勤講師（～93年3月） |
| 1991年4月 | 東京大学教養学部助教授（～93年3月） |
| 1993年4月 | 東京大学文学部助教授 |
| 1995年4月 | 東京大学大学院人文社会系研究科教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国古典文学

b 研究課題

(1) 中国文学史の再検討。古典詩文、古典小説、古典文学理論に対して個別の研究を行い、その成果を総合して、先秦より宋代に至る文学史の再検討を進めている。

(2) 日本の雅楽・伎楽を資料とする隋唐宋代の文学・演劇・音楽の研究。北京大学中文系教授・葛曉音氏と共同で、97年度より進めている。雅楽・伎楽の源流は中央アジア諸国の音楽や宗教活動にあるが、それらはインドや西アジアの影響を強く受けている。研究が進むに連れ、雅楽・伎楽には、中国で完成するまでに

行われた様々な文化交流の跡が封じ込められていることを知り、研究の対象は、アジア諸地域に朝鮮と日本を加えた交流の諸相へと拡大している。

c 主要研究業績

(1) 総説・総合報告

「東方学会第59回全国会員総会シンポジウム、『六朝隋唐文学に見るアジア—芸能・思想・物語の交錯』の報告」、学術論文誌、『東方学会報』No.97、22-24頁、2009.12

(2) 監修

『甘泉賦』新釈新考(二)、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、第12号、2009.10

『太平広記』を読む:虎に食べられそうになる話、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、第12号、2009.10

(3) 学会発表

「風景的誕生與其衰変—中国古代詩歌中自然描写的变化」、 「自然詩学重探」ワークショップ、台湾台北市、2008.9.9

「『青海波』—李白と源氏が愛した舞曲—」、東方学会第59回全国会員総会シンポジウム「六朝隋唐文学に見るアジア—芸能・思想・物語の交錯」、東京、2009.11.6

(4) 会議主催(チェア他)

「高麗大学・東京大学共催 日本語学・日本文学・中国文学国際シンポジウム」、実行委員、中国古典文学部会、東京大学、2008.2.19

「第二届中国文系研究生国際学術研討会」、香港浸会大学、2008.4.28~2008.4.30

「東京大学・香港浸会大学中文系院生学術討論会」、主催、東京大学、2008.5.22

「The Twelfth Asian Studies Conference Japan(ASCJ)」、「Magic, Mythical and Mundane in The Extensive Records of the Taiping Period」、立教大学、2008.6.21

「東亜文学脈絡與文化伝承国際研究生学術研討会」、台湾大学、2008.7.2~2008.7.4

「日本中国学会第61回大会」、チェア、第二部会(文学・先秦~唐)、文教大学、2009.10.10~2009.10.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

台湾大学中文系特別講演、2008.1

台湾逢甲大学唐代研究中心特別講演、2008.1

香港城市大学中国文化中心特別講演、2008.4

全国漢文教育学会特別講演、2009.7

東京大学総合研究会特別講演、2009.10

中国広西大学中文系特別講演、2009.12

教授 **藤井 省三** FUJII, Shozo

1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部中国文学科卒業(文学士)

1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国文学専攻課程修了

1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程(中国文学)~1982年3月

1979年9月 復旦大学(中国文学系、中国政府国費留学生)~1980年8月

1982年4月 東京大学文学部助手

1985年4月 桜美林大学文学部助教授(中国文学)

1988年4月 東京大学文学部助教授(中国文学)

1991年9月 東京大学より博士(文学)学位を授与される

1994年7月 東京大学文学部教授

1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要と自己評価

- 概要(1) 魯迅・胡適から莫言・鄭義・高行健に至る 20 世紀中国文学の研究。
概要(2) 夏目漱石から村上春樹に至る日中両国文化人の交流、影響関係の研究。
概要(3) 香港・台湾・シンガポール・南洋における文学と地域主義との関わりに関する研究。
概要(4) 中国語圏映画の研究

自己評価

(1)(2)に関しては、2009 年に編著『東アジアが読む村上春樹』を刊行し、2011 年 2 月に『魯迅——東アジアを生きる文学』（岩波新書、仮題）を刊行する予定である。

(3)(4)に関しては新聞・雑誌に論文、映画批評などを発表した。

c 主要研究業績

(1) 論文

「東アジアが読む村上春樹 東京大学シンポジウム」、文學界、220-233 頁、2009.1

「村上春樹の中国語訳——日本文化の土着化と中国本土文化の変革」、日語学習と研究、第 140 号、111-117 頁、2009.2

「『1Q84』のなかの「阿 Q」の影——魯迅と村上春樹」、文學界、第 63 卷第 8 号、228-231 頁、2009.8

「青豆と「阿 Q 正伝」の亡霊たち——村上春樹『1Q84』の中の魯迅および中国の影」、1Q84 スタディーズ BOOK1、24-38 頁、2009.11

(2) 解説

「幻の街の『歴史の記憶』——虚実皮膜の不思議な映画」、『四川のうた：ジャ・ジャンクー監督最新作○2008 カンヌ国際映画祭コンペティション部門正式上映』、ビタース・エンド刊行、12-13 頁、2009

「序 植民地台湾における下村湖人——文教官僚の挫折と教養小説作家の誕生」、『張季琳著、東方書店刊行『台湾における下村湖人——文教官僚から作家へ』、i-viii 頁、2009.3

「幻の街の『歴史の記憶』——虚実皮膜の不思議な映画」、『四川のうた：ジャ・ジャンクー監督最新作○2008 カンヌ国際映画祭コンペティション部門正式上映』、14-15 頁、2009.4

(3) 翻訳

魯迅『故郷／阿 Q 正伝』光文社古典新訳文庫、2009. 4

(4) マスコミ

雑誌、「ポストモダンの終焉と百年の現代中国文学」、東方、東方書店、2009.1

雑誌、「二〇〇八年読書アンケート」、みすず、みすず書房、2009.1

新聞、「世界文学・文化アラカルト 中国 映画、小説で描く「底層」社会」、北海道新聞夕刊、2009.1.13

その他、「新しい一年は劉曉波に捧げよう」、獄中作家の日パンフレット、日本ペンクラブ、2009.2

雑誌、「天安門以後に「個人」を撮る」（ジャ・ジャンクー（賈樟柯）との対談）、群像、講談社、2009.4

新聞、「世界文学・文化アラカルト 台湾 庶民感覚で描く日台関係」、北海道新聞、2009.4.1

新聞、「高度経済成長を支える労働者」、北海道新聞、2009.6.30

新聞、「魯迅を新訳／魯迅の深い苦悩伝えたい／日本語訳文の「魯迅化」で人物の内面に迫る」、公明新聞、公明党、2009.7.14

雑誌、「映画を通し聞こえてくる、孫文の“遺言”とは！？／『孫文—100年先を見た男—』」、Pen、阪急コミュニケーションズ、2009.9.1

雑誌、「東アジアにおける「阿 Q」像の系譜：夏目漱石、魯迅そして村上春樹」、法政大学国際日本学研究中心 The Newsletter、2009.10

新聞、「世界文学・文化アラカルト：「底層叙述」 貧富の格差警鐘」、北海道新聞（夕刊）、2009.10.13

新聞、「青春の一冊 白酒精神に誘われ中文へ 「阿 Q 正伝」魯迅著」、東京大学新聞、2009.12.8

雑誌、「村上春樹と中国——または『1Q84』に潜む「阿 Q 正伝」の亡霊たち」、学会会報、2009.12.31

(5) 学会発表

「魯迅的「孔乙己」与芥川龍之介「毛利先生」——圍繞清末讀書人和大正時期英語教師展開的回憶故事」、五四与中国現当代文学國際シンポジウム、中国・北京大学、2009.4.23

「新加坡小説、電影中的非婚和無性—陳華彪小説《超級鐵鏈男的故事》与梁智強電影《我在政府部門的日子》的比較研究」

Special Session: Popular Culture in Asia “Families in the Films of Asia” & “The Past and The Present Development of Singapore films”、The 9th conference of Science Council of Asia、Grand Copthorne Waterfront Hotel, Singapore、2009.6.18

(6) 会議主催 (チェア他)

「五四与中国現代文学国際シンポジウム」、チェア、戯劇、影視以及歴史書写、中国・北京大学、2009.4.23～2009.4.25

「The 9th conference of Science Council of Asia」、実行委員、Special Session: Popular Culture in Asia “Families in the Films of Asia” & “The Past and The Present Development of Singapore films、AsiaGrand Copthorne Waterfront Hotel, Singapore、2009.6.18

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

朝日カルチャーセンター新宿校非常勤講師、2008.4～2010.3

University of Colorado 特別講演、2009.3～

中国・復旦大学特別講演、2009.3～

中国・上海作家協会特別講演、2009.3～

早稲田大学法学部非常勤講師、2008.4～2009.9

法大国際日本学研究センター特別講演、2009.6

東北師範大学 (中国・長春市) 特別講演、2009.9

吉林大学文学院特別講演、2009.9

日本国際交流基金北京日本文化中心特別講演、2009.9

NPO「東アジア隣人ネットワーク」特別講演、2009.11

台湾大學台湾文学研究所 (台湾・台北) 特別講演、2009.12

南京大学現代中国文学中心特別講演、2010.3

(2) 行政

「日本学術会議」、学術、会員、2008.4～2010.3

「日本学術会議」、アジア学術会議分科会委員、2008.4～2010.3

「文部科学省中国政府奨学金留学生選考委員」2008.4,2009.4

(3) 学会

「日本中国学会」、評議員、理事、研究推進・国際交流委員会委員長、2008.4～2010.3

「東方学会」、評議員、『東方学』編集委員、2008.4～2010.3

「日本台湾学会」、役員・委員、理事、2008.4～2010.3

(4) 学外組織 (学協会・省庁を除く) 委員・役員

「日本ペンクラブ」、獄中作家委員会委員、2008.4～2010.3

教授 **木村 英樹** KIMURA, Hideki

1. 略歴

1976年 3月 大阪外国語大学外国語学部中国語学科卒業 (文学士)
1978年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了 (中国語学)
1978年 4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学 (中国語学)
1978年 9月 中華人民共和国北京語言学院留学
1979年 9月 中華人民共和国北京大学中国語言文学系留学
1982年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士単位取得退学
1982年 4月 金沢大学文学部助教授
1986年 10月 神戸大学教養部助教授
1992年 10月 神戸大学国際文化学部助教授

1996年 4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授
1999年 4月 東京大学文学部大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、主として現代中国語の意味論と文法論

b 研究課題

自然言語の普遍性と多様性のパラダイムを背景に、中国語の意味的現象と、その反映としてある文法的現象を考察し、中国語の意味と構造のメカニズムの解明に取り組む。

c 主要研究業績

(1) 著書

編著、生越直樹・鷺尾龍一、「ヴォイスの対照研究——東アジア諸語からの視点」、くろしお出版、2008.11

(2) 論文

「認知言語学的接地理論と漢語口語形態研究」、当代言語学理論と漢語研究、2008.5

「中国語疑問詞の意味機能——属性記述と個体記述」、日中言語研究と日本語教育、Vol.1, no.1、12-24 頁、2008.10

「東アジア諸語にみるヴォイスの多様性と普遍性」、ヴォイスの対照研究、1-20 頁、2008.11

「授与と受動の構文ネットワーク——中国語授与動詞の文法化に関する方言比較文法試」、ヴォイスの対照研究、65-91 頁、2008.10

「北京語授与動詞“給”の文法化——〈授与〉と〈結果〉と〈使役〉の意味的連携」、ヴォイスの対照研究、93-108 頁、2008.11

(3) 研究報告書

「中国語の構文及び文法範疇形成の歴史的変容と汎時的普遍性」、2008.12

(4) 学会発表

「現代中国語における存在表現の諸相と「時空間存在文」の特性」、日本中国語学会第 59 回全国大会、北海道大学、2009.10.24

(5) 教科書

「新版中日交流標準日本語・中級(上・下)」、木村英樹、水野義道、中国・人民教育出版社、2008

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

立命館孔子学院公開講座において講演（「中国語に見る対人意識と待遇表現」）、2009.3

立命館アジア太平洋大学中国語教員ブラッシュアップ講座において講演（「中国語疑問詞における属性記述と個体指定の対立」）、2009.3

桜美林大学中国語教員研修において講演（「中国語疑問文の種類と疑問詞の意味機能」）、2009.7

東京言語研究所公開講座において講演（「中国語のヴォイス」）、2010.2

(2) 大学外社会人教育

放送大学客員教授、2008.4～2010.3

(3) 学会活動

「国際中国言語学学会(International Association of Chinese Linguistics)」、一般会員、2008～2010.3

「日本中国語学会」、役員・委員、理事、2008.4～2010.3

「日本言語学会」、一般会員、会員、2008～2010.3

准教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya

1. 略歴

1985年 3月 東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業

- 1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程入学
- 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程修了
- 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程進学
- 1988年9月 中華人民共和国北京大学中国語言文学系留学（至1990年2月）
- 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程退学
- 1990年4月 神奈川大学外国語学部専任講師
- 1993年4月 神奈川大学外国語学部助教授（至1995年3月）
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（現在に至る）
- 1998年3月 文部省在外研究員に採用され、中国広州市中山大学に於いて研修（至1998年12月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、中国古文字学

b 研究課題

(1) 上古中国語の文法研究

構文と文法範疇の相関的変容の諸相、及びそれに関与する様々なファクターの解明を目指している。

(2) 戦国秦漢出土文字資料の研究

戦国秦漢時代の出土文字資料の解読の他、言語がどのように文字化されたかという視点に基づき、地域毎の用字法の相違、秦による文字統一の実態や文字政策に関する探究を行っている。

c 主要研究業績

(1) 論文

「上博楚簡（四）“龔之月隼”的“月隼”字怎麼讀？」、開篇、27、7-8頁、2008.4

「再論上古漢語中的“可”和“可以”——古漢語的語態試探之二——」、中国語学、1、149-165頁、2008.7

「戦国楚簡文字中讀作舌根音的幾個章組字」、古文字研究、27、513-518頁、2008.9

「試論上古漢語詞彙使役句的語義特點」、語言文字與教學的多元對話、383-399頁、2009.5

「上古漢語“使”字使役句的語法化過程」、何樂士紀念文集、11-28頁、2009.6

(2) 学会発表

「古漢語“來”類動詞詞彙使役句和句法使役句的語義差異」、第四屆漢語史暨第七屆中古漢語國際學術研討會、北京語言文化大學、2009.8.23

「秦漢楚地隸書及關於「史書」的考察」、シンポジウム「戦国秦漢出土文字資料と地域性——漢字文化圏の時空と構造——」、日本女子大学、2009.9.19

「所有から存在へ——上古中国語における「有」の拡張——」、日本中国語学会第59回全国大会、北海道大学、2009.10.24

「上博六《平王》兩篇故事中的幾個問題」、2009年華語言與華文化教育國際研討會、台湾、新竹、玄奘大学、2009.12.11

(3) 教科書

「アジアと漢字文化」、宮本徹・福井玲・岩月純一・陳力衛、放送大学教育振興会、2009

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東アジアの古代文化を考える会セミナー、2009.9

北京大学委嘱教授、2009.10~2009.11

浙江大学文学院特別講演、2010.1

湖南大学特別講演、2010.3

(2) 学会

「中国出土資料学会」、役員・委員、理事、1997.4~

「東方学会」、役員・委員、評議員、2005.10~

「日本中国語学会」、役員・委員、編集委員、2008.10~

1 2 東洋史学

教授 蔀 勇造 SHITOMI, Yuzo

1. 略歴

1972年 3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
1974年 3月 同 大学院人文科学研究科修士課程修了（東洋史学）
1977年 3月 同 博士課程単位取得退学（東洋史学）
1977年 4月 日本学術振興会奨励研究員 ～78年 3月
1978年 4月 財団法人東洋文庫奨励研究員 ～79年 3月
1979年 4月 東京大学文学部助手（東洋史学） ～82年 9月
1979年 10月 ルーヴアン大学文学部（東洋学、ベルギー政府給費留学生）
1982年 9月 同 大学院博士課程（東洋学） ～86年 10月
1986年 11月 東京工業大学工学部助教授（一般教育等） ～91年 3月
1991年 4月 東京大学文学部助教授（東洋史学） ～94年 5月
1994年 6月 同 教授（東洋史学） ～95年 3月
1995年 4月 同 大学院人文社会系研究科教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究活動

概要

・先イスラーム期のアラビア史研究：3～6世紀の南アラビアのヒムヤル王国とエチオピアのアクスム王国の関係の実態を解明し、さらにこの関係が先イスラーム期の西アジア史において如何なる意義を有していたのかを検討している。

・古代における東西海上交流史研究：前1～後6世紀のインド洋交易の発展と変遷の過程を究明し、それが沿岸諸国に与えた影響について考察する。

c 主要業績

(1) 啓蒙

「歴史、あるいは不完全な過去の記録」、学術論文誌、『Mobile Society Review 未来心理』、14、24-29頁、2008.12

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本オリエント学会」、役員・委員、常務理事、2006.6～

教授 小松 久男 KOMATSU, Hisao

1. 略歴

1974年 3月 東京教育大学文学部史学科東洋史学専攻卒業
1977年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（東洋史学）修了
1980年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（東洋史学）中退
1980年 4月 東海大学文学部文明学科西アジア課程専任講師
1987年 4月 東海大学文学部文明学科西アジア課程助教授
1992年 4月 東京外国語大学外国語学部中東語学科（トルコ語）助教授
1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中央アジア近現代史

b 研究課題

- (1) 19世紀末～20世紀初頭の中央アジアにおけるムスリム知識人の思想と運動
- (2) ソ連解体後にその歴史・文化的な広がりが見えるようになった中央ユーラシアの地域研究
- (3) 近現代中央アジアにおけるイスラーム復興

c 主要業績

(1) 著書

『イブラヒム、日本への旅：ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房、176頁、2008.10

(2) 論文：

「聖戦から自治構想へ：ダール・アル・イスラームとしてのロシア領トルキスタン」『西南アジア研究』69、59-91頁、2008.9

「中央アジアの動態を読む：GISによる地域研究の試み」水島司・柴山守編『地域研究のためのGIS』古今書院、95-112頁、2009.10（後藤寛との共著）

(3) 解説

「バルトリド：中央アジア史に不朽の業績」『興亡の世界史03 通商国家カルタゴ』月報、講談社、1-3頁、2009.9

(4) 啓蒙

「イスラーム復興の潮流とその行方」（公開シンポジウム：「シルクロード」は、いまー中央ユーラシアの現在をさぐる）『東西南北』2008、18-26頁、2008.3

「中央アジア 2008年夏：ソ連時代の記憶と現代のイスラーム復興」『イスラーム地域研究ジャーナル』Vol.1 (2009)、9-13頁、2009.3

(6) 学会発表

「中央ユーラシア研究の展望：現状と課題」日本中央アジア学会、松崎町商工会議所、2008.4.1

Historical Perspective of Central Eurasia: Central Eurasian Studies in Japan, Central Eurasia in World History, Seoul National University, 2008.4.18

A Pan-Islamist's Journey: Russia, the Ottoman Empire and Japan, Center for Pacific Asia Studies Seminar, Center for Pacific Asia Studies, Stockholm University, 2008.9.30

Historical Perspectives on Central Asian Studies in Japan, Workshop on Central Asian History: Vision and Revision, Stockholm University, 2008.10.1

Japonya'da Merkezi Avrasya Araştırmalarına Yaklaşımlar: Geçmiş be Bugün, International Conference on Central Eurasian Studies: Past, Present and Future, 17 March 2009, Maltepe University (Istanbul, Turkey), 2009.3.17

「イブラヒムの旅路：イスラーム世界と日本」日本大学史学会大会、2009年6月13日、日本大学文理学部百周年記念館

3. 主な社会活動

(1) 共同研究等

「NIHU プログラム イスラーム地域研究」東京大学拠点代表、2008.4～2010.3

(2) 他機関での講義等

学習院大学文学部非常勤講師、2008.4～2008.7

筑波大学非常勤講師、2008.10

(3) 学会

内陸アジア史学会常任理事、2008.4～2010.3

日本中央アジア学会理事、2008.4～2010.3

日本中東学会理事、2009.4～2010.3

1. 略歴

- 1976年 3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業
- 1976年 4月 東京大学大学院人文科学系研究科修士課程入学
- 1979年 4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手
- 1988年 4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
- 1992年 12月 東京大学文学部より博士号（文学）取得
- 1995年 4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
- 1997年 10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

南アジア近現代史

b 研究課題

1. 歴史研究への地理情報システムの応用
2. 在地社会論、ミーラーズ体制からの18世紀南インド経済史分析
3. 歴史統計分析による18-20世紀の長期変動の分析
4. グローバル・ヒストリーと南アジア

c 主要業績

(1) 著書

単著、「前近代南インドの社会空間と社会構造」、東京大学出版会、2008.2

編著、『グローバル・ヒストリーの挑戦』、山川出版社、2008.8

編著、柴山守、「地域研究のためのGIS」、古今書院、2009.10

編著、「グローバル・ヒストリー入門」、山川出版社、2010.1

(2) 論文

「“Features of Economic Development in Early Modern India”」、Multiple Paths of Economic Development in Global History, Proceedings of the Symposium in Commemoration of the Executive Committee Meeting of the IEHA, No. 8-9, pp.95-104, 2008

「“Indian History from Medieval to Modern Periods: An Alternative to the Land-System-Centred Perspective”」、International Journal of South Asian Studies, Vol. 1, pp.31-49, 2008

「“Globaler Handel und binnenwirtschaftliche Entwicklung. Sudindische Hafenstadte in der vorkolonialen Zeit”」、Hamburger Wirtschafts-Chronik, Neue Folge, Band 7, pp.117-150, 2008

「イギリス東インド会社のインド支配」、『南アジア史2 中世・近世』（小谷汪之編）、293-324頁、2008

「インド農村の変化と都市」、『現代社会の構想と分析』、第6号、87-99頁、2008.7

「20世紀前期における南インドの経済構造・流通面からみた一考察」、『アジア経済』、18-1、27-51頁、2009

「“Features of Economic Development in Early Modern India”」、Centre for Southeast Asian Studies, Kyoto University and Graduate、pp.95-104、2009

「18世紀インド綿業と在地社会をめぐる考察」、『明大アジア史論集』、第13号、147-156頁、2009.3

「煌めくインド・蠢く農村」、アジア社会研究会年報、3、105-124頁、2009.10

(3) 解説

「インドの土地に関する権利について教えてください」、学術論文誌、『歴史と地理 世界史の研究』、50-52頁、2008.5

(4) マスコミ

テレビ、「古代インド ～仏教とアショーカ王～」、NHK、2008.5.11

テレビ、「東南アジア世界の形成 ～海を渡ったラーマーヤナ～」、2008.5.18

(5) 会議主催（チェア他）

「The Caucasus and Its Inhabitants between Russia and Middle East」、チェア、Caucasian Islam and

the Legacy of Imperial Authority、東京大学、2008.1.26

「Volga-Ural'skii region kak perekrestok Evrazii」、主催、2008.9.19～2008.9.20

「International Conference on Central Eurasian Studies: Past, Present and Future」、実行委員、Maltepe University, Istanbul, Turkey、2009.3.17～2009.3.19

3. 主な社会活動

(1) 共同研究・受託研究

文部省科研費：研究代表の場合のみ

1) 2006年～2008年：学術振興会基盤研究

『南インド村落構造の変動：四半世紀後の再調査とGISの応用研究』代表として、南インドティルチラパッリ県での25年後の再調査をまとめる。

(2) 他機関での講義等

1) 立命館アジア太平洋大学 2006.8

2) 明治大学 2007.4-2008.3

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「International Journal of Asian Studies (Cambridge University Press)」、Executive Editor、2006～

「学術会議」、連携委員、2006～

「東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所」、運営委員、2006～

准教授 **吉澤 誠一郎** YOSHIZAWA, Seiichiro

1. 略歴

1991年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業

1993年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）修士課程修了

1995年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学）博士課程中退

1995年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手

1999年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター助手

2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（東アジア歴史社会）

[2000年5月に、東京大学より博士（文学）の学位を取得]

2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

主な研究課題は、近代中国の都市政治、経済建設、ナショナリズム。最近では、近代中国における歴史学の形成と日本の「東洋史学」の交流の考察にも関心がある。

c 主要業績

(1) 論文

「日露戦争と中国—その知的刻印を考える」、東アジア近代史学会編『日露戦争と東アジア世界』、221-243頁、2008.1

「康有為的幾何公理—『実理公法全書』と追求普遍真理之夢想」、黄寬重主編『基調与変奏—一七至二十世紀的中国』台北：国立政治大学歴史学系、325-337頁、2008.7

「思想のグローバル・ヒストリー」、水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、154-163頁、2008.8

「西北建設政策的形成—南京国民政府与区域経済開発」、鄭起東・史建雲主編『晚清以降の経済与社会』北京：社会科学文献出版社、441-456頁、2008.12

「公理と強権—民国8年の国際関係論」、谷垣真理子ほか編『模索する近代日中関係—対話と競存の時代』東京大学出版会、141-156頁、2009.6

「清代後期における社会経済の動態」、村田雄二郎ほか編『シリーズ20世紀中国史[1]中華世界と近代』東京大学出版会、101-120頁、2009.7

「中国における近代史学の形成—梁啓超「新史学」再読」、歴史学研究、863号、2-11頁、2010.2

(2) 書評

「程美宝『地域文化与国家認同—晩清以来「広東文化」観的形成』」、三聯書店(北京)、2006.6、學術論文誌、『明清史研究』、第4輯、61-74頁、2008.2

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講師等

中央大学非常勤講師、2009.9～2010.3

(2) 学会

「中国社会文化学会」、理事、2008.4～2010.3

准教授 **大稔 哲也** OTOSHI, Tetsuya

1. 略歴

1983年3月 早稲田大学第一文学部東洋史学専攻卒業
1983年4月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学専門課程）修士課程入学
1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学専攻）博士課程進学
1988年12月 エジプト・アラブ共和国カイロ大学文学部留学～1991年3月
1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学専攻）博士課程単位修得退学
1992年4月 日本学術振興会特別研究員
1994年4月 山形大学教養部専任講師
1995年6月 東京大学大学院人文社会系研究科より博士(文学)の学位を得る。
1996年4月 九州大学文学部助教授
2000年4月 九州大学大学院人文科学研究科助教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西アジア史・中東社会史

b 研究課題

中世エジプトにおける聖墓参詣と聖者崇敬
イスラーム期エジプトにおける諸宗教の並存
現代カイロの庶民街研究

c 主要業績

(1) 論文

「ムスリムの『参詣の書』より——エジプトの参詣案内記——」、『説話・伝承学』、第18号、40-56頁、2010.3
「ムスリム社会の参詣と聖者生誕祭——エジプトの歴史と現況から——」（異文化講座7 国際交流基金「中東理解叢書」）『民衆のイスラーム——スーフィー・聖者・精霊の世界——』山川出版社、74～102頁、2008年3月
「ガオ・サネのアラビア語碑文をもつ墓碑」（坂井信三氏と共著）（『西アフリカの歴史的文明の形成と展開過程に関する歴史人類学的研究』研究代表者・坂井信三、29～48頁、2008年3月
「ムスリム社会の聖遺物——聖遺物とイスラーム——」（東京大学大学院人文社会系研究科『死生学研究』第12号、171(106)～158(119)頁、2009年10月
“Relics in Muslim Societies: Relics and Islam Reconsidered”, (*Miraculous Images in Christian and Buddhist Culture: “Death and Life” and Visual Culture II*, pp.116-127,2010.

(2) 学会発表

「ムスリムの参詣案内記・巡礼記から」、説話・伝承学会 2008 年度春季大会、名古屋大学、2008.4.27
「中東のキリスト教徒 たち——エジプトのコプト・キリスト教徒を中心に——」、国際交流基金主催「中東理解講座：国境を越える人々：中東における宗教と民族の諸相」、国際交流基金、2008.10.30
「オールド・カイロの野帳から——庶民生活、伝統産業と墓地居住——」、西南アジア研究会総会、京都大学大学院文学研究科、2008.12.20
「イスラームへの招待——異文化理解に向けて——」、「世界史補講・時空絵の旅」特別編、小田原高校、2008.12.26
「エジプト死者の街における参詣のシャイフと参詣書」、国際シンポジウム 四国遍路と世界の巡礼 その歴史的諸相の解明と国際比較、愛媛大学、2009.10.31
“The Creation of Holy Tombs and Saints in Medieval Egypt”, 3rd World Congress for Middle Eastern Studies, Universitat Autònoma de Barcelona, Barcelona, 2010.7.21.
“Successes and Failures in Creating Holy Tombs and Saints”, Connectivity and Micro-Region in the Mediterranean II, Mediterranean Studies Group, Trieste University, Trieste, 2010.9.2

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講師等

京都大学非常勤講師、2008.12
日本女子大学人間社会学部非常勤講師、2007.4～2010.3
筑波大学北アフリカ研究センター客員共同研究員、2007～
国立民族学博物館共同研究員、2008～

(2) 学会

「日本イスラム協会」、常任理事、2008.4～
「地域研究学会連絡協議会」、事務局長、2008.11～2009.11
「日本中東学会」、理事、2007.4～
「日本歴史学協会」、委員、2006.4～
「史学会」、編集委員、2007.6～、評議員、2010～

1 3 中国思想文化学

教授 **佐藤 慎一** SATO, Shin'ichi

1. 略歴

1969年6月 東京大学法学部第3類卒業（法学士）
1969年7月 東京大学法学部助手（国際政治学講座）
1972年7月 東北大学法学部助教授（比較政治学講座）
1979年7月 カリフォルニア大学バークレー校客員研究員（～1961年8月）
1987年4月 東京大学文学部助教授（中国哲学第1講座）
1993年4月 東京大学文学部教授（中国哲学第1講座）

1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（アジア文化研究専攻）（～2009年3月）
1997年4月 東京大学評議員（～2000年3月）
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長（2003年4月）
2006年4月 東京大学理事・副学長（～2007年3月）
2009年3月 東京大学を定年退職
2009年4月 東京大学理事・副学長、人文社会系研究科特任教授

2. 主な研究分野

a 専門分野

中国思想史（特に近代思想）

b 研究課題

民国期の歴史意識の研究

c 主要業績（2008-2009年度）

概要

大学経営に関する仕事に追われ、自分の研究時間は事実上ゼロとなった。

(1) 論文

「歴史の変革と歴史学の変革——中国史解釈をめぐる民国期の論争について」、『中国哲学研究』24号、2009年11月

「19世紀中国の思想遺産と中国——進化論、アナーキズム、マルクス主義」、『19世紀学研究』4号、2010年3月

3. 主な社会活動（2008-2009年度）

(1) 行政

文部科学省 研究機関における公的研究費の管理・監査に関する検討会、立案、座長代理、2008.4～

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「人間文化研究機構「地域研究推進委員会」、委員、2008.4～

教授 **川原 秀城** KAWAHARA, Hideki

1. 略歴

1968年4月 京都大学理学部入学
1972年3月 京都大学理学部数学科卒業・理学士
1972年4月 京都大学文学部哲学科（中国哲学史専攻）編入学
1974年3月 京都大学文学部哲学科（中国哲学史専攻）卒業・文学士
1974年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程（中国哲学史専攻）入学
1980年3月 京都大学大学院文学研究科博士課程（中国哲学史専攻）単位取得退学
1980年7月 岐阜大学教育学部助教授（社会科・哲学研究室）
1992年4月 東京大学文学部 助教授
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

東アジアの思想史と科学史

b 研究課題

東アジア（中国と韓国朝鮮）の科学と思想について分析した。同期、評価に値することがあるとすれば、朝鮮王朝期の儒学思想に関する専門研究を本格的に開始した点をあげることができるであろう。

c 主要業績

(1) 論文

「丁若鏞の科学著作」、茶山学、13、43-107 頁、2008.11

(2) 史料

編纂、「関流和算書大成——関算四伝書——」、勉誠出版、2008.12

准教授 **小島 毅** KOJIMA, Tsuyoshi

1. 略歴

- 1985年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業（文学士）
- 1987年3月 同 大学院人文科学研究科修士課程修了（中国哲学）
- 1987年4月 東京大学東洋文化研究所助手（東アジア第一部門）
- 1992年4月 徳島大学総合科学部講師（総合科学科）
- 1994年4月 同 助教授（人間社会学科）
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（中国思想文化学）
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（中国思想文化学）
現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想文化史、王権理論の展開および儒教の教化論

b 研究課題

- (1) 中国における朱子学・陽明学の思想的形成と社会的展開。
- (2) 中国皇帝制秩序を支える王権儀礼とその理論。
- (3) 日本における儒教思想の流入とその社会的効果。

c 主な業績

(1) 著書

- 単著、『足利義満 消された日本国王』、光文社、2008
- 単著、『父が子に語る日本史』、トランスビュー、2008.11
- 単著、『織田信長最後の茶会』、光文社、2009.7
- 単著、『父が子に語る近現代史』、トランスビュー、2009.11

(2) 論文

- 「日本漢文の訓読とその将来」、中村春作ほか編 『「訓読」論』、2008.10
- 「いざ鎌倉！——武家の古都を世界遺産に」、東京大学次世代人文学開発センター紀要、22、2009

(3) マスコミ

- 新聞、「こちら特報部：「桜田門外」暗殺者を合祀」、東京新聞、2008.10.21
- 新聞、「あとがきのあと：「父が子に語る日本史」」、日本経済新聞、2008.10.26
- 雑誌、「父が子に語る近現代史」、日本古書通信、39 頁、2009.11
- 新聞、「父が子に語る近現代史」、日本経済新聞、2009.11.15
- 新聞、「著者に聞く」、東大新聞、2009.12.15
- 新聞、「父が子に語る近現代史」、公明新聞、2009.12.28
- 雑誌、『父が子に語る近現代史』を書いた小島毅氏に聞く」、週刊東洋経済、2010.1.16
- 雑誌、『父が子に語る近現代史』、内外教育、27 頁、2010.1.22

(4) 共同研究

「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」の領域代表、科研特定領域、2005年度～2009年度

「歴史書編纂と王権理論に見る東アジア3国の比較」の研究代表、科研特定領域「東アジア海域交流」、2005年度～2009年度

3. 主な社会活動

- (1) 他機関での講義等
名古屋大学非常勤講師、2009.7
岩手大学非常勤講師、2008.9、2009.9

准教授 **横手 裕** YOKOTE, Yutaka

1. 略歴

- 1988年3月 東京大学文学部中国哲学科卒業
1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（中国哲学専攻）修了
1991年8月 東京大学大学院人文科学研究科第一種博士課程（中国哲学専攻）中退
1991年9月 京都大学人文科学研究所助手
1997年4月 千葉大学文学部助教授
2003年4月 東京大学大学院人文社会系助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想、道教

b 研究課題

- (1) 道教思想、道教史の解明
(2) 道教と中国仏教の交渉史
(3) 儒・仏・道の三教交渉史を中心とする中国思想史

c 主要業績

- (1) 著書

単著、「中国道教の展開」、山川出版社、2008.6

- (2) 論文

「一人で行う亡魂救済——鄭思肖の太極祭鍊内法——」、アジア遊学、110、2008.6

- (3) 研究報告書

「東京大学総合図書館所蔵万曆版大蔵経（嘉興蔵）正編目録稿」、2008.2

「道蔵精華目録」、2009.2

- (4) 展示

資料展示・大蔵経と東アジア東京大学総合研究博物館、2009.8.25～2009.9.15

- (5) 学会発表

「鄭思肖『太極祭鍊内法』与祭鍊法諸派」、海峡兩岸「宗教文化与经济社会發展」學術研討会、中国・泉州・華僑大学、2008.6.27

「真祭鍊之道——鄭思肖の祭鍊法与救度」、「沈淪、懺悔与救度：中国文化中的懺悔書写」国際學術研討会、台湾中央研究院學術活動中心、2008.12.4

「中国の大蔵経と道蔵」、シンポジウム大蔵経と東アジア世界、2009.9.1

- (6) 会議主催（チェア他）

「シンポジウム大蔵経と東アジア世界」、主催、2009.9.1

「日本道教学会第60回大会」、準備委員会委員長、2009.11.6～2009.11.7

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本宗教学会」、一般会員、2009.4～

1 4 インド語インド文学

教授 土田 龍太郎 TSUCHIDA, Ryutaro

1. 略歴

1971年6月	東京大学文学部印度哲学印度文学科卒業（文学士）
1973年3月	同 人文科学研究所大学院修士（印度哲学）
1975年10月	ドイツ、マールブルク大学留学（印度文献学）PhD. (1979.4)
1979年10月	同 助手（非ヨーロッパの言語と文化）～1983.3
1983年4月	東京大学文学部助教授（印度哲学印度文学）
1987年6月	日本印度学仏教学会賞受賞（昭和六十二年度）
1988年4月	東京大学文学部助教授（印度語印度文学）
1994年4月	同 教授
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科教授 ～現在に至る

2. 研究活動

a 専門分野

印度語学印度文学

b 研究課題

1. 古代印度の家長・苦行者・隠者の生活と生活理念の研究
2. 大説話集 *Brhatkatha* の研究
3. 二大叙事詩研究
4. *Kavya* 文芸研究

上記四分野のうち、*Mahabharata*, *Harivamsa*, *Ramayana* 研究についていくつか新視点を見出した。

c 主要業績（2008, 2009年度に限る）

(1) 論文

“Considerations on the Narrative Structure of the Mahabharata”, *Studies in Indian Philosophy and Buddhism*, 15, 2008.3

「ワーグナーと印度思想」、ワーグナー・フォーラム 2009、102-116 頁、2009

“Some Reflections on the Chronological Problems of the *Mahabharata*”, *Studies in Indian Philosophy and Buddhism*, 16, pp. 1-30, 2009.3

“On the dynastic transition from the Sungas to Kanvayanas”, *Studies in Indian Philosophy and Buddhism*, 17, pp. 1-16, 2010.3

1. 略歴

東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学。

1979年10月～1982年2月インド・マドゥライ大学へ留学、

1985年4月～1988年9月オランダ・ユトレヒト大学東洋言語文化研究所へ留学。

1989年6月ユトレヒト大学より博士（文学）取得。

四天王寺国際仏教大学文学部助教授、東京大学大学院人文社会系研究科助教授をへて、現在東京大学大学院人文社会系研究科教授。

2. 研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要

1. タミル古典文学（紀元後1～3世紀ごろ）および文学理論（詩論）の研究。
2. タミル古典文学により古代社会再考。
3. タミル二大叙事詩研究。
4. 大航海時代以降の南インドでの西洋宣教師の活動、および彼らがタミルおよびドラヴィダ学に果たした役割に関する研究。

上記のうち、1. については英雄文学の詞華集の成立についてあたらな知見を得た。また、2. については、当該文学を翻訳しつつ、正確な理解を進めつつある。

c 主要業績

(1) 論文（2008, 2009年度に限る）

「プラムは「雑歌」か—タミル古代文学のジャンル分け—」、『万葉古代学研究所年報』第6号、万葉古代学研究所、橿原、2008.3、215-228頁

「「耕す」とは「殺す」こと？ —タミル文化とジャイナ教の伝播—」、『印度哲学仏教学』第23号、北海道印度哲学仏教学会、2008.9、276-294頁

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本印度学仏教学会」、役員・委員、理事2008～

「日本南アジア学会」、役員・委員、常務理事2008～2010、編集委員長2009～2010

「(財)東京大学仏教青年会」、役員・委員、理事長、2008～

15 インド哲学仏教学

教授 **末木 文美士** SUEKI, Fumihiko

1. 略歴

1973年3月 東京大学文学部1類(印度哲学印度文学専修課程)卒業
1975年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程(印度哲学印度文学専門課程)修了(文学修士)
1978年3月 同博士課程単位取得退学
1978年4月 東京大学文学部助手(印度哲学研究室)
1981年4月 財団法人東方研究会専任研究員
1986年4月 東京大学文学部助教授
1993年11月 博士(文学)(東京大学)
1995年1月 東京大学文学部教授
1995年4月 同 大学院人文社会系研究科教授
2009年3月 同 退職

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要

専門は日本仏教思想史の研究。もともとは古代・中世が中心であったが、近年の研究は近代に力を注ぐ。その他、禅思想や日本宗教史などに関心をもつ。

c 主要業績

著書

単著、「鎌倉仏教展開論」、トランスビュー、2008.4

3. 主な社会活動

「日本宗教学会」、役員・委員、常務理事、2007～
「比較思想学会」、役員・委員、理事、2007～
「中国社会文化学会」、役員・委員、評議員、2007～
「日本思想史学会」、役員・委員、評議員、2007～
「東方学会」、役員・委員、評議員、2007～

教授 **斎藤 明** SAITO, Akira

1. 略歴

1976年3月 東京大学文学部第I類倫理学専修課程卒業
1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門課程修士課程修了
1981年6月 オーストラリア国立大学アジア研究学部博士課程給費留学(～1984年3月)
1984年3月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専門課程博士課程単位取得退学
1984年4月 東京大学文学部助手
1985年5月 オーストラリア国立大学より Ph.D.学位取得
1988年4月 三重大学人文学部助教授
1993年4月 同 教授
2000年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

インド大乘仏教思想史の研究。とくに中観派(Mādhyamika)の前史、学派成立の経緯、およびインドからチベットに至る同派の思想展開と影響を洗い直す作業を行っている。

c 主要業績

(1) 著書

編著、*Mahayana Buddhism: Its Origins and Reality*, Acta Asiatica, vol.96、The Toho Gakkai、2009.3

共著、片倉望(編著者)他、『自然の探求』、三重大学出版会、2009.3

(2) 論文

「バーヴィヴェーカの識二分説批判」、『印度学仏教学研究』、56-2、897-903頁、2008.3

「バヴィア作『論理炎論』の識二分説批判」、『多田孝正博士古稀記念論集・仏教と文化』、141-156頁、2008.11
“Nagarjuna's Influence on the Formation of the Early Yogacara Thoughts - from the *Mulamadhyamakakarika* to the *Bodhisattvabhumi*”、*Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol.58, No.3, pp.1212-1218、2010.3

“An Inquiry into the Relationship between the *Sikṣasamuccaya* and the *Bodhi(sattva)caryavataṛa*”、*Studies in Indian Philosophy and Buddhism*, Vol.17、2010.3

(3) 総説・総合報告

「シンポジウムV「仏典翻訳の過去・現在・未来——『日英基準訳語集』構築に向けて——」(第53回国際東方学者会議(ICES)報告)」、学術論文誌、『東方学会報』94、19-22頁、2008.7

“A Report on the XVth International Association of Buddhist Studies (Atlanta, 23-28 June, 2008)”、一般雑誌、*Mahapitaka* 14、4-6頁、2009.1

「第59回東方学会会員総会シンポジウムI:「大乘仏教研究の現在」、その他、学会報、『東方学会報』No.97、pp.20-22頁、2009.12

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本印度学仏教学会」、役員・委員、理事長、2008～

「東方学会」、役員・委員、理事・評議員・編集委員、常務理事 2009～

「日本仏教学会」、役員・委員、理事、2007～

「南アジア学会」、役員・委員、理事、2007～2008

「日本宗教学会」、役員・委員、評議員、2007～

「仏教思想学会」、役員・委員、理事・評議員、2007～

「インド思想史学会」、役員・委員、理事、2007～

「日本西藏学会」、役員・委員、委員、2007～

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

「科学研究費委員会専門委員」、2007～

「日本学生支援機構返還業務専門部会」、2007～

教授 **丸井 浩** MARUI, Hiroshi

1. 略歴

1972年4月 東京大学教養学部文科III類入学

1974年4月 東京大学文学部印度哲学印度文学科進学

1976年3月 同 上 卒業

1976年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻修士課程入学

1979年3月 同 上 修了

1979年4月 東京大学大学院人文科学研究科印度哲学専攻博士課程進学

1983年3月 同 上 単位取得退学
 1984年1月 インド・プーナ大学サンスクリット高等研究センター在学（～1986年1月）
 （文部省給費留学生）
 1983年4月 財団法人東方研究会専任研究員（～1990年3月）
 1990年4月 武蔵野女子大学短期大学部専任講師（～1992年3月）
 1992年4月 東京大学文学部助教授
 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（大学院部局化に伴う）
 1999年1月 同 上 教授（～現在）

<学位>

1979年3月 修士（文学）（東京大学）

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

専門分野はインド哲学。インドの哲学的思索の伝統諸派（ダルシヤナ）のなかで、特に多元論的世界観と分析的、合理的思考を特徴とする、ニヤーヤ派・ヴァイシエーシカ派のサンスクリット文献の解説・解釈、およびその思想（史）研究に従事している。最近の研究テーマは、(1) 宗教聖典の権威をいかに論理的に擁護するかをめぐる諸議論を分析して、インド思想における哲学と宗教の交錯関係をテキスト実証的に解明すること、(2) 「(インド) 六派哲学」という概念の展開、(3) 『ニヤーヤ・カリカー』というニヤーヤ最古の綱要書のテキスト校訂と翻訳を中心としたジャヤンタ研究、の三つ。

c 主要業績（2008－2009年度）

(1) 論文

「宗教聖典の権威論証に現れるインド的思惟の特質解明—ユダヤ学との対話を手掛かりに—」、平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究C 課題番号17520045）研究成果報告書、161pp., 2008.5.

(2) 学会発表

“Philosophy or religion? Reasoning and argumentation as a bridge over inter-religious conflicts.” XXII World Congress of Philosophy: Rethinking Philosophy Today, Seoul National University, 2008.7.30.

“The meaning of a diversity of established world views or tenets (*siddhanta*) in debate: What does Jayanta’s explanation of NS 1.1.26-31 tell us?” International Conference: World view and theory in Indian philosophy, Barcelona, 2009.4.28.

“Examination of the meaning of *pramanyā* with special reference to its use for the Veda or ‘verbal testimony’ (*śabda*) in the Codanasutra-adhikarana of Slokavarttika and some Nyaya texts.” 14th World Sanskrit Conference, Kyoto University, 2009.9.2.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等・学会役員

学習院大学非常勤（思想史講義）、2009.4-2010.3

武蔵野大学第514回日曜講演会、2009.10.18

「日本印度学仏教学会」、理事、常務委員、2008.4-2010.3

「日本宗教学会」、評議員、編集委員(2006.9-2010.9)、2008.4-2010.3

「東方学会」、評議員、2008.4-2010.3

「日本南アジア学会」、英文雑誌編集委員、2008.4-2010.3

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

日本学会協議会、第20期、2008.4-2008.9、第21期、2008.10-2010.3

「財団法人東京大学仏教青年会」、理事、2008.4～2010.3

「財団法人東方研究会、理事、2008.4～2010.3、主任研究員、2009.4-2010.3

「財団法人大法輪石原育英会」、評議員、2008.4-2010.3

1. 略歴

- 1981.03 東京大学文学部印度哲学印度文学専修過程卒業
- 1981.04 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）入学
- 1984.03 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）修了
- 1984.04 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（印度哲学）進学（-1989.3）
- 1985.07 インド・デリー大学大学院留学（文部省国際交流計画）（-1986.05）
- 1988.04 日本学術振興会特別研究員（-1990.03）
- 1994.06 博士（文学）（東京大学）
- 1994.10 東京大学文学部助教授
- 1995.04 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2006.04 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2007.04 東京大学文学部次世代人文学開発センター兼任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

専門分野はインド仏教の教典形成史、および人文情報学。前者については *sutra*, *vinaya* の形成過程解明を通して初期仏教から大乘仏教にいたる思想史、社会背景史の解明を目標とする。目下の研究課題は(1)大乘仏教の形成過程および大乘仏教の特徴についての従来の研究のみなおし、(2)仏教学を支える近代の仏教研究方法の問いなおし、および(3)仏教と現代の諸問題とのかかわりの考究という3点に集約される。西洋近代から生まれ、200年の歴史を有する仏教学を検証する視野のなかにこれら3点を据え、仏教学の進む新たな道を模索している。後者の課題、すなわち人文情報学については、仏教文献の電子化事業を進める過程で3年ほど前から本格的に着手。科学研究費基盤A「国際連携による仏教学術知識基盤の形成」のプロジェクトを中心に、次世代に向けた仏教学の国際的知識基盤づくりを始めた。

c 研究業績

(1) 著書

- 1. 編著（熊野純彦と共編）『死生学2 宗教と他界が照らす生』東京大学出版会、2008.12
- 2. 共著（聖心女子大キリスト教文化研究所）『仏教の人間観と現代』、春秋社、2009.2
- 3. 共著 *Acta Asiatica*, Bulletin of the Institute of Eastern Culture 96, 2009.2
- 4. 共著『戒律と倫理』、平楽寺書店、2009.7
- 5. 共著『宗教史とはなにか（下）』2009.12
- 6 共著 *Indian Philosophy and Text Science*, Motiral Banarsidass, Delhi, 2010.2

(2) 論文

- 1. (永崎研宣と共著)「人文系データベース」における相互運用性をめぐる諸問題『人文科学とコンピュータシンポジウム論文集』pp. 19-26, 2008.4
- 2. 「涅槃について——仏教における「いのち」」『東方』24, pp.30-45, 2009.3
- 3. 「伝承といういとなみ——実践仏教の解釈学」『親鸞教学』93, pp.23-45, 2009.3
- 4. 「仏教の倫理を考察するための視点——縁起から二諦へ」『日本仏教学会年報』74, pp.1-13, 2009.3
- 5. “Aspects of the Interoperability in the Digital Humanities,” *Digital Humanities* 2009, 2009.7

(3) 書評

- 1. 「藤田宏達『浄土三部経の研究』」『宗教研究』362, pp.253-261, 2009.12

(4) 総説・総合報告

- 1. 「人文系データベースのゆくえと人文学」『明日の東洋学』（東洋文化研究所ニューズレター20）pp.3-6, 2008.10
- 2. 「戦前日本における仏教研究」『宗教研究』363, pp.80-81, 2010.3

(5) 研究報告書

- 1. 「仏教学デジタルアーカイブの構築にむけて」『古写経研究の最前線』（国際仏教学大学院大学）pp.25-31,

2010.2

(6) 学会発表

1. “Mahayana as a Continuous Movement of Creating Sutras: Focusing on a Nirvana Sutra in the Ekottaragama Intermediate between the Main Stream and the Mahayana,” Stanford Lecture, Stanford University, 2008.2.7
2. “What Are the Nirvana Sutras and What Do They Tell Us, Nirvanasutra and Buddhism,” Columbia University, New York, 2008.3.17
3. 「仏典コーパスの誕生と仏教世界の出現——媒体の展開からみた仏教史——」PeSeTo 人文学会議、ソウル大学、2008.3.28
4. “Appearance of a Corpus of Buddhist Scriptures and Appearance of a World of Buddhism,” United Nations Day of Vesak Celebrations 2551/ 2008” (Hanoi, Vietnam) 2008.5.15
5. 「他なる故郷としての南アジア」(南アジア学会創立 20 周年記念シンポジウム)「可能性としての南アジア」京都大学、2008.6.21
6. 「仏教の倫理を考察するための視点」(日本仏教学会学術大会) 叡山学院、2008.9.11
7. 「仏教とサンガ」(真宗総合研究所講演) 大谷大学、2009.6.5
8. “How Can We Retrieve the Twofold Truth in This Secularized World? (International Symposium: Peace in the Buddhist Traditions of India and Tibet) University of Hamburg, Germany, 2009.6.19
9. “Aspects of the Interoperability in the Digital Humanities”, Digital Humanities 2009, Maryland, USA, 2009.6.21
10. 「大蔵経の現在」(特定領域研究「寧波プロジェクト」シンポジウム「大蔵経と東アジア世界」) 東京大学人文社会系研究科、2009.9.1
11. 「戦前日本の仏教研究」(宗教学会学術大会) 京都大学、2009.9.12
12. 「日本の仏教学の 120 年を回顧して」(仏教史学会 60 周年記念大会)、龍谷大学、2009.10.17
13. 「経典研究からみる大乘仏教研究の現在」(国際東方学者会議) 東方学会、2009.11.6
14. “Some Reflections of the Nirvanasutra in Mahayana,” American Academy of Religion, Montreal, 2009.11.10
15. 「念仏と仏性」(真宗学会学術大会) 大谷大学、2009.11.24
16. 「仏教における死生」(臨床死生学会 15 回大会) 東京大学、2009.12.5
17. 「自死、孤独死、安楽死——仏教思想の立場から」コルモス会議、京都、2009.12.26
18. “The Lotus Sutra as the Teaching in the Age of the Buddha’s Absence,” International Seminar for Lotus Sutra, RKK Retreat Center, Kona, USA, 2010.1.27
19. 「日本の人文系データベースの動向と海外」シンポジウム「文化とコンピューティング」、京都大学、2010.2.22

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

1. 武蔵野大学大学院非常勤講師 (2008.4-2010.3)
2. 東洋大学大学院非常勤講師 (2009.4-2010.3)
3. 國學院大學大学院非常勤講師 (2008.4-2009.3)

(2) 学外組織委員・役員

Eastern Buddhist 編集委員 2008.10-
「財団法人・東京大学仏教青年会」理事 2008-
「大法輪石原育英会奨学金選考委員」委員 2008-
「財団法人・仏教学術振興財団」理事・評議員 2008-2009.3
「大蔵経データベース化支援募金会」委員 2008-
「日本印度学仏教学会」常務委員 2008-
「東方学会」評議員 2008-
「日本仏教学会」理事 2008-
「南アジア学会」常務理事 2008.4-2009.9、監事 2009.10-
「日本宗教学会」理事 2008.4-2010.3

「仏教思想学会」評議員 2008-
「大蔵経テキストデータベース研究会代表」2008.4-2010.3
「科学研究費委員会専門委員」2008.4-2010.3

16 イスラム学

教授 竹下 政孝 TAKESHITA, Masataka

1. 略歴

1971年6月 東京大学教養学部教養学科（科学史科学哲学分科）卒業（教養学士）
1971年6月 シカゴ大学大学院中近東学科修士課程入学
1973年6月 シカゴ大学大学院中近東学科修士課程修了
1973年9月 テヘラン大学へ留学
1974年9月 ベイルート・アメリカン大学へ留学
1975年9月 カイロ大学へ留学
1976年8月 シカゴ大学大学院中近東学科より修士号取得
1976年9月 ウィーン大学留学
1979年9月 再び シカゴ大学大学院中近東学科博士課程入学
1981年6月 シカゴ大学大学院中近東学科博士課程修了
1983年4月 東海大学文学部文明学科アジア課程西アジア専攻専任講師
1986年4月 東海大学文学部文明学科アジア課程西アジア専攻助教授
1986年8月 シカゴ大学大学院中近東学科より博士号取得
1990年4月 東京大学文学部イスラム学助教授
1994年4月 東京大学文学部イスラム学教授
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教

2. 主な研究活動

a 専門分野とb 研究課題

イスラム思想史の流れの中で、特にイブン・アラビーに代表される後期スーフィズムの思想をテキストの綿密な分析によって解明するとともに、彼の思想の起源をイスラム哲学や、神学、初期スーフィズムとの関係の中で歴史的に跡付け、また、彼の死後、彼の思想がどのように受容されていったかを明らかにすることを大きな目標にしている。現在、13世紀のアナトリアのイスラムを総合的に捉え、その中で、イブン・アラビー学派の位置を検討している最中である。そのために、ルーム・セルジューク朝の歴史文献を読んでいるが、

特にメウレヴィー教団の聖者伝を資料として当時の宗教と社会の関係を探っている。

c 主要業績

(1) 論文

「イスラームの聖者マウラーナー・ジャラールッディーン・ルーミー」、中東協力センターニュース、32巻6号、25-30頁、2008.2

「サドルッディーン・クーナウィーのイスラーム哲学史上の位置」、哲学、59号、61-76頁、2008.4

「サドルッディーン・クーナウィーの人間論」、アジア遊学、111号、2008.5

「「マスナヴィー」からの物語」、中東協力センターニュース、vol. 33, no. 2、50-54頁、2008.7

「イスラームの暦と年中行事」、中東協力センターニュース、vol. 33, no. 5、50-54頁、2009.1

「神の友、アブラハムの物語」、中東協力センターニュース、34巻5号、71-78頁、2010.1

(2) 学会発表

「哲学史を読み直す——イスラム思想の視点から」、日本哲学会、広島大学、2008.5.18

「ギリシャ政治哲学のイスラム政治哲学への影響——ファーラービーを中心に」、
「ギリシャ政治哲学の総括的研究」全体研究集会、首都大学東京、2008.9.28

「Shams-e Tabrizi and the Philosophers」、International Shems Symposium、Istanbul, Konya、
2009.12.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東海大学非常勤講師、2006.4～2006.9

東海大学非常勤講師、2007.4～2007.9

教授 **柳橋 博之** YANAGIHASHI, Hiroyuki

1. 略歴

1980年3月 東京大学文学部東洋史学専修課程卒業

1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（東洋史学）

1988年9月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学（東洋史学）

1988年10月 茨城大学教養学部専任講師

1989年4月 同 助教授

1993年4月 東北大学大学院国際文化研究科助教授

1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（1997年度は東北大学大学院と併任）

2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要

2004年3月にA History of the early Islamic law of property, 2005年2月に『現代ムスリム家族法』を出版した。その後7世紀以来のイスラーム実定法の研究を進め、現在財産法の概説書を執筆中である。

c 主要業績

(1) 論文

「『アスル』「賃約の書」の編纂過程—カイロ写本の分析」、法制史研究、1-46頁、2009.4

「初期アブー・ハニーファ美德伝の編纂期における言い伝えの選別基準について」、宗教研究、第361号、385-408頁、2009.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

神戸大学大学院国際協力研究科非常勤講師、2009.9

(2) 学会

「日本イスラム協会」、理事、2009.4～

17 西洋古典学

教授 **逸身 喜一郎** ITSUMI, Kiichiro

1. 略歴

1970年 5月	東京大学文学部西洋古典学専修課程卒業
1972年 3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了 (西洋古典学)
1975年 3月	同 博士課程 単位修得の上 退学
1975年 4月～76年 3月	日本学術振興会 奨励研究員
1976年 7月～82年 9月	東京大学教養学部 助手 (西洋古典学)
1979年 10月～82年 7月	セント・アンドルーズ大学 大学院ギリシャ科 留学 (University of St. Andrews, Scotland)
1983年 7月	同上 Ph.D. 取得
1984年 4月～91年 3月	成城大学文芸学部 助教授 (西洋古典学)
1989年 4月～90年 3月	オックスフォード大学セント・ヒューズ・コレッジ 客員教員 (Visiting Fellow, St. Hugh's College, Oxford)
1991年 4月～94年 3月	成城大学文芸学部 教授 (西洋古典学)
1994年 4月～97年 3月	東京都立大学 人文学部 教授 (西洋古典学講座)
1997年 4月～2010年 3月	東京大学 大学院人文社会系研究科 教授 (西洋古典学)

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

西洋古典学全般といたいだが、韻文／散文の別をたてれば韻文、ギリシャ／ラテンの別をたてればギリシャの方が得手である。研究対象を、専門性の度合いが強くそれだけ特殊な領域から降順に、ただし重要性の順とは関係なく並べると、次のようになる。

- (a) ギリシャ詩、特に抒情詩ならびに悲劇喜劇の韻律研究
- (b) ギリシャ悲劇のテキスト・文体・作品構成・伝承などいわゆる「悲劇研究」
- (c) ギリシャ・ラテン両文学を通じて、韻文諸ジャンルの伝統

(a)の分野にあたる *The Other Half of Pindaric Metre* なる書物をつくるべく1989年来取り組んできたが(英語で執筆)、ようやく完成した。(c)は著書『古代ギリシャ・ローマの文学・韻文の系譜』と関連する。

すでに一度、増補・改訂版を作ったけれども（2000年）、この本で扱えなかった作品を加えるいっぽう、すでに扱った作品に関してももっと大がかりに改良し補充した書物を作る予定である。didactic poetry や satura のような、「物語」のない詩をいかに叙述するかが目下の関心である。

c 主要業績

(1) 著書

単著、『『オイディプース王』と『バッカイ』 ギリシャ悲劇とギリシャ神話』、岩波書店、2008.11

単著、『Pindaric Metre: The 'Other Half』、Oxford U.P.、2008.12

(2) 論文

「教訓詩人個々人の系譜的自己規定、ないしジャンル意識」、西洋古典学研究、56、1-13頁、2008.3

(3) 啓蒙

『読む』ことにより広がり続ける空間」、一般雑誌、『東京大学アカデミックグルーヴ』、24-25頁、2008.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

長崎外国語大学特別講演、2007.11

(2) 行政

日本学術会議、教育政策、連携会員、2006.10～

(3) 学会

「日本西洋古典学会」、役員・委員、常任委員 編集委員、2007.6～

教授 片山 英男 KATAYAMA, Hideo

1. 略歴

1971年 6月 東京大学文学部卒業（西洋古典学専修課程）

1973年 3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（西洋古典学専門課程）

1976年 3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（西洋古典学専門課程）

1982年 10月～1983年 6月 イタリア政府奨学金給費留学生（パドヴァ大学文学哲学部）

1976年 4月～1977年 3月 日本学術振興会奨励研究員

1977年 4月 東京大学文学部助手（西洋古典学研究室）

1983年 8月 東京大学文学部助教授（西洋古典学専修課程）

1993年 4月 東京大学文学部教授（西洋古典学専修課程）

1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（西洋古典学専門分野）

2000年 4月 同（文化資源学研究専攻文献学専門分野）

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古典学、西洋古典学史

b 研究課題

前3世紀アレクサンドレイアに興った新傾向の詩の文学動向の研究により、こうした学者詩人によって確立された古典学の成立事情を解明する。

ルネサンスの古典研究再興に関し、古典学の近代的変貌を跡づける。

テキストの電子化に際し、多国語処理の統一的方法を検討する。

c 主要業績

(1) 論文

「ポッジョ写本再考」大芝芳弘・小池登（編）『西洋古典学の明日へ——逸身喜一郎教授退職記念論文集——』知泉書館、2010年、373-393

18 フランス語フランス文学

教授 塩川 徹也 SHIOKAWA, Tetsuya

1. 略歴

1968年3月	東京大学教養学部教養学科（フランスの文化と社会）卒業
1968年4月	同 大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
1970年10月	パリ第4大学修士課程入学
1971年6月	同 修了
1971年10月	同 博士課程進学
1975年6月	同 修了（第3期課程博士取得〔フランス文学〕）
1976年4月	京都大学教養部助教授（フランス語）
1980年4月	東京大学文学部助教授（フランス語フランス文学）
1993年1月	同 教授
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科教授
2007年2月	パリ・ソルボンヌ大学（パリ第4大学）、招聘教授（アルフォンス・デュプロン講座） ～4月
2009年3月	定年により退職

2. 主な研究活動

a 専門分野と b 研究課題

19世紀以降の狭義の「文学」に収まらない学者・文学者の文筆活動（哲学、宗教、歴史、文学）を、特にフランス17世紀に焦点を当てて、文献学と思想史の双方の観点から研究する。興味を中心は、パスカル及びジャンセニズムであり、最近では17世紀末から18世紀初頭にかけて活躍した小説家・反キリスト教思想家・大旅行家であるロベール・シャールにも関心を寄せている。1) パスカルについては、同時に科学者・哲学者・信仰者であった彼の思索と信仰のあり方を、体験と思想と表現の三つの観点を交差させて浮き彫りにすることを目指している。2003年に年来の研究成果を『パスカル考』という著書にまとめて公刊したが、それ以降は、主著『パンセ』の翻訳に取り組んでいる。2) ジャンセニズムについては、元来カトリック宗教改革の一翼として出発しながら、反体制運動として当時の国家と教会から弾圧されたこの宗教運動が、アンシャン・レジームの政治・宗教・社会にどのような影響を及ぼし、特に「良心の自由」の観念の形成にいかなる役割を果たしたかを、歴史的観点から探求することを目指しているが、これについては残念ながら、研究は足踏み状態である。3) ロベール・シャールについては、パスカルとの思想的対立を裏付ける文献学的証拠の発見があり、科研費補助金による研究成果報告書および国際シンポジウムにおいて発表した。

c 主要業績

(1) 論文

« La campagne de la 18^e Provinciale », *Chroniques de Port-Royal*, no. 58, pp.59-71, 2008

« La "pensee" selon Pascal », *Chroniques de Port-Royal*, no. 58, pp.399-414, 2008

« Le temps et l'éternité selon Pascal », *XVII^e siècle*, no.239, pp.273-283, 2008

(2) 総説・総合報告

« Allocution du président au 59^e congrès de l'Association » 学術論文誌, *Cahiers de l'Association internationale des études françaises*, no. 60, p. 5-8, 2008

(3) 啓蒙

「哲学書を読む パスカル 1」, 一般雑誌, 『ふらんす』, 68-69頁, 2008.4

「哲学書を読む パスカル 2」, 一般雑誌, 『ふらんす』, 36-37頁, 2008.5

「哲学書を読む パスカル 3」, 一般雑誌, 『ふらんす』, 34-35頁, 2008.6

(4) 研究報告書

「フランスにおけるキリスト教と文学」, 2009.5

(5) 会議主催（チェア他）

「日本フランス語フランス文学会春季大会」, 青山学院大学, 2009.5.24~2009.5.25

「日本フランス語フランス文学会秋季大会」, 岩手大学, 2009.11.8~2009.11.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

北海道大学文学部特別講義, 2008.10

アスペン・フェローズ懇話会, 2009.3

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

「日本学術会議」, 連携会員, 2008.4~2009.3

「財団法人日仏会館」, 理事, 2008.4~2009.3

教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo

1. 略歴

1974年 3月	東京大学文学部卒業(フランス語フランス文学)
1976年 3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了(仏語仏文学)
1977年 10月	パリ高等学術研究院博士課程(フランス政府給費留学、~80年 9月)
1979年 10月	パリ第3大学東洋語東洋文化研究所講師(日本語科、~80年 9月)
1981年 3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学(仏語仏文学)
1981年 4月	同 文学部助手(フランス語フランス文学)
1986年 4月	獨協大学外国語学部専任講師(フランス語科)
1989年 4月	東京大学文学部助教授(フランス語フランス文学)
1995年 1月	同 教授(フランス語フランス文学)
1995年 4月	同 大学院人文社会系研究科教授(仏語仏文学)
2000年 4月	同 文化資源学研究専攻(文書学専門分野)に配置換

2. 主な研究活動(2003年11月~2005年10月)

a 専門分野

フランス文学(中世文学、ルネサンス文学)

文化資源学(書物史、ヨーロッパ図書館史)

b 研究課題

(1) マルコ・ポーロ研究

現在、マルコ・ポーロ『東方見聞録』の中世フランス語本、イタリア方言本、ラテン語本等の比較研究をおこない、もっとも原本に近いとされるフランコ・ヴェネチアン語本をもとに、そこに中世フランス語本、ヴェネチア方言本、トスカナ方言本、ラテン語本との校合結果を盛り込んだ翻訳を準備中。

(2) 中世西ヨーロッパのアジア観についての研究

『アレクサンドロス大王物語』、プレスター・ジョンの手紙、カルビーニ、ルブルク、オドリコ等の東方旅行記録、ハイトンの地誌、マンドヴィルの架空旅行記など、12~14世紀のヨーロッパの東方記述の総体を対象に、中世西ヨーロッパのアジア観についての研究を進めている。

(2) レトリック教育史研究

古典修辞学が古代ギリシア以降、19世紀末のフランスに至るあいだ、どのように学校教育の中で教えられてきたのかという問題を、とりわけディスクールの様々な型を教える初等教科書『プロギュムナスマタ』を中心に研究している。

(3) 明治期の演説研究

レトリックの歴史に関連して、文化資源学においては、明治初頭の日本にヨーロッパのどのようなレトリック教本が移入され、それがどのように理解、ないしは誤解されて、自由民権運動とともに盛んになった演説の中に取り入れられたのかを研究している。

c 主要業績

(1) 解説文

「フランス語」、梶茂樹他編『事典世界のことば』、大修館書店、444-447頁、2009.4

教授 **中地 義和** NAKAJI, Yoshikazu

1. 略歴

1976年 3月	東京大学教養学科（フランスの文化と社会）卒業
1979年 3月	同 大学院人文科学研究科修士課程修了（仏語仏文学）
1982年 10月	パリ第三大学東洋語東洋文明研究所講師（～ '83年9月）
1985年 12月	同 第三期課程博士（フランス文学・19世紀部門）
1986年 3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程（仏語仏文学）単位取得のうえ退学
1986年 4月	同 教養学部助手
1988年 4月	同 助教授
1992年 4月	同 文学部助教授
1995年 4月	同 大学院人文社会系研究科助教授
1996年 2月	同 教授、現在にいたる

2. 研究活動

a 専門分野 フランス近代詩、フランス現代文学の諸相

b 研究課題

フランス近代詩とその文化的ファクターの関係が主な研究対象。2003年5月に本学で開催したボードレール国際コロックの論集がまとまり、フランスで刊行された。2008-09年度はまた、ランボーの散文作品『地獄の季節』が、フランスで2009-10年度「教員資格（アグレガシオン）」試験科目の一つとなったのに伴い、いくつかの論集や国際研究集會に招聘され、難解で知られるこの作品の新たな読み方、理解の更新に寄与すべく努めた。その作業は2010年度以降も継続中で、新たな論考を二本準備している。

科学研究費補助金基盤研究（B）の研究課題「旅行記と文学創造」（2007-09年度）に関連して、2008年10月に本学でフランス、スイスから招待した研究者を交えて「旅行記から文学作品へ」と題する研究集會を開催、以後、ルネサンス期から現代にいたる旅と文学との関係の変遷をたどる作業を継続した（その成果は2010年9月に編まれた論文集にまとめられた）。

現代文学における「旅」に関連して、2008年度ノーベル文学賞受賞作家ル・クレジオにとっての旅の重要性を考察する試みを行ない、二つの発表を行なった。また、2009年11月には同氏を本学キャンパスに招待し公開対談を開催し、会場に収まりきれないほどの聴衆が参集する盛会となった。

c 主要業績

(1) 編著書

Baudelaire et les formes poétiques, La Licorne, n° 83, Presses universitaires de Rennes, 2008, 212p.

(2) 共著

Rimbaud, l'invisible et l'inouï. Poésies, Une saison en enfer (1869-1873), ouvrage coordonné par Arnaud Bernadet, CNED - Presses universitaires de France, 2009, pp.120-140 / 210.

(3) 論文

Sur la « fatalité du bonheur », *Parade sauvage* (numero special, hommage à Steve Murphy), Musée-Bibliothèque Charleville, 2008, pp.586-595.

« Voix des ancêtres, voix de soi : le cycle mauricien des romans de Le Clezio », *La Voix. Hommage à Pierre Brunel*, dir. par Danièle Chauvin, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 2009,

pp.283-294.

« Rimbaud et les vers libres de *La Vogue* », *Le Vers libre dans tous ses états. Histoire et poétique d'une forme (1886-1914)*, sous la direction de Catherine Boschian-Campaner, L'Harmattan, 2009, pp.33-45.

« Les “voix instructives” dans les poèmes de 1872 », *Europe* (numéro consacré à Rimbaud), octobre 2009, pp.130-138.

« Les lignes de force de “Nuit de l'enfer” », *Rimbaud. Des Poésies à la Saison*, études réunies par André Guyaux, Classiques Garnier, 2009, pp.245-263.

(4) 翻訳

『ロラン・バルトの遺産』(エリック・マルティ、アントワヌ・コンパニオン、フィリップ・ロジェ著)、みすず書房、2008年(共訳)

『黄金探索者』(ル・クレジオ著)、「世界文学全集」(池澤夏樹編)II-9、河出書房新社、2009年

(5) 書評

「Masao Suzuki, J.: *M.G. Le Clézio. Évolution spirituelle et littéraire. Par delà l'Occident moderne*, L'Harmattan, 2007」、『Cahier』(日本フランス語フランス文学会) No 4, pp.23-25, 2009年9月

(6) 学会発表、ラウンド・テーブルなど

« Voix des ancêtres, voix de soi : le cycle mauricien des romans de Le Clézio », *La Voix. Hommage a Pierre Brunel* (ピエール・ブリュネル教授退官記念国際コロック), Université de Paris - Sorbonne, 2008.6.7

« *Voyage à Rodrigues* ou la double quête de Le Clézio », 科学研究費補助金による基盤研究(B)「旅行記と文学創造」の一環としての国際コロック « Du récit de voyage à l'œuvre littéraire » での発表、東京大学大学院人文社会系研究科、2008.10.16

« L'Avenir de la culture française au Japon », 日本フランス語フランス文学会春季大会でのラウンド・テーブルでの報告、中央大学、2009.5.24

« Une quête nommée fiction (フィクションという探求) », 2008年度ノーベル文学賞受賞作家ル・クレジオ氏との公開対談、東京大学大学院人文社会系研究科、2009.11.29

« Les lignes de force de “Nuit de l'enfer” », *Rimbaud. Des Poésies à la Saison* (教職資格試験候補者向け国際コロック), Université de Paris - Sorbonne, 2009.12.12

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

ブリヂストン美術館土曜講座「現代性とメランコリー——変容するパリのボードレール」2008.11.1

東京外国語大学講演「ル・クレジオ——フランスからの出発」、2008.12.11

国際基督教大学講演「ル・クレジオの世界」、2009.6.3

(2) 学外組織委員

日本学術振興会・学術システム研究センター主任研究員、2008.4~2010.3

准教授 **塚本 昌則** TSUKAMOTO, Masanori

1. 略歴

1982年3月 東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
1984年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学(仏語仏文学)
1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程進学
1988年10月 パリ第12大学博士課程(～1991年9月)(フランス文学、フランス政府給費留学生、98年11月、課程博士取得)
1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学
1992年4月 東京大学文学部助手

1994年 4月 白百合女子大学文学部専任講師 (フランス文学)
1997年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (フランス語フランス文学)

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

ポール・ヴァレリーを中心とする 20 世紀フランス文学研究。苦痛、眠り、エロス等々、知性では割り切れないものをどこまで明晰に捉えられるのか、終わりなき探求をおこなったヴァレリーの作家活動を、「夢」というトポスに焦点を当てて研究してきた。同時に、ヴァレリーが偏愛した断章形式についても、ブランシヨとバルトを視野におさめながら、分析を進めている。

また、科学研究費補助金による研究「フランス文学における時間意識の変化」(2004-2006 年度)では、より広い視野から、現代の変化しつつある時間意識の把握を試みている。特に 1910-30 年代における〈前衛〉と〈後衛〉の錯綜した関係、さらにカリブ海の文学における時間意識の表現に焦点を当てながら、〈近代〉の特質の一端を明らかにすることを目指している。

c 主要業績

(1) 著書

共著、「〈前縁〉とは何か? 〈後衛〉とは何か?——文学史の虚構と近代性の時間」、平凡社、2010.3

(2) 論文

「Les Paradis artificiels et Monsieur Teste : la théâtralisation de la conscience», *Baudelaire et les forme poétiques, La Licorne*, n°83, pp.193-203, 2008

「La modernité et la simulation chez Valéry ? les puissances de l'inachèvement」、Paul Valéry : «Regards» sur l'histoire, Presses Universitaires Blaise-Pascal, pp.327-334, 2008

「心の中のフレーム」、水声通信、27 号、11-22 頁、2008.11

「シュルレアリスムの視覚体験とは何か」、水声通信、27 号、45-53 頁、2008.11

「二十世紀フランス文学と死——類型化の試み」、死生学研究、11 号、2009.3

(3) 書評

「年末回顧『外国文学 (フランス)』」、その他、『週刊読書人』、2008.12

「エリック・マルティ/アントワヌ・コンパニオン/フィリップ・ロジェ『ロラン・バルトの遺産』」、みすず書房、その他、『週刊読書人』、2009 年 3 月 13 日号、2009.3

「2009 年フランス文学回顧『2009 年フランス文学回顧』」、2009、その他、『週刊読書人』、2009 年 12 月 25 日号、2009.12.

(4) 解説

「無意識」と「錯綜体」——フランス作家たちの「抵抗」、その他、『フロイト全集月報』、13、2009.12

(5) 学会発表

「フランス文学と〈私〉」、PESETO 人文学学術会議、2008.3.28

「Qu'est-ce que le dehors ? — une lecture du “retour de Hollande” de Valéry」、国際コロク「Du récit de voyage à l'œuvre littéraire」での発表、東京大学大学院人文社会系研究科、2008.10.16

「クレオール幼年時代——シャモワゾー『最期の身振り——カリブ海偽典』をめぐって」、クレオール再考、「日本フランス語フランス文学会」2009 年秋季大会(熊本大学)ワークショップでの発表、2009.11.8

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本フランス語フランス文学会」、役員・委員、常任幹事 大会担当幹事、2006.5~2007.5

「日本フランス語フランス文学会」、役員・委員、編集委員、2007.5~

1. 略歴

- 1981年3月 東京大学文学部第三類フランス語フランス文学専修課程卒業
- 1981年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
- 1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科専攻博士課程進学
- 1985年9月 パリ第3大学博士課程（～1989年3月）（フランス文学、フランス政府給費留学生）
- 1989年4月 東京大学文学部助手
- 1990年4月 一橋大学法学部専任講師
- 1993年4月 一橋大学法学部助教授
- 1997年5月 一橋大学大学院言語社会研究科助教授
- 2000年4月 東京大学大学院総合科学研究科助教授
- 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 現在にいたる

2. 主な研究活動

a 専門分野と b 研究課題

フランス・ロマン主義文学、とりわけジェラルド・ド・ネルヴァルの作品が主要な研究対象。その『東方紀行』に、オリエンタリズムに回収されない異文化体験の諸相を読み取る試みに取り組んでいる。現代小説や古典作品の翻訳紹介にも力を注ぎ、日本におけるフランス文学受容の活性化に努めてきた。文学研究と並び、フランス、アジアを中心とする映画にも関心を寄せている。2009-2011年度科学研究費補助金による研究「フランス文学と映画の相関関係についての総合的研究」を発足させ、内外の研究者との交流を深めつつある。

b 主要業績

(1) 著書

- 共編著、柴田元幸・沼野充義、「文学の愉しみ」、財団法人 日本放送出版教会、2008.3
- 共著、吉岡洋・岡田暁生編、「文学・芸術は何のためにあるのか?」、東信堂、2009.3
- 単著、「こどもたちは知っている 永遠の少年少女のための文学案内」、春秋社、2009.10
- 共著、「(前衛)とは何か? (後衛)とは何か?—文学史の虚構と近代性の時間」、平凡社、2010.3

(2) 論文

- 「異邦の香り ネルヴァル「東方紀行」論 第5章 迷路の中へ」、群像、2009.4
- 「異邦の香り ネルヴァル「東方紀行」論 第6章 逆説と真理」、群像、2009.5
- 「異邦の香り ネルヴァル「東方紀行」論 第7章 奇想のピラミッド」、群像、2009.6
- 「異邦の香り ネルヴァル「東方紀行」論 第8章 レバノンの一角獣」、群像、2009.7
- 「異邦の香り ネルヴァル「東方紀行」論 第9章 惑乱するカリフ」、群像、2009.8
- 「異邦の香り ネルヴァル「東方紀行」論 第10章 夢の波」、群像、2009.9
- 「異邦の香り ネルヴァル「東方紀行」論 第11章 地底世界とフロイト」、群像、2009.10
- 「異邦の香り ネルヴァル「東方紀行」論 第12章 幻想的家系図」、群像、2009.11
- 「異邦の香り ネルヴァル「東方紀行」論 第13章 寛容の帝国」、群像、2009.12

(3) 啓蒙

「剥き出しの生—ウエルベック以降のフランス文学」、一般雑誌、『ユリイカ』、2008年3月号、60-67頁、2008.2

(4) マスコミ

- 雑誌、「街角のキネマ」、東京人、2009.1.15、2.15、3.15、4.15、5.15、6.15、7.15、8.15、9.15
- 雑誌、「「翻訳家」が亡びるとき? 『日本語が亡びるとき』にあらがって」、ユリイカ、2009.2.1
- 雑誌、「すばる文学カフェ・映画」、すばる、2009.2.7、5.7、8.7、11.7、2010.2.7
- 新聞、「本のソムリエ」、読売新聞、2009.2.15
- 新聞、「映画 悪役の系譜」、日本経済新聞、2009.3.5、3.12、3.19、3.26
- 新聞、「映画とは何か アンンドレ・バザン没後50年に寄せて」、朝日新聞、2009.3.7
- 雑誌、「海外文学最前線 フランス語圏 新しい小説は、現実に働きかける」、群像、2009.5.7

新聞、「シネマ万華鏡」、日本経済新聞、2009.7.31、8.7、10.9、10.23

雑誌、「翻訳あるいは走り続ける列車の物語」、花椿、2009.10.1

新聞、「エリック・ロメール監督追悼」、読売新聞、2010.1.15

(5) 学会発表

「*Le Voyage en Orient* de Nerval ou l'aspect "sentimental" du récit」、国際コロク「*De récit de voyage à l'œuvre littéraire*」での発表、東京大学大学院人文社会系研究科、2008.10.16

「*Retraduire Stendhal aujourd'hui : Le Rouge et le Noir dans le contexte japonais*」、国際高等研究所研究プロジェクト「受容から創造へ 近現代日本文学におけるスタンダードの場合」、国際高等研究所、2009.5.29

「このままでいいのか語学文学研究 フランス語の場合」、日本英文学会春季大会特別シンポジウム、東京大学駒場キャンパス、2009.5.31

(6) 会議主催 (チェア他)

「映画批評の原点を求めて アンドレ・バザン没後 50 周年国際シンポジウム」、主催、東京大学駒場キャンパス、2009.1.28

3. 主な社会活動

(1) 学外組織委員 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「講談社」、野間文芸翻訳賞選考委員長、2008.1~2009.9

「小西財団」、日仏翻訳文学賞選考委員、2008.1~

「国際交流基金」、国際交流基金賞文化芸術交流部門選考委員、2009.4~

19 南欧語南欧文学

教授 **長神 悟** NAGAMI, Satoru

1. 略歴

1974年3月	東京大学文学部言語学専修課程卒業
1977年3月	同 大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了
1977年4月	同 博士課程~'79年3月
1977年11月	ピサ高等師範学校留学 (イタリア政府給費留学生) ~'78年10月
1978年11月	フィレンツェ大学文学部留学~'79年3月
1979年4月	東京大学文学部助手
1983年4月	成城大学文芸学部専任講師
1990年4月	同 助教授
1991年4月	東京大学文学部助教授 (イタリア語イタリア文学)
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授 (南欧語南欧文学)
1996年4月	同 教授 (南欧語南欧文学)

2. 主な研究活動

a 専門分野：イタリア語学、ロマンス語学

b 研究課題

概要

1) イタリア語史上の諸問題の解明を目指す。近年はことに語形成や語源学・語彙史の分野に関心を寄せている。また、大学院の演習などを通じ、イタリア語史上重要な「言語問題」(Questione della lingua)を歴史的に跡づける作業を行なっている。

2) ロマンス語学の観点からイタリア語の特質を検討する。

自己評価

上の1)で触れた「言語問題」に関して近年、大学院の演習において、イタリアで出版された最古のイタリア語文典であるG. F.フォルトゥニオの"Regole Grammaticali della volgar lingua" (Ancona, 1516)、またその9年後に刊行され、"Regole"よりはるかに大きな反響を呼んだP. ベンボの主著"Prose della volgar lingua" (Venezia, 1525)を取り上げ、さらに2007年度からはP.ジャンブッラーリ(1495-1555)の著作を講読しているが、今後もしばらく16世紀前半のイタリアの言語論争について検討を進め、この分野に関する理解を深めたい。

c 主要業績

(1) 著書

「イタリア語練習問題集 (CD付き・新装版)」(マリーサ・ディ・ルッソ、西本晃ニと共著)、2009.8

(2) 辞書・事典項目

「イタリア語」、石井米雄編『世界のことば・辞典の辞典・ヨーロッパ編』、三省堂、211-223頁、2008.5

「近代のヨーロッパ諸語」、樺山紘一・責任編集『歴史学事典』、弘文堂第15巻「コミュニケーション」、174-177頁、2008.6

「イタリア語」、梶茂樹ほか編『事典・世界のことば141』、大修館書店、396-399頁、2009.4

(3) 会議主催(チェア他)

「日本ロマンス語学会第46回大会」、実行委員長、東京大学本郷キャンパス、2008.5.17~2008.5.18

「Emanuele Banfi 教授講演会」、主催、東京大学文学部南欧文学研究室、2008.5.30

「イタリア学会第56回大会」、主催、神戸大学、2008.10.19

「日本ロマンス語学会第47回大会」、チェア、ロマンス語の疑問文、北海道大学、2009.5.30~2009.5.31

「イタリア学会第57回大会」、主催、明治大学、2009.10.19

3. 主な社会活動

(1) 学外組織委員(学協会、省庁を除く)委員・役員

「財団法人・日伊協会」、評議員、2009.4~2010.3

「イタリア学会」、会長、2008.4~2010.3

「日本ロマンス語学会」、副会長、2008.4~2010.3

(2) 他機関での講義等

成城大学非常勤講師、2008.4~2010.3

准教授 浦 一章 URA Kazuaki

1. 略歴

1982年3月 東京大学教養学部教養学科イギリス科卒業

1984年3月 同 文学部イタリア語イタリア文学専修課程卒業

1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)修士課程修了

1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア文学専攻)博士課程進学

1988年3月 東京大学大学院人文科学研究科フランス語フランス文学専門課程(イタリア語イタリア

	文学専攻) 博士課程中途退学
1988年4月	東京芸術大学音楽学部一般学科専任講師
1990年4月	同 助教授
1994年4月	東京大学文学部南欧語南欧文学科助教授
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科助教授
2010年4月	同 教授、現在に至る。

2. 主な研究活動

a 専門分野：(ダンテを中心とした) イタリア文学、中世オック語文学

b 研究課題：

概要

『ダンテ研究 I』(東京、東信堂、1994年)以降も、『神曲』以前のダンテ、恋愛詩人としてのダンテを研究の中心に据え、1230年頃からホーエンシュタウヘン家の宮廷で花開いたシチリア派の詩人たちが、それに続くシチリア・トスカナ派の詩人たちについての知識を深め、さらには南仏トルバドゥールたちの詩に対する理解を深めること。ダンテは少なくとも8名のトルバドゥールに言及しており、そのうちアルナウト・ダニエルを「煉獄篇」第26歌に登場させるに際しては、わざわざオック語で語らせるという念の入りようである。そのため、ダンテとトルバドゥールとの関係に対する興味が現在では次第に大きくなりつつある。また、恋愛詩の伝統はペトラルカをへて、時と地域、個性の壁を超越した一種の文学的コイナーを形成してゆくと、ダンテ以降の恋愛詩をも視野に含めるよう努め、ダンテの受容史という観点から、その最初の崇拜者ともいべきボッカッチョにも関心を寄せている。

自己評価

『神曲』とも対照させながら、『キタ・ノワ』に収録された韻文のスタイルの変化を跡づけることが現在の主要な課題であるが、文体を問題とする困難な研究は少しずつ前進を続けている。トスカナ地方の文学(とりわけダンテ)がアペニン山脈以北の地方、たとえばボローニャを中心としたエミリア・ロマーニャ地方や、パドヴァ、ヴェネツィア、トレヴィーゾなどを含むヴェネト地方でどのように受容されたかについても知見を深めるべく努めている、教育面では、現在、効果的な文学史教育を模索中であるが、必要な講義資料の整備もほぼ完了しており、かなりルーティーン化することに成功した。すでに中世オック語入門に関してはルーティーン化が完了したといつてよい状況だが、入門を終えた後の教育体制はまだ改善の余地がある。また、中世オック語文学については、現在論文を執筆中であり、2011年初頭には刊行されよう。

c 主要業績：

(1) 著書

共訳、マリオ・プラーツ、『ローマ百景 I』、ありな書房、2009.4

辞書・辞典・事典、学校法人上智学院新カトリック大事典編纂委員会、『新カトリック大事典』、研究社、2009.5、
「ダンテ」、「ペトラルカ」、「ボッカッチョ」3項目執筆

(2) 論文

「ジャコモ・ダ・レンティーニにおけるマクロテクスト」、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、IV、47-159頁、2008.5

「文学史のために——2つの覚書」、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、IV、161-244頁、2008.5

「Una tradizione: viso - riso - Paradiso」、《Lingua e Letteratura Italiana》(Facolta' di Lettere, Universita' di Tokyo)、IV、pp.1-27、2008.5

「3 fonti di Giacomo da Lentini: Andreas Capellanus, Jaufre Rudel e leggenda tristaniana」、《Lingua e Letteratura Italiana》(Facolta' di Lettere, Universita' di Tokyo)、IV、pp.29-46、2008.5

「ダンテにおけるウェルギリウス受容」、日本英文学会第79回大会 Proceedings、170-72頁、2008.9

「一九八〇年代以降におけるウフィツィ美術館自画像コレクションの拡張——取得作品に関する資料紹介」、『美術史論叢』(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室紀要)、第25号(2009年)、136-81頁、2009.4

「How Dante Stepped Forward in Writing the Divine Comedy: an Observation on the Inferno XXVI」、《The Development of the Anglo-Saxon Language and Linguistic Universals》(Senshu University: Center for Research on Language and Culture - Institute for the Development of Social Intelligence)、5、

2010、pp.15-28、2010.3

「2 note per l'uso dei segni diacritici」、《Lingua e Letteratura Italiana》(Facolta' di Lettere, Universita' di Tokyo)、V、2010、pp.167-79、2010.4

「La retorica dell'anima solitaria: 3 sonetti di Torquato Tasso」、《Lingua e Letteratura Italiana》(Facolta' di Lettere, Universita' di Tokyo)、V、2010、pp.181-193、2010.4

「ダンテは『神曲』をいかに書き進めたか——「地獄篇」第 26 歌に関する一考察」、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、V、2010 年、75-120 頁、2010.4

「イタリア文学におけるヴィーナスとその周辺人物たち」、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要)、V、2010 年、3-52 頁、2010.4

(3) 解説

『神曲』への道程、『Inferno Purgatorio Paradiso. Trilogy freely inspired to the Divine Comedy by Dante Alighieri (=『神曲——地獄篇／煉獄篇／天国篇』パンフレット)』、27-29 頁、2009.12

(4) 啓蒙

「Dolcissima mia vita (わがいとしい人よ)」、『合唱名曲シリーズ 38——平成 21 年度全日本合唱コンクール課題曲集』、38、87 頁、2009.3

「Mamma, il giovane principe (かあさん 王子さまが)」、「Egli mormoro': "Amor mio alza i tuoi occhi (いとしい人よ、さあ眼を上げて…)と、あの人がつぶやいた)」、および「Parlami, amor mio (教えてください、いとしい人よ)」、『イタリアのオペラと歌曲を知る 12 章』、275-279 頁、2009.4

(5) 史料

史料調査・収集、「帰国後のファルサーリ——その活動のひとつの記録」、『1880 年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討』平成 17-19 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))、研究成果報告書、46-49 頁、2008.3

史料調査・収集、「エンリーコ・ボルポーネー一行の横浜滞在記」、『1880 年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討』平成 17-19 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))、研究成果報告書、97-120 頁、2008.3

史料調査・収集、「ファルサーリ文庫目録」、『1880 年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討』平成 17-19 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))、研究成果報告書、121-27 頁、2008.3

その他、研究文献の翻訳・解題・訳注等、「チャールズ・S・シングルトン『キタ・ノワ試論』[第 2 章]」、『イタリア語イタリア文学』(東京大学人文社会系研究科南欧語南欧文学研究室紀要) IV、293-340 頁、2008.5

(6) 学会発表

「ジャコモ・ダ・レンティーニが“Piu Gente”と呼んだ婦人をめぐって」、イタリア学会第 56 回大会、神戸大学、瀧川記念会館、2008.10.19

「How Dante Stepped Forward in writing the Divine Comedy: an Observation on the Inferno XXVI」、
「ダンテ『神曲』の魅力」、専修大学神田校舎 1 号館 12 教室、2009.5.25

「La retorica dell'anima solitaria: 3 sonetti di Torquato Tasso」、Convegno internazionale “Letteratura e cibo”、Lucca (Centro culturale Agora, Piazza dei Servi)、2009.10.2

(7) 会議主催(チェア他)

「クラウディオ・ジュンタ氏(トレント大学准教授)の日本学術振興会フェローシップによる招聘」(東京大学、京都大学、イタリア文化会館などにおける 12 回の講演の企画、主催)、2009.4-6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

国立西洋美術館講堂特別講演、2008.4~

『地獄篇第 1 歌』ほか、『神曲』を“歌う”、東京イタリア文化会館、2009.5.28

20 英語英米文学

教授 **平石 貴樹** HIRAISHI, Takaki

1. 略歴

- 1971年6月 東京大学文学部英語英米文学科卒業
- 1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（英文学）
- 1979年4月 工学院大学共通課程専任講師
- 1981年4月 武蔵大学人文学部助教授
- 1983年4月 東京大学教養学部助教授
- 1986年4月 東京大学文学部助教授
- 1994年6月 東京大学文学部教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要

- (1) 20世紀前半のアメリカの主要な小説家の文学史的な位置と評価の研究をしてきた。
- (2) いわゆるイデオロギー問題などを念頭においた、アメリカ文学史の再構成にかかわる諸問題の研究をしてきた。

c 主要業績

(1) 著書

編著、田中久男監修、亀井俊介・平石貴樹編、『『アメリカ文学研究のニュー・フロンティア』』、南雲堂、2009.10

(2) 論文

「谷崎潤一郎『細雪』、『名作はこのように始まる II』、2008

「フォークナー『アブサロム、アブサロム!』、『名作はこのように始まる I』 千葉一幹・芳川泰久編、2008

(3) 書評

「巽孝之編『反知性の帝国——アメリカ・文学・精神史』、一般雑誌、『週刊読書人』、2008.7

「藤平育子『フォークナーのアメリカ幻想——「アブサロム、アブサロム!」の真実』、学術論文誌、『英語青年』、2009.3

教授 **高橋 和久** TAKAHASHI, Kazuhisa

1. 略歴

- 1973年3月 京都大学文学部英語英文学科卒業
- 1976年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（英文学）
- 1976年4月 岡山大学教養部助手
- 1977年4月 岡山大学教養部講師
- 1978年4月 愛媛大学法文学部講師
- 1981年4月 学習院大学文学部講師
- 1983年4月 東京大学教養学部助教授
- 1992年4月 東京大学文学部助教授
- 1994年12月 東京大学文学部教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要

いわゆるイギリス小説を主たる研究対象とし、そのなかでも、1) モダニズム文学とそれ以降の文学の特質の解明、2) モダニズム運動と連動した〈新批評〉以降に目覚ましい展開を見せた現代批評によって獲得されたように見える様々の知見を踏まえた小説技法とイデオロギーの分析、3) それと表裏一体の関係にある文学理論の有効性の検討、に関心を払うことによって、そこから必然的に派生する、4) 英文学の正典形成という古くて新しい、つまり厄介な問題に首を突っ込む羽目に陥っている、と自らの研究活動の概要を纏めてみることで自己評価の産物であるに違いないにも拘わらず、改めてそれをしなければならぬとすれば、自己を正しく評価できない自分を殊更に前景化して、その克服が今後の課題であるかのように記せば、自己評価はそれに尽きるように思われる一方で、「教育活動」をはじめとする諸々の活動については、どうやら自己評価に及ばないか自己評価に馴染まないらしく、「研究活動」についてのみ自己評価を下すという姿勢の暗示するところを付度して、もう少し具体性を持った表現にしなければならぬとすると、以下に掲げる「業績」は、むしろ「不行跡」に近いものではないかという不安を拭い去ることのできない2年間だったので、今後はそうした不安からの脱却を目指して頑張りたい、と殊勝な身振りで言うしかないのだけれども、同じ身振りを毎年のように繰り返すはずであるという確信に満ちた予感がわき上がってくる事実だけは否定できないのはどうしてかまで記す必要は流石にないだろう。

c 研究業績

(1) 著書

訳書、「アラスター・グレイ『哀れなるものたち』」、早川書房、2008.1

共編訳、橋本楨矩、「キプリング『キプリング・インド傑作選』」、鳳書房、2008.3

訳書、ジョージ・オーウェル（著）、「『一九八四年』」、早川書房、2009.7

(2) 論文

「恋する老人は学び続けるか」、『英語青年』、153巻12号、745-7頁、2008.2

「何かを棚上げして読むオースティン」、『ジェイン・オースティン研究』、第2号、1-21頁、2008.6

(3) 総説・総合報告

「イギリス小説と批評の研究」、その他、『英語年鑑2010』、2010.1

(4) 研究報告書

「平成17～19年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書」、43-60頁、2008.5

(5) 会議主催 (チェア他)

「第1回PESETO人文学国際学術会議」、「東アジアにおける英文学研究」(キム・ソンゴン教授) についてのコメント、2008.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

武蔵大学非常勤講師、2008.4～2009.3

中京大学招待講演、2008.3

Sungkyunkwan University BK21 招待講演、2008.10

慶應義塾大学非常勤講師、2009.4～2010.3

教授 **今西 典子** IMANISHI, Noriko

1. 略歴

1970年 4月 お茶の水女子大学文教育学部英文科入学

1974年 3月 お茶の水女子大学文教育学部英文科卒業

1974年 4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程入学

1976年 3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了

- 1976年 4月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程進学
 1977年 3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻博士課程単位取得のうえ中途退学
 1977年 4月 富山大学文理学部（改組後 人文学部）専任講師
 1981年 4月 富山大学文理学部（改組後 人文学部）助教授
 1982年 10月 お茶の水女子大学文教育学部 専任講師
 1985年 11月 お茶の水女子大学文教育学部 助教授
 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授
 1996年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授、現在に至る。

2. 主な研究活動

- a 専門分野 英語学／言語学
 b 研究課題 「普遍文法と言語獲得理論研究」

(概要)

これまで生成文法理論に基づき、主として二つの問題に焦点を当て研究を行ってきた。一つは、照応表現の形式とそれが担う意味との対応の仕方を解明することにより、構造と意味の結びつきに関する一般原理を抽出するという文法理論研究における最も基本的な問題を探求することである。もう一つは、子供の言語習得過程を実証的に研究することにより生成文法理論の基盤をなしている普遍文法に関する仮説の妥当性を検討し、言語間変異と言語の習得可能性をより妥当に説明しうる普遍文法の定式化を模索することである。この二つの問題を深く掘り下げることは、言語機能の本質がどの程度他の認知体系によって動機付けられて規定されているのかという問題意識に連なる。現在、生成文法理論研究では、ミニマリスト・プログラムを指針とする普遍文法研究が活発に行なわれているが、このような問題意識は、言語機能とは他の認知体系とのインターフェイスにおける判読可能性条件を最適に満たすものであるというミニマリスト・プログラムの基本仮説を実質的に深化させる研究への志向となる。言語習得機構および言語処理機構の特性の解明やそれらの機構と言語の外側の認知体系との相互作用の解明に係わる実証的研究に着手することにより、言語特性を理論的・実証的に研究するという言語学の領域から人間の精神/脳内における言語を中核とする認知体系の特性を理論的・実証的に研究するという認知科学の領域に研究の射程を広げつつある。

c 研究業績

(1) 著書

共著、大津由紀雄他、『ことばの宇宙への旅立ち：10代からの言語学』、2008.1

共著、大津由紀雄他、『はじめて学ぶ言語学：ことばの世界をさぐる17章』、2009.9

共編著、Yukio Otsu and Noriko Imanishi eds. *Poetica* 70 Special Issue: Current Issues in Generative Grammar, 2008.12

(2) 論文

"Introduction"、*Poetica*、70、pp.i-iii、2008.12

「リレー連載 言語研究の動向 16 発音されない構造に潜む不思議」、月刊『言語』、38巻7号、6-7頁、2009.7

「音形を欠く主要部名詞をもつ名詞句表現について」、『語研ジャーナル』、8号、79-86頁、2009.10

「ことばとこころ：形と意味の結びつきの不思議(特集ことばの科学)」、『科学フォーラム』、21-27頁、2009.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

お茶の水女子大学文教育学部非常勤講師、2008～2009

慶応義塾大学非常勤講師、2008～2009

東京言語研究所 理論言語学講座非常勤講師、2008～2009

専修大学特別講演、2008.11

(2) 学外組織委員（学協会、省庁を除く）委員・役員

市河賞選考委員、2008～2009

とやま賞選考委員、2008～2009

お茶の水女子大学、博士論文外部審査委員、2009.6～2009.9

1. 略歴

- 1976年3月 東京教育大学文学部文学科英語英文学専攻 卒業 (文学士)
- 1979年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程 修了 (英文学)
- 1979年4月 東京大学文学部英文科 助手
- 1981年4月 中央大学法学部 専任講師 (英語)
- 1983年4月 学習院大学文学部英米文学科 専任講師
- 1985年4月 学習院大学文学部英米文学科 助教授
- 1994年4月 学習院大学文学部英米文学科 教授
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 助教授 (英語学英米文学)
- 1999年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要と自己評価

(1) シェイクスピアを中心とする英国初期近代演劇の研究。とくにジェンダー理論 (クイア理論を含む) とポストコロニアル理論の適用を模索し実践する。(2) 「文芸映画」とりわけ現在も製作されつつあるシェイクスピア映画を題材にして、アダプテーションの問題、文化的歴史的パースペクティブからみた「文学テクスト」の変容、解体、再生などのプロセスを考察する。最終的には文学と映画という二つのメディアの交錯と交流における可能性の条件を探るような文化研究をめざす。(3) 英語圏の文学理論の研究。教育の場で、理論あるいは分析法をいかに教えるかという問題も視野に入れる。

(1)に関しては、シェイクスピア演劇をジェンダー/ポストコロニアル理論の観点からの考察において、ポストコロニアル関連の研究は発表までの準備を終えているので、ジェンダー関係の研究を充実させたい。その際、同時代の他の劇作家との比較を通して、とくに16世紀から17世紀にかけてのDomesticityの表象について理解を深めたいと考えている。(2)については、科学研究費の研究課題とも連動させて、2005年から2006年にかけての研究成果公表のための準備を行なっている。(3)批評理論の紹介のための文献を、若い研究者たちと連携して公刊するための準備に2004年と2005年前半は費やされた。なおエドワード・W・サイードの批評的業績を翻訳紹介し、関連書の翻訳、論文の執筆を2008年度から2009年度にかけて行なう。

c 主要業績 (2008-2009年度)

(1) 翻訳

- エドワード・W・サイード『文化と抵抗』(共訳)、ちくま学芸文庫、筑摩書房、2008.3
- エドワード・W・サイード『故国喪失についての省察2』(共訳)、みすず書房、2008.6
- テリー・イーグルトン『反逆の群像——批評とは何か』(共訳)、青土社、2008.11
- テリー・イーグルトン『学者と反逆者——19世紀アイルランド』(共訳)、松柏社、2008.11
- フレドリック・ジェイムソン『政治的無意識』(共訳、改訳版)、平凡社ライブラリー、平凡社、2010.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

日本英文学会会長、2007.4~2009.3

(2) 他機関での講義等

- 「オセロからキャリバンへ—クイア・シェイクスピアをめぐる」(九州シェイクスピア学会講演、九州大学、2008.10.23)
- 「ロミオからハムレットへ——放蕩者の帰還」(日本英文学会九州支部特別講演)福岡大学、2008.10.25)
- 「パラダイム・シフト」(比較分学会中部支部シンポジウム、パネラー、名古屋大学、2008.11.25)
- 「シェイクスピアと文学理論——『マクベス』を中心に」(大東文化大学英米文学科講演)(2010.3.10)

1. 略歴

- 1987年3月 東京大学文学部英語英米文学専修課程卒業
1989年3月 東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専攻修士課程修了
1993年9月 マサチューセッツ工科大学大学院言語・哲学科博士課程修了
博士号 (Ph.D. in Linguistics) 取得
博士論文 AGR-Based Case Theory and Its Interaction with the A-bar System
1994年4月 神田外語大学外国語学部英米語学科専任講師
1997年4月 同 大学院言語科学研究科助教授
1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要

DPの内部構造、古代日本語の話題・焦点構造、および否定一致

c 研究業績

(1) 著書

共著、Miyagawa, Shigeru & Saito, Mamoru (eds.), Watanabe, Akira 他、「The Oxford Handbook of Japanese Linguistics」、Oxford University Press、2008

共著、Tetsuya Sano 他、「An Enterprise in the Cognitive: A festschrift for Yukio Otsu」、2008.3

単著、「生成文法」、東京大学出版会、2009.1

共著、Crisma, Paola & Longobardi, Giuseppe (eds.), Watanabe, Akira 他、「Historical Syntax and Linguistic Theory」、Oxford University Press、2009

(2) 論文

「生物言語学」、月刊言語、37巻5号、2008.5

「Vague Quantity, Numerals, and Natural Numbers」、Syntax、13、2010

「Notes on Nominal Ellipsis and the Nature of No and Classifiers in Japanese」、Journal of East Asian Linguistics、2010

(3) 予稿・会議録

招待講演、「Measure phrases in PP」、Keio University、2009.3、「The Proceedings of the Tenth Tokyo Conference on Psycholinguistics」、pp.1-25、2009.12

(4) 学会発表

「Measure Phrases Across Categories」、福岡言語学サークル、九州大学、2008.7.19

「Dissolving Chains」、1st International Workshop on Chains in Minimalism、横浜国立大学、2008.8.8

「Measure Phrases in PP」、Tokyo Conference on Psycholinguistics、慶応大学、2009.3.13

「A Morphological Solution to Agreement Puzzles in Slavic」、7th Mediterranean Morphology Meeting、Cyprus、2009.9

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

Stony Brook University 特別講演、2009.3

(2) 学外組織委員 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「the Language Faculty and Beyond (John Benjamins)」、advisory board member、2008～

「University of Tromsø」、博士論文外部審査委員、2010.1～2010.3

「Journal of East Asian Linguistics (Springer)」、editorial board member、2008～2009

「Lingua (Elsevier)」、editorial board member、2008～2009

「Natural Language and Linguistic Theory (Springer)」、editorial board member、2008～2009

1. 略歴

1985年3月	静岡県静岡聖光学院高等学校卒業
1985年4月	東京大学教養学部文科三類入学
1989年3月	同 文学部英語英米文学科専修課程卒業
1989年4月	東京大学大学院人文科学研究科(英語英米文学専攻)入学
1992年3月	同 修士課程修了・修士(文学)
1993年10月	連合王国ケンブリッジ大学大学院博士課程入学(英米文学専攻)
1997年5月	同博士課程修了 博士号取得(文学) タイトル: 'Wallace Stevens and the Aesthetic of Boredom'
1992年4月	東京大学文学部英語英米文学科助手
1993年4月	帝京大学文学部助手
1997年4月	帝京大学文学部専任講師
2001年4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

英語圏の詩、とくに 20 世紀におけるイギリスやアメリカの詩の研究を中心とする。個々の詩作品の緻密な解釈と、作品を作品たらしめる力学の解明に向けた努力を研究の中心としつつ、同時に、「なぜ詩でなければならぬか?」という素朴な疑問との取り組みをも新たな課題とする。詩を自足的なジャンルとみなすのではなく、「詩的であること」を絵画・舞台芸術、スポーツ、インターネット空間などとの関係でとらえることもテーマとする。

c 研究業績

(1) 著書

共著、「ウルフの不まじめさ」(『転回するモダン』遠藤不比人ほか編、27-50所収)、研究社、2008.7

訳書、「フランク・オコナー短編集」、岩波書店、2008.9

単著、「スローモーション考——残像に秘められた文化」、南雲堂、2008.11

(2) 論文

「西脇順三郎の英文学度」、英語青年、2008.1

「出だし①——レイモンド・カーヴァー「大聖堂」(英語文章読本)」、英語青年、2008年4月号、37-41頁、2008.4

「出だし②——フランク・オコナー「ある独身者のお話」(英語文章読本)」、英語青年、2008年5月号、97-101頁、2008.5

「小さく言う——フィリップ・ラーキン『冬の少女』(英語文章読本)」、英語青年、2008年6月号、168-72頁、2008.6

「強さ——ジョージ・エリオット『ダニエル・デロンダ』」、英語青年、2008年7月号、221-225頁、2008.7

「スピード——ドリス・レスリング『黄金のノート』」、英語青年、2008年8月号、278-282頁、2008.8

「カッコ——エリザベス・ギャスケル『クランフォード』」、英語青年、2008年9月号、333-337頁、2008.9

「Reticence against the Plot: the Meaning of "IS" in Wallace Stevens's "Thirteen Ways of Looking at a Blackbird"」、POETICA、69(Spring 2008)、pp.93-112、2008.10

「イタリック体——ヘンリー・ジェイムズ『黄金の杯』」、英語青年、2008年10月、396-400頁、2008.10

「カズオ・イシグロの長電話——『私を離さないで』で気になること」、水声通信、9.10月合併号、70-75頁、2008.11

「丁寧——J・D・サリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』」、英語青年、2008年11月号、449-453頁、2008.11

「眠さ——ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』」、英語青年、2008年12月号、524-528頁、2008.12

「まじめさ——ウィラ・キャザー『私のアントニア』」、英語青年、2009年1月号、577-581頁、2009.1

「箇条書き——バーナード・マラマッド「魔法の樽」」、英語青年、2009年2月号、634-638頁、2009.2

「美しさ——メアリー・シェリー『フランケンシュタイン』」、英語青年、2009年3月号、2009.3

「形容詞 — ジョン・アップダイク「殺す」、ウェブ英語青年、2009年 創刊準備号、13-31 頁、2009.3
「no sooner ...than 構文 — ヘンリー・フィールディング『トム・ジョーンズ』(上)」、「ウェブ英語青年」、2009年4月号、22-33 頁、2009.4

「no sooner ...than 構文——ヘンリー・フィールディング『トム・ジョーンズ』(下)」、ウェブ英語青年、2009年5月号、2-7 頁、2009.5

「軸足——ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム!』(上)」、ウェブ英語青年、2009年6月号、5-13 頁、2009.6

「大江健三郎が読めない人のために——『臆たしアナベル・リイ 総毛立ちつ身まかりつ』をめぐって」、國文學 解釈と教材の研究、6月臨時増刊号、146-53 頁、2009.6

「軸足——ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム!』(下)」、ウェブ英語青年、2009年7月号、5-20 頁、2009.7

「アイルランド的——ジェラルド・ドノバン「朝、泳ぐ者たち」(上)」、ウェブ英語青年、2009年9月号、6-14 頁、2009.9

「アイルランド的——ジェラルド・ドノバン『朝、泳ぐ者たち』(下)」、ウェブ英語青年、2009年10月号、5-13 頁、2009.10

「主人公——F・スコット・フィッツジェラルド『ザ・グレイト・ギャツビイ』(上)」、ウェブ英語青年、2009年11月号、5-13 頁、2009.11

「主人公——F・スコット・フィッツジェラルド『ザ・グレイト・ギャツビイ』(下)」、ウェブ英語青年、2009年12月号、5-16 頁、2009.12

(3) 書評

「小山敏夫『ウィリアム・フォークナーの詩の世界』」、学術論文誌、『フォークナー』10号(2008年)、171-174 頁、2008.4

「青山七恵『かけら』」、新潮社、一般雑誌、『文學界』、2009年12月号、286-287 頁、2009

「古井由吉『人生の色気』」、新潮社、その他、『産経新聞』、2009年12月20日、2009

「古井由吉『漱石の漢詩を読む』」、岩波書店、2008.12、一般雑誌、『文學界』、2009年4月号、256-257 頁、2009.4

「宮本輝『骸骨ビルの庭(上・下)』」、講談社、一般雑誌、『文學界』、2009年9月号、270-271 頁、2009.9

「西村賢太『瘡癩旅行』」、講談社、一般雑誌、『群像』、2009年10月号、320-321 頁、2009.10

(4) 解説

イギリス文学の現況と翻訳・研究 2007、『文藝年鑑 2008』、2008年度、78-81 頁、2008.6

(5) 啓蒙

「ブロードウェイ通信——「ヒッチコックの『39夜』」」、一般雑誌、『悲劇喜劇』、2009年3月号、64-67 頁、2009.3

(6) 学会発表

「『息』の血統——高村光太郎の駝鳥」、日本英文学会全国大会シンポジウム「ホイットマンの親戚」、広島大学、2008.5.25

「On Slow Motion -- An Approach to the Art of Painting, Cartoon and Poetry」、The Today-Yale Initiative Lecture Series、Yale University、2008.11.7

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

慶應義塾大学非常勤講師、2008.4~2008.9

広島大学非常勤講師、2008.7~2008.8

東北大学非常勤講師、2008.7

2 1 ドイツ語ドイツ文学

教授 松浦 純 MATSUURA, Jun

1. 略歴

- 1968. 3 東京都立新宿高校卒業
- 1968. 4 東京大学文科三類入学
- 1971.10 サンケイスカラシップによりドイツ連邦共和国テュービンゲン大学留学 (1973. 4 帰国)
- 1974. 3 東京大学教養学部教養学科「ドイツの文化と社会」分科卒業
- 1976. 3 東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専攻修士課程修了
- 1976. 4 東京大学文学部助手 (ドイツ語ドイツ文学)
- 1977. 9 ドイツ連邦共和国テュービンゲン大学後期中世・宗教改革研究所にて在外研究 (1980.3 帰国)
- 1980. 4 東京都立大学人文学部講師 (ドイツ語ドイツ文学)
- 1983. 4 同 助教授
- 1985. 4 東京大学文学部助教授 (ドイツ語ドイツ文学)
- 1985. 5 ドイツ語学文学振興会賞受賞
- 1985. 7-9 ドイツ学術交流会 (DAAD) の招待によりドイツ連邦共和国へ研究出張
- 1986. 7-9 東京大学学術基金によりドイツ連邦共和国へ研究出張
- 1989.10 ドイツ連邦共和国アレクサンダー・フォン・フンボルト研究財団の招待によりテュービンゲン大学ドイツ文学科および後期中世・宗教改革研究所にて在外研究 (1991. 9 帰国)
- 1994.12 東京大学文学部教授 (ドイツ語ドイツ文学)
- 1995. 4 学部改編により東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、現在に至る
- 1995. 7 ドイツ連邦共和国大統領より Philipp Franz von Siebold-Preis 受賞 (同賞により 1995、1997、1998、1999 の各年度夏期休暇時、ドイツ連邦共和国ほかへ研究出張)
- 2001. 4 国際交流基金助成により、ドイツ連邦共和国ミュンヘン大学にて、同大ラインハルト・シュヴァルツ名誉教授と共同研究 (2002. 3 帰国)
- 2005.7-9 ドイツ連邦共和国アレクサンダー・フォン・フンボルト研究財団の受賞者再招待により、テュービンゲン大学後期中世・宗教改革研究所ほかへ研究出張

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

専門分野としては、ルター研究とドイツ中世文学・中世思想研究を重点としている。

前者については、西欧思想史の中で、伝統的キリスト教思想を革新するとともに近代への発展の関与が問題にされ、また特にドイツ思想史上まれな独自性と影響力を兼ね備えた思想家、ルターの思想を、完成した教義としてでなく、中世思想の伝統やアクチュアルな状況との関係の中で運動としてとらえ、日本人にとってのあらたな理解の地平を開くことを課題としている。その関心から、着任直前の 1983 年夏期、国際ルター学会参加の機会にエルフルト、東ベルリン (当時)、西ベルリン (当時) での資料調査によって、ルターの思想発展の最初期にあたるエルフルト時代の修道院蔵書残部の再構成を行い、その中に新たな自筆資料を発見することができた事を端緒として、以来エルフルト時代の資料探索・校訂・注解作業を続けていたが、2009 年 11 月、ようやくその成果をルター全集 (「ワイマール版全集」) の続編である *Archiv zur Weimarer Ausgabe der Werke Martin Luthers* の第 9 巻として刊行することができた。ルター研究の基礎を築き直す仕事であり、この間にドイツやイギリスの専門誌で高い評価を受けている。2000 年には、エルフルト時代に続くヴィッテンベルク時代初期の講義草稿の新訂版も刊行されており、それと併せて、ルターの最初期についての資料がこれで出揃った状況である。今後は、新しい基礎の上立って、その思想発展をあらためて詳しく分析することを課題とする。

中世文学研究については、着任以来この分野での大学院演習を続けているのに加えて 1997 年度から講義で 9 世紀から 13 世紀初頭にかけてのドイツ中世叙事文学を講じており、また博士論文を初めとする研究指導に当たっている。

c 主要業績 (2008—2009年度)

(1) 著書 (手稿テキスト校訂・注解)

Jun Matsuura (Hg.): 「Martin Luther: Erfurter Annotationen 1509-1510/11. Herausg. von Jun Matsuura」(Archiv zur Weimarer Ausgabe der Werke Martin Luthers 9), Boehlau Verlag Koeln Weimar Wien, 2009.11, CCLX+727pp.

(2) 学会発表

「Die editorische Leistung der Weimarer Lutherausgabe - aus der Erfahrung der Neuedition der fruhen Randbemerkungen」 Luther in Tuebingen. Vollendung und Zukunft eines Jahrhundertprojekts. Abschlussveranstaltung der Forschungsstelle „Luther-Register“ der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, University of Tuebingen, Germany, 2009.11.11

(3) 海外講演

「Buecherschicksale. Geschichte der Erfurter Augustinerbibliothek seit der Reformation」 Augustinerkloster Erfurt, Germany, 2009.11.19

3. 主な社会活動 (2008—2009年度)

(1) 学外組織委員 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「学位授与大学評価機構」、大学評価委員、2008

「ドイツ学術交流会 (DAAD)」、奨学生選考委員、2008.

「日本学術会議」、連携会員、2008～

教授 **重藤 実** SHIGETO, Minoru

1. 略歴

1970年4月 東京大学教養学部文科3類入学

1974年3月 東京大学文学部第3類 (言語学専修課程) 卒業 (文学士)

1974年4月 同 大学院人文科学研究科独語独文学専門課程修士課程進学

(1975年7月～1977年9月 ドイツ学術交流会(DAAD)奨学金によりドイツ連邦共和国ボン大学、シュトゥットガルト大学に留学)

1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科独語独文学専門課程修士課程修了 (文学修士)

1978年4月 同 大学院人文科学研究科独語独文学専門課程博士課程進学

1979年4月 同 教養学部助手

1980年4月 一橋大学経済学部講師

1984年4月 東京大学教養学部助教授

(1984年4月～85年3月 一橋大学経済学部併任)

(1991年10月～93年3月 アレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究奨学金によりドイツ連邦共和国テュービンゲン大学に研究滞在)

1996年4月 東京大学大学院総合文化研究科助教授

(1996年4月～97年3月 東京大学大学院人文社会系研究科併任)

1997年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2004年10月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 ドイツ語学

b 研究課題と自己評価

現代ドイツ語の記述、および現代ドイツ語を生み出したドイツ語史の記述を研究の目標と考えている。背景となる言語理論や言語変化についての理論の考察も必要となる。

研究では、最近是一般言語学の言語理論に関することとドイツ語史に関することに重点を置いている。2009年度より3年間の予定で科学研究費補助金による研究（基盤研究（C））「ドイツ語史における開始相表現の変化」を始めることができた。

授業は現代ドイツ語文法理論と中高ドイツ語を中心としている。

c 主要業績

(1) 論文

「Origoverschiebung bei 'kommen' und 'gehen' im heutigen Deutsch und im Mittelhochdeutschen」
In: "Grammatik und sprachliches Handeln" (hrsg. von der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik)、
pp.90-96、2010.3

(2) 学会発表

「Origoverschiebung bei 'kommen' im Mittelhochdeutschen」
2008.9.7. 日本独文学会第36回語学ゼミナール（IPC生産性国際交流センター（葉山））

(3) その他

「ドイツ語学ゼミナールの歴史」
In: "Neue Beitrage zur Germanistik" (Herausgegeben von der Japanischen Gesellschaft fuer Germanistik) Band 8 / Heft 2 2009 pp.170-171

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

学習院大学文学部非常勤講師、明治大学文学部非常勤講師

(2) 学会

ドイツ文法理論研究会機関誌「エネルゲイア」編集長

(3) 学外組織委員（学協会、省庁を除く）委員・役員

法務省司法試験（旧司法試験）考査委員

大学評価・学位授与機構 学位審査会専門委員

准教授 **宮田 眞治** MIYATA, Shinji

1. 略歴

1987年3月 京都大学文学部卒業（文学士）
1989年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）修了（文学修士）
1990年3月 京都大学大学院文学研究科博士後期課程（ドイツ語学・ドイツ文学専攻）退学
1990年4月 神戸大学教養部助手
1991年10月 神戸大学教養部講師
1992年10月 神戸大学文学部講師
2000年10月 神戸大学文学部助教授
2000年4月 文部省在外研究員としてドイツベルリン自由大学に留学（2001年2月まで）
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

近代ドイツ語圏文学

b 研究課題

18世紀の文学・思想が研究の中心にある。もともと初期ロマン主義研究から出発し、ノヴァーリスを中心に仕事を進めてきた。とくに超越論哲学・自然科学との関係において初期ロマン主義が展開した独自の

表現技法と、その背景にある言語・芸術観が興味の中心にあった。また、その問題意識を継承する 20 世紀の文学者・思想家の系譜も研究の対象となった。現在は、啓蒙期の文学・思想を、ロマン主義の前史という観点に限定されることなく研究している。また、18 世紀以後、ドイツ語圏にあつて、自然科学者であり、あるいは自然科学研究から出発しつつ、文学者であった人々ハーラー、リヒテンベルク、ノヴァーリス、アルニムから現代にいたるまで—の営みを〈実験者の文学〉という観点から跡付けるという作業を進めている。

c 主要業績

(1) 論文

「実験の〈文学〉——リヒテンベルクの場合——」、文化交流研究、2008.3

「二つの〈回帰〉——『芸術の哲学』における小説論をめぐって」、シェリング年報、第 16 号、80-84 頁、2008.10

(2) 学会発表

「ヤコービの小説論」、中央大学ドイツ研究会、2009.3.21

(3) 会議主催 (チェア他)

「ドイツ文化ゼミナール」、実行委員、2008.3.23～2008.3.29

「ドイツ文化ゼミナール」、実行委員、2009.3.22～2009.3.28

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本独文学会」学会誌編集委員、2009.4～

「日本シェリング協会」理事・「シェリング年報」編集委員長、2008.10～

2 2 スラヴ語スラヴ文学

教授 **長谷見 一雄** HASEMI, Kazuo

1. 略歴

1973 年 3 月	東京大学文学部第 3 類ロシア語ロシア文学専修課程卒業 (文学士)
1976 年 3 月	同 大学院人文科学研究科露語露文学専門課程修士課程修了
1977 年 5 月	ワルシャワ大学ポーランド 文学研究所研究生 (～1979 年 5 月)
1979 年 9 月	東京大学大学院人文科学研究科露語露文学専門課程博士課程 中途退学
1979 年 10 月	東京大学文学部助手 (ロシア語ロシア文学, 西洋近代語近代文学)
1981 年 4 月	山形大学教養部専任講師 (露語)
1982 年 8 月	山形大学教養部助教授 (露語)
1993 年 4 月	東京大学文学部助教授 (ロシア語ロシア文学)
1994 年 11 月	同 教授 (スラヴ語スラヴ文学)
1995 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授 (スラヴ語スラヴ文学)

2. 主な研究活動

a 専門分野と b 研究課題

(1) 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのロシアおよびポーランドの文学を、その時代の文脈に即してとらえ直し、最終的には象徴主義小説 (特に幻想文学) の詩学の構築を目指す。その基礎作業として、まず先行する文学研究を調査研究するのはもちろんのこと、同時代人の言語意識を理解するために、当時のロシア語・ポーランド語に関する歴史文法および歴史文体論関係の文献の調査研究も続けている。また当時刊行されて

いた数多い文芸雑誌を重視し、資料収集に努め、主にそこに掲載された単行本収録以前の初出作品、評論、時評、書評、挿絵、広告、さらには紙面のレイアウトなどのヴィジュアルな側面等をも検討し直す一方で、当時の読者文化、書物文化の諸相に関する文芸社会学的研究にも留意する。

(2) また、当時の文学に大きな影響を与えた神話学的・民俗学的・宗教学的関心の実態にも目を向け、背景の理解に努める。

(3) さらに、近代ロシア・ポーランドの文学作品に現れた語彙・語法の歴史的系統性と変化に注目し、19世紀のロシア語・ポーランド語に関する辞書・研究書などの基本文献の調査収集を行う。

(4) その上で、19世紀ロシア語・ポーランド語の語彙・語法・比喩表現に関する基本的なデータベースを作成する。

(5) 以上とは別に、紹介の遅れている近現代ポーランド文学の優れた作品の翻訳・解説作業を進める。

(6) その他、ポーランド語辞典編纂の準備作業として、ポーランドにおいて刊行されている現行辞書の調査収集を行う。

自己評価

ロシアおよびポーランドの文芸雑誌関係の研究活動は主に授業(学部・大学院講義)で紹介した。スラヴ神話学・民俗学・宗教学関係の研究活動としては、数年前に行った若手研究者、院生との「スラヴ神話研究会」での作業をもとに、基礎的研究文献の翻訳を完成させたが、まだ発表に至っていない。19世紀ロシア・ポーランド文学の作品に現れた語彙・語法・比喩表現の調査については、現在、ロシアについては約1200件、ポーランドについては約400件のデータが調査済みである。ポーランド文学については、2006年のことではあるが共訳による文学史の翻訳を刊行した。その他、現行の特色あるポーランド語辞書の収集調査はかなり進捗した。

c 主要業績(2008-2009年度)

(1) 著書

共訳、チェスワフ・ミウォシュ、「ポーランド文学史」、2006.5

共訳、飯島周・小原雅俊編、「ポケットの中の東欧文学」、2006.11

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本ロシア文学会」、役員・委員、編集委員長、2008.1~2008.12

「西スラヴ学研究会」、役員・委員、企画編集委員、2008.1~

「日本ロシア文学会」、役員・委員、編集委員長、2009.1~2009.9

「日本ロシア文学会」、役員・委員、理事・編集委員、2009.10~

教授 **金澤 美知子** KANAZAWA, Michiko

1. 略歴

1974年3月 東京大学教養学部教養学科卒業

1977年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(ロシア語ロシア文学)

1981年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得満期退学

1981年4月 東京大学文学部露語露文学研究室助手(~1989年3月)

1989年4月 放送大学教養学部助教授(~1994年3月)

1994年4月 東京大学文学部助教授(スラヴ語スラヴ文学)

1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授(スラヴ語スラヴ文学)

1996年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授(スラヴ語スラヴ文学) 現在に至る

2000年10月-2001年9月 ワルシャワ大学東洋研究所客員講師

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要と自己評価

現在、主として次のような研究活動を行っている。

(1) ドストエフスキー研究。作品の分析、他の作家との比較研究、現代における受容の研究など。

第9回(オーストリア)、第10回国際ドストエフスキー学会(アメリカ合衆国)での研究発表を踏まえ、2000年8月、千葉大学に於いて開催された国際ドストエフスキー研究会ではドストエフスキーと18世紀ロシア文学の関係について発表した。その成果は2002年にロシアで出版された論文集に収録された。その他国内のドストエフスキー研究会に於いても発表し、研究者と学問上の交流を図っている。

(2) 19世紀初頭のロマン派に関する比較文学的な視点からの考察。

これは(1)と共に私の研究の出発点であり、ライフワークでもある。研究の中心はロシア・ロマン派だが、それと関係の深い18世紀末から19世紀初めのヨーロッパの他地域の文学にも注目し、影響関係やテーマの変遷などを考察している。またロマン主義文学はドストエフスキーの初期の文学活動とも密接に関わっており、前述のドストエフスキー学会、研究会に於いても度々取り上げた。

(3) 18世紀ロシア文学・文化の研究。

先行研究の少ない領域であり、文献の面での困難もあるが、多方面から助力を得て着実に成果はあがりつつある。この数年、主に次のような形で作業を進めてきた。ひとつは18世紀ロシア小説の翻訳紹介であり、『可愛い料理女』(彩流社、1999年度木村彰一賞受賞)出版に続き、H. II. ミローノフ『哀れなマリヤのお話』、A. E. イズマイロフ『哀れなマーシャ』を訳出した。第二に、研究会等の場で学生との共同作業により18世紀文化について様々な角度から調査、考察し、その成果を研究誌「ロシア18世紀論集」2号(2002年、創刊号は1999年)および3号(2006年)に発表した。この論集は18世紀ロシア研究の広報的な役割を果たすことができたと考える。第三は、文部省科研助成金による研究「18世紀ロシアの文化的コンテクストに見る小説文学の成立と発展」(平成12年度～14年度)の実施である。これは小説作品を文化的コンテクストの中で読み解くと同時に、小説文学というジャンルの発展を通して18世紀ロシア文化の特質にアプローチしようとする新しい試みであった。14年度は纏めの年であり、研究成果報告書を発行した。さらに第四の作業として、2003年7月に日本18世紀ロシア研究会を設立し、その運営に当たっている。これは、日本における18世紀ロシア研究の発展のために、言語、文学、歴史など異なった領域を専門とする18世紀ロシア研究者が情報交換と研究協力を行うことを目的としたものである。なお、2007年7月には国際18世紀学会第12回大会で発表し、学術上の交流を行った。

(4) 近代ロシア文学とその背景としての文化史。

上記補助金による18世紀ロシア研究はほぼ当初の目的を達成した。その一方で、文学を作家だけでなく、読者＝パトロンとの関わりの中で考察することが文化的コンテクストを理解する上での重要な課題として浮かび上がり、この点を明らかにするために新たな作業が必要になった。このような事情のもとに、上記の課題を進展させる形で、2003-2005年度は研究課題「近代ロシア文学の誕生とパトロンたちの文化史」の研究に従事した。本研究は18世紀半ばから19世紀初めに於けるロシア近代文学成立の事情を、文学テキスト、作家、読者＝パトロンの関係の中に探り、またそれら三者の関係のダイナミックな力学を通してロシア近代文化の特質を明らかにしようとするものである。さらに2007年度には科研助成金「『手紙』の文化に見る近代ロシア文学の成立過程」(平成18年度～平成20年度)を受けて、新たに「手紙」の文化に見る近代ロシア文学の成立過程の研究に着手した。

(5) 19世紀末のロシア小説の研究。

ロシア19世紀の伝統的文学とモダニズムの接点としての作家アンドレーエフに注目し、その創作技法を考察し、論文を発表した。アンドレーエフとの関係で、ガルシン、チェーホフ等の調査も行っている。

なお、ロシアに限らず、ヨーロッパの文化全般を視野に入れて17～19世紀の文学を論じる機会が増えており、上に列記した諸作業も常に広い研究視野の中で行ってきた。研究の成果は、授業にも還元されている。

c 主要業績

(1) 論文

「フォードル・エミンとその文学」、日本18世紀ロシア研究会年報第6号、2010

(2) 書評

「伊東一郎、宮澤淳一『文化の透視法』」、学術論文誌、『ロシア語ロシア文学研究』、2009

(3) 監修

共同編集、「SLAVISTIKA」、2008

共同編集、「日本18世紀ロシア研究会ニューズレター No.5」、日本18世紀ロシア研究会、2008

共同編集、「SLAVISTIKA」、スラヴ研究室、2009

(4) 啓蒙

「観察者という主役」、一般雑誌、『ユリイカ』、2008

(5) 学会発表

「フョードル・エミンとその文学」、日本18世紀ロシア研究会、2008.9.21

(6) 会議主催 (チェア他)

「第6回日本18世紀ロシア研究会」、2008.9

「第7回日本18世紀ロシア研究会」、2009.9

(7) 学会発表

「18th-Century Russia in Japanese Scholarship」、国際18世紀学会 XIIe Congres international des Lumieres、Montpellier、2007.7.10

「フョードル・エミンとその文学」、日本18世紀ロシア研究会、2008.9.21

(8) 研究報告書

「科研研究成果報告書「近代ロシア文学の誕生とパトロンたちの文化史」、2007.6

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本18世紀学会」幹事 2004.6～2008.6

「日本18世紀ロシア研究会」役員、運営委員 2003.7～

(2) 学外組織委員 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「日本学術振興会」、2008～

「学位授与機構」、2008～

教授 **沼野 充義** NUMANO, Mitsuyoshi

1. 略歴

1977年3月	東京大学教養学部教養学科学士
1979年3月	東京大学人文科学研究科 (露語露文学専攻修士課程) 修士
1981年9月～1985年7月	ハーヴァード大学 Harvard University (フルブライト全額給費奨学生として留学 (スラヴ語スラヴ文学専攻博士課程))
1984年6月	ハーヴァード大学修士
1985年3月	東京大学人文科学研究科 (露語露文学専攻博士課程) 単位取得満期退学
1984年2月～1985年6月	ハーヴァード大学、ティーチング・アシスタント
1985年8月～1989年1月	東京大学教養学部、専任講師 (ロシア語教室・教養学科ロシア分科)
1987年10月～1988年9月	ワルシャワ大学東洋学研究所、客員講師 (日本語日本文学)
1989年1月～1994年3月	東京大学教養学部、助教授 (ロシア語教室・教養学科表象文化論)
1994年4月～2004年3月	東京大学文学部、助教授 (スラヴ語スラヴ文学)
2000年5月～11月	ロシア国立人文大学 (モスクワ)、客員研究員 (国際交流基金フェロー)
2002年10月～11月	モスクワ大学アジア・アフリカ研究所、客員教授
2004年4月	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシアおよびポーランド文学、現代日本文学を視野に入れた世界文学論、越境・亡命文学

b 研究課題

(概要) 興味と活動は近・現代文学全般にわたり、現代世界文学への比較文学的アプローチや現代日本文学の批評・時評も行なっているが、本来の専門領域はロシア文学およびポーランド文学 (主として 19～20

世紀)である。1994年文学部に赴任して以来、スラヴ語スラヴ文学専修課程と並行して、西洋近代語近代文学専修課程の教育・運営に一貫して携わり、2007年4月に西洋近代語近代文学専修課程を改組した形で現代文芸論専修課程が創設されると、こちらに研究・教育の主軸を移しながらも、スラヴ語スラヴ文学の専修課程の研究・教育活動にも引き続き関わってきた。またモスクワ大学およびワルシャワ大学との大学間交流協定の実施担当者として、東京大学とこれらの大学との研究交流および学生交換の世話役を一貫して務めてきた。

日本とアメリカの優れた先達に学んだ厳密な文献学としてのスラヴ・フィロロジーを日本に根付かせ、発展させることに少しでも貢献したいと考えているが、昨今の風潮の中ではこれはなかなか厳しい戦いである。それと同時に、「世界文学」の視点からできるだけ幅広く現代文学を(日本文学の特殊性と普遍性も視野に入れて)とらえるように努めている。一国一言語の枠内に収まらないような、亡命・越境・二言語併用などの問題に特に関心がある。

2008年4月からは現代文芸論研究室を中心とした科研費研究プロジェクト「グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成」の代表者として、現代の世界文学研究のための横断的な知のネットワークの構築に携わり、内外の研究者や文学者を積極的に招き、頻繁に講演会・セミナー・シンポジウムを開催してきた。

ロシア東欧の専門分野における主要な関心の一つは、ソ連崩壊・東欧革命後の状況を文化史的にとらえることであり、その作業を通じて、因習的なロシア文学史の枠組みを変え、また文化の境界を見直す必要があることを主張してきた。またロシア文学における「詩的」なものの理論化を考えており、小説研究にこれまで偏ってきたため未発達な日本におけるロシア詩理解の基礎を固めるべく努めている。

海外(特にロシア東欧)と日本の文化・文学交流にも関心があり、国際交流基金や文化庁の様々な企画に協力し、ロシアや東欧の作家との交流や、日本文学の海外紹介といった事業にも積極的に参加している。最近では交流対象をアジアにも広げ、国際交流基金の委嘱をうけて、インドネシア(2005年)、ベトナム(2009年)両国各地の大学で連続講演・セミナーを行ない、その時にできた人的ネットワークも現在、研究・教育活動に活かしており、ロシア文学会において東アジアの研究ネットワーク構築を目指している。

具体的な進行中の研究課題としては、(1)新たな世界文学論へのアプローチ、(2)ポスト共産主義時代のロシア東欧文学の総合的研究、(3)ナボコフの著作のロシア語の文体論的研究(特に長篇『賜物』)、(4)チェーホフ短篇の現代的再解釈、(5)ロシア文学における日本人のイメージ/日本文学におけるロシア人のイメージの双方向的対照研究、(6)ロシア詩史の見直しと新しいロシア詩アンソロジーの編纂、などがある。

c 研究業績

(1) 著書

共著、宇山智彦(編)、他計11名、「講座スラブ・ユーラシア学2 地域認識論—多民族空間の構造と表象」、講談社、2008.2

共著、「ラヴレターを読む 愛の領分」、大修館書店、2008.12

編著、「芸術は何を超えていくのか?」、東信堂、2009.3

(2) 論文

「中欧文学と地域アイデンティティ—現代文学を通じての〈中(東)欧意識〉再検討の試み」、科学研究費研究成果報告書、『越境する文学の総合的研究』32-51頁、2008.3

「新しい世界文学の場所へ—大きな楊文学についての小さな論」、文学界、62-9、2008.9

「Toward a New Age of World Literature: The Boundary of Contemporary Japanese Literature and Its Shift in the Global Context」、れにくさ、1、2009.3

「レーリッヒの美術」、演劇博物館グローバルCOE紀要 演劇映像学2007報告集、1、2009.4

「枠を変える Mission Two: 世界に向き合うために」、比較地域大国論集、1、2009.5

(3) 書評

「ヤン・パトチカ(石川達夫訳)『歴史哲学についての異端的論考』、みすず書房、2007、その他、『毎日新聞』、2008.1.20

「小野正弘(編)『日本語オノマトペ辞典』、小学館、2007.10、『毎日新聞』、2008.3.2

「トルーマン・カポーティ(村上春樹訳)『ティファニーで朝食を』、新潮社、2008.2、『毎日新聞』、2008.3.30

「桐野夏生『東京島』、新潮社、2008.5、『毎日新聞』、2008.6.8

「平野啓一郎『決壊』、新潮社、2008.6、『毎日新聞』、2008.7.13

「川村湊『文芸時評 1993-2007』、水声社、2008.7、『毎日新聞』、2008.8.17

「細川周平『遠きにありて思うもの―日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』、みすず書房、2008.6、『毎日新聞』、2008.9.28

「高野陽太郎『「集団主義」という錯覚』、新曜社、2008.6、『毎日新聞』、2008.10.26

「高野文緒『赤い星』、ハヤカワ書房、2008.8、『毎日新聞』、2008.11.16

「今福龍太『群島―世界論』、岩波書店、2008.11、『毎日新聞』、2009.1.11

「エステルハージ・ペーテル『ハーン＝ハーン伯爵夫人のまなざし』、松籟社、2008.11、『毎日新聞』、2009.2.15

「竹内整一『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』、筑摩書房、2009.1、『毎日新聞』、2009.3.15

「津島佑子『電気馬』、新潮社、2009.3、『毎日新聞』、2009.4.19

「鹿島田真希『ゼロの王国』、講談社、2009.4、『毎日新聞』、2008.5.24

「村上春樹『1Q84』Book1, 2』、新潮社、2009.5、『毎日新聞』、2008.6.14

「辻原登『許されざる者』、毎日新聞社、2009.6、『毎日新聞』、2009.7.12

「加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』、2009.7、朝日出版社、『毎日新聞』、2009.8.16

「オーウェル（高橋和久訳）『一九八四年』、早川書房、2009.7、『毎日新聞』、2008.9.13

「キシユ（山崎佳代子訳）『庭、灰』他』、河出書房新社、2009.9、『毎日新聞』、2009.10.25

(4) 総説・総合報告

「日本で研究する外国文学」、東京大学国際化白書（本編）、34-35頁、2009.3

(5) 監修

「吉田忠正『世界の国ぐに35 ロシア』、ポプラ社、2009.3

(6) 解説

井坂幸太郎の「精度」について、『井坂幸太郎『死神の精度』（文春文庫）』、338-345頁、2008.2

二つの「地獄」の間で、『リービ英雄『千々にくだけて』（講談社文庫）』、268-276頁、2008.9

原点にして究極―フレイブニコフに至る（帰る）長い道、『亀山郁夫『甦るフレイブニコフ』（平凡社ライブラリー）』、627-653頁、2009.4

(7) 啓蒙

「現代ロシア美術紀行 地下活動から自由の謳歌を経て、また新たな受難の時代に？」、一般雑誌、『AVANTGARDE』、Vol.4、70-73頁、2008.1

「現代文芸論のフロンティア1 薄餅とクレープはどちらが美味しいか？ ―翻訳について」、一般雑誌、『UP』、2008年2月号、22-28頁、2008.2

「現代文芸論のフロンティア2 ゲーテの家の庭は意外に小さかった ―世界文学について」、一般雑誌、『UP』、2008年3月号、40-46頁、2008.3

「現代文芸論のフロンティア3 加計呂麻島とロシア正教と特攻艇 ―日本文学について」、一般雑誌、『UP』、2008年4月号、26-31頁、2008.4

「「私」に内蔵された、宇宙と交信するアンテナ(谷川俊太郎論)」、一般雑誌、『現代詩手帖』、51-4(2008年4月号)、89-91頁、2008.4

『「チェブラーシカ」ソ連的用語集』、一般雑誌、『熱風』、2008年7月号、27-34頁、2008.7

「エステルハージ・ペーテル」、一般雑誌、『神奈川大学評論』、第62号、158-161頁、2009.3

「未発見の大陸か、未来のワンダーランドか」、一般雑誌、『群像』、2009年5月号、360-371頁、2009.5

(8) 学会発表

「Toward a New Age of World Literature: The Boundary of Contemporary Japanese Literature and Its Shifts in the Global Context」、Language, Literature, Culture, Identity (organized by Belgrade University), Sava Congress Center, Belgrade、2008.9.12

「宇宙から呼びかける二羽のカモメ―現代日本小説におけるロシア人のイメージ」、国際日本文化研究センター平成20年度海外研究交流シンポジウム「ロシア極東文化の中の日本」、ウラジオストク極東大学、2008.9.26

「美女と醜女、または翻訳可能性と不可能性の間で」、ワークショップ「ロシア文学にとって翻訳とは何か？―理論・実践・受容」、中京大学（日本ロシア文学会全国大会）、2008.10.11

「中心・周縁・中間―スラヴ地域研究の活性化に向けて」、地域研究コンソーシアム「人文学的アプローチによるポーランド地域主義研究―文学・芸術・言語を通して考えるポーランドの周辺地域」、東京大学文学部、2009.1.10

「エステルハージと中欧文学の「地詩学」ードナウを下って、世界文学の未来へ」、大阪大学グローバルCOE「コンフリクトの人文学」国際研究教育拠点主催シンポジウム「中欧の詩学」、大阪大学豊中キャンパス、2009.2.8

「芸術は何を超えていく（超えていかない）のか?」、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業シンポジウム「芸術は誰のものか?」、KOKUYO ホール、2009.3.7

(9) 会議主催（チェア他）

「2009年度国際交流基金賞受賞者記念講演会 ボリス・アクーニン『日本と私』、チェア、東京大学文学部1番大教室、2009.10.9

(10) 教科書

「文学の愉しみ」、柴田元幸・野崎歓、日本放送出版協会、2008.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

朝日カルチャーセンター(横浜) 非常勤講師、2008.2～（不定期）

北海道大学スラブ研究センター、特別講義、2009.5

ハノイ大学、フエ大学、ダナン大学、ホーチミン大学その他、国際交流基金「日本文学巡回セミナー」派遣講師、2009.9.15～9.29

イエール大学、特別講演（東大ーイエール・イニシャティヴ）、”Haruki vs. Karamazov: Contemporary Japanese Literature under the Shadow of the Great Russian Literature”、2009.12.8

ユーラシア研究所、創立20周年記念講演「光源氏 vs. カラマーゾフ——ロシアと日本 文学が映し出す互いの姿」2009.12.12

(2) 行政

「文化庁」、JLPP 現代日本文学翻訳作品選定委員、2007～

「東京都文京区」、文の京文芸賞選考委員、2008.4～

「文化庁」、芸術選奨（文学部門）の推薦委員、芸術選奨推薦委員、2009.10～

(3) 学会

「日本ナボコフ協会」、運営委員、1998～

「日本スラヴ東欧研究学会（JSSEES）」、理事、1998～

「ロシア・東欧学会」、理事、2000～

「日本西スラヴ学研究会」、企画編集委員 2000～、事務局長 2005～2009

「日本ロシア文学会」、会長、2009.10～

「日本ロシア文学会」、日本ロシア文学会賞選考委員長、2009.10～

(4) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「毎日新聞社」、書評委員、1995.4～

「セゾン文化財団」、評議員、1999～

「国際交流基金」、Japanese Book News 編集委員、2004.10.1～

「新聞三社連合（東京新聞・中日新聞他）」、文芸時評担当者、2005.1～

「読売新聞社」、読売文学賞選考委員、2005～

「日本ペンクラブ」、国際委員、2006～

「東京大学出版会」、企画委員、2007.4～

「早稲田大学」、坪内逍遙大賞選考委員、2007.4～

「北海道大学スラブ研究センター」、運営委員、2008.4～

「光文社」、感想文コンクール審査委員、2008.7～

2 3 現代文芸論

教授 野谷 文昭 NOYA, Fumiaki

1. 略歴

1971年 東京外国語大学外国語学部スペイン語学科学士・文学士
1975年 東京外国語大学大学院外国語研究科（ロマンス系言語学）修士・文学修士
1986年4月～1987年3月 東京工科大学、助教授（スペイン語）
1987年4月～1994年3月 立教大学一般教育部、助教授（スペイン語）
1992年4月～1993年3月 カリフォルニア大学アーバイン校（University of California, Irvine）、客員
研究員
1994年4月～1998年3月 立教大学一般教育部、教授（スペイン語）
1998年4月～2005年3月 立教大学法学部、教授（全学共通カリキュラム担当）
1999年12月～2000年3月 メキシコ大学院大学(El Colegio de México)、客員研究員
2001年4月～2005年3月 立教大学大学院比較文明学専攻、教授
2005年4月～2008年3月 早稲田大学教育・総合科学学術院、教授（スペイン語・複合文化学）
2008年4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部、教授

2. 主な研究活動

a 研究業績

(1) 著書

訳書、フリオ・コルタサル、「愛しのグレンダ」、岩波書店、2008.1
その他、ガブリエル・ガルシア＝マルケス、「予告された殺人の記録」、新潮社、2008.1
辞書・辞典・事典、野谷文昭、「広辞苑第六版」、岩波書店、2008.1
その他、「『コレラの時代の愛』ロマンティシズムのリアリティー」、ギャガ、2008.6
字幕監修、「永遠の子どもたち」、2008.12
共訳、アデライダ・ガルシア＝モラレス、「エル・スール」、インスクリプト、2009.2
その他、「『宿命と意思』『日曜日の随想2008』」、日本経済新聞社、2009.4
共著、『『古典新訳の発見3』』、光文社、2009.5
共著、「『他分野交流プロジェクト研究ニューズレターVol.61』」、2009.7
共著、『『カフェ古典新訳文庫 Vol.1』』、光文社、2009.11
その他、「『青春の一冊 書かれなかった章 ジーン・フランコ『ラテンアメリカ文化と文学—苦悩する知識人』(吉田秀太郎訳)』」、東京大学新聞、2010.3

(2) 論文

「中上健次『枯木灘』、中村邦生・千石英世編著 『名作はこのように始まるII』(ミネルヴァ書房)、31-41
頁、2008.3

「騎士の才知、従者の智慧——セルバンテスの諺」、れにくさ、第一号、103-120頁、2009.3

(3) 書評

「柳原孝敦『ラテンアメリカ主義のレトリック』」、学術論文誌、『日本イスパニヤ学会会報』、13号、2008.9

「室井光広『ドン・キホーテ讃歌——世界文学練習帖』」、その他、『週刊読書人』、2009.2

「マルコス・アギニス『マラーノの武勲(八重樫克彦・八重樫由貴子訳)』」、その他、『日本経済新聞』、2009.4

「堀尾真紀子『フリーダ・カーロとディエゴ・リベラ』」、一般雑誌、『季論21』、2009.7

「ロベルト・ボラーニョ『通話』(松本健二訳)」、一般雑誌、『日本経済新聞』、2009.7

「佐竹謙一『概説スペイン文学史』」、その他、『週刊読書人』、2009.10

「ガブリエル・ガルシア＝マルケス『生きて、語り伝える(旦敬介訳)』」、その他、『日本経済新聞』、2009.12

「(マリオ・バルガス・ジョサ『嘘から出たまこと』(寺尾隆吉訳)」、その他、『日本経済新聞』、2010.3

(4) 総説・総合報告

「批評の空間」、その他、『批評の空間 多分野交流プロジェクト研究ニューズレター』Vol.61、2009.7

(5) 解説

大萩康司『想いの届く日』解説、2008.4

『あの日、欲望の大地で』、劇場用プログラム、2009.9

「2009回顧・ラテンアメリカ」、『図書新聞』、2009.12

「世界の文学—ラテンアメリカ ガルシア=マルケス 伝記と新たな読み」、『東京新聞』、2010.1

辻 仁成『ピアニシモ ピアニシモ』、2010.3

(6) 啓蒙

「翻訳と所作」、『早稲田の片隅で—16号館に集った教師と学生たち』、2008.7

「ガウチョの現代性と普遍性」、『光文社文芸編集部編『古典新訳の発見3』』、30-37頁、2009.5

(7) マスコミ

雑誌、「「チェ 28歳の革命/チェ 39歳別れの手紙」」、シアターカルチャーマガジン「ティー」、2008

新聞、「意思と宿命」、日本経済新聞、2008.1.13

新聞、「フリオ・コルタサル『愛しのグレンダ』(野谷文昭訳)」、毎日新聞、毎日新聞社、2008.2.2

雑誌、「善の中の恐怖」、図書、岩波書店、2008.3

新聞、「カストロ時代の終焉と文学」、東京新聞、2008.3

新聞、「フリオ・コルタサル『愛しのグレンダ』(野谷文昭訳)」、日本経済新聞、日本経済新聞社、2008.3.16

新聞、「今夜、列車は走る——惨めな現実から希望求め(シネマ万華鏡)」、日本経済新聞、日本経済新聞社、2008.4.18

新聞、「A Cortázar se le quiere en japonés」、International Press、International Press、2008.5.3

雑誌、「長野まゆみ『カルトローレ』」、新潮、2008.6

新聞、「わが夫、チェ・ゲバラ、血の通った等身大の肖像明かす——アレイダ・マルチ著(読書)」、日本経済新聞、日本経済新聞社、2008.6.22

新聞、「ラス・カサスへの道、新旧の中南米史を自在に往還——上野清士著(読書)」、日本経済新聞、日本経済新聞社、2008.9.7

新聞、「10月3日からガルシア=マルケス会議 東京・千代田で、講演や展覧会」、朝日新聞、朝日新聞社、2008.9.30

雑誌、「記憶の継承」、群像、2008.10

雑誌、「『百年の孤独』を超えて」、すばる、集英社、2008.12

その他、「エリセの聖なる映画」、紀伊國屋、2008.12

その他、「対談 井口奈巳 x 野谷文昭：ビクトル・エリセの映画」、2008.12

新聞、「室井光広『ドン・キホーテ讃歌—世界文学練習帖』(東海大学出版会)」、週刊読書人、2009.2.13

新聞、「アデライダ・ガルシア=モラレス『エル・スール』(野谷文昭共訳)」、週刊読書人、2009.4.3

新聞、「マルコス・アギニス『マラーノの武勳』八重樫克彦・八重樫由貴子訳(作品社)」、日本経済新聞、2009.4.5

新聞、「マラーノの武勳、ユダヤ人の受難語る知的小説——マルコス・アギニス著(読書)」、日本経済新聞、日本経済新聞社、2009.4.5

新聞、「アデライダ・ガルシア=モラレス『エル・スール』(野谷文昭共訳)」、読売新聞、読売新聞社、2009.4.19

テレビ、「アデライダ・ガルシア=モラレス『エル・スール』(野谷文昭共訳)」、NHK週刊ブックレビュー、日本放送協会、2009.4.25

雑誌、「アデライダ・ガルシア=モラレス『エル・スール』(野谷文昭共訳)」、本の雑誌、2009.5

新聞、「アデライダ・ガルシア=モラレス『エル・スール』(野谷文昭共訳)」、毎日新聞、毎日新聞社、2009.5.3

雑誌、「堀尾真紀子『フリーダ・カーロとディエゴ・リベラ』(ランダムハウス講談社)」、季論21(2009年夏号)、木の泉社、2009.7

新聞、「ロベルト・ボラーニョ『通話』松本健二訳(白水社)」、日本経済新聞、2009.7.26

その他、「「あの日、欲望の大地で」」、2009.9

新聞、「ボルヘス会創立10周年記念シンポジウム 東京・千代田区で」、朝日新聞、朝日新聞社、2009.10.15

新聞、「ボルヘス会創立10周年記念シンポジウム」、毎日新聞、毎日新聞社、2009.10.28

新聞、「佐竹謙一『概説スペイン文学史』(研究社)」、週刊読書人、2009.10.30

新聞、「Borges fue un escritor para escritores Cervantes-Tokio」、International Press、International Press、2009.10.31

新聞、「Día de la cultura cubana en Tokio-Senel Paz」、International Press、International Press、2009.11.7

新聞、「祖国愛と慣用性を穏やかに」、毎日新聞、2009.12.1

その他、「アデライダ・ガルシア＝モラレス『エル・スール』(野谷文昭共訳)、イスパニア図書、行路社、2009.12.10

新聞、「ガブリエル・ガルシア＝マルケス『生きて、語り伝える』旦敬介訳(新潮社)、日本経済新聞、2009.12.13

新聞、「生きて、語り伝える——ガブリエル・ガルシア＝マルケス著(読書)、日本経済新聞、日本経済新聞社、2009.12.13

新聞、「海外文学・文化 2009 回顧・ラテンアメリカ」、図書新聞、2009.12.26

新聞、「世界の文学：ラテンアメリカ ガルシア＝マルケス 伝記と新たな読み」、東京新聞、2010.1.21

新聞、「嘘から出たまこと、世界の小説を読む作家の情熱、マリオ・バルガス・ジョサ著(読書)、日本経済新聞、日本経済新聞社、2010.3.28

(8) 学会発表

「今《世界文学》は可能か？ グローバリゼーションのなかで 21 世紀比較文学の現在を問う」、日本比較文学会第 70 回全国大会、大妻女子大学、2008.6.22

「騎士の才知、従者の知恵—セルバンテスの諺」、文豪とことわざ—セルバンテス・シェイクスピア・ドストエフスキー・漱石、明治大学、2008.11.15

(9) 会議主催(チェア他)

「第一回ガルシア＝マルケス会議「翻訳の挑戦」、実行委員長、「翻訳の挑戦」、東京セルバンテス文化センター、2008.10.4～2008.10.6

「ボルヘス会創立 10 周年記念シンポジウム」、実行委員長、「ボルヘスと南北アメリカ」、東京セルバンテス文化センター、2009.10.24

「セネル・パス講演会」、東京セルバンテス文化センター、2009.10.27

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

早稲田大学演劇博物館グローバル COE と東京国際芸術祭共同企画セミナー、2008.3～

アルゼンチン大使館セミナー、2008.4～

セルバンテス文化センターセミナー、2008.7～

国際交流基金セミナー、2008.9～

神奈川大学エクステンション講座セミナー、2009.7～

ユーロスペース特別講演、2009.9～

セルバンテス文化センターセミナー、2009.10～

セルバンテス文化センター特別講演、2009.10～

上智大学グローバル・スタディーズ研究科 大学院生・次世代研究者ワークショップセミナー、2010.1～

(2) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

「日本文芸家協会」、会員、2007～

教授 **柴田 元幸** SHIBATA, Motoyuki

1. 略歴

1979 年	東京大学文学部(英語英米文学) 学士・文学士
1984 年	東京大学大学院人文社会研究科(英語英文学) 修士・文学修士
1986 年	イェール大学 Yale University (Department of English) 修士・文学修士
1984 年 4 月～1987 年 11 月	東京学芸大学教育学部、講師
1987 年 12 月～1988 年 9 月	東京学芸大学教育学部、助教授
1988 年 10 月～1997 年 3 月	東京大学教養学部、助教授

1997年4月～1999年3月 東京大学大学院総合文化研究科、助教授
1999年4月～2005年3月 東京大学大学院人文社会系研究科、助教授
2005年4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科、教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

(概要)

アメリカ文学。これまで同様、現代アメリカ小説の紹介・翻訳に努めるとともに、翻訳の文化的意義などについても発言してきた。2008年～2009年の主要業績は以下の通り。

c 研究業績

(1) 著書

インタビュー集、「代表質問」、新書館、2009.7

共著、Motoko Sugano、「Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical Perspectives」、2009.12

(2) 論文

「Lost and Found: On the Japanese Translations of Kazuo Ishiguro」、In Other Words ..., 30、pp.32-39、2008.1

「自虐の向こう側へ——リン・ディンとマイノリティ文学」、れにくさ、1、79-88頁、2009.3

3. 主な社会活動

(1) 学会

「アメリカ文学会」、役員・委員、学術雑誌編集委員長、2008.4～2009.3

教授 **沼野 充義** NUMANO, Mitsuyoshi

1. 略歴

1977年3月 東京大学教養学部教養学科学士
1979年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻修士課程）修士
1981年9月～1985年7月 ハーヴァード大学 Harvard University（フルブライト全額給費奨学生として留学（スラヴ語スラヴ文学専攻博士課程）
1984年6月 ハーヴァード大学修士
1985年3月 東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻博士課程）単位取得満期退学
1984年2月～1985年6月 ハーヴァード大学、ティーチング・アシスタント
1985年8月～1989年1月 東京大学教養学部、専任講師（ロシア語教室・教養学科ロシア分科）
1987年10月～1988年9月 ワルシャワ大学東洋学研究所、客員講師（日本語日本文学）
1989年1月～1994年3月 東京大学教養学部、助教授（ロシア語教室・教養学科表象文化論）
1994年4月～2004年3月 東京大学文学部、助教授（スラヴ語スラヴ文学）
2000年5月～11月 ロシア国立人文大学（モスクワ）、客員研究員（国際交流基金フェロー）
2002年10月～11月 モスクワ大学アジア・アフリカ研究所、客員教授
2004年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授、現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

近現代ロシアおよびポーランド文学、現代日本文学を視野に入れた世界文学論、越境・亡命文学

b 研究課題

(概要) 興味と活動は近・現代文学全般にわたり、現代世界文学への比較文学的アプローチや現代日本文学の批評・時評も行なっているが、本来の専門領域はロシア文学およびポーランド文学（主として19～20世紀）である。1994年文学部に赴任して以来、スラヴ語スラヴ文学専修課程と並行して、西洋近代語近代文

学専修課程の教育・運営に一貫して携わり、2007年4月に西洋近代語近代文学専修課程を改組した形で現代文芸論専修課程が創設されると、こちらに研究・教育の主軸を移しながらも、スラヴ語スラヴ文学の専修課程の研究・教育活動にも引き続き関わってきた。またモスクワ大学およびワルシャワ大学との大学間交流協定の実施担当者として、東京大学とこれらの大学との研究交流および学生交換の世話役を一貫して務めてきた。

日本とアメリカの優れた先達に学んだ厳密な文献学としてのスラヴ・フィロロジーを日本に根付かせ、発展させることに少しでも貢献したいと考えているが、昨今の風潮の中ではこれはなかなか厳しい戦いである。それと同時に、「世界文学」の視点からできるだけ幅広く現代文学を（日本文学の特殊性と普遍性も視野に入れて）とらえるように努めている。一国一言語の枠内に収まらないような、亡命・越境・二言語併用などの問題に特に関心がある。

2008年4月からは現代文芸論研究室を中心とした科研費研究プロジェクト「グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成」の代表者として、現代の世界文学研究のための横断的な知のネットワークの構築に携わり、内外の研究者や文学者を積極的に招き、頻りに講演会・セミナー・シンポジウムを開催してきた。

ロシア東欧の専門分野における主要な関心の一つは、ソ連崩壊・東欧革命後の状況を文化史的にとらえることであり、その作業を通じて、因習的なロシア文学史の枠組みを変え、また文化の境界を見直す必要があることを主張してきた。またロシア文学における「詩的」なものの理論化を考えており、小説研究にこれまで偏ってきたため未発達な日本におけるロシア詩理解の基礎を固めるべく努めている。

海外（特にロシア東欧）と日本の文化・文学交流にも関心があり、国際交流基金や文化庁の様々な企画に協力し、ロシアや東欧の作家との交流や、日本文学の海外紹介といった事業にも積極的に参加している。最近では交流対象をアジアにも広げ、国際交流基金の委嘱をうけて、インドネシア（2005年）、ベトナム（2009年）両国各地の大学で連続講演・セミナーを行ない、その時にできた人的ネットワークも現在、研究・教育活動に活かしており、ロシア文学会において東アジアの研究ネットワーク構築を目指している。

具体的な進行中の研究課題としては、（1）新たな世界文学論へのアプローチ、（2）ポスト共産主義時代のロシア東欧文学の総合的研究、（3）ナボコフの著作のロシア語の文体論的研究（特に長篇『賜物』）、（4）チェーホフ短篇の現代的再解釈、（5）ロシア文学における日本人のイメージ/日本文学におけるロシア人のイメージの双方向的対照研究、（6）ロシア詩史の見直しと新しいロシア詩アンソロジーの編纂、などがある。

c 研究業績

(1) 著書

共著、宇山智彦（編）、他計11名、「講座スラブ・ユーラシア学2 地域認識論—多民族空間の構造と表象」、講談社、2008.2

共著、「ラヴレターを読む 愛の領分」、大修館書店、2008.12

編著、「芸術は何を超えていくのか?」、東信堂、2009.3

(2) 論文

「中欧文学と地域アイデンティティ—現代文学を通じての〈中（東）欧意識〉再検討の試み」、科学研究費研究成果報告書、『越境する文学の総合的研究』32-51頁、2008.3

「新しい世界文学の場所へ—大きな楊文学についての小さな論」、文学界、62-9、2008.9

「Toward a New Age of World Literature: The Boundary of Contemporary Japanese Literature and Its Shift in the Global Context」、れにくさ、1、2009.3

「レーリッヒの美術」、演劇博物館グローバルCOE紀要 演劇映像学2007報告集、1、2009.4

「枠を変える Mission Two: 世界に向き合うために」、比較地域大国論集、1、2009.5

(3) 書評

「ヤン・パトチカ(石川達夫訳)『歴史哲学についての異端的論考』、みすず書房、2007、その他、『毎日新聞』、2008.1.20

「小野正弘(編)『日本語オノマトペ辞典』、小学館、2007.10、『毎日新聞』、2008.3.2

「トルーマン・カポーティ(村上春樹訳)『ティファニーで朝食を』、新潮社、2008.2、『毎日新聞』、2008.3.30

「桐野夏生『東京島』、新潮社、2008.5、『毎日新聞』、2008.6.8

「平野啓一郎『決壊』、新潮社、2008.6、『毎日新聞』、2008.7.13

「川村湊『文芸時評 1993-2007』、水声社、2008.7、『毎日新聞』、2008.8.17

「細川周平『遠きにありて思うもの—日系ブラジル人の思い・ことば・芸能』、みすず書房、2008.6、『毎

日新聞』、2008.9.28

「高野陽太郎『「集団主義」という錯覚』、新曜社、2008.6、『毎日新聞』、2008.10.26

「高野文緒『赤い星』、ハヤカワ書房、2008.8、『毎日新聞』、2008.11.16

「今福龍太『群島—世界論』、岩波書店、2008.11、『毎日新聞』、2009.1.11

「エステルハージ・ペーテル『ハーン=ハーン伯爵夫人のまなざし』、松籟社、2008.11、『毎日新聞』、

2009.2.15

「竹内整一『日本人はなぜ「さようなら」と別れるのか』、筑摩書房、2009.1、『毎日新聞』、2009.3.15

「津島佑子『電気馬』、新潮社、2009.3、『毎日新聞』、2009.4.19

「鹿島田真希『ゼロの王国』、講談社、2009.4、『毎日新聞』、2008.5.24

「村上春樹『1Q84』Book1, 2』、新潮社、2009.5、『毎日新聞』、2008.6.14

「辻原登『許されざる者』、毎日新聞社、2009.6、『毎日新聞』、2009.7.12

「加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』、2009.7、朝日出版社、『毎日新聞』、2009.8.16

「オーウェル（高橋和久訳）『一九八四年』、早川書房、2009.7、『毎日新聞』、2008.9.13

「キシユ（山崎佳代子訳）『庭、灰』他』、河出書房新社、2009.9、『毎日新聞』、2009.10.25

(4) 総説・総合報告

「日本で研究する外国文学」、東京大学国際化白書（本編）、34-35頁、2009.3

(5) 監修

「吉田忠正『世界の国ぐに 35 ロシア』、ポプラ社、2009.3

(6) 解説

井坂幸太郎の「精度」について、『井坂幸太郎『死神の精度』（文春文庫）』、338-345頁、2008.2

二つの「地獄」の間で、『リービ英雄『千々にくだけで』（講談社文庫）』、268-276頁、2008.9

原点にして究極—フレイブニコフに至る（帰る）長い道、『亀山郁夫『甦るフレイブニコフ』（平凡社ライブラリー）』、627-653頁、2009.4

(7) 啓蒙

「現代ロシア美術紀行 地下活動から自由の謳歌を経て、また新たな受難の時代に？」、一般雑誌、『AVANTGARDE』、Vol.4、70-73頁、2008.1

「現代文芸論のフロンティア1 薄餅とクレープはどちらが美味しいか？ — 翻訳について」、一般雑誌、『UP』、2008年2月号、22-28頁、2008.2

「現代文芸論のフロンティア2 ゲーテの家の庭は意外に小さかった—世界文学について」、一般雑誌、『UP』、2008年3月号、40-46頁、2008.3

「現代文芸論のフロンティア3 加計呂麻島とロシア正教と特攻艇—日本文学について」、一般雑誌、『UP』、2008年4月号、26-31頁、2008.4

「私」に内蔵された、宇宙と交信するアンテナ(谷川俊太郎論)、一般雑誌、『現代詩手帖』、51-4 (2008年4月号)、89-91頁、2008.4

『「チェブラーシカ」ソ連的用語集』、一般雑誌、『熱風』、2008年7月号、27-34頁、2008.7

「エステルハージ・ペーテル」、一般雑誌、『神奈川大学評論』、第62号、158-161頁、2009.3

「未発見の大陸か、未来のワンダーランドか」、一般雑誌、『群像』、2009年5月号、360-371頁、2009.5

(8) 学会発表

「Toward a New Age of World Literature: The Boundary of Contemporary Japanese Literature and Its Shifts in the Global Context」、Language, Literature, Culture, Identity (organized by Belgrade University), Sava Congress Center, Belgrade, 2008.9.12

「宇宙から呼びかける二羽のカモメ—現代日本小説におけるロシア人のイメージ」、国際日本文化研究センター平成20年度海外研究交流シンポジウム「ロシア極東文化の中の日本」、ウラジオストク極東大学、2008.9.26

「美女と醜女、または翻訳可能性と不可能性の間で」、ワークショップ「ロシア文学にとって翻訳とは何か？—理論・実践・受容」、中京大学（日本ロシア文学会全国大会）、2008.10.11

「中心・周縁・中間—スラヴ地域研究の活性化に向けて」、地域研究コンソーシアム「人文学的アプローチによるポーランド地域主義研究—文学・芸術・言語を通して考えるポーランドの周辺地域」、東京大学文学部、2009.1.10

「エステルハージと中欧文学の「地詩学」—ドナウを下って、世界文学の未来へ」、大阪大学グローバルC

OE「コンフリクトの人文科学」国際研究教育拠点主催シンポジウム「中欧の詩学」、大阪大学豊中キャンパス、2009.2.8

「芸術は何を超えていく（超えていかない）のか?」、日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業シンポジウム「芸術は誰のものか?」、KOKUYO ホール、2009.3.7

(9) 会議主催 (チェア他)

「2009年度国際交流基金賞受賞者記念講演会 ボリス・アクーニン『日本と私』、チェア、東京大学文学部1番大教室、2009.10.9

(10) 教科書

「文学の愉しみ」、柴田元幸・野崎敏、日本放送出版協会、2008.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

朝日カルチャーセンター(横浜) 非常勤講師、2008.2～ (不定期)

北海道大学スラブ研究センター、特別講義、2009.5

ハノイ大学、フエ大学、ダナン大学、ホーチミン大学その他、国際交流基金「日本文学巡回セミナー」派遣講師、2009.9.15～9.29

イェール大学、特別講演 (東大——イェール・イニシヤティヴ)、"Haruki vs. Karamazov: Contemporary Japanese Literature under the Shadow of the Great Russian Literature"、2009.12.8

ユーラシア研究所、創立20周年記念講演「光源氏 vs. カラマーゾフ——ロシアと日本 文学が映し出す互いの姿」2009.12.12

(2) 行政

「文化庁」、JLPP 現代日本文学翻訳作品選定委員、2007～

「東京都文京区」、文の京文芸賞選考委員、2008.4～

「文化庁」、芸術選奨 (文学部門) の推薦委員、芸術選奨推薦委員、2009.10～

(3) 学会

「日本ナボコフ協会」、運営委員、1998～

「日本スラヴ東欧研究学会 (JSSEES)」、理事、1998～

「ロシア・東欧学会」、理事、2000～

「日本西スラヴ学研究会」、企画編集委員 2000～、事務局長 2005～2009

「日本ロシア文学会」、会長、2009.10～

「日本ロシア文学会」、日本ロシア文学会賞選考委員長、2009.10～

(4) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「毎日新聞社」、書評委員、1995.4～

「セゾン文化財団」、評議員、1999～

「国際交流基金」、Japanese Book News 編集委員、2004.10.1～

「新聞三社連合 (東京新聞・中日新聞他)」、文芸時評担当者、2005.1～

「読売新聞社」、読売文学賞選考委員、2005～

「日本ペンクラブ」、国際委員、2006～

「東京大学出版会」、企画委員、2007.4～

「早稲田大学」、坪内逍遙大賞選考委員、2007.4～

「北海道大学スラブ研究センター」、運営委員、2008.4～

「光文社」、感想文コンクール審査委員、2008.7～

24 西洋史学

教授 近藤 和彦 KONDO, Kazuhiko

1. 略歴

- 1971年6月 東京大学文学部（西洋史学専修課程）卒業
- 1973年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（西洋史学）修了
- 1974年7月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（西洋史学）中途退学
- 1974年8月 東京大学助手（文学部西洋史学）
- 1977年4月 名古屋大学講師（文学部西洋史学）
- 1980年9月 ケインブリッジ大学大学院博士課程（歴史学）～1982年8月
- 1983年1月 名古屋大学助教授（文学部西洋史学）
- 1988年4月 東京大学助教授（文学部西洋史学）
- 1994年4月 東京大学教授（文学部西洋史学）
- 1994年9月 ロンドン大学（UCL 史学科）客員教授 ～1995年12月
- 1995年4月 東京大学教授（大学院人文社会系研究科西洋史学）
- 2003年10月 オクスフォード大学（リナカ学寮）客員上級メンバー ～2004年3月

2. 主な研究活動

a 専門分野 西洋史学（イギリス近代史）

b 研究課題

- (1) 18世紀マンチェスタの地域史研究、史料編纂。
- (2) イギリス諸島の通史の試み。
- (3) 16世紀～19世紀ヨーロッパ史の構造的な理解。
- (4) 近代歴史学の歴史。

以上4つの課題を時間をかけて遂行している。

c 主要業績

(1) 著書

編著、『歴史的ヨーロッパの政治社会』、山川出版社、2008.5

(2) 論文

“Lost in translation? Documents relating to the disturbances at Manchester 1715”, *Manchester Region History Review*, 19, pp.81-94, 2008.

(3) 予稿・会議録

招待講演, “Ukiyoe and the Westminster Bridge: cultural exchanges before Japonisme”, Japanese-Korean Conference of British History (3rd), Chonnam National University (光州), 2008.11.13, *Region, Interchange and Culture in History*, pp.95-105, 2008.11.

(4) 書評

“Jonathan Oates, *The Jacobite Invasion of 1745 in North-West England*”, University of Lancaster, 2006, 学術論文誌, *Manchester Region History Review*, 19, pp.152-153, 2008.

(5) 監修

International Bibliography of Historical Sciences, Gruyter, 2008

(6) 啓蒙

「読書アンケート」、一般雑誌、『みすず』、557、61-62頁、2008.1

「日本の現在と将来」、学術論文誌、『日本歴史』、728、32-35頁、2009.1

「読書アンケート」、一般雑誌、『みすず』、568、31-32頁、2009.1

「読書アンケート」、一般雑誌、『みすず』、579、48-49頁、2010.2

(7) マスコミ

新聞、「上半期の収穫から」、『週刊読書人』、2008.7.25

新聞、「青春の一冊：歴史とらえようとする壮大な意志」、『東京大学新聞』、2008.8.5

雑誌、「岩波新書」、『図書』、2008.10

(8) 学会発表

「18世紀のマンチェスタ：近世から近代へ」、日本西洋史学会大会、島根県文化会館、2008.5.10

(9) 会議主催 (チェア他)

「Anglo-Japanese Conference of Historians」、実行委員長、東京大学、2009.9.16～2009.9.19

(10) 教科書

『新世界史』、山川出版社、2008

『現代の世界史』、山川出版社、2008

『世界の歴史』、山川出版社、2008

『現代の世界史』、山川出版社、2009

『新世界史』、山川出版社、2009

『世界の歴史』、山川出版社、2009

3. 主な社会活動

(1) 行政

日本学術振興会

(2) 非常勤講師引き受け状況

放送大学大学院客員教授 「近現代ヨーロッパ史」2005年度より

(3) 学会

「英国王立歴史学会フェロー (F.R.Hist.S.)」、1989～

「史学会」、評議員・理事、1988～

「社会経済史学会」、評議員、1989～

「*International Bibliography of Historical Sciences* (K.G.Saur)」、Member of the advisory board & contributing editor、1996～

「*Manchester Region History Review*」、Corresponding member、2004～

教授 **石井 規衛** ISHII, Norie

1. 略歴

1973年3月	東京大学文学部 (西洋史学専修課程) 卒業
1976年3月	同 大学院人文科学研究科 (西洋史学専門課程) 修士課程修了
1981年3月	同 大学院人文科学研究科 (西洋史学専門課程) 単位取得の上退学
1984年4月	神戸大学文学部 (西洋史学担当) 助教授 (1993年3月まで)
1993年4月	東京大学文学部 (西洋史学担当) 助教授 (1994年11月まで)
1994年12月	同 文学部 (西洋史学担当) 教授
1995年4月	同 大学院人文社会系研究科教授 (～継続中)

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋史学 (近現代ロシア史)

b 研究課題

革命後、最初の経済復興策を調査し、これまでのイデオロギー的な解釈から離れてとらえ直す作業を行った。それにより、いわゆる戦時共産主義とは、一時的なものではなく、ソヴィエト期ロシア全体の解明にとっても決定的な意義を持つ政策体系であることが確認した。続いて、そうした政策体系を採用する政治体制の解明に着手した。

成立直後の時期のソヴィエト社会の、複雑な政治的メカニズムの実態を整理することを通して、古参党員集団による寡頭支配として、新しい支配構造をモデル化した。第二に、ソ連世界 (文明) の歴史的な性格を

解明すること。そのさい、発生史的な接近方法と、解剖学的に接近する方法を組み合わせ、総合することを試みてきた。さらに、ロシア・マルクス主義と、それにもとづく歴史観が、各地の歴史研究に大きな影響をあたえた事実をふまえ、ロシアや日本の史学史を、思想的に整理することにも従事している。

c 主要業績

(1) 著書

共著、樺山紘一編、『新・現代歴史学の名著——普遍から多様へ』、中公新書、2010.3

(2) 論文

「回顧と展望（現代—ロシア・東欧・北欧）」、『史学雑誌』、2007.5

(2) 書評

「高尾千津子『ソ連農業集団化の原点：ソヴィエト体制とアメリカユダヤ人』」、彩流社、2006.11、一般雑誌、『ユーラシア研究』2007.5

(3) 史料

調査・収集、「ソヴィエト期ロシアの政治秩序の形成過程に関する史料・文献調査、出張国」、ロシア、2007

調査・収集、「コミンテルンの極東政策に関する史料・文献調査、出張国」、ロシア、2007

(4) 学会発表

「「国民国家」症候群とロシア・ソ連」、史学会シンポジウム、2006.11.18

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京芸術大学非常勤講師、2009～2009

立教大学文学部非常勤講師、2008～2009

岡山大学非常勤講師、2009

教授 **深澤 克己** FUKASAWA, Katsumi

1. 略歴

1973年 3月 東京大学文学部西洋史学科卒業
1976年 4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻修士課程入学
1978年 3月 同 課程修了（文学修士）
1978年 4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻博士課程入学
（1984年 3月 同課程単位取得満期退学）
1980年 10月 フランス・プロヴァンス第1大学第3課程（歴史と文明）登録
1984年 12月 同課程修了 フランス第3課程博士号（歴史と文明）取得
1986年 12月 九州大学文学部助教授
1994年 10月 九州大学文学部教授
1995年 4月 東京大学人文社会系大学院教授／九州大学文学部教授（併任）
1995年 10月 東京大学人文社会系大学院教授
1997年 3-5月 フランス・ボルドー第3大学客員教授
2005年 3-7月 フランス・ニュース大学文学部客員教授
2007年 6月 フランス・南ブルターニュ大学、客員教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

近世ヨーロッパ、とくにフランスを主要な対象として以下の諸分野を研究。

1) 国際商業史、2) 港湾都市史、3) 宗教社会史、4) フリーメイソン史

c 主要業績

(1) 著書

共著, *Le goût de l'Inde*, Lorient-Rennes: Musée de la Compagnie des Indes/Presses Universitaires de Rennes, 2008.11.

著書序文執筆, Georges Koutzakiotis, *Cavalla, une Echelle égéenne au XVIIIe siècle. Négociants européens et notables ottomans*, 2009.3.

訳書, ピエール=イヴ・ボルペール, 『「啓蒙の世紀」のフリーメイソン』, 山川出版社, 2009.4

共著, 池澤優・アンヌ・ブッシィ他, 『非業の死の記憶——大量の死者をめぐる表象のポリティクス』, 2010.3

(2) 論文

“Les ports méditerranéens et les grandes étapes du commerce du Levant à l'époque moderne”, 『古代・中世・近現代ヨーロッパ港湾都市の空間構成と社会動態に関する比較史的研究』, 平成 17-19 年度科学研究費補助金・基盤研究 B・研究成果報告書』, 1-21 頁, 2008.3

(3) 書評

“Georges Koutzakiotis, *Cavalla, une Echelle égéenne au XVIIIe siècle. Négociants européens et notables ottomans*, Les Editions Isis, 2009.1”, その他, *Préface à Cavalla, une Echelle égéenne au XVIIIe siècle. Négociants européens et notables ottomans*, pp.7-10, 2009.1

(4) 総説・総合報告

「三報告へのコメント——ヨーロッパ的視点から (中・近世期の港湾都市と海域世界のネットワーク—海・都市・宗教)」, 学術論文誌, 広島大学『史学研究』260 号, 58-62 頁, 2008.6

(5) 啓蒙

「更紗のむすぶ人の縁」, 一般雑誌, 『UP』, 424 号, 38-43 頁, 2008.2

「マルセイユ——東方の門戸」, 『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 第 7 巻 地中海ヨーロッパ』, 190-196 頁, 2010.2

(6) 学会発表

「グディノ、黒田、ベルノン各氏の発表へのコメント」, 非業の死の記憶—追悼儀礼のポリティクス, 東京大学, 2008.9.19

“Du Rite Français au Rite Ecossois Rectifié: le choix de la Loge de la Triple Union de Marseille à la fin du XVIIIe siècle”, Diffusions circulations des pratiques maçonniques en Europe et en Méditerranée, XVIIIe-XIXe siècles. Colloque international des 2 et 3 juillet 2009, Université de Nice-Sophia Antipolis, 2009.7.2

「高校世界史と大学の歴史教育とを結ぶもの」, 日本西洋史学会第 60 回大会大シンポジウム「世界史教育の現状と課題」, 別府国際コンベンションセンター, 2010.5.29

(7) 会議主催 (チェア他)

「史学会第 106 回大会・公開シンポジウム『信仰における他者——異宗教・異宗派の受容と排除の比較史論』, チェア, 東京大学, 2008.11.8

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

五島美術館特別講演, 2008.10~

教授 **姫岡 とし子** HIMEOKA, Toshiko

1. 略歴

1973 年 3 月 奈良女子大学理学部化学科卒業

1980 年 6 月 フランクフルト大学歴史学部修士課程修了

1984 年 3 月 奈良女子大学大学院人間科学研究科比較文化学専攻単位取得退学 (文学博士)

1988 年 4 月 立命館大学国際関係学部講師

1991 年 4 月 立命館大学国際関係学部助教授

1995 年 4 月 立命館大学国際関係学部教授

1998年9月 ドイツ・ボーフム大学社会科学部客員教授（1999年3月まで）
2005年4月 筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻教授
2009年4月 東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋史

b 研究課題

近現代ドイツ社会史、女性・ジェンター史

c 主要業績

(1) 著書

共著、江原由美子他、「学術会議叢書14『性差とは何か——ジェンダー研究と生物学の対話』」、日本学術協力財団、2008.1

共著、Florian Coulmas, Harald Conrad, Annette Schad-Seifert and Gabriele Vogt (eds.), *The Demographic Challenge: A Handbook about Japan*, Leiden/Boston(Brill), 2008

共著、長谷川まゆ帆・河村貞枝・松本彰他、『ジェンダー』、ミネルヴァ書房、2008.7

単著、『ヨーロッパの家族史』、山川出版社、2008.10

編著、姫岡とし子・川越修編、『ドイツジェンダー史研究入門』、青木書店、2009.2

共著、長野ひろ子・松本悠子編、『経済と消費社会—ジェンダー史叢書6』、明石書店、2009.7

(2) 論文

「ナチズムと人口管理」、『学術の動向』、2008.4

(3) 解説

キーワード 国民/ネーション、学術論文誌、『ジェンダー史学』、第5号、2009.10

(4) 学会発表

「分科会 『仕事の人類学』が拓く地平——労働・ジェンダー・社会変容 コメント」、日本文化人類学会代42回研究大会、京都大学、2008.6.1

「ドイツにおける労働とジェンダー関係」、ジェンダー史学会、東京大学、2008.11.30

“Die feministische Bewegung und der Wandel der Alltagskultur in Japan und Deutschland aus vergleichender Sicht“, “1968 in Japan, Deutschland und den USA : Politischer Protest und kultureller Wandel, JAPANISCH-DEUTSCHES ZENTRUM BERLIN, 2009.3.6

「ドイツ・ジェンター史研究の20年」、ドイツ現代史学会、東京外国語大学、2009.9.20

「近代化過程の日独機業における〈女の労働〉〈男の労働〉」、歴史人類学会第30回大会記念シンポジウム、2009.10.24

3. 主な社会活動

(1) 行政

「日本学術会議」、連携会員（史学）、2008～2009

(2) 学会

「ドイツ学会」、理事長、2009

教授 **高山 博** TAKAYAMA, Hiroshi

HP: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~tkymh/index.html>

1. 略歴

1980年3月 東京大学文学部西洋史学科卒業

1980年4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学修士課程入学

1982年3月 東京大学大学院同研究科同修士課程修了（文学修士）

1982年 4月	東京大学大学院同研究科同博士課程進学
1984年 9月	アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程入学 (Harvard Yenching Institute, Doctoral Scholarship for Junior Faculty, 1984-88 による)
1986年 5月	アメリカ、エール大学大学院 M.A. (Master of Arts) 取得
1987年 9月	アメリカ、エール大学 teaching assistant (12月まで)
1988年 3月	東京大学大学院人文科学研究科西洋史学博士課程単位取得退学
1989年 6月	イギリス、ケンブリッジ大学客員研究員(1990年3月まで)
1990年 5月	アメリカ、エール大学大学院歴史学博士課程修了、Ph.D.取得 Robert S. Lopez Memorial Prize (最優秀中世史博士論文賞)
1990年 4月	一橋大学助教授 (経済学部) (1993年4月から1994年3月まで併任助教授)
1993年 4月	東京大学文学部助教授 (文化交流研究施設)
12月	サントリー学芸賞
1994年 6月	地中海学会賞
10月	マルコ・ポーロ賞
1995年 10月	フランス、国立社会科学高等研究院客員研究員 (1996年9月まで) (国際交流基金フェローシップによる)
1998年 4月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (文化交流研究施設・基礎部門)
2001年 10月	(西洋史学助教授を併任)
2002年 4月	21世紀COEプログラム委員会分野別審査・評価部会委員 (人文科学) (2005年まで)
2002年 10月	イタリア、American Academy in Rome, R.A.A.R. (Resident of American Academy in Rome), (12月まで)
2004年 4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授 (西洋史学) 現在に至る
2004年 4月	日本学術振興会 学術システム研究センター研究員 (人文学) (2007年まで)
2008年 4月	文部科学省科学官、現在に至る
2009年 10月	アメリカ、UCLA, CMRS Distinguished Visiting Scholar

2. 主な研究活動

a 専門分野 西洋中世史

b 研究課題

- (1) 古代から現代に至る諸国家の形態、組織、統治システムの比較を行う。
- (2) 西洋中世の主要な君主国の統治システムを比較・検討し、その異同を明らかにする。
- (3) 異なる文化・宗教を背景に持つ様々な人間集団が、地中海を舞台にどのように接触・対応していったかを通時的に見通すとともに、地中海の回りに形成された三大文化圏 (ラテン・キリスト教文化圏、ギリシャ・ビザンツ文化圏、アラブ・イスラム文化圏) 研究の接合を目指す。
- (4) 上記三大文化が併存する十二世紀ノルマン・シチリア王国の解明を行う。
- (5) 異文化交流によって生じる様々な現象を分析し、人間集団が持つ特性と多様性を考える。
- (6) グローバル化が社会や国家形態に及ぼす影響を考察する。

c 主要業績

(1) 著書

『地中海世界の歴史～古代から近世～』、放送大学教育振興会、2009.3、本村凌二との共著

(2) 論文

「シチリア伯ロゲリウス 1 世の統治～ノルマン統治システムの基礎～」、近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』山川出版社、38-74 頁、2008.5

“Religious Tolerance in Norman Sicily? The Case of Muslims”, *Puer Apuliae. Mélanges offerts à Jean-Marie Martin*, eds. E. Cuozzo, V. Deroche, A. Peters-Custot & V. Prigent (Paris, Centre de recherche d'Histoire et Civilisation de Byzance, Monographies 30), pp.451-464, 2009.1

「中世地中海世界と文明の交流」、『七隈史学』、11、1-12 頁、2009.3

(3) 啓蒙

「世界の歴史：文明の交流と衝突～十字軍と現代～」、『マネジメント・スクエア』、215 号、16-18 頁、2008

- 「中世シチリア：文明の交差点」、『地中海学会月報』、314号、4頁、2008
「西洋中世学の未来」（池上俊一との対談録）、『クリオ』、22号、1-24頁、2008.5
「やさしい経済学～「社会科学」で今を読み解く：歴史から見る現代①～⑩」、『日本経済新聞』 2009.10.5
～2009.10.21
「グローバル化 日本の道は」、『朝日新聞』、2010. 1.10
(4) 学会発表・講演
「中世シチリア：文明の交差点」、地中海学会春期連続講演会、ブリヂストン美術館、2008.5.10
「中世地中海世界と文明の交流」、福岡大学七隈史学会第10回大会、10周年記念シンポジウム「九州の中世学～交易・開発・信仰」、福岡大学、2008.9.27
「中世シチリアの「宗教的寛容」～ノルマン君主支配下のムスリム～」、シンポジウム「島嶼と異文化接触」、神戸大学、海港都市研究センター、2009.3.9
「皇妃になった踊り子～ビザンツ皇妃テオドラ」、地中海学会春期連続講演会、ブリヂストン美術館 2009.5.16
““Religious Tolerance” in Medieval Sicily”, Seminar of a CMRS Distinguished Visiting Scholar, Department of History, UCLA, 2009.10.13
“The Norman Kingdom of Sicily: Forms of the Central Power and Multi-Cultural Elements at the Royal Court”, Lecture of a CMRS Distinguished Visiting Scholar, Center for Medieval and Renaissance Studies, UCLA, 2009.10.14
「ノルマン・シチリア王国の権力構造と異文化集団」、第9回シンポジウム「イスラムとIT～西欧とイスラム・いま新たなる局面～」、早稲田大学、イスラム科学研究所、2009.12.12

3. 主な社会活動

(1) 行政

- 「文部科学省」科学官、科学技術政策、2008.4～2010.3
「日本学術会議」連携会員（史学）、立案、2008.4～2010.3

(2) 学会

- 「Journal of Medieval Iberian Studies (USA)」、Editorial Board, 2008.4～2010.3
「International Medieval Bibliography (Leeds, U.K.)」、Regular Contributor for Japan, 2008.4～2010.3
「The Mediterranean Seminar (UCSC, USA)」、Advisory & Editorial Board, 2008.4～2010.3
「史学会」、理事 2009.6～2010.3、評議員 2008.4～2010.3
「地中海学会」、常任委員 2008.4～2010.3
「史学研究会」、評議員 2008.4～2010.3
「西洋中世学会」、常任委員 2009.4～2010.3、事務局次長 2008.4～2010.3

准教授 **橋場 弦** HASHIBA, Yuzuru

1. 略歴

- 1991年 東京大学大学院人文科学研究科博士課程博士・博士（文学）
1991年11月 東京大学文学部助手
1993年4月 大阪外国語大学外国語学部助教授
2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

古代ギリシア史

b 主要業績

- (1) 著書
単著、『賄賂とアテナイ民主政：美德から犯罪へ』、山川出版社、2008.11
- (2) 論文
「ギリシアの「衰退」とは何か」、『西洋史学』、234号、49-60頁、2009.9
- (3) 啓蒙
「古代ギリシアの裁判員」、一般雑誌、『公研』、549、18-19頁、2009.5
「陶片追放」、一般雑誌、『公研』、555、18-19頁、2009.11
- (4) 学会発表
「ギリシアの「衰退」とは何か」、日本西洋史学会、島根大学、2008.5.11
- (5) 会議主催（チェア他）
「The second Euro-Japanese Colloquium of the Ancient Mediterranean World」、チェア、全セッション、
東京大学山上会館、2009.3.27～2009.3.29
- (6) 教科書
『詳説世界史』、佐藤次高 木村靖二 岸本美緒 青木康 水島司 山川出版社、2008
『詳説世界史』、佐藤次高 木村靖二 岸本美緒 青木康 水島司 山川出版社、2009

3. 主な社会活動

- (1) 学会
「日本西洋古典学会」、役員・委員、学術雑誌『西洋古典学研究』編集委員、2008.4～
「Hellenic Society」、一般会員、2009.1～2009.12
「史学会」、役員・委員、評議員、2009.10～

25 社会学

教授 **盛山 和夫** SEIYAMA, Kazuo

1. 略歴

- 1971年6月 東京大学文学部社会学科卒業
- 1978年4月 北海道大学文学部助教授（社会行動学）
- 1985年4月 東京大学文学部助教授（社会学）
- 1994年6月 東京大学文学部教授（社会学）
- 1995年4月 同 大学院人文社会系研究科教授（社会学）

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要

基本的に以下の4領域を中心に研究を進めている。

- (1) 社会学的問題領域における数理モデルの開発。
- (2) 社会学的な計量モデルと分析手法の研究。

(3) 社会階層と社会移動に関する実証的および理論的研究。

(4) 秩序問題と制度に関する理論的研究。

c 主要業績

(1) 著書

単著、「Liberalism: Its Achievements and Failures」、Trans Pacific Press、2010.3

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

北星学園大学社会福祉学部非常勤講師、2007

(2) 行政

日本学術振興会、科学技術政策、学術システムセンター主任研究員、2007.4～2010.3

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「日本学術会議」、連携会員、2006.10～

「社会調査協会」、理事、2006.11～

教授 **上野 千鶴子** UENO, Chizuko

1. 略歴

1977年 3月 京都大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程単位取得退学

1977年 4月 京都大学大学院文学研究科社会学専攻研修員

1978年 4月～1979年 3月 日本学術振興会奨励研究員

1979年 4月～1982年 3月 平安女学院短期大学専任講師

1982年 4月～1989年 3月 平安女学院短期大学助教授

1989年 4月～1992年 9月 京都精華大学人文学部助教授

1992年 10月～1993年 3月 京都精華大学人文学部教授

1993年 4月～1995年 3月 東京大学文学部助教授

1995年 4月～現在 東京大学大学院人文社会系研究科教授

この間、ノースウエスタン大学人類学部客員研究員、シカゴ大学人類学部客員研究員、ボン大学日本学研究所客員教授、フランス社会科学高等研究員人間学研究所客員研究員などを務める。

また、京都大学経済学部、富山大学人文学部非常勤講師のほか、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所客員研究員、国立民族学博物館客員研究員、国立歴史民俗博物館客員研究員、国立国際日本文化研究センター客員助教授などを歴任。

2. 主な研究活動

a 専門分野

女性学、ジェンダー研究、フェミニズム理論、福祉・介護

b 研究課題

(1) フェミニズム・ジェンダー理論

(2) 高齢社会と介護

(3) ナショナリズムとジェンダー

概要と自己評価

長期にわたって編集委員として準備してきたいくつかのシリーズの刊行が始まり、ほぼ完結した。以下のものである。

上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也共編「ケア その思想と実践」全6巻、岩波書店、2008-9

岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編、「戦後日本スタディーズ」全3巻、紀伊国屋書店、2008-9

伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編集協力、
「新編 日本のフェミニズム」全12巻、2009-2011

介護関係では共同研究を続けてきた以下の共編著も刊行に至った。

共編著、上野千鶴子・中西正司、「ニーズ中心の福祉社会へ―当事者主権の次世代福祉戦略」、2008
季刊at」の「ケアの社会学」の連載も完結し、単著として刊行の予定である。

英文の単著（翻訳）、共著も刊行した。また岩波現代文庫から「上野千鶴子の仕事」シリーズが始まり、過去の著作を自解つきで復刻した。

c 主要業績

(1) 著書

単著、「家父長制と資本制」（文庫版）、岩波書店、2009.5

単著、「セクシィ・ギャルの大研究」（文庫版）、岩波書店、2009.5

単著、The Modern Family in Japan: Its Rise and Fall、Trans Pacific Press、2009.2

単著、「女縁を生きた女たち」（増補新版）、岩波書店、2008.9

共編著、上野千鶴子・中西正司、「ニーズ中心の福祉社会へ―当事者主権の次世代福祉戦略」、医学書院、2008.10

共著、日本学術会議社会学委員会ジェンダー分科会編、「性差とは何か：ジェンダー研究と生物学の対話」、
日本学術協力財団、2008.1

共著、山口二郎編、「ポスト新自由主義」、七つ森書館、2009.3

共著、辻村みよ子・大沢真理編、「ジェンダー平等と多文化共生：複合差別を超えて」、東北大学出版会、2010.3

共著、Tsujiyura, Miyoko, & Mari Osawa, eds., Gender Equality in Multicultural Societies: Gender, Diversity, and Conviviality in the age of Globalization、Tohoku University Press、2010.3

編著、上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也、「ケア その思想と実践」（1巻 ケアという思想）、岩波書店、2008.4

編著、上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也、「ケア その思想と実践」（2巻 ケアすること）、岩波書店、2008.5

編著、上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也、「ケア その思想と実践」（5巻 ケアを支えるしくみ）、岩波書店、2008.6

編著、上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也、「ケア その思想と実践」（6巻 ケアを
実践するしかけ）、岩波書店、2008.7

編著、上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也、「ケア その思想と実践」（3巻 ケアされること）、岩波書店、2008.8

編著、上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也、「ケア その思想と実践」（4巻 家族の
ケア 家族へのケア）、岩波書店、2008.9

編著、岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編、「戦後日本スタディーズ ③80・90年代」、
紀伊国屋書店、2008.12

編著、岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編、「戦後日本スタディーズ ②60・70年代」、
紀伊国屋書店、2009.5

編著、岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編、「戦後日本スタディーズ ①40・50年代」、
紀伊国屋書店、2009.9

編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編
集協力、「新編 日本のフェミニズム」（8巻 ジェンダーと教育）、岩波書店、2009.1

編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編
集協力、「新編 日本のフェミニズム」（10巻 女性史・ジェンダー史）、岩波書店、2009.2

編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編
集協力、「新編 日本のフェミニズム」（7巻 表現とメディア）、岩波書店、2009.3

編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編
集協力、「新編 日本のフェミニズム」（5巻 母性）、岩波書店、2009.4

編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編
集協力、「新編 日本のフェミニズム」（1巻 リブとフェミニズム）、岩波書店、2009.5

編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編
集協力、「新編 日本のフェミニズム」（3巻 性役割）、岩波書店、2009.7

編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編集協力、「新編 日本のフェミニズム」(4巻 権力と労働)、岩波書店、2009.8
編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編集協力、「新編 日本のフェミニズム」(11巻 フェミニズム文学批評)、岩波書店、2009.9
編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編集協力、「新編 日本のフェミニズム」(6巻 セクシュアリティ)、岩波書店、2009.10
編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編集協力、「新編 日本のフェミニズム」(2巻 フェミニズム理論)、2009.11
編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編集協力、「新編 日本のフェミニズム」(12巻 男性学)、岩波書店、2009.12
編著、伊藤公雄・伊藤るり・井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納実紀代編／斉藤美奈子編集協力、「新編 日本のフェミニズム」(9巻 グローバリゼーション)、岩波書店、2010.1

(2) 論文

「グローバリゼーションと日本の社会学教育」、社会学評論、58(4)、524-539頁、2008
「家族の臨界」、家族社会学研究、20-1、2008.4
「ケアの社会学 11章 官セクターの挫折」、『季刊 at』、13、2008.9
「ケアの社会学 12章 ふたたびケア労働をめぐる：グローバリゼーションとケア」、『季刊 at』、14、2008.12
「ケアの社会学 13章 当事者とは誰か?」、『季刊 at』、15、2009.4
「ケアの社会学 14章 次世代福祉社会の構想」(連載完結)、『季刊 at』、16、2009.7
「グローバリゼーションとケア 外国人労働者はケアの現場をどう変えるか」、東京女子大学社会学会紀要、38、195-233頁、2010.3

(3) 書評

タイモン・スクリーチ「春画 片手で読む江戸の絵」(文庫版解説)、講談社、2010.7
副田義也「福祉社会学宣言」書評論文、社会学評論、60(2)、2009

(4) 研究報告書

「科研費報告書 ジェンダー、福祉、環境および多元主義に関する公共性の総合的研究」、2008.8

(5) 啓蒙

単著、「男おひとりさま道」、法研、2009.9
単著、「サヨナラ、学校化社会」(文庫版)、筑摩書房、2008.10
共著、辻元清美、「世代間連帯」、岩波新書、2009

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

津田塾大学非常勤講師、2009
京都大学文学部非常勤講師、2010

(2) 学会

日本社会学会理事、国際交流委員会委員長、2006.10～2009.10

(3) 学外組織(学協会、省庁を除く) 委員・役員

日本学術振興会審査委員、2009.4～
日本学術会議第19期会員、2006.10～2009.10
日本学術会議第20期会員、2009.10～

1. 略歴

- 1981年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
1982年4月 城西大学経済学部専任講師（社会学）
1985年4月 城西大学経済学部助教授（社会学）
1993年6月 博士（社会学）取得（東京大学）
1995年4月 城西大学経済学部教授（社会学）
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（社会学）
1998年10月 オックスフォード大学セントアントニーズカレッジ上級客員研究員（～1999年10月）
2003年4月～ 東京大学大学院人文社会系研究科教授（社会学）

この間、エジンバラ大学ゲノム政策研究所 Distinguished Visiting Scholar を務める（2007.6）。

2. 研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要：以下の4つの領域を中心に研究をすすめている。

- (1) 科学技術の社会学におけるセクターモデルの地球環境問題、エネルギー問題への展開
- (2) 軍産学複合体の形成・展開過程の研究
- (3) 不確実性のもとでの社会的意思決定に関する理論社会学的研究
- (4) 知の失敗の研究の理論化

自己評価：

(1)は、クリーンな新エネルギー技術開発が地球環境問題を悪化させる可能性があることを解明し、予防原則を補完する「弱い凍結」の原則を示すことができた。(2)については、成果を英文の学術書として刊行することができた。現在進行中の仕事は(3)で、とくに科学社会学と理論社会学を接合する基礎枠組を構築し、単著にまとめることができた（著書を参照）。(4)は、すでに行った知の失敗の研究を新たに展開する見本例が発見され、分析をすすめ、近い将来独自の理論化を行うことをめざしている。

c 主要業績

(1) 著書

単著、「テクノサイエンス・リスクと社会学—科学社会学の新たな展開—」、東京大学出版会、2009

共編、「年報 科学・技術・社会 第18巻」、I & K コーポレーション、2009

(2) 論文

「The complex social realities of bioethics in the science-technology-society interface」、Proceedings of the international Workshop on War and Peace、pp. 176-197、2009

「Theoretical challenges for the current sociology of science and technology: A prospect for its future development」、*East Asian Science, Technology & Society: An International Journal*, Vol. 4, No. 1, pp. 129-136, 2010.

「分野別研究動向（科学技術）—科学技術の社会学の現在、そして未来—」、『社会学評論』、第59巻、第2号、405-420頁、2008

(3) 学会発表

「Opening the black box of the institutional context of technology: Reconsidering sociology and history in technology studies」、4S/EASST Joint Meeting、Erasmus University, Rotterdam、2008.8.20

「The Complex Social Realities of Bioethics at the Science-Technology-Society Interface」、Invited paper given at War and Peace Workshop、International House, Tokyo、2008.12.22

「STS in Japan and East Asia」、Invited paper given at EASTS Conference、National Yang-Ming University, Taipei、2009.6.19

「Sociology」、Guest Lecture given at Advance Summer School on Radioactive Waste Disposal with Social Scientific Literacy、University of California、Berkeley、2009.8.3

「『生命倫理』に潜む多元的現実—科学社会学の視点—」、総合研究大学院大学「科学と社会シンポジウム」、湘南国際村センター、2008.1.30

「軍民両用技術にかかわる灰色領域について」、外務省軍縮不拡散・科学部生物・化学兵器禁止条約室「バイオセイフティ・バイオセキュリティ勉強会」、外務省、2008.6.3

「難問解説」、科学技術振興機構研究開発戦略センター「新興・分野融合フォーラム」、科学技術振興機構研究開発戦略センター、2008.8.4

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京大学大学院理学系研究科冬季集中講義非常勤講師、2008.2

(2) 行政

「日本学術振興会特別研究員等審査会」、研究計画立案監理、審査委員、2008.7～2010.6

(3) 学会

「Society for the Social Studies of Science」、役員・委員、理事、2009～

「International Journal of Technoethics (IGI Global)」、役員・委員、編集理事、2010～

「International Sociological Association, Research Committee on the Sociology of Science & Technology (RC 23)」、役員・委員、評議員、2010～

教授 **武川 正吾** TAKEGAWA, Shogo

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~takegawa/>

1. 略歴

1984年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学

社会保障研究所、中央大学を経て、1993年4月から東京大学助教授

現在 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

福祉社会学

b 研究課題

(1) 社会政策および社会計画に関する理論的研究

(2) 日本の地域社会計画に関する実証的研究

(3) イギリスをはじめとする諸外国の社会政策に関する研究

(4) 社会保障をはじめとする社会政策に関する政策論的研究

(5) 福祉国家と福祉社会に関する理論的実証的研究

(6) 社会政策と社会意識に関する実証的研究

(7) 健康の不平等に関する実証的研究

c 主要業績

(1) 著書

分担執筆、舩橋恵子・宮本みち子編、「雇流動化のなかの家族」、ミネルヴァ書房、2008.3

分担執筆、二木立ほか編、「福祉社会開発学——理論・政策・実際」、2008.3

分担執筆、上野千鶴子ほか編、「ケア その思想と実践5 ケアを支えるしくみ」、2008.6

編著、西平直、「死生学 3 ライフサイクルと死」、2008.7

編著、「シティズンシップとベーシック・インカムの可能性」、法律文化社、2008.10

単著、「社会政策の社会学——ネオリベラリズムの彼方へ」、ミネルヴァ書房、2009.9

(2) 論文

- 「地域福祉の主流化とローカル・ガバナンス」、地域福祉研究、No.36、5-15 頁、2008.3
「縮小社会における地域福祉と地域社会」、地域社会学会年報、20 集、9-22 頁、2008.5
「セーフティネットかナショナルミニマムか」、社会福祉研究、第 102 号、38-44 頁、2008.7
「社会政策学会の再々出発」、社会政策、第 1 巻第 1 号、7-19 頁、2008.10
「東アジアの地域統合と社会保障——共通社会政策の可能性」、週刊社会保障、2510、2008.12

(3) 書評

「京極高宣『新しい社会保障の理論を求めて』」、一般雑誌、『月刊福祉』、2008.7

(4) 啓蒙

- 「少子化、何が問題か、何が対策か」、一般雑誌、『学術の動向』、2008.4
「地域福祉の主流化と地域包括ケアの課題」、その他、『社会保障年鑑』、2008.5
「韓国の福祉事情——福祉国家形成の 10 年」、一般雑誌、『福祉介護機器+』、2008.6
「これからの社会政策研究」、その他、『同志社社会福祉教育・研究支援センター ニュースレター』、2008.6
「忘れえぬ先生の笑み」、その他、『追悼・島崎晴哉先生を偲んで』、2008.6
「イギリスの高齢者福祉事情」、一般雑誌、『福祉介護機器+』、2008.8
「法律文化社の 60 年とこれからへのメッセージ」、その他、『法律文化社創設 60 年とこれから』、2008.10

3. 主な社会活動

(1) 行政

- 国家公務員採用 I 種試験、「(人間科学 II)」試験専門委員、2006～
法務教官採用試験、専門委員、2006～
船橋市社会福祉審議会、委員長、2006～

(2) 学会

- 「日本社会政策学会」、その他、代表幹事、2006
「日本社会学会」、役員・委員、研究活動委員、2007

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

- 「国立社会保障・人口問題研究所」、編集委員、2007～
「独立行政法人国立女性教育会館」、紀要編集委員、2007～
「家計経済研究所」、研究助成審査委員、2007～
「福祉医療機構」、基金事業審査・評価委員、2007～

教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji

1. 略歴

- | | |
|-------------|-------------------------------|
| 1981 年 3 月 | 東京大学大学院社会学研究科修士課程修了 |
| 1983 年 3 月 | 東京大学大学院社会学研究科博士課程中退 |
| 1983 年 4 月 | 東京大学教養学部助手 |
| 1986 年 4 月 | 法政大学社会学部専任講師 |
| 1988 年 4 月 | 法政大学社会学部助教授 |
| 1994 年 10 月 | 東京大学文学部助教授 (東京大学大学院社会学研究科担当) |
| 1995 年 4 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (文学部担当) |
| 2000 年 4 月 | 同研究科文化資源学専攻助教授 (形態資料学専門分野) 併任 |
| 2005 年 9 月 | 東京大学大学院人文社会系研究科教授 (文学部担当) |

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要

- (1) 歴史社会学の思想と方法。一つの基礎資料としての柳田国男を中心とした全集の編纂。
- (2) モノとしての書物をモデルとしたメディア文化の地層分析。読書空間論。
- (3) 社会調査の社会史。日本近代における調査の実践と方法意識の展開について。
- (4) 文字テキスト以外の資料へのテキスト概念の可能性の拡大。かわら版・新聞錦絵データベースの実験、など。

c 主要業績

(1) 論文

『大阪民俗談話会』を考える」、柳田国男研究論集、6、2-26 頁、2008.8

「歴史社会学におけるオーラルティの位置」、日本オーラル・ヒストリー研究、4、3-18 頁、2008.10

「テキスト空間論の構想：日本近代における出版を素材に」、齋藤晃編『テキストと人文学』人文書院、153-171 頁、2009.1

「方法としての民俗学／運動としての民俗学／構想力としての民俗学」、小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房、260-281 頁、2009.3

「関東大震災における流言蜚語」、死生学研究、11、45-110 頁、2009.3

『遠野物語』から『郷土誌』へ」、石井正己・遠野物語研究所編『近代日本への挑戦』三弥井書店、93-111 頁、2009.6

「民間学者としての喜多川周之」、江戸東京博物館都市歴史研究室編『喜多川周之コレクション』調査報告書第22集、123-148 頁、2010.3

(2) 書評

「福田アジオ『日本の民俗学』」、吉川弘文館、2009.10、その他、『読書人』、2009年12月18日号、2009.12

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本社会学会」、一般会員、2008-9

「日本生活学会」、一般会員、2008-9

「都市社会学会」、一般会員、2008-9

「関東社会学会」、一般会員、2008-9

准教授 **白波瀬 佐和子** SHIRAHASE, Sawako

1. 略歴

1997年 オックスフォード大学 University of Oxford (社会学)・社会学博士

1997年4月 国立社会保障・人口問題研究所室長

2003年4月 筑波大学大学院システム情報工学研究科助教授

2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授 (社会学)

2. 研究活動

a 専門分野

社会階層論、人口社会学、少子高齢化の国際比較

b 主要業績

(1) 著書

単著、『日本の不平等を考える 少子高齢化の国際比較』、東京大学出版会 2009.5

編著、『リーディングス 戦後日本の格差と不平等 3：ゆれる平等神話 1986-2000』(盛山和夫・原純輔と共編著)、日本図書センター、2008年

(2) 論文

“Change in Living Arrangement of Unmarried Adults with Parents and Income Inequality in Japan with Comparative Perspective”、『東大社研パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ』、

19号、pp.1-34、2009

“Delay in Marriage and Income inequality in Japan: The Impact of the Increased Number of Unmarried Adults Living with Their Parents on the Household Economy”, *The German Socio-Economic Panel Study papers*, No. 190、2009

“Age, Change, and Poverty: Coping with Social Transformation”, *Global Asia*、Vol.4 No. 1、pp.38-42、2009

「人口高齢化と経済格差拡大・再考」(竹内俊子と共著)、『社会学評論』、第60巻第2号、pp.259-278、2009
「変容する地域の人口構成と市民像——人口減少社会の世帯と家族」、『月刊 自治研』、Vol. 51 No. 592、pp.25-33、2009

「少子高齢化と格差社会」、鉄道弘済会社会福祉部編『脱・格差社会をめざす福祉 現代の貧困と地域の再生』明石書店、pp.80-92、2009

“Marriage as An Association of Social Classes in a Low Fertility Society”, *Social Class in Contemporary Japan*, edited by Hiroshi Ishida and David Slater, (London: Routledge), pp.57-84、2009

(3) 学会発表

“Gender Gap in the Relationship between Delay in Marriage and Income Inequality In Comparative Perspective”, The 22nd International Symposium at the Institute of Social Science, University of Tokyo、2009

“Socio-economic Inequalities in a Rapidly Ageing Society, Japan”, International Symposium、Deutsches Institut Japanstudien、2009

“Youth in Changing Family Formation and Social Inequality in Japan”, The conference on Gender Dynamics in Education, Labor Markets and Social Policy-Regulation and Outcomes in Comparative Perspective、Hanse-Wissenschaftskolleg, Delmenhorst, Bremen、2009

“Socio-economic Inequalities in a Rapidly Ageing Society, Japan”, Ph.D labo of International Sociological Association、Yokohama、2009

「階層帰属意識と世代間意識」、日本社会学会、立教大学、2009

“Failure to Launch in Contemporary Japan: Delay in Marriage and Income Inequality in Comparative Perspective”, International Sociological Association, RC28 meeting、Renmin University of China, Beijing、2009.5

「雇用不安定社会の階層と格差」、生活経営学部会・家庭経済学部会、東京家政大学、2009.8

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

お茶の水女子大学非常勤講師 (2008年度)

東北大学非常勤講師 (2008年度)

国立女性教育会館研究ジャーナル査読委員 (2008年度～)

日本学術会議連携会員 (2006年度～)

(2) 学会

「日本社会学会」、国際交流委員、2006.11～

「日本社会学会」、世界社会学組織委員会副委員長 (2008年度～)

「福祉社会学会」、研究活動委員、2007.5～

1. 略歴

1990年3月	東京大学大学院社会学研究科社会学修士課程修了
1995年	東京大学大学院社会学研究科社会学博士課程単位取得退学
1995年	信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助手
1995年	専修大学文学部社会学科非常勤講師
1996年	富山大学人文学部非常勤講師
1998年	徳島大学総合科学部非常勤講師
1999年	岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座講師
1999年	信州大学人文学部人間情報学科非常勤講師
2000年	筑波大学第一学群社会学類非常勤講師
2001年	岡山大学文学部行動科学科社会学・文化人類学講座助教授
2002年	信州大学人文学部人間情報学科文化情報論講座助教授
2005年	名古屋大学大学院国際多元文化専攻ジェンダー論講座非常勤講師
2006年	東京大学大学院人文社会系研究科社会学専門分野准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会問題の社会学

b 主要業績

(1) 論文

「言説分析は、社会調査の手法たりえるか」、社会と調査、No.3、52-58頁、2009.9

(2) マスコミ

新聞、「異見新言」、朝日新聞、2008.5.10

(3) 研究報告書

「人口減少時代の社会学をめざして」、1-52頁、2009.3

「地域ブランドの手法による地域社会の活性化」、59-62, 293-294頁、2009.3

(4) 会議主催 (チェア他)

「関東社会学会テーマ部会『人口減少時代の地域づくり』」、実行委員、首都大学東京、2008.6.21～2008.6.22

「UT-SNU Sociology Joint Forum2008」、主催、東京大学文学部、2008.11.20～2008.11.21

「関東社会学会大会」、実行委員、テーマ部会A、お茶の水女子大学、2009.6.21

(5) 教科書

「社会福祉学学習双書2009 社会学」、編集委員、社会福祉法人 全国社会福祉協議会、2009

「社会福祉学学習双書2009 社会学」、社会福祉法人 全国社会福祉協議会、2009

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

熊本大学文学部非常勤講師、2008.12

26 社会心理学

教授 山口 勸 YAMAGUCHI, Susumu

1. 略歴

- 1974年 3月 東京大学文学部第四類（心理学専修課程）卒業（文学士）
- 1976年 3月 同 大学院人文科学研究科修士課程心理学専門課程 修了（文学修士）
- 1980年 6月 同 博士課程心理学専門課程 修了退学
- 1980年 7月 同 文学部社会心理学研究室助手 ～'82年 3月
- 1983年 4月 学習院大学文学部心理学科助手 ～'84年 3月
- 1984年 4月 米国オハイオ州立大学大学院留学 ～'84年 12月
- 1985年 2月 放送大学客員助教授 ～'85年 3月
- 1985年 4月 同 教養学部助教授 ～'87年 9月
- 1987年 10月 東京大学文学部助教授（社会心理学）
- 1991年 9月 博士（社会学）学位取得（東京大学）
- 1994年 6月 東京大学文学部教授（社会心理学）
- 1995年 4月 同 大学院人文社会系研究科教授（社会心理学）～現在
- 1995年 7月 米国ハワイ大学客員教授 ～'95年 12月
- 2000年 8月 米国ミシガン大学客員教授 ～'00年 12月
米国ハワイ大学、グローバリゼーション研究センター（affiliate faculty）～現在

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

集団主義的傾向の比較文化的研究 集団主義的傾向は、日本でだけ見られるものではない。さらに、集団主義的な文化のもとでも、個人差がみられる。現在は集団主義的傾向と、集団として環境をコントロールしようとする傾向との関連を研究している。

個人の集団内行動 個人の集団内行動は、集団から独立している場合の行動と、多くの場合異なっている。また、他者の行動を観察する場合でも、その行動が集団の影響下で行われた場合と、そうでないときとは、異なった判断がなされることが多い。こうした点について、実験的研究を行っている。

甘えに関する研究 日本人に特有な心理的傾向と考えられている「甘え」については、実証的な研究が少ない。そこで、この問題について日本でのデータ収集と結果の分析を終えたところである。これから、日本人の甘えと同様の現象が、他のアジア文化や西欧の文化でも見られるかどうかを問題とする予定である。

自尊心に関する実験的研究 近年、日本人の自尊心は欧米人のそれと比較して低いことが主張されている。しかしながら、日本人には謙遜をするという傾向があることを忘れてはならない。したがって、実際には高い自尊心を表明しないのか、それとも本当に自己評価が低いのか、見きわめる必要がある。この点について、実験的な検討を比較文化的に行っている。

自己評価 すでに行った諸研究のうち、一部の研究論文を公表したが、まだ未公開の研究が残されている。これまで以上に、体系的な論文執筆により多くの時間を割くことを考えている。

c 主要業績

(1) 著書

編著、Sorrentino, R. M., Yamaguchi, S., 「Handbook of motivation and cognition across cultures」、Elsevier、2008

(2) 論文

Muramoto, Y., Yamaguchi, S., & Kim, U. (2009). Perception of achievement attribution in individual and group contexts: Comparative analysis of Japanese, Korean, and Asian-American results. *Asian Journal of Social Psychology*, 12, 199-210.

Yamaguchi, S., Lin, C., Morio, H., & Okumura, T. (2008). Motivated expression of self-esteem across cultures. In R. M. Sorrentino & S. Yamaguchi (Eds.), *Handbook of motivation and cognition across*

- cultures*. (pp. 369-392). San Diego, CA: Elsevier.
- Sorrentino, R. M., & Yamaguchi, S. (2008). Motivation and cognition across cultures. R. M. Sorrentino & S. Yamaguchi (Eds.), (pp. 1-15). San Diego, CA: Elsevier.
- Yamaguchi, S., Okumura, T., Chua, H. F., Morio, H., & Yates, F. J. (2008). Levels of control across cultures: Conceptual and empirical analysis. In F. J. R. Vvan de Vijver, D. A. van Hemert & Y. H. Poortinga (Eds.), *Multilevel analysis of individuals and cultures* (pp. 123-144). New York: LEA.
- (3) 学会発表
- Yamaguchi, S., Morio, H., Yagi, Y., Lin, C., & Cai, H. (2009, December 13). Functional universality of self-esteem across cultures. Presented at the 8th biannual meeting of the Asian Association of Social Psychology, New Delhi, India.
- Fukuzawa, A., & Yamaguchi, S. (2009, December 13). Relationship among self-esteem instability, achievement motivation, and defensive pessimism. Presented at the 8th biannual meeting of the Asian Association of Social Psychology, New Delhi, India.
- Yamaguchi, S., Morio, H., Okumura, T., Lin, C., Yagi, Y., Sawaumi, T., Li, Z., Nagashima, Y., & Sugiyama, Y. (2009, August 16). Functional equivalence of self-esteem in Japanese culture. Presented at the 6th Biennial Conference of International Academy for Intercultural Research, Honolulu, USA.
- Yamaguchi, S., Lin, C., Morio, H., & Okumura, T. (2009, February 6) Functional equivalence of self-esteem between Western and East-Asian cultures. Presented at the 10th annual conference of the Society for Personality and Social Psychology, Tampa, Florida.
- Yamaguchi, S., Lin, C., Morio, H. (2008, October 24). Motivated expression of self-esteem across cultures. Presented at the 2008 Annual Meeting of the Society of Experimental Social Psychology, Sacramento, California.
- Yamaguchi, S., Lin, C., Morio, H., & Okumura, T. (2008, July 28). *A critical examination of the East Asians' Self-Criticism Hypothesis*. Presented at the The 19th International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Bremen, Germany.
- Fukuzawa, A., & Yamaguchi, S. (2008, July 28). *Optimism associated with fluctuation of self-esteem: Relationship between self-esteem fluctuations and a sense of self-improvement among Japanese*. Presented at the 19th International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology, Bremen, Germany.
- Singh, R., Fujimori, T., Yamaguchi, S., Osborne, C., Srinivasan, H., & Fisher, J. D. (2008, July 23, 2008). *Culture and power distance effects on norm-enforcement: Intuitive prosecutors as fair but softer toward leaders*. Presented at the XXIX International Congress of Psychology, Berlin, Germany.

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

New York University 特別講演、2008.10

Sapienza University of Rome 特別講演、2009.3

教授 池田 謙一 IKEDA, Ken'ichi

<http://socpsy.L.u-tokyo.ac.jp/ikeda/>

1. 略歴

- 1978年 3月 東京大学文学部社会心理学専修課程卒業 文学士
- 1980年 3月 東京大学大学院社会学研究科社会心理学専門課程修士課程修了 社会学修士
- 1982年 3月 東京大学大学院社会学研究科社会心理学専門課程博士課程中途退学
- 1982年 4月 東京大学新聞研究所助手
- 1987年 4月 明治学院大学法学部専任講師

1990年 4月 明治学院大学法学部助教授（政治学科 [政治社会学・情報学]）
 1992年 4月 東京大学文学部助教授（社会心理学）
 1995年 3月 博士（社会心理学）
 1995年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（大学院大学化に伴う）
 2000年 8月 東京大学大学院人文社会系研究科教授
 現在にいたる

1995年 7-9月 ミシガン大学政治研究センター客員研究員（文部省短期在外研究）
 1996年 7-8月, 1998年 11月 ニュージーランド・ビクトリア大学心理学科客員研究員
 1997年 8月-1998年 5月 インディアナ大学高等研究所客員研究員
 2003年 8月-9月 トロント大学都市・コミュニティ研究センター・客員研究員
 2007年 8-9月 トロント大学社会科学部客員研究員

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

(1) 概要

○政治社会心理学の再構成：実証研究の主力は、政治社会心理学に認知科学的なアプローチを展開するところにある。世論調査、投票行動調査の分析をこの観点から行うとともに、投票行動・世論過程の理論的再構成をめざしている。

○コミュニケーション行動の研究：マスメディアや高度情報システム諸領域におけるコミュニケーション行動の生成・変容を検討している。電子ネットワークの実証研究が主体である。

○社会のリアリティの社会心理学的研究：上記諸研究に基づきつつ「認知社会心理学」の理論化の試みを継続している。特にわれわれの社会のリアリティを構成する諸力の社会心理学的な分析に力点を置いている。

○データ・サイエンス：以上の実証研究は調査データの収集と密接に結びついている。これに関わる中で、国際・国内の共同研究に多く関わり、実施した調査データの公開作業を活発に行っている。

(2) 自己評価

・21世紀に入らな中でいくつかの国際共同研究に参加を継続している。特に日米共同の選挙調査 JEDS96、JEDS2000 は成功し、双方とも日米両言語でデータ公開し、多くの需要がある。国際的な研究の文脈では、アジア諸国の市民文化・政治文化・民主主義の国際比較調査アジアン・バロメータの実施を継続している。また、世界 50 カ国以上にまたがる選挙制度の効果の国際比較研究 C S E S にも日本代表として加わっており、第三期の比較データ取得に貢献している。

・2001 年度から 5 年間、科学研究費特別推進研究の研究代表者となり、同一対象に対する全国パネル調査 (JES3) を実施中である。2001 年参議院選挙前後調査、2002 年統一地方選挙前調査、2003 年衆議院選挙前後調査、2004 年参議院選挙前後調査、2005 年衆議院選挙前後調査を同一の対象者に対し、全国サンプルにて調査を進めている。これは日本の選挙研究の背骨を構成する主データとなり、日本を国際的なデータベースのブラックホールから救うためにも不可欠のものである。この研究の中から出た拙論文に対し、第八回三宅賞(2004 年)を受賞した。これは当該年度における実証的政治学の最優秀論文に与えられる賞である。この調査データに基き、その後複数の論文を執筆、さらに後続調査 (JES4) にも分担研究者として加わっている (2007 年度より 5 年)。

・これらのデータ取得に際して、個人の研究としてソーシャル・ネットワーク研究の開拓を進めており、選挙調査以外にも、JGSS2003 (日本版総合社会調査 2003 年版) においては全国規模で、日本人の基本的なソーシャルネットワークの把握を試み、重要他者・政治的コミュニケーションを行う他者、職業移動に重要な他者間のネットワークの関連性の把握を目指す作業に協同で取り組んでいる。JGSS 調査への協力は継続しており、2005 年度からは韓国・台湾との共同研究となった。

・また、上記の諸研究に関し、理論的な視点からも著作を世に問うている。国際共同研究も順調に進行中であり、学会発表および投稿・出版している。

・コミュニケーション行動研究の領域でも、リアリティの共有をテーマにいくつかの研究を進めつつある。電子ネットワークが成熟しつつあるいま、複数の共同研究を実施しており、日韓のオンラインゲーム世界の行動と現実世界との相互作用の研究、日本のインターネットユーザのデジタルデバイスと社会関係資本の研究(カナダとの共同研究)、日韓の消費行動のリアリティ研究など、精力的に発表を進めている。

・学生に対する指導は、ここ数年多角的な領域にわたっており、毎年数本の世論調査を指導している。また

教員との共同研究を拡大してきており、共著論文が増えている。この2年では大学院生を研究者として1人、社会人として数名を世に送り出した。

・自己評価であるからマイナス面についても記しておく。基本的に仕事量が過負荷になりすぎており、特に研究周りの雑用が激増している。外国との交渉や出張、データの整備・分析などの作業は必ずしもRAでもこなせるとは限らず、研究者本人の負担が重い。このために、データの分析、執筆、推敲などに割きうる時間が激減している。

c 主要業績

(1) 著書

編著、宮田加久子、「ネットが変える消費者行動：クチコミの影響力の実証分析」、NTT出版、2008

共著、Nan Lin and Bonnie H. Erickson(Eds.)、「Social Capital: Advances in Research」、Oxford University Press、2008

共著、Yun-han Chu, Larry Diamond, Andrew J. Nathan, and Doh Chull Shin (Eds.)、「How East Asians View Democracy」、Columbia University Press、2008

共著、谷岡一郎・仁田道夫・岩井紀子(編)、「日本人の意識と行動」、東京大学出版会、2008

共著、Ray-May Hsung, Nan Lin, Ronald Breiger (Eds.)、「Contexts of Social Capital: Social Networks in Communities, Markets and Organizations」、Taylor & Francis、2008

共著、Maren Hartmann, Patrick Roessler, & Joachim R. Hoeflich (Eds.)、「After the Mobile Phone? Social Changes and the Development of Mobile Communication」、Berlin, Germany: Frank & Timme、2008.11

辞書・辞典・事典、日本社会心理学会、「社会心理学事典」、丸善、2009.4

(2) 論文

「Does Political Participation Make a Difference?: The Relationship Between Political Choice, Civic Engagement and Political Efficacy」、Electoral Studies、27、pp.77-88、2008

「地域オンラインコミュニティと社会関係資本—地域内パーソナルネットワークの異質性と社会的寛容性に注目して—」、情報通信学会誌、85、47-58頁、2008

「鉄道事業者に対する社会的信頼の規定因：共分散構造分析を用いたモデルの構成」、社会心理学研究、24、2008

「消費者行動における「他者」の多面性を測定する：スノーボールサンプリング調査の意義の検証」、マーケティングジャーナル、108、75-88頁、2008

「地域オンラインコミュニティが社会的ネットワークに持つ効果の検討：社会的ネットワークの同質性・異質性に注目して」、平成19年度情報通信学会年報、41-54頁、2008

「Selective exposure in political web browsing: Empirical verification of 'cyber-balkanization' in Japan and the U.S.」、Information, Communication & Society、2008

「地域オンラインコミュニティと地域参加に対して地域の構造要因が及ぼす影響の検討」、日本建築学会計画系論文集、630、1743-1748頁、2008.8

「PCによるメール利用が社会的寛容性に及ぼす効果：異質な他者とのコミュニケーションの媒介効果に注目して」、社会心理学研究、24、120-130頁、2008.11

「The Impact of Diversity in Informal Social Networks on Tolerance in Japan」、British Journal of Political Science、39、2009.3

「インターネットによる社会的ネットワークの広がり」、児童心理学の進歩、2008年度年報、2009.3

「地域オンラインコミュニティが地域社会への参加に及ぼす因果的影響の検討」、日本建築学会計画系論文集、638、863-869頁、2009.4

「消費者行動をとらえる文理融合研究」、電子情報通信学会誌、92、700-705頁、2009.8

「Selective exposure in political web browsing: Empirical verification of 'cyber-balkanization' in Japan and the U.S.」、Information, Communication & Society、12、pp.929-953、2009.9

「Institutional Incentives and Trust: Marginalized Groups and the Creation of Trust in Local Government」、Social Science Quarterly、90、pp.911-926、2009.10

「多様化するテレビ報道が有権者の選挙への関心および政治への関与にもたらす効果の検討：内容分析と大規模社会調査の融合を通して」、社会心理学研究、25、42-52頁、2009.11

(3) 啓蒙

「共有を意図的に進めるコミュニケーション」、一般雑誌、『BerD』、11、2-6 頁、2008.1

「信頼形成と安心」、一般雑誌、『環境安全』、116、3-5 頁、2008

(4) 研究報告書

「社会関係資本を高めるためのインターネットの集会的利用の検討」、東京大学人工物工学研究センター学内連携研究・RA活動報告書、125-130 頁、2008.3

「インターネット上のコミュニケーションシステムがリアル社会のインタラクションに与える影響の研究」、東京大学人工物工学研究センター学内連携研究・RA活動報告書、142-149 頁、2009.3

「インターネット上のコミュニケーションシステムとリアル社会のインタラクションの関係に対して、地域の物理的要因が及ぼす影響の研究」、東京大学人工物工学研究センター学内連携研究・RA活動報告書、233-237 頁、2009.3

(5) 学会発表

「The Effects of Network Social Capital on Personal and Collective Outcomes in Japan: The JGSS 2003 Dataset」、Social Capital Conference、Taipei、2008.5.29

「The effect of gendered social capital on political participation: Using the position generator method on the JES3 dataset」、Social Capital Conference、Taipei、2008.5.30

「Social capital as a pan-cultural determinant of the consolidation of democracy: Results from the second wave of the Asian Barometer Survey」、Asian Barometer Conference、Taipei、2008.6.22

「Populistic Koizumi years and thereafter: Japanese Elections in the early 21st Century based on Japanese Election Studies.」、Asian Study Corroquium、Georgia State University、2009.3.16

「A latitude theory of political party support and meaningful choice: Analyses from Japanese elections from 1996 to 2007」、IPSA 21st World Congress、Santiago、2009.7.14

3. 主な社会活動

(1) 学会

「Asian Social Psychology Association」、役員・委員、Consulting Editor、2008.4～

(2) 学外組織委員（学協会、省庁を除く）委員・役員

「大阪商業大学」、嘱託研究員、2008.8～

「独立行政法人 情報処理推進機構・情報セキュリティと行動科学研究会」、委員、2008.4～

准教授 **唐沢 かおり** KARASAWA, Kaori

1. 略歴

1992 年 University of California, Los Angeles Ph.D

1992 年 京都大学大学院文学研究科博士後期課程

1992 年 4 月 名古屋明德短期大学講師

1995 年 4 月 日本福祉大学情報社会科学部助教授

1999 年 6 月 名古屋大学情報文化学部助教授

2001 年 4 月 名古屋大学大学院環境学研究科助教授

2006 年 10 月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会心理学

b 主要業績

(1) 著書

編著、「幸せな高齢者としての生活」、ナカニシヤ、2009

辞書・辞典・事典、「日本社会心理学事典」、丸善株式会社、2009

(2) 論文

「高齢者介護における人間関係と家族介護者の精神的健康」、人間環境学研究、7、1-7頁、2009

(3) シンポジウム・講演

「高齢者介護における人間関係と精神的健康」、日本行動医学学会、2008.3.20

「社会心理学の重層性と可能性」、日本心理学会、2009.8

「脳神経科学の発展と社会心理学」、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会、2009.10

(4) 学会発表

「Responsibility Attribution Bias towards Reducing Inequality by」、9th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Albuquerque, New Mexico、2008.2

「平等主義規範が潜在的な性役割ステレオタイプ反応に及ぼす影響」、日本心理学会第72回大会、北海道大学、2008.9.21

「遺伝子組み換え技術に対する態度とその規定因—実在する生物を対象とした検討—」、日本社会心理学会第49回大会、2008.11.3

「制御焦点関連の感情が目標と方略の変容に与える影響」、第49回社会心理学会大会、鹿児島、2008.11.3

「社会心理学方法論の再検討 パート2」、日本社会心理学会第49回大会、2008.11.3

「他者の視線が性役割ステレオタイプの想起可能性に及ぼす影響」、日本社会心理学会第49回大会、鹿児島大学、2008.11.3

「視点取得と出来事の帰属の関連—父子関係における検討—」、日本社会心理学会 第49回大会、2008.11.3

「学生・市民の分野別科学イメージ調査」、第7回科学技術社会論学会年次研究大会、大阪大学、2008.11.8

「出来事の帰属が父子関係の良好さに与える効果：パネル調査による検討」、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会、2009

「Effects of the fear-arousing communication for disaster preparedness actions and longitudinal changes of fear and risk perception」、10th Annual meeting of the society for personality and social psychology、2009.2.5

「Someone to watch over me: The effect of the ingroup norm on implicit gender role attitudes」、10th Annual meeting of the society for personality and social psychology、2009.2.5

「The effects of negative emotions guided by regulatory focus on decision making about goal pursuit.」、The 10th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Tampa USA、2009.2.7

「Japanese Images of the Scientific Disciplines」、Society for Social Studies of Science、2009.10

「社会心理学方法論の再検討とその拡張の試み」、中部哲学会、2009.10

「新たな社会心理学の展開と現状からの脱却」、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会、2009.10

「Transgressor Apology for the Victim and the Third-party: Its Effects on Cognition, Emotion, and Motivation」、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会、2009.10

「制御焦点の活性化とポジティブ/ネガティブな自己側面への注目が利得接近傾向と損失回避傾向にもたらす影響」、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会、2009.10

「制御焦点が多目的状況での制御資源の配分に与える影響」、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会、2009.10

「親との政治的会話と子どもの政治的有効性感覚の関連」、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会、2009.10

「侵害者の謝罪に対する被害者と第三者の許し：社会的目標の観点からの検討」、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会、2009.10

「高齢労働者・女性労働者に対する態度—高齢者と女性に対する視点取得の効果の違い—」、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会、2009.10

(5) 受賞

「日本グループ・ダイナミクス学会・優秀学会発表賞」、日本グループ・ダイナミクス学会、2009.11

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

京都大学教育学研究科非常勤講師、2009.9～

(2) 学会

「日本グループダイナミクス学会」、役員・委員、常任理事、2008.4～

「日本社会心理学会」、役員・委員、常任理事、2008.4～2009.3

27 文化資源学

文化経営学専門分野

教授 **木下 直之** KINOSHITA, Naoyuki

1. 略歴

- 1979年 3月 東京芸術大学美術学部芸術学科卒業
- 1981年 3月 東京芸術大学大学院美術研究科芸術学専攻修士課程中途退学
- 1981年 4月 兵庫県立近代美術館学芸員
- 1995年 4月 同美術館学芸課長に昇任
- 1997年 4月 東京大学総合研究博物館助教授
- 2000年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2001年 4月 国立民族学博物館助教授併任（～2003年4月）
- 2004年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 b 研究課題

幕末・明治期の造形表現の形成と変容と展開を、従来の美術史学の枠組みを離れて、追跡している。既存領域である美術に隣接する写真、芸能、祭礼、見世物、民衆娯楽の領域に目を向けるとともに、それらの表現活動と社会の関係の解明にも取り組んでいる。いいかえれば、評価されないものの実態と、それを評価しない仕組みの双方を明らかにしたい。後者は当時の文化政策の研究へと展開するはずだ。開設時より関わった文化資源学専攻における新たな研究領域の開拓と構築に対し、こうした歴史的視点の導入を積極的に進めてきた。講義では毎年の「展示論」と「近代日本の文化政策」でこれを実践、著作では、編著『講座日本美術史』に発表の論文で展望を示した。

c 主要業績

(1) 著書

編著、「芸術が生まれる場」、東信堂、2009

編著、「鬼がゆく 江戸の華神田祭」、平凡社、2009.4

(2) 論文

「動物園に行こう」、松永澄夫編『環境、文化と政策』東信堂、205～226頁、2008

「日清戦争と原田重吉の奮闘」、五十殿利治編『近代舞台美術に関する視覚文化的研究』平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、53-61頁、2008

「清正公考——死してのち木像と銅像を遺すことについて」、『死生学』4巻、東京大学出版会、2008

「ミュージアムでなぜしゃべってはいけないの?」、『芸術の生まれる場』、東信堂、5-15 頁、2009

「仏像を拝まなくていいの?」、『芸術の生まれる場』、東信堂、16-25 頁、2009

「展示される戦利動物」、川口幸也編『展示の政治学』水声社、83-102 頁、2009.9

(3) 受賞

「第 58 回芸術選奨文部科学大臣賞(評論部門)」、『わたしの城下町』(筑摩書房、2007)、文部科学省、2008.3.10

3. 主な社会活動

(2) 学会

「文化資源学会」、会長

「明治美術学会」、理事

(3) 学外組織委員(学協会、省庁を除く) 委員・役員

「横浜美術館」、アドヴァイザー、2008～

「独立行政法人国立美術館」、運営委員、2009.4～

「独立行政法人東京国立近代美術館」、評議員、2008～

「東京都写真美術館」、評価委員、2009～

「静岡県立美術館」、第 3 者評価委員

准教授 **小林 真理** KOBAYASHI, Mari

1. 略歴

1987 年 3 月	早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業
1987 年 4 月	早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻入学
1990 年 3 月	早稲田大学大学院政治学研究科修士課程政治学専攻修了(政治学)
1990 年 4 月	早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻入学
1993 年 5 月	早稲田大学人間科学部助手(1996 年 3 月まで)
2006 年 3 月	早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程政治学専攻単位取得満期退学
2008 年 4 月	昭和音楽大学音楽学部助手
2000 年 4 月	静岡文化芸術大学文化政策学部講師
2001 年 1 月	博士(人間科学)
2004 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 文化資源学(文化政策学)

b 研究課題

文化を支える諸制度、それと反対のベクトルである文化の発展を阻害する制度について関心をもってきた。研究の中心を法制度においてきたが、最近では国や自治体の文化政策のドラステックな動きに対して、文化にとってよりよい政策の企画、立案、執行のあり方について考えている。とくに行政改革が現実に行われ、市町村合併の推進及び 2003 年に地方自治法改定で施行された指定管理者制度が導入される状況の中で、公立文化施設(美術館、文化ホール等)の望ましい運営方法とそれを管理する文化政策のあり方を研究の対象としてきた。

他方、芸術を支える制度としての劇場についても関心を持っており、この数年はドイツの劇場のあり方をめぐる動向、それを取り巻く文化政策、環境について関心をもって研究している。とはいえ、そもそも「制度」そのものについて疑問をもっていることから、あるべき「制度」に固執しているわけではない。むしろ「制度」を超えた活動、とくにドイツの社会文化活動とそれを巡る政策に大いなる関心を持っている。

c 主要業績

(1) 著書

共著、「芸術の生まれる場」、東信堂 2009.3

共著、佐々木雅幸、川崎賢一、河島伸子「グローバル化する文化政策」、2009.7

(2) 論文

「博物館法改正に関する一考察—誰のための博物館法か」、文化資源学、2008.3

「指定管理者制度の成果と課題」、地域政策研究、2009.3

「文化芸術施設の管理のあり方」、都市問題研究、2009.10

「「文化行政」とは何であったのか?自治体文化行政論再考」、地域政策、42-47 頁、2010.3

「地域に住まう?文化でつながるコミュニティの可能性」、住宅、3-10 頁、2010.7

(3) 研究報告書

「都市政策の課題と芸術文化の役割 研究ドキュメント 2004-2008」、2009.3

(4) 学会発表

「"Des competences partagees et des initiatives diversifiees", " Les moyens de financement des politique culturelles locales"」、Les Collectivite Locales et la culture en France et au Japon、2008.1.31

「The Policy Debate on Publicly-Funded Cultural Organisations in Japan」、Research seminar: Creativity and Cultural Policy in East Asian Contexts、2008.3.20

「Current Situation and Issues of Public Art Museum in Japan- from the Points of View of Cultural Policies」、2009、2009.10.28

「C」、2009 Annual Forum for Museum Directors & Strategic Alliance of Asia Pacific Museums、2009.10.28

「国立メディア芸術総合センターの課題-文化政策的視点から」、静岡文化芸術大学メディアアートフェスティバル 2009、2009.10.31

「Le cadre institutionnel des echanges culturels internationaux」、国際シンポジウム「演劇・舞踊・芸術環境 日仏交流の 20 世紀」、2009.11.27

「日本における芸術文化支援政策の制度、法と政策」、日伊の文化政策のあり方と課題 文化事業への官民支援、法、地域連携、2009.12.9

「行政構造改革が戦後日本の芸術文化政策の成果に与えた影響に関する研究 (中間報告)」、日本文化政策学会第 3 回年次大会、2010.1.9

「Creating Creative Cities? Cultural Administration in Japan since 1970」、Creating Cities: Culture, Space and Sustainability: The Cities, Culture, and Society (CCS) Conference、2010.2.26

「自治体文化行政における制度形成の課題?市民協働の方法と大学の媒介機能」、文化経済学会<日本> 2010 年研究大会、2010.7.3

(5) 会議主催 (チェア他)

「映画政策と積極的統制」、主催、2009.6.27

「日本文化政策学会第 3 回年次大会」、実行委員、ラウンドテーブル「提言—新しい政府に新しい文化政策を」議長、2009.9~2010.1.10

「2009 Annual Forum for Museum Directors & Strategic Alliance of Asia Pacific Museums」、2009.10.27~2009.10.29

「シンポジウム『国立メディア芸術総合センターを考える』」、2009.10.31

「国際シンポジウム『演劇・舞踊・芸術環境 日仏交流の 20 世紀』」、2009.11.25~2009.11.27

「日伊の文化政策のあり方と課題 文化事業への官民支援、法、地域連携」、2009.12.9

「文化政策領域における官民協働-日台韓の国際比較」、主催、2010.3.17~2010.3.18

(6) 教科書

「アーツマネジメント概論三訂版」、片山泰輔他、水曜社、2009

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

青山学院大学非常勤講師、2008.4~

京都造形大学非常勤講師、2008.10~2009.10

(2) 行政

「独立行政法人国立新美術館」、評議員、2008~

「埼玉県・川越市」、西部地域振興ふれあい拠点施設事業審査委員、委員、2008.4~

「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」、立案、委員、2009.4~

「武蔵野市」、立案、図書館基本計画策定委員会委員、2009.4～
「文部科学省」、図書館・博物館等への指定管理者制度導入に関する調査研究検討会委員、2009.6～
「大宮盆栽美術館」、開設準備委員会委員、2009.7～
「日本芸術文化振興会」、芸術文化振興基金審査委員、2009.10～

形態資料学専門分野

教授 **渡辺 裕** WATANABE, Hiroshi

1. 略歴

1972年3月 千葉県立千葉高校卒業
1977年3月 東京大学文学部第1類（美学芸術学専修課程）卒業
1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（美学芸術学）修了
1983年7月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（美学芸術学）単位取得退学
1983年7月 東京大学文学部助手（美学芸術学）
1986年4月 玉川大学文学部専任講師（芸術学科）
1991年4月 玉川大学文学部助教授
1992年4月 大阪大学文学部助教授（音楽学）
1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（美学芸術学）
2001年7月 博士（文学）学位取得（東京大学）
2002年1月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 研究活動

a 専門分野

音楽文化論、音楽社会史

b 研究課題

音楽文化の伝承、受容、流用にかかわるプロセスとメカニズムを歴史研究によって解明することを課題としている。これまで、西洋芸術音楽の「近代化」とテクノロジー、西洋芸術音楽における演奏伝統の形成とその伝承メカニズム、日本近代の音楽文化におけるメディアや言説といったテーマを取り上げてきた。

ここ数年は、場所の表象や記憶の生成・変容のメカニズムやそれに関わる多様な文化的コンテクストの相互作用を解明し、その中で芸術作品や美的体験の果たす役割を考えることを課題としている。作品体験と現実の都市の表象とを媒介する場としての文学散歩、映画のロケ地巡りとといった営みの考察、廃墟趣味や路上観察の見直し等の試みを進めており、近年の「視覚文化論」、「聴覚文化論」などの進展とも連動しながら、狭義の「芸術」の枠組みにとらわれない「文化資源」という観点から、観光、保存・活用といった問題系をも取り込む展開を目指している。

c 主要研究業績

(1) 論文

「戦後体制と「国民文化」—宝塚歌劇の「日本民俗舞踊シリーズ」とその周辺—」、美学芸術学研究、26、159-202頁、2008.3

「寮歌の「戦後史」—日本寮歌祭と北大恵迪寮におけるその伝承の文化資源学的考察—」、美学芸術学研究、27、57-94頁、2009.3

「Building the body and mind of Japanese “Nationals”: Modern history of “Song (shōka)” in Japan」、International Yearbook of Aesthetics、13、189-208頁、2009.10

(2) 解説

「歌は世につれ、世は歌につれ」、『アステイオン』、68、2008.5

「わかりやすい」話の陥穽——CDが売れないのは「不法ダビング」横行のため？、『アステイオン』、69、2008.11

バナナの叩き売りの口上はいかにして「芸術」になったか、『大航海』、70、86-93 頁、2009.3
レクイエムは音楽？ 典礼？、『アステイオン』、70、202-205 頁、2009.5
県歌《信濃の国》にみる「中央」と「地方」、『アステイオン』、71、132-135 頁、2009.11

(3) マスコミ

新聞、「考える耳」、毎日新聞夕刊、2008.4.17～2010.3.16

(4) 学会発表

「日本近代のなかの宝塚歌劇」、国際シンポジウム「戦間期(1918-1938)大阪の音楽と近代」、国際日本文化研究センター、2008.12.6

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義

「文化資源としての炭鉱 1」(第 68 回 Cafe Talk + Tadashi KAWAMATA、目黒区美術館)、ヒルサイドプラザ、2009.7.29

(2) 学会

「日本音楽学会」、参事、2007.4～

「文化資源学会」、一般会員、2004.4～

「美学会」、委員、1998.10～

教授 **佐藤 健二** SATO, Kenji

1. 略歴

1981 年 3 月	東京大学大学院社会学研究科修士課程修了
1983 年 3 月	東京大学大学院社会学研究科博士課程中退
1983 年 4 月	東京大学教養学部助手
1986 年 4 月	法政大学社会学部専任講師
1988 年 4 月	法政大学社会学部助教授
1994 年 10 月	東京大学文学部助教授 (東京大学大学院社会学研究科担当)
1995 年 4 月	東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (文学部担当)
2000 年 4 月	同研究科文化資源学専攻助教授 (形態資料学専門分野) 併任
2005 年 9 月	東京大学大学院人文社会系研究科教授 (文学部担当)

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要

(1) 歴史社会学の思想と方法。一つの基礎資料としての柳田国男を中心とした全集の編纂。
(2) モノとしての書物をモデルとしたメディア文化の地層分析。読書空間論。
(3) 社会調査の社会史。日本近代における調査の実践と方法意識の展開について。
(4) 文字テキスト以外の資料へのテキスト概念の可能性の拡大。かわら版・新聞錦絵データベースの実験、など。

c 主要業績

(1) 論文

『大阪民俗談話会』を考える」、柳田国男研究論集、6、2-26 頁、2008.8

「歴史社会学におけるオーラリティの位置」、日本オーラル・ヒストリー研究、4、3-18 頁、2008.10

「テキスト空間論の構想: 日本近代における出版を素材に」、齋藤晃編『テキストと人文学』人文書院、153-171 頁、2009.1

「方法としての民俗学/運動としての民俗学/構想力としての民俗学」、小池淳一編『民俗学的想像力』せりか書房、260-281 頁、2009.3

- 「関東大震災における流言蜚語」、死生学研究、11、45-110 頁、2009.3
 「『遠野物語』から『郷土誌』へ」、石井正己・遠野物語研究所編『近代日本への挑戦』三弥井書店、93-111 頁、2009.6
 「民間学者としての喜多川周之」、江戸東京博物館都市歴史研究室編『喜多川周之コレクション』調査報告書第 22 集、123-148 頁、2010.3
 (2) 書評
 「福田アジオ『日本の民俗学』」、吉川弘文館、2009.10、その他、『読書人』、2009 年 12 月 18 日号、2009.12

3. 主な社会活動

(1) 学会

- 「日本社会学会」、一般会員、2008-2009
 「日本生活学会」、一般会員、2008-2009
 「都市社会学会」、一般会員、2008-2009
 「関東社会学会」、一般会員、2008-2009

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo

1. 略歴

- 1974 年 3 月 早稲田大学第一文学部演劇専攻学士
 1976 年 3 月 早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻修士
 1982 年 3 月 早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻博士退学
 1981 年 4 月 早稲田大学文学部助手
 1984 年 4 月 早稲田大学文学部専任講師
 1987 年 4 月 早稲田大学文学部助教授
 1992 年 4 月 早稲田大学文学部教授
 2006 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

演劇学・舞踊学

b 主要業績

(1) 論文

「舞踊—近代から現代へ」、国立劇場企画編集『日本の古典芸能舞踊・演劇』（淡交社）、2009.2

(2) 予稿・会議録

- 基調講演、「歌舞伎・日本舞踊と狂言の舞踊」、2008.6.22、「『楽劇学』16」、2009.3
 招待講演、「歌舞伎の 18 世紀」、2008.6.22、「『日本 18 世紀学会年報』24」、2009.6
 招待講演、「江戸のお祭り」、邦楽、西洋とくらぶれば、紀尾井小ホール、2009
 招待講演、「シェイクスピアの時代に歌舞伎は何を描こうとしたのか?」、新国立劇場、2009.11.11
 招待講演、「江戸歌舞伎の劇場ならびに舞台の特色」、演劇舞台構造の国際比較研究会、早稲田大学、2009.12.12

(3) 書評

「服部幸雄『絵で読む歌舞伎の歴史』」、学術論文誌、『楽劇学 16』、2009.3

(4) 監修

「国立劇場第 262 回歌舞伎公演『誦競艶仲町』監修」、2009.1

(5) 啓蒙

「『誦くらべ』の復活上演」、『国立劇場第 262 回歌舞伎公演解説書』、2009.1

「道成寺物の系譜③」、『日本舞踊振興財団会誌『NBF』35』、2009.1
 「鶴屋南北の覆面」、学術論文誌、『日本演劇学会会報73』、2009
 「三遊亭円朝『文七元結』と河竹黙阿弥『三人吉三』」、『歌舞伎座二月大歌舞伎筋書』、2009.2
 「色悪の系譜」、一般雑誌、『演劇界3月号』、2009.3
 「初代市川団十郎の『暫』と近松門左衛門の『毛剃』」、『歌舞伎座五月大歌舞伎筋書』、2009.5
 「『正札付根源草摺』と『蝶の道行』」、『歌舞伎座六月大歌舞伎筋書』、2009.6
 「歌舞伎の無頼」、『俳句雑誌『塵風』創刊号』、2009.6
 「道成寺物の系譜④」、『日本舞踊振興財団会誌『NBF』36』、2009.7
 「江戸の祭と子供たち」、『紀尾井小ホールパンフレット「邦楽、洋楽とくらぶれば」25』、2009.7
 「『船弁慶』」、『歌舞伎座八月納涼大歌舞伎筋書』、2009.8
 「清元『お祭』」、『歌舞伎座九月大歌舞伎筋書』、2009.9
 「『操り三番叟』と『身替座禪』」、『歌舞伎座十二月大歌舞伎筋書』、2009.12

3. 主な社会活動

(1) 行政

「文化審議官（文化功労者選考分科会）」、委員、2009.1～2009.12
 「文化庁」、芸術選奨選考委員（評論部門）、2009.1～2009.12
 「国立劇場」、国立劇場舞踊公演専門委員、2009.1～2009.12
 「国立劇場」、国立劇場復活上演候補作品検討委員会委員、2009.1～2009.12
 「芸術文化振興基金」、芸術文化振興基金運営委員会（伝統芸能・大衆芸能専門委員）、2009.1～2009.12
 「文化庁」、芸術団体人材育成支援事業協力者会議審査委員会（伝統芸能部門専門委員）、2009～

(2) 学会

「舞踊学会」、会長、2008.1～2009.12
 「日本演劇学会」、理事、2008.1～2009.1
 「楽劇学会」、理事、2008.1～2009.12
 「文化資源学会」、理事、2008.1～2009.12

(3) 学外組織委員（学協会、省庁を除く）委員・役員

「日本舞踊協会」、顧問、2009.1～2009.12
 「日本舞踊花柳流」、顧問相談役、2009.1～2009.12

文字資料学文書学専門分野

准教授 **大西 克也** ONISHI, Katsuya

1. 略歴

1985年3月 東京大学文学部中国語中国文学専修課程卒業
 1985年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程入学
 1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻修士課程修了
 1987年4月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程進学
 1988年9月 中華人民共和国北京大学中国語文学系留学（至1990年2月）
 1990年3月 東京大学大学院人文科学研究科中国語学専攻博士課程退学
 1990年4月 神奈川大学外国語学部専任講師
 1993年4月 神奈川大学外国語学部助教授（至1995年3月）
 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（現在に至る）
 1998年3月 文部省在外研究員に採用され、中国広州市中山大学に於いて研修（至1998年12月）

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国語学、中国古文字学

b 研究課題

(1) 上古中国語の文法研究

構文と文法範疇の相関的変容の諸相、及びそれに関与する様々なファクターの解明を目指している。

(2) 戦国秦漢出土文字資料の研究

戦国秦漢時代の出土文字資料の解読の他、言語がどのように文字化されたかという視点に基づき、地域毎の用字法の相違、秦による文字統一の実態や文字政策に関する探究を行っている。

c 主要研究業績

(1) 論文

「上博楚簡（四）“龔之月隼”的“月隼”字怎麼讀？」、開篇、27、7-8 頁、2008.4

「再論上古漢語中的“可”和“可以”——古漢語的語態試探之二——」、中国語言学、1、149-165 頁、2008.7

「戰國楚簡文字中讀作舌根音的幾個章組字」、古文字研究、27、513-518 頁、2008.9

「試論上古漢語詞彙使役句的語義特點」、語言文字與教學的多元對話、383-399 頁、2009.5

「上古漢語“使”字使役句的語法化過程」、何樂士紀念文集、11-28 頁、2009.6

(2) 学会発表

「古漢語“來”類動詞詞彙使役句和句法使役句的語義差異」、第四屆漢語史暨第七屆中古漢語國際學術研討會、北京語言文化大學、2009.8.23

「秦漢楚地隸書及關於「史書」的考察」、シンポジウム「戦国秦漢出土文字資料と地域性——漢字文化圏の時空と構造——」、日本女子大学、2009.9.19

「所有から存在へ——上古中国語における「有」の拡張——」、日本中国語学会第 59 回全国大会、北海道大学、2009.10.24

「上博六《平王》兩篇故事中的幾個問題」、2009 年華語言與華文化教育國際研討會、台湾、新竹、玄奘大学、2009.12.11

(3) 教科書

「アジアと漢字文化」、宮本徹・福井玲・岩月純一・陳力衛、放送大学教育振興会、2009

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東アジアの古代文化を考える会セミナー、2009.9

北京大学委嘱教授、2009.10~2009.11

浙江大学文学院特別講演、2010.1

湖南大学特別講演、2010.3

(2) 学会

「中国出土資料学会」、役員・委員、理事、1997.4~

「東方学会」、役員・委員、評議員、2005.10~

「日本中国語学会」、役員・委員、編集委員、2008.10~

准教授 **中村 雄祐** NAKAMURA Yusuke

1. 略歴

1980.04 東京大学教養学部理科 I 類、入学

1982.04 同学部教養学科第一文化人類学分科、進学

1984.03 同学科、卒業

1984.04 東京大学大学院社会学研究科修士課程文化人類学専攻、入学

1986.03 同修士課程、修了

1986.04 同研究科文化人類学専攻博士課程、進学

1988.04 社会学研究科より総合文化研究科へ移管
 1990.08 東京大学大学院総合文化研究科博士課程文化人類学専攻、中途退学
 1995.11 東京大学大学院総合文化研究科、博士号（学術）取得
 1994.04 - 1997.03 東京大学教養学部専任講師
 1996.04 大学院総合文化研究科超域文化科学専攻専任講師に配置換
 1997.04 - 2004.09 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻助教授
 2004.10 - 東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻助教授
 2005.04 - 2009.03 国立民族学博物館文化動態研究部門客員研究員
 2009.04 - 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻准教授

2. 主な研究活動

主たる研究対象は、認知的人工物である。具体的な研究の現場は、発展途上国、特にラテンアメリカの先住民諸言語話者を対象とする職業訓練や社会開発で、現地の研究者や NGO と連携しながら調査を進めている。関連する課題として、フィールド調査法の検討、改善にも関心を持っている。また、フィールド調査で得られる知見を、言語能力、数的能力、道具使用等に関する認知科学や、文書をはじめとする認知的道具の発展に関する歴史学と有機的に接合することも重要な研究課題で、隣接諸分野の研究者との共同研究にも取り組んでいる。

a 専門分野

開発研究、特に認知科学と社会開発論の接合

b 研究課題

発展途上国、特にラテンアメリカの先住民諸言語話者を対象とする職業訓練や社会開発。

c 主要業績

(1) 著書

共著、『人間の安全保障』、東京大学出版会、2008.4

共著、『テキストと人文学——知の土台を解剖する』、人文書院、2009.1

編著、関 雄二・狐崎 知己・中村雄祐（編著）、『グアテマラ内戦後——人間の安全保障の挑戦』、明石書店、2009.4

単著、『生きるための読み書き——発展途上国のリテラシー問題』、みすず書房、2009.9

編著、Akira Saito & Yusuke Nakamura、*Les outils de la pensée: étude historique et comparative des "textes"*、Editions de la Maison des Sciences de l'Homme、2010.3

(2) 学会発表

「討論」、国際開発学会 第20回全国大会、立命館アジア太平洋大学、2009.11.21

文字資料学文献学専門分野

教授 **月村 辰雄** TSUKIMURA, Tatsuo

1. 略歴

1974年 3月 東京大学文学部卒業（フランス語フランス文学）

1976年 3月 同 大学院人文科学研究科修士課程修了（仏語仏文学）

1977年 10月 パリ高等学術研究院博士課程（フランス政府給費留学、～80年 9月）

1979年 10月 パリ第3大学東洋語東洋文化研究所講師（日本語科、～80年 9月）

1981年 3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学（仏語仏文学）
1981年 4月	同 文学部助手（フランス語フランス文学）
1986年 4月	獨協大学外国語学部専任講師（フランス語科）
1989年 4月	東京大学文学部助教授（フランス語フランス文学）
1995年 1月	同 教授（フランス語フランス文学）
1995年 4月	同 大学院人文社会系研究科教授（仏語仏文学）
2000年 4月	同 文化資源学研究専攻（文書学専門分野）に配置換

2. 主な研究活動（2003年11月～2005年10月）

a 専門分野

フランス文学（中世文学、ルネサンス文学）
文化資源学（書物史、ヨーロッパ図書館史）

b 研究課題

(1) マルコ・ポーロ研究

現在、マルコ・ポーロ『東方見聞録』の中世フランス語本、イタリア方言本、ラテン語本等の比較研究をおこない、もっとも原本に近いとされるフランコ・ヴェネチアン語本をもとに、そこに中世フランス語本、ヴェネチア方言本、トスカナ方言本、ラテン語本との校合結果を盛り込んだ翻訳を準備中。

(2) 中世西ヨーロッパのアジア観についての研究

『アレクサンドロス大王物語』、プレスター・ジョンの手紙、カルビーニ、ルブルク、オドリコ等の東方旅行記録、ハイトンの地誌、マンドヴィルの架空旅行記など、12～14世紀のヨーロッパの東方記述の総体を対象に、中世西ヨーロッパのアジア観についての研究を進めている。

(2) レトリック教育史研究

古典修辞学が古代ギリシア以降、19世紀末のフランスに至るあいだ、どのように学校教育の中で教えられてきたのかという問題を、とりわけディスクールの様々な型を教える初等教科書『プロギュムナスマタ』を中心に研究している。

(3) 明治期の演説研究

レトリックの歴史に関連して、文化資源学においては、明治初頭の日本にヨーロッパのどのようなレトリック教本が移入され、それがどのように理解、ないしは誤解されて、自由民権運動とともに盛んになった演説の中に取り入れられたのかを研究している。

c 解説文

「フランス語」、梶茂樹他編『事典世界のことば』、大修館書店、444-447頁、2009.4

教授 **片山 英男** KATAYAMA, Hideo

1. 略歴

1971年 6月	東京大学文学部卒業（西洋古典学専修課程）
1973年 3月	東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（西洋古典学専門課程）
1976年 3月	東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（西洋古典学専門課程）
1982年 10月～1983年 6月	イタリア政府奨学金給費留学生（パドヴァ大学文学哲学部）
1976年 4月～1977年 3月	日本学術振興会奨励研究員
1977年 4月	東京大学文学部助手（西洋古典学研究室）
1983年 8月	東京大学文学部助教授（西洋古典学専修課程）
1993年 4月	東京大学文学部教授（西洋古典学専修課程）
1995年 4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授（西洋古典学専門分野）
2000年 4月	同（文化資源学研究専攻文献学専門分野）

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋古典学、西洋古典学史

b 研究課題

前3世紀アレクサンドレイアに興った新傾向の詩の文学動向の研究により、こうした学者詩人によって確立された古典学の成立事情を解明する。

ルネサンスの古典研究再興に関し、古典学の近代的変貌を跡づける。

テキストの電子化に際し、多国語処理の統一的方法を検討する。

c 主要業績

(1) 論文

「ポッジョ写本再考」大芝芳弘・小池登（編）『西洋古典学の明日へ—逸身喜一郎教授退職記念論文集—』知泉書館、2010年、373-393

28 韓国朝鮮文化

教授 **服部 民夫** HATTORI, Tamio

1. 略歴

- 1971年 同志社大学文学部社会学科社会学専攻 Faculty of Letters, Doshisha University 学士・経済学博士
- 1971年4月 アジア経済研究所主任研究員・課長
- 1991年4月 東京経済大学経営学部教授
- 1996年4月 同志社大学文学部教授
- 2002年4月 東京大学人文社会系研究科・文学部教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

韓国を中心とする北東アジアの経済と社会

b 研究課題

- (1) 経済開発過程における社会変化、
(2) 財閥の社会的分析、
(3) 工業化の発展パターンと経済成長の特質

c 主要業績 (2006-2007年度)

(1) 著書

編著、服部民夫ほか、「日韓政治社会の比較分析」、慶応義塾大学出版会、2006

単著、「東アジア経済の発展と日本一組立型工業化と貿易関係」、東京大学出版会、2007

単著、韓国語、「開発の経済社会学」、伝統と現代社、2007

(2) 論文

「韓国の経済・経営をどう理解するか」、えーじえつくればーと、V o 1. 43、2007.2

(3) 研究報告書

「日韓財閥のサステナビリティ—危機後の韓国財閥と最末期三井財閥を中心として」、科学研究費補助金報告書、2006.3

3. 主な社会活動

(1) 共同研究・受託研究

アジア経済研究所、「韓国機械産業の競争力」、2006～2007

日韓文化交流基金、「日韓歴史共同研究（第3分科会・近現代史）」、2007～

(2) 他機関での講義等

東洋英和女学院大学非常勤講師、2007.4～

教授 **川原 秀城** KAWAHARA, Hideki

1. 略歴

- 1968年4月 京都大学理学部入学
- 1972年3月 京都大学理学部数学科卒業・理学士
- 1972年4月 京都大学文学部哲学科（中国哲学史専攻）編入学
- 1974年3月 京都大学文学部哲学科（中国哲学史専攻）卒業・文学士
- 1974年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程（中国哲学史専攻）入学
- 1980年3月 京都大学大学院文学研究科博士課程（中国哲学史専攻）単位取得退学
- 1980年7月 岐阜大学教育学部助教授（社会科・哲学研究室）
- 1992年4月 東京大学文学部 助教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授 現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

東アジアの思想史と科学史

b 研究課題

東アジア（中国と韓国朝鮮）の科学と思想について分析した。同期、評価に値することがあるとすれば、朝鮮王朝期の儒学思想に関する専門研究を本格的に開始した点をあげることができるであろう。

c 主要業績

(1) 論文

「丁若鏞の科学著作」、茶山学、13、43-107頁、2008.11

(2) 史料

編纂、「関流和算書大成—関算四伝書一」、勉誠出版、2008.12

教授 **早乙女 雅博** SAOTOME, Masahiro

1. 略歴

- 1976年3月 東京大学文学部考古学専修課程卒業
- 1978年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（考古学）
- 1981年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（考古学）
- 1981年4月 東京国立博物館学芸部東洋課東洋考古室研究員
- 1988年7月 東京国立博物館学芸部東洋課主任研究官
- 1990年4月 東京国立博物館学芸部北東アジア室長
- 1996年4月 東京大学文学部助教授（附属文化交流研究施設朝鮮文化部門）

1998年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (附属文化交流研究施設朝鮮文化部門)
2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授 (韓国朝鮮文化研究専攻)
現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

韓国朝鮮を中心とする東アジアの考古学

b 研究課題

- (1) 朝鮮半島の古代国家の成立と発展過程を考古学資料から追求している。とくに、高句麗、新羅、百濟、加耶の相互交流を中心として、比較研究している。
- (2) 高句麗の積石塚と壁画古墳の多様性から、国内社会の内的成長発展を探ることによって、一国における国家形成の過程を追求している。
- (3) 朝鮮考古学史では、戦前に朝鮮総督府を中心として行なわれた考古学発掘調査の成果を学術的な面から探っている。植民地政策としての古蹟調査事業のなかで、いかに学術的成果をあげてきたか、また日本における考古学の発展とどのようにかかわってきたかを追求している。

c 主要業績

(1) 著書

単著、鄭仁盛、「日本所在高句麗遺物」、2008.7

編著、藤井恵介、角田真弓ほか、「関野貞日記」、中央公論美術出版、2009.2

(2) 論文

「東アジアにおける国際交流——韓国・北朝鮮——」、日本考古学、第26号、2008.11

(3) 総説・総合報告

「植民地期の朝鮮考古学」、学術論文誌、『考古学ジャーナル』no.596、3～5頁、2010.2

(4) 学会発表

「ピョンヤンの壁画古墳の現状」、文化遺産コンソーシアム、2008.10.29

「楽浪郡と東アジアの国際化」、国際シンポジウム「東アジア造形文化を繋ぐ思想」、秋田公立美術工芸短期大学、2009.11.23

3. 主な社会活動

(1) 学会

「高句麗渤海学会」、役員・委員、海外学術諮問委員、2008.3～

准教授 **福井 玲** FUKUI, Rei

<http://www.tooyoo.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/>

1. 略歴

1980年3月 東京大学文学部言語学科卒業 (文学士)

1982年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻修士課程修了 (文学修士)

1984年9月～1986年10月 韓国ソウル大学校人文大学国語国文学科に留学

1987年3月 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学

1987年4月～1989年3月 東京大学文学部助手 (言語学研究室)

1989年4月～1992年9月 明海大学外国語学部講師 (日本語学科)

1992年10月～1997年3月 東京大学教養学部助教授

1994年10月 東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授 (併任)

- 1997年 4月 東京大学文学部附属文化交流研究施設に配置換
 1998年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設に配置換
 2002年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科に配置換

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要と自己評価

専攻分野は韓国語学であるが、言語学（音声学・音韻論）、日本語学（方言研究）にも関心をもっている。韓国語学の中では、中世語を中心として、古代語や近代語についても音声や方言研究などを行ってきた。

また、筆者は2003年、2007年に小倉文庫目録を作成したが、そこに含まれる、対馬出身の通詞として明治初期に活動した中村庄次郎の寄贈資料についての研究を行った。特に『酉年工夫』という、雨森芳洲が編纂したと推定できる資料が、18世紀初頭の韓国語を知るうえでも重要であることを指摘して、何度か研究発表を行ない、現在その成果を取りまとめているところである。

また2008・2009年度は、世宗実録に掲載されている「致和平」という楽譜の歌詞として用いられている龍飛御天歌の声調（アクセント）が、旋律に反映されていることを報告し、中世語の声調ないしアクセント研究の音声的実態を知るための新しい重要な資料になりうることを論じた。

c 主要業績

(1) 論文

「致和平譜に反映した中世韓国語声調のアクセント論的解釈」、『東京大学言語学論集』、29、3-16 頁、東京大学文学部言語学研究室、2010.3

(2) 学会発表

「訓民正音の文字論的性格」、東京大学コリア・コロキウム、東京大学文学部、2008.9.24

「致和平譜に反映した中世語声調について」、韓国語学会創立50周年記念国際学術大会、ソウル：西江大学、2009.12.19

(3) 教科書

「アジアと漢字文化」、大西克也・宮本徹編著、放送大学教育振興会、2009（第12章、15章担当）

准教授 **六反田 豊** ROKUTANDA, Yutaka

1. 略歴

- 1985年 3月 九州大学文学部史学科朝鮮史学専攻卒業
 1987年 3月 九州大学大学院文学研究科（史学専攻）修士課程修了
 1989年 3月 九州大学大学院文学研究科（史学専攻）博士後期課程中途退学
 1989年 4月 九州大学文学部助手
 1992年 4月 久留米大学文学部専任講師
 1995年 4月 久留米大学文学部助教授
 1996年 4月 九州大学文学部助教授
 2000年 4月 九州大学大学院人文科学研究院助教授
 2002年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

朝鮮中世・近世史

b 研究課題

現在の主たる研究課題は、(1)朝鮮時代前期漕運制研究、(2)朝鮮時代後期財政史研究、(3)朝鮮中世土地制度史研究、(4)朝鮮中世・近世海事史研究、などである。2008年度から2009年度にかけては、このうちの(1)と(4)の課題を中心に研究を進めた。そのほか、共同研究プロジェクトの1員として、朝鮮近世社会史に

関する現地踏査や中世・近世の日朝関係史研究などにも従事した。

c 主要業績

(1) 著書

東洋文庫東北アジア研究班（朝鮮）＝武田幸男・井上和枝・糟谷憲一・須川英徳・森平雅彦・山内弘一・山内民博・吉田光男・六反田豊、「日本所在朝鮮近世記録類解題」、財団法人東洋文庫、2009.3

(2) 論文

「19世紀慶尚道沿岸における「朝倭未弁船」接近と水軍営鎮等の対応——『東萊府啓録』にみる哲宗即位年（1849）の事例分析——」、大阪市立大学東洋史論叢、別冊特集号、157-187頁、2009.1

『西岳志』異本考——その概要と類型化——」、朝鮮学報、第210輯、1-40頁、2009.4

(3) マスコミ

「朝鮮停滞史観の反省に立ち新しい研究の基礎を築く——『復刻 朝鮮史研究会会報全3巻』の刊行によせて」、図書新聞、図書新聞社、2009.5.23

(4) 研究報告書

「朝鮮書籍から見た中世の日本と国際関係」、平成16年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）研究成果報告書、143-172頁、2008.3

「朝鮮近世士族の社会的性格に関する総合的研究」、平成16年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、139-168頁、2008.3

(5) 学会発表

「朝鮮半島における不審船の接近への地方官の対応について——『東萊府啓録』を素材にして——」、国際シンポジウム「東アジア海域世界における交通・交易と国家の対外政策」、大阪市立大学、2008.2.3

「19世紀慶尚道南部海域における「朝倭未弁船」接近と水軍営鎮の対応——『東萊府啓録』にみえる1849年の事例分析——」、朝鮮史研究会関東部会2008年7月例会、東京大学、2008.7.19

『西岳志』異本考——その概要と類型化——」、第59回朝鮮学会大会、麗澤大学、2008.10.5

「朝鮮時代海事史研究の課題と可能性」、韓日海洋史・海洋文化共同Workshop「韓日海洋史研究の最前線」、木浦大学校（韓国全羅南道木浦市）、2008.11.30

「朝鮮時代の政治・文化と絵画」、公開ワークショップ「朝鮮時代の絵画とその周辺——時代背景への視点」、静岡県立美術館、2009.3.1

「15・16世紀朝鮮の水賊——その基礎的考察」、九州史学会2009年度大会朝鮮学部会シンポジウム「中近世の朝鮮半島と東アジア海域」、九州大学、2009.12.13

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

埼玉大学教養学部非常勤講師、2008.4～

(2) 学会

「韓国中世史学会」、役員・委員、地域理事、2008.1～

「朝鮮学会」、役員・委員、常任幹事、編集委員、2008.4～

「朝鮮史研究会」、役員・委員、幹事長、2008.10～

「韓国・朝鮮文化研究会」、役員・委員、副会長、2008.10～

「史学会」、役員・委員、評議員、2009.10～

准教授 **本田 洋** HONDA, Hiroshi

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~hhonda/>

1. 略歴

1986年3月 東京大学教養学部教養学科第一文化人類学専攻卒業

1986年4月 東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程入学

1988年3月 同上 大学院社会学研究科修士課程修了

- 1988年4月 同上 大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程進学
 1988年8月 文部省アジア諸国等派遣留学生として韓国ソウル大学校に留学（～1991年5月）
 1993年3月 東京大学大学院総合文化研究科文化人類学専攻博士課程単位取得満期退学
 1993年4月 日本学術振興会特別研究員（PD）（～1994年3月）
 1994年4月 東京大学教養学部助手（～1996年3月）
 1996年4月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手（～2000年3月）
 1999年8月 韓国ソウル大学校社会科学研究院比較文化研究所研究員（～2000年8月）
 2000年3月 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授（～2002年3月）
 2000年9月 英国オックスフォード大学訪問研究者（～2001年3月）
 2002年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（現在に至る）

2. 主な研究活動

a 専門分野

社会・文化人類学

b 研究課題

韓国朝鮮社会を対象として、人類学的な観点から調査研究を進めている。博士課程在学時より韓国全羅北道南原地域でフィールドワークを続けており、他の地域でも短期の調査を行ってきた。近年の研究課題は、(1) 近現代韓国地方社会における近代化・開発と在地社会の変化、(2) 小生産物の生産と流通・消費、(3) 植民地期民族誌の系譜学的再検討、等である。

c 主要業績

(1) 論文

Reproduction of Status Traditions and Social Prestige in Provincial Modern and Contemporary Korea: A Case Study of Namwŏn, North Chŏlla Province, *Status and Stratification: Cultural Forms in East and Southeast Asia* (ed. by Mutsuhiko Shima), pp.115-147, 2008

「威信の存立と富——民族誌からの展望」、『韓国朝鮮の文化と社会』、8号、pp.7-28、2009.10

(2) 研究報告書

『アジア歴史研究報告書（JFE21世紀財団）』、2007年度、73-82頁、2008

『平成18年度AGS研究成果報告書』、124-130頁、2008.2

『平成19年度AGS研究成果報告書』、243-249頁、2009.3

(3) 学会発表

「第一部総括」、釜山国際シンポジウム：東アジアの植民地主義「文化・技術・移動—日本認識をめぐって」、朝鮮ビーチホテル（韓国釜山広域市）、2008.7.19

「韓国朝鮮社会における富と威信—趣旨説明」、韓国・朝鮮文化研究会第9回研究大会シンポジウム「韓国朝鮮社会における富と威信」、早稲田大学戸山キャンパス、2008.10.18

「フィールドの現実と歴史：韓国南原でのフィールドワークから」、朝鮮史研究会第45回大会パネル「フィールドワークと歴史研究——人類学と歴史学の対話から見えてくるもの」、佛教大学、2008.10.26

「[日本人類学界での韓国研究] コメント」、創立50周年記念韓国文化人類学会国際学術大会、ソウル大学校、2008.11.14

「韓国地方社会の民族誌：南原の事例」、人文の窓（韓国全北大学校人文大学）、韓国全北大学校博物館、2009.9.9

「韓国地方社会の民族誌的研究：南原地域の事例」、韓国学中央研究院文化宗教研究所フォーラム、韓国学中央研究院、2009.9.11

(4) 会議主催（チェア他）

「韓国・朝鮮文化研究会第9回研究大会シンポジウム『韓国朝鮮社会における富と威信』」、チェア、早稲田大学戸山キャンパス、2008.10.18

(5) 教科書

『社会学概論2008』、松本三和夫・服部民夫・盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾・佐藤健二・白波瀬佐和子・赤川学と共著、東京大学文学部社会学研究室、2008

『社会学概論2009』、松本三和夫・服部民夫・盛山和夫・上野千鶴子・武川正吾・佐藤健二・白波瀬佐和子・赤川学と共著、東京大学文学部社会学研究室、2009

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

日韓文化交流基金セミナー、2008.1

日本女子大学社会学部非常勤講師、2008.10～2009.2

東京外国語大学外国語学部・大学院地域文化研究科非常勤講師、2008.10～2009.3

東京外国語大学外国語学部・大学院地域文化研究科非常勤講師、2009.10～2010.3

(2) 学会

「韓国・朝鮮文化研究会」、運営委員（庶務責任者）、2008.1～

29 言語動態学

教授 **角田 太作** TSUNODA, Tasaku

1. 略歴

- | | | |
|-------|--|--|
| 1970年 | 文学士（言語学） | 東京大学 |
| 1974年 | M.A.（言語学） | Monash University (Australia) |
| 1979年 | Ph.D.（言語学） | Monash University (Australia) |
| 1977年 | Language Centre, | Griffith University (Australia) |
| 1979年 | 名古屋大学文学部 | 助教授 |
| 1990年 | 筑波大学文芸・言語学系 | 助教授→教授 |
| 1994年 | 東京大学文学部 | 教授 |
| 1998年 | 東京大学人文社会系 | 研究科教授 |
| 2003年 | School of Indigenous Australian Studies, | James Cook University of North Queensland, Adjunct Professor |
| 2009年 | 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 | 国立国語研究所 言語対照研究系 教授 |

2. 主な研究活動

a 専門分野

- (1) オーストラリア原住民語学：Warrongo 語、Jaru 語、Wanyjirra 語など
- (2) 言語類型論
- (3) 言語消滅の危機と言語再活性化

b 研究課題

現在行っている主な研究は以下の通り。

- (1) Warrongu 語、Jaru 語、Wanyjirra 語の研究： 現地調査と資料の整理
- (2) Warrongu 語などの復活と言語再活性化の方法
- (3) 人魚構文の通言語的

(4) 副詞節の通言語的研究

c 主要業績

(1) 著書

単著、「世界の言語と日本語（改訂版）」、くろしお出版、2009.5

(2) 論文

“Sonority hierarchies in Warrongo (Australia)”, *Gengo Kenkyu*, 133, pp.147-161, 2008.3

“Predicting a future change: relative clauses of Japanese”, *Studies on grammaticalization*, pp.209-216, 2008.12

(3) 予稿・会議録

一般講演、「Revival movement of the Warrongo language (Australia):Progress report (2008)”, 18th International Congress of Linguists, Korea University, Seoul, Republic of Korea, 2008.7.21, “Current issues in unity and diversity of languages”. Collections of the papers selected from the CIL 18, held at Korea University, Seoul, on July 21-16, 2008

招待講演、「世界各地の言語再活性化運動の現状と今後の展望」、日本のなかの危機言語～アイヌ語、琉球語、本土方言、東京大学文学部、「日本のなかの危機言語～アイヌ語、琉球語、本土方言～予稿集」、1-6 頁、2009.3.14

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

日本女子大学文学部非常勤講師、2008.4～2009.3

上智大学非常勤講師、2008.11

学習院大学非常勤講師、2008.4～2009.3

山口大学人文学部・大学院文学研究科非常勤講師、2009.11～2009.11

(2) 学会

「日本語学会」、学術雑誌編集委員、2006.3～2009.3、評議員、2009.6～

「Pacific Linguistics 出版局（キャンベラ、The Australian National University）」、役員・委員、Editorial Advisory Board（編集顧問委員会）の委員、2004.1～

「Studies in Language (Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins)の Board of Consulting Editors 委員、2004.1～

(3) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「日本学術振興会特別研究員の審査委員」、2008.7～2010.3

准教授 **中村 雄祐** NAKAMURA Yusuke

1. 略歴

1980.04 東京大学教養学部理科 I 類、入学

1982.04 同学部教養学科第一文化人類学分科、進学

1984.03 同学科、卒業

1984.04 東京大学大学院社会学研究科修士課程文化人類学専攻、入学

1986.03 同修士課程、修了

1986.04 同研究科文化人類学専攻博士課程、進学

1988.04 社会学研究科より総合文化研究科へ移管

1990.08 東京大学大学院総合文化研究科博士課程文化人類学専攻、中途退学

1995.11 東京大学大学院総合文化研究科、博士号（学術）取得

1994.04 - 1997.03 東京大学教養学部専任講師

1996.04	大学院総合文化研究科超域文化科学専攻専任講師に配置換
1997.04 - 2004.09	東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻助教授
2004.10 -	東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻助教授
2005.04 - 2009.03	国立民族学博物館文化動態研究部門客員研究員
2009.04 -	東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学専攻准教授

2. 主な研究活動

主たる研究対象は、認知的人工物である。具体的な研究の現場は、発展途上国、特にラテンアメリカの先住民諸言語話者を対象とする職業訓練や社会開発で、現地の研究者やNGOと連携しながら調査を進めている。関連する課題として、フィールド調査法の検討、改善にも関心を持っている。また、フィールド調査で得られる知見を、言語能力、数的能力、道具使用等に関する認知科学や、文書をはじめとする認知的道具の発展に関する歴史学と有機的に接合することも重要な研究課題で、隣接諸分野の研究者との共同研究にも取り組んでいる。

a 専門分野

開発研究、特に認知科学と社会開発論の接合

b 研究課題

発展途上国、特にラテンアメリカの先住民諸言語話者を対象とする職業訓練や社会開発。

c 主要業績

(1) 著書

共著、『人間の安全保障』、東京大学出版会、2008.4

共著、『テキストと人文学——知の土台を解剖する』、人文書院、2009.1

編著、関 雄二・狐崎 知己・中村雄祐（編著）、『グアテマラ内戦後——人間の安全保障の挑戦』、明石書店、2009.4

単著、『生きるための読み書き——発展途上国のリテラシー問題』、みすず書房、2009.9

編著、Akira Saito & Yusuke Nakamura, *Les outils de la pensée: étude historique et comparative des "textes"*, Editions de la Maison des Sciences de l'Homme, 2010.3

(2) 学会発表

「討論」、国際開発学会 第20回全国大会、立命館アジア太平洋大学、2009.11.21

30 人文学開発センター

《先端構想部門》

教授 **小佐野 重利** OSANO, Shigetoshi

1. 略歴

1978年3月 東京大学文学部美術史学科卒業（文学士）

1978年4月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程入学

1980年9月 バドヴァ大学美術史学科専門課程(Scuola di Perfezionamento)
(イタリア政府給費留学生) ~1982年10月

- 1983年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（美術史学修士）
 1983年4月 東京大学大学院博士課程 ～1985年4月15日
 1985年4月 東京大学文学部助手（美術史学科）～1987年3月
 1987年4月 多摩美術大学美術学部講師（西洋美術史）～1989年3月
 1989年4月 東京工業大学工学部助教授（一般教育等芸術）～1993年3月
 1993年4月 東京大学文学部助教授（美術史学科）～1994年6月
 1994年6月 東京大学文学部教授（美術史学科）～1995年3月
 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授に配置換え（文学部教授兼任）
 （1995年9月～12月 ジョン・ポール・ゲッティ財団ゲッティ美術史人文学研究所招聘研究者）
 2005年4月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部次世代人文学開発センター（先端構想部門）
 教授を兼任
 2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科副研究科長（兼務）～2009年3月

2. 主な研究活動

a 専門分野

西洋近世美術史 イタリア中世・ルネサンス美術 アルプス南北の美術交流

b 研究課題

- ①イタリア中世末、ルネサンス期の美術を特に絵画史の観点から、古代美術および同時代のアルプス以北の美術との影響関係をも検討しながら幅広くかつ詳細に研究すること。
- ②西洋美術作品における身振り言語の機能に関して、隣接研究分野（文化史、民俗学、文化人類学、考古学、社会学、記号学）の先行研究成果も踏まえ、再検討を加え、新しい様式学および図像学的研究のモデルを模索研究すること。
- ③美術の展開に果たした芸術家の旅行の意義に関する包括的研究。
- ④ヴェローナの画家一門バディーレ家（14-16世紀）の包括的な作品現地調査・資料収集研究の継続。
- ⑤1880年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討 ——写真家アドolfo・ファルサーリとブルボン家エンリコ・バルディ伯爵の随臣アレッシンドロ・ツイレーリ伯爵の研究（研究代表者：平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）。
- ⑥国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化史的研究（研究代表者：平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究（B）の研究題目）

c 主要業績

(1) 著書

編著、木下直之と共編、『死生学[4] ——死と死後をめぐるイメージと文化——』、東京大学出版会、2008.9

(2) 学術論文

「ウフィッツィ美術館所蔵《受胎告知》とフランドルの風景表現」、『文化交流研究』21、95-102頁、2008.3
 「ジョットとその遺産をふり振り返る」、『ジョットとその遺産展——ジョットからルネサンス初めまでのフィレンツェ絵画——』（展覧会カタログ）、18-28頁、2008.7

「ルネサンスにおける古代への憧憬——15世紀メディチ家の古代彫玉コレクションをめぐる——」、『カメオ展 宝石彫刻の2000年——アレクサンダー大王からナポレオン3世まで——』（展覧会カタログ）、33-39頁、2008.9

「国家もしくは都市の顕彰装置としての自画像コレクションの歴史文化的研究（平成20-22年度科学研究費補助金「基盤研究（B）」の中間報告（1）」、『美術史論叢』25、146-158頁、2009.3

「The Present and Future of Research on Yokohama Photography: Insights Gleaned from the Latest Study of Adolfo Farsari」、『古写真研究 Old Photography Study』第3号、63-71頁、2009.5

「アントニオ・パッツィ自画像コレクションの実態——ウフィッツィ美術館自画像コレクション形成史との関係で——」、『美術史論叢』26、153-184頁、2010.3

「小説になる／ならないルネサンス画家——レオナルド・ダ・ヴィンチの場合——」、『文化交流研究』23、29-57頁、2010.3

(3) 監修

ブルーノ・サンティと共に、「ジョットとその遺産展——ジョットからルネサンス初めまでのフィレンツェ絵

画」(展覧会監修)、アートプランニング、2008.7

(4) 解説

「ジュリオ・マンチーニ『絵画に関する諸考察』第10章」、『美術史論叢』24、130-110頁、2008.3

「ボッティチェルリの絵画鑑賞への誘い」、辻邦生『春の戴冠4』、467-477頁、2008.10

(5) 啓蒙

「はらかな都市——描かれた都市のユートピア——」、『地中海学会月報』306(2008/1)、5頁、2008.1

「美術史家の覚書 <1>あきめくら」、『西洋美術研究』No.15、244-245頁、2009.12

「静かに晴れわたるヴェネツィアの絵画」、『地中海学会月報』326(2010/1)、4頁、2010.1

(6) 研究報告書

『1880年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討——写真家アドルフォ・ファルサーリとブルボン家エンリコ・バルディ伯爵の随臣アレッサンドロ・ツイレーリ伯爵の日本での活動——』、平成17-19年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書(課題番号 17320025)(研究代表者 小佐野重利)、3-5、11-37、59-61、132-133頁、2008.3

(7) 学会発表

(8) 会議主催(チェア他)

鹿島美術財団主催 第38回東京美術講演会 総合テーマ『建築と景観——庭園からランドスケープへ——』、チェア、鹿島建設K I ビル、2009.10.28

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

イタリア文化会館特別講演、2008.9.13

東北大学大学院文学研究科・文学部非常勤講師(集中講義)、2009.7

ブリヂストン美術館地中海学会秋期土曜講座、2009.10.17

北見市・北見市教育委員会・東京大学文学部常呂実習施設「北見公開講座」、2009.12.11

(2) 行政

「文部科学省」、大学設置審議会分科会専門委員 2008.4~2010.3

「秋田県教育庁」、新県立美術館基本計画策定委員会委員、2008.7~2009.1

(3) 学会

「地中海学会」、常任委員、事務局長 ~2008.6

「国際美術史学会 CIHA」、一般会員、国内委員会事務局長、~2009.2

「国際美術史学会 CIHA」、委員、国内委員会代表、2009.2~

「美術史学会」、学会代表委員・常任委員、2009.6~

(4) 学外組織(学協会・省庁を除く)委員・役員

「鹿島美術財団」、選考委員、1999.4~

「独立行政法人国立美術館 国立西洋美術館」、評議委員会評議委員、2001.4~

「大塚美術財団」、評議員、2008.6~

「美術ファンクラブ」、理事、2009.1~

「損保ジャパン美術財団」、評議員、2009.3~

准教授 **小島 毅** KOJIMA, Tsuyoshi

1. 略歴

1985年3月 東京大学文学部中国哲学専修課程卒業(文学士)

1987年3月 同 大学院人文科学研究科修士課程修了(中国哲学)

1987年4月 東京大学東洋文化研究所助手(東アジア第一部門)

1992年4月 徳島大学総合科学部講師(総合科学科)

1994年4月 同 助教授(人間社会学科)

1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（中国思想文化学）
2007年4月 東京大学大学院人文社会系研究科准教授（中国思想文化学）
現在に至る

2. 主な研究活動

a 専門分野

中国思想文化史、王権理論の展開および儒教の教化論

b 研究課題

- (1) 中国における朱子学・陽明学の思想的形成と社会的展開。
- (2) 中国皇帝制秩序を支える王権儀礼とその理論。
- (3) 日本における儒教思想の流入とその社会的効果。

c 主な業績

(1) 著書

単著、『足利義満 消された日本国王』、光文社、2008
単著、『父が子に語る日本史』、トランスビュー、2008.11
単著、『織田信長最後の茶会』、光文社、2009.7
単著、『父が子に語る近現代史』、トランスビュー、2009.11

(2) 論文

「日本漢文の訓読とその将来」、中村春作ほか編 『「訓読」論』、2008.10
「いざ鎌倉！——武家の古都を世界遺産に」、東京大学次世代人文学開発センター紀要、22、2009

(3) マスコミ

新聞、「こちら特報部：「桜田門外」暗殺者を合祀」、東京新聞、2008.10.21
新聞、「あとのあとのあと：「父が子に語る日本史」」、日本経済新聞、2008.10.26
雑誌、「父が子に語る近現代史」、日本古書通信、39頁、2009.11
新聞、「父が子に語る近現代史」、日本経済新聞、2009.11.15
新聞、「著者に聞く」、東大新聞、2009.12.15
新聞、「父が子に語る近現代史」、公明新聞、2009.12.28
雑誌、『父が子に語る近現代史』を書いた小島毅氏に聞く」、週刊東洋経済、2010.1.16
雑誌、『父が子に語る近現代史』、内外教育、27頁、2010.1.22

(4) 共同研究

「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成 ——寧波を焦点とする学際的創生」の領域代表、科研特定領域、2005年度～2009年度
「歴史書編纂と王権理論に見る東アジア3国の比較」の研究代表、科研特定領域「東アジア海域交流」、2005年度～2009年度

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

名古屋大学非常勤講師、2009.7
岩手大学非常勤講師、2008.9、2009.9

教授 **佐藤 慎一** SATO, Shin'ichi

1. 略歴

1969年6月 東京大学法学部第3類卒業（法学士）
1969年7月 東京大学法学部助手（国際政治学講座）
1972年7月 東北大学法学部助教授（比較政治学講座）
1979年7月 カリフォルニア大学バークレー校客員研究員（～1961年8月）

1987年4月 東京大学文学部助教授（中国哲学第1講座）
1993年4月 東京大学文学部教授（中国哲学第1講座）
1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（アジア文化研究専攻）（～2009年3月）
1997年4月 東京大学評議員（～2000年3月）
2001年4月 東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長（2003年4月）
2006年4月 東京大学理事・副学長（～2007年3月）
2009年3月 東京大学を定年退職
2009年4月 東京大学理事・副学長、人文社会系研究科特任教授

2. 主な研究分野

a 専門分野

中国思想史（特に近代思想）

b 研究課題

民国期の歴史意識の研究

c 主要業績（2008-2009年度）

概要

大学経営に関する仕事に追われ、自分の研究時間は事実上ゼロとなった。

(1) 論文

「歴史の変革と歴史学の変革——中国史解釈をめぐる民国期の論争について」、『中国哲学研究』24号、2009年11月

「19世紀中国の思想遺産と中国——進化論、アナーキズム、マルクス主義」、『19世紀学研究』4号、2010年3月

3. 主な社会活動（2008-2009年度）

(1) 行政

文部科学省 研究機関における公的研究費の管理・監査に関する検討会、立案、座長代理、2008.4～

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

「人間文化研究機構「地域研究推進委員会」、委員、2008.4～

《創成部門》

教授 **島菌 進** SHIMAZONO, Susumu

1. 略歴

1972年3月 東京大学文学部宗教学宗教史学科（文学士）
1974年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了（宗教学宗教史学）
1974年4月 東京大学博士課程単位取得退学（同上）
1974年4月 日本学術振興会奨励研究員
1977年4月 筑波大学哲学思想学系研究員（文部技官）
1981年4月 東京外国語大学外国語学部日本語学科助手（のち専任講師、助教授に昇進）
1984年8月 カリフォルニア大学バークレイ校留学（フルブライト奨学金）～85年7月
1987年4月 東京大学文学部宗教学宗教史学科助教授
1994年1月 東京大学文学部宗教学宗教史学科教授

1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授 ～継続中
1996年3月	シカゴ大学宗教学部客員教授 ～'96年5月
1997年11月	フランス社会科学高等研究員招聘教授 ～'97年12月
2000年6月	テュービンゲン大学日本文化研究所客員教授 ～'00年7月
2005年4月	東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター創生部門（死生学）教授（兼任）
2006年2月	カイロ大学文学部、客員教授 ～2006年4月

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

概要と自己評価

(1) 死生学の諸問題について考察している。①死生観、死生学という概念・学知の歴史、②日本人の死生観と宗教の関わり、③生命倫理と人間の尊厳をめぐる諸問題、④死生学の方法論的・理論的枠組み、など。21世紀COEプログラム「死生学の構築」の拠点リーダーとして、新たに興隆しつつある死生学の基礎づくりが重要な仕事になってきている。

(2) 近代日本の宗教の歴史を総体としてとらえ、現代日本人の生活や思考において、宗教がどのような位置を占めているかを明らかにしようとしている。明治維新以降、また第二次世界大戦後の日本の宗教史を理解する鍵概念として「国家神道」があるが、この概念の意味するものを正確にとらえることを目標としている。

(3) 現代世界の中で宗教はどのように多様な形をとって広がっているかを調査研究を踏まえて研究し、現代人の精神状況について考察してきている。発展途上地域でのファンダメンタリズムを含めた救済宗教的な復興運動の強力な展開、先進国での従来の「宗教」という語に収まらないようなスピリチュアルなものへの関心の拡充などを統合的に理解することを目指している。

(4) 一九世紀から二〇世紀のはじめに確立してくる有力な宗教理論の意義について検討し、新たな宗教理論の可能性について考察する。これに関わって、(1)(2)のどちらの問題にも関わりますが、そもそも「宗教」という概念がどのような背景をもったものであり、どれほど適切なものであるかを検討するという課題についても研究を進めている。

c 主要研究業績

(1) 著書

共編著、竹内整一、『死生学[1] 死生学とは何か』、東京大学出版会、2008.5

共編著、Gernot Bohme, William R. LaFleur, Susumu Shimazono, 「Fragwürdige Medizin: Unmoralische Forschung in Deutschland, Japan und den USA im 20. Jahrhundert, 」, Frankfurt/New York: Campus Verlag, 2008.7

単著、『宗教学の名著30』、286ページ、筑摩書房、2008.9

共編著、W. ラフルーア、G.パーメ、『悪夢の医療史——人体実験・軍事技術。先端生命科学』（中村圭志・秋山淑子訳）、勁草書房、2008.10

(2) 論文

「宗教言説の形成と近代的個人の主体性——内村鑑三と清沢満之の宗教論と超越的普遍性」、季刊 日本思想史、72号（林淳・磯前順一編、特集——近代日本と宗教学：学知をめぐるナラトロジー）、32-52頁、2008.1

「“Individualization of Society and Religionization of Individuals: Resacralization in Postmodernity (Second Modernity)」、Pensamiento: Revista de Investigacion e Informacion Filosofica、vol.64, no.242, pp.603-619、2008.4

「国家神道はどのようにして国民生活を形づくったのか？——明治後期の天皇崇敬・国体思想・神社神道」、洗建・田中滋編（京都仏教会監修）『国家と宗教——宗教から見る近代日本』法蔵館、243-284頁、2008.7

「Contemporary Religions and the Public Arena」、Eileen Barker ed., The Centrality of Religion in Social Life: Essays in Honour of James A. Beckford, Ashgate, 2008、pp.203-213、2008.8

「宗教史叙述の罫——神道史・国家神道史を例として」、市川裕・松村一男・渡辺和子編『宗教史とは何か』上巻（宗教史学叢書13）リトン、297-422頁、2008.9

「いのちの選別はなぜ避けるべきなのか？——出生前診断をめぐる日本の経験から」、死生学研究、第10号、32-60頁、2008.9

「State Shinto and Emperor Veneration」、Ben-Ami Shillony, ed., The Emperors of Modern Japan, Brill、pp.53-78、2008.11

「日本の新宗教から見た宗教多元主義」、間瀬啓允編『宗教多元主義を学ぶ人のために』世界思想社、152-166頁、2008.12

「“Reasons against the Selection of Life: From Japan’s Experience of Prenatal Genetic Diagnosis」、PrenJulian Savulescu and Nick Bostrom eds., Human Enhancement, Oxford University Press、pp.291-313、2009.1

「わが国の死生学の現状」、近藤卓編『現代のエスプリ 499 いのちの教育の考え方と実際』至文堂、136-143頁、2009.2

「慎重論の論拠を求めて——エンハンスメント論争と抗うつ薬」、日本学報、第28号、3-20頁、2009.3

“State Shinto in the Lives of the People: The Establishment of Emperor Wotship, Modern Nationalism, and Shrine Shinto in Late Meiji”、Japanese Journal of Religious Studies、Vol.36, No.1、pp.93-124、2009.3

“Reasons against the Selection of Life: From Japan’s Experience of Prenatal Genetic Diagnosis.”、Julian Savulescu and Nick Bostrom eds., Human Enhancement, Oxford University Press、pp.291-313、2009.6

“Bodhisattva Practice and Lotus Sutra-Based New Religions of Japan: The Concept of Integration, Dharma World” vol.36, July-Sept、2009.9

(3) 書評

「大岡信『『ひとの最後の言葉』、2009年3月』、筑摩書房、2009.3、その他、『ひとの最後の言葉』、243-251頁、2009.3

「釈徹宗『『不干斎ハビアン』新潮選書』、2009.1、その他、『日本海新聞』、2009年3月8日号、2009.3

「谷川穰『『明治前期の教育・教化・仏教』、思文閣出版、2008.2、学術論文誌、『史林』、第92巻第3号、155-161頁、2009.5

(4) 解説

解説、『島藺進・高橋原・星野靖二編『日本の宗教教育論』第7巻、クレス出版』、巻末7-17頁、2009.11

3. 主な社会活動

(1) 行政

総合科学技術会議生命倫理調査会、委員、2007～

宗教法人審議会、委員、2004.4～

(2) 学会

「British Journal of Sociology (英国社会学会学術誌)」、編集顧問、2007～

(3) 学外組織 (学協会、省庁を除く) 委員・役員

「日本宗教連盟」、理事、2005.4～

日本宗教学会会長、2008.9～

「国際宗教研究所」、常務理事、2000～

「東京大学仏教青年会」、理事、2007～

「Japanese Journal of Religious Studies」、編集顧問、2007～

「Social Science Japan Journal」、編集顧問、2007～

「British Journal of Sociology (英国社会学会学術誌)」、編集顧問、2007～

特任教授 **清水 哲郎** SHIMIZU, Tetsuro

1. 略歴

1969年4月 東京大学理学部天文学科卒業

1972年3月 東京都立大学人文学部人文学科 (哲学専攻) 卒業

1974年3月 同大学大学院人文科学研究科修士課程修了
1977年3月 同大学大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学
1977年6月～80年8月 東京都立大学人文学部倫理学講座助手
1980年8月～82年8月 北海道大学文学部西洋哲学第二講座講師
1982年8月～93年3月 同 助 教 授
1990年2月 文学博士(東京都立大学)
(1990年10月～91年6月 文部省在外研究員(英国ケンブリッジ大学))
1993年4月～96年3月 東北大学文学部助教授(西洋哲学史第一講座)
1996年4月～2000年3月 同 教 授
2000年4月～2007年3月 東北大学大学院文学研究科教授(哲学講座)
(2004年4月～2006年3月 東北大学教育研究評議会評議員、文学研究科副研究科長)
2007年4月～現在 東京大学大学院人文社会系研究科 次世代人文学開発センター 上廣死生学
講座 特任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

哲学、臨床死生学、臨床倫理学、西欧中世思想

b 研究課題

①医療現場に臨む哲学・臨床倫理学から臨床死生学へ 医療の現場への哲学的アプローチから出発し、その思索を医療の質の向上につなげるべく、研究と実践が一体となった活動を行っている。従来の人文系の研究者による生命倫理学研究は現場と結びつかずに終わっていたのに対し、80年代後半から医療現場の医師、看護師等と対話しつつ哲学するという新しい試みをして来ており、その線上で、医療者が患者・家族とコミュニケーションを通して治療方針の決定等に至るプロセスを、現実にも有効であり、理論的にも適切に基礎付けられたものとして整えようとする臨床倫理学研究に取り組んでおり、最近では、介護の現場にも活動領域を広げている。この線上で、臨床現場において死生をどう理解し、その理解を医療・介護のケア実践にどう活かして行くかという臨床死生学の課題に向かっている。

②西欧中世の言語哲学・キリスト教思想 西欧中世における言語と論理の哲学をテーマとし、当時の哲学者たちが古代ギリシア哲学とキリスト教思想の伝統を受け継ぎ、この二つの絡み合いにおいて西欧中世特有の哲学的思索を展開していく状況を明らかにしつつ、現代の私たちの哲学がそこから学び得るものを見出すとしている。アンセルムス、アベラルドゥス、オッカムを主要な研究対象としているが、さらにキリスト教思想伝統の源流であるパウロ思想等にも取り組む。この系統の研究はさらに死生学領域にもつながるものと今後なっていくであろう。

c 主な業績 2008. 4～2010.3

(1) 著書

編著

岩波講座哲学第1巻『いま(哲学する)ことへ』、共著(飯田隆他と共に)、岩波書店 2008.6

執筆担当:「現場に臨む哲学の可能性」(253-275)

岩波講座哲学第8巻『生命/環境の哲学』、共編著(飯田隆他と共に)、岩波書店 2009.6

執筆担当:展望「世界把握の枠組みとしての〈生命-環境〉」(1-13)

『どう生き どう死ぬか——現場から考える死生学』、清水哲郎監修、岡部健、竹之内裕文編著、弓箭書院、2009.5

執筆担当:終章「人生の終わりをどう生きるか:死に直面した意思決定」(245-264)

”*The Word in Medieval Logic, Theology and Psychology*”、Shimizu T & Burnett C (eds.), Brepols, 2009, 440ps.

執筆担当: Introduction、1-13;

『生命と環境の倫理』、編著、放送大学教育振興会、2010.3

執筆担当:1章(9-17頁)、10～15章(152-251頁)

(2) 論文その他

世界について語る論理——コメントをいくつか、グレアム・プリースト(訳:菅沼聡、解説:清水哲郎)『一冊でわかる 論理学』,143-161, 2008.2

鎮静をめぐる臨床倫理、がんけあナビ, 1-5:70-75, 2008.5
緩和ケアと臨床倫理、Pharma Medica, 26-7:43-46, 2008.7
臨床倫理検討シート、緩和ケア, 18 suppl:139-142, 2008.10
時の流れを越えた場に向かって——死に直面する人間の希望、熊野・下田編『死生学2 死と他界が照らす生』115-136, 2008.12
死の訓練としての哲学——カシオドルス・イシドルス・アルクィヌス、東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要, 22(2009):1-8, 2009.3
臨床倫理の考え方と検討の実際（研修会用テキスト、厚生労働省科研費等による刊行（非売品）：2009 年春版 2009.3；2009 年度冬 β版 2009.12）
高齢者ケアにおける意思決定プロセス、岩波『科学』80-1(2010 年 1 月号): 93-97, 2010.1

(3) 研究費の獲得状況

科学研究費 基盤研究 (A) 「西欧中世における言語哲学の展開と諸学における意義」(2005～2008) 研究代表者

厚生労働省・難治性疾患克服研究事業「特定疾患患者の生活の質 (Quality of life, QOL) の向上に関する研究」分担研究者

(4) 学会講演・国際会議発表など

第 55 回日本実験動物学会総会／第 42 回日本実験動物技術者協会総会シンポジウム「動物実験倫理と生命倫理」提題「動物の被験者保護と死生観」2008.5.16、仙台

第 13 回 日本緩和医療学会大会シンポジウム「終末期医療における臨床倫理：こんな時どう考える？」提題「臨床倫理検討の方法論の視点から」 2008.7.5

日本臨床死生学会第 14 回大会 基調講演「安楽死とは何か」, 2008 年 9 月 6 日, 札幌

持続可能な Well Being に関する国際会議 “A Conception of well-being based on “capability” and its sustainability based on relational intergenerational ethics,” 2008 年 9 月 13 日, 東京

2008 Carnegie-Uehiro-Oxford Uehiro Centre Conference, Keynote Lecture, “Relational System of Clinical Ethics: theory and practice in Japanese medical activities”, 12/Dec/2008.

The 3rd BESETO Conference of Philosophy, “Concept of sustainable well-being based on “capability” and relational intergenerational ethics”, 2009.1.10-11、東京大学駒場

International Conference “Saint Anselm of Canterbury and His Legacy”, “Ockham as an heir to Anselm”, 2009.4.25, Canterbury, UK.

第 15 回日本臨床死生学会大会 大会長講演「ケアと臨床死生学・倫理学」2009.12.5

3. 主な社会活動

(1) 学術団体役員・各種委員等

日本医学哲学・倫理学会会長

第 15 回日本臨床死生学会大会長

日本学術会議連携会員

日本哲学系諸学会連合事務局長

日本哲学会委員

中世哲学会理事

日本倫理学会評議員

日本生命倫理学会理事

日本臨床死生学会常任理事

東北大学利益相反アドバイザーボード 委員

みやぎ在宅ホスピスケアネットワーク 代表

東北大学薬学研究科 倫理委員会 委員

東札幌病院臨床倫理委員、倫理セミナー講師

日本緩和医療学会 鎮静ガイドライン作成専門委員

同 終末期輸液ガイドライン作成専門委員

(2) 他大学への出講

東北大学大学院医学系研究科非常勤講師 (2008～9 年度)、医療倫理

宮城大学大学院非常勤講師 (2008~9年度)、看護倫理
聖心女子大学大学院非常勤講師 (2009年度)、現代哲学特論
島根大学大学院医学研究科(看護学)非常勤講師(集中 2008~9年度)、看護倫理
新潟県立看護大学大学院非常勤講師(集中 2008年度)、看護倫理
放送大学客員教授「生命と人生の倫理」主任講師 (~2009年度)

(3) 講演、研修会講師等

東京大学 GCOE「死生学の展開と組織化」事業推進担当者としてリカレント教育「医療・介護従事者のための死生学」担当。夏季・冬季セミナー開催(東京大学 2008~9年度 計4回)。全国各地にて出前セミナー：臨床倫理セミナー in さっぽろ(2008.10.18; 2009.2.28; 2010.2.6)、臨床倫理セミナー in 霧島(2009.2.21)、臨床倫理セミナー in 大阪(2010.2.28)

社会保険連合研修センター 感染管理研修「医療倫理」 2008.5.27; 2009.5.22

取手共同病院講演「臨床倫理の考え方と実際」2008.10.31

千葉大看護学部 乳がん看護認定看護師コース講師「臨床倫理」2008.11.7; 2009.7.30

岩手医科大学特別講義「安楽死と尊厳ある死—終末期医療の視点から」2008.11.21

医療事故・紛争対応研究会 講演 「患者の最善と患者の意思の狭間で——意思決定プロセスの臨床倫理」
2008.12.6 東京大学

がん看護学会 SIG 臨床試験看護師会「臨床倫理——益と害のアセスメント」 2009.1.24、東京：国立がんセンター

兵庫県医師会脳神経外科・神経内科診療所医会第5回難病フォーラム講演「臨床倫理学——終末期医療の意思決定プロセスを中心に——」2009.2.14、神戸

看護協会研修センター研修「臨床看護実践における倫理」講演「医療現場における倫理——哲学の視点から——」2009.2.17、神戸

宮城高等看護学校講演「患者の権利を尊重する看護」 2009.2.23 ; 2010.3.17

東京都立広尾病院講演「臨床倫理——基礎と実際」 2009.3.11

千葉県救急医療センター講演 「臨床倫理エッセンシャル」2009.5.22

京都大学大学院人間健康学研究科 講演 2009.6.3, 17

東京都立駒込病院講演「臨床倫理エッセンシャル」 2009.7.1

QOL研究会 講演 「悲嘆とQOL」 2009.7.11 神戸女学院大学

東京都老人総合研究所講演 「高齢者の終末期における意思決定」2009.7.29

宇和島市立病院講演「臨床倫理検討シートの使い方」2009.8.7; 2010.1.22

まつもと医療センター 中信松本病院 「終末期における治療の差し控えと中止」2009.9.24

砺波総合病院講演 「臨床倫理——治療の差し控えと中止をめぐって」2009.9.26

姫路臨床神経内科医会講演「終末期医療における意思決定の臨床倫理」 2009.10.1

第5回神経難病の非侵襲呼吸ケア・ワークショップ 講演「神経難病と臨床倫理」 2009.10.3

京都大学附属病院講演「終末期医療における意思決定の臨床倫理」 2009.10.16

CLC 研究事業「《最期まで自分らしく》を支える」研修会講演 2009.10.24 仙台; 2010.1.30 千葉 2.7 栃木; 東京 3.21

鳥取大学 講義 2009.10.28

岡山大学病院講演「医療というケアを支える倫理——臨床倫理入門」2009.10.29

社会保険連合研修センター がん性疼痛認定看護師コース講師「臨床倫理」2009.11.6

南岡山医療センター講演「臨床倫理」2010.1.23

看護倫理学会ワークショップ講演「臨床倫理ベーシック」2010.1.24 大阪

大田区明るい社会作り運動の会 講演「人生の最期まで尊厳をもって生きるために」 2010.1.31

十和田市立中央病院講演「臨床倫理」2010.2.10

ファイザー製薬第37回 HS20/20 (Health & Science Twenty-Twenty) 講演「臨床死生・学と臨床倫理学——生と死の狭間での意思決定プロセスを考える」2010.2.18

大阪府医師会勤務医部会研修会 「臨床倫理と死生学」2010.2.23

茨城キリスト教大学講演「「患者の生死に寄り添える看護者の新たな視点の模索」2010.2.24

世田谷区シンポジウム「死を想い、死ぬまでの生き方を想う」講演「豊かな人生の終わりをめざして」2010.3.20

1. 略歴

1996年12月 University of Edinburgh, Graduate School of Social and Political Studies 修了 (MSc with Distinction in Social Anthropology)

2002年3月 京都大学 大学院人間・環境学研究科 環境相関研究専攻 博士課程単位取得退学 (2006年1月: 博士 (人間・環境学) 取得)

2002年4月～2005年3月 京都大学 大学院医学研究科 非常勤講師

2003年4月～2005年3月 同志社大学 社会学部 非常勤講師

2005年4月～2006年3月 京都大学 大学院医学研究科 非常勤研究員

2006年4月～2007年3月 関西看護医療大学(前・順心会看護医療大学) 専任講師

2007年4月～現在 東京大学 大学院人文社会系研究科 次世代人文学開発センター 上廣死生学講座 特任講師

2. 主な研究活動

a 専門分野

死生学、医療社会学、質的研究

b 研究課題

現代日本社会における生きづらさについて、その現象の解明と是正策の検討を研究の根幹に据えている。具体的には、①マンガを題材に死生の物語の構築と読解という現象に照準し、そこにいかなる死生観や医療観がどのように生産・消費されるのかを解明することで、「良い死」という概念を問いなおす、②死別悲嘆(とくに公認されない悲嘆[disenfranchised grief])にまつわる現象の解明とグリーフケアのあり方を検討する、③地方(青森県)におけるがんをめぐる病気観・医療観などを探り、予防やケアの可能性と限界を考察する、④保健医療研究および死生学研究における質的研究の実践と可能性を検討する、⑤性的マイノリティの文化と HIV 感染リスクの関係を分析し、感染予防に役立つ知見を生成する、といった研究に 2008～2009 年度は取り組んだ。

c 主要業績

(1) 著書

共訳、『ナラティブ・ベイスト・メディスンの臨床実践』, 金剛出版, 2009.6

(2) 論文 (翻訳論文を含む)

『イキガミ』を読む——死生の物語の構築と読解に関する試論『死生学研究』第9号, 304(43)-279(68) 頁, 2008

「悲嘆と向き合う死生学」『春秋』第499号, 8-11頁, 2008.6

「死別とグリーフに向き合う——他者へのケアとセルフケア(二)」(Wogrin C 著, 山崎浩司訳)『死生学研究』第11号, 8-44頁, 2008.9

Rethinking Good Death: Insights from a case analysis of a Japanese medical comic. *Carnegie-Uehiro-Oxford Conference*,

http://www.practicaethics.ox.ac.uk/Docs/yamazaki_uehiroconf_medicalcomic.pdf, 2008.12

Research into Accupuncture for Respiratory Disease in Japan: a systematic review. (with Suzuki M & Yokoyama Y) *Accupuncture in Medicine*, 27, 54-60, 2009

Characteristics of Qualitative Studies Published in Influential Journals of General Medicine: a critical review. (with Slingsby BT, Takahashi M, Hayashi Y, Sugimori H & Nakayama T) *BioScience Trends*, 3(6), 202-209, 2009

「青森県民のがん検診に関する認識と経験——胃がん・大腸がん・肺がんの検診を中心に」(横山葉子・石倉綾子・開沼博・梶原葉月・佐藤まなび・橋本望・原田満里子・宮崎亮・山田淑子・大西基喜, 共著)『保健師ジャーナル』第66巻第4号, 358-365頁, 2010.3

(3) 研究報告書

「インターネットを利用する MSM の HIV 感染リスク行為をめぐる意味づけと行為の検討」(横山葉子・日高庸晴, 共著)『インターネット利用層への行動科学的 HIV 予防介入とモニタリングに関する研究 (厚生労

働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成 20 年度 総括・分担研究報告書』, 82-93 頁, 2009.3

『青森県民の胃がん・大腸がん・肺がんの検診にまつわるがん予防意識調査報告書』(横山葉子・石倉綾子・開沼博・梶原葉月・佐藤まなび・橋本望・原田満里子・宮崎亮・山田淑子・大西基喜, 共著) 東京大学大学院人文社会系研究科・青森県健康福祉部保健衛生課, 全 47 頁, 2009.3

「HIV 陽性 MSM の感染リスクと HIV 対策をめぐる意味づけと行為の検討」(横山葉子・日高庸晴, 共著) 『インターネット利用層への行動科学的 HIV 予防介入とモニタリングに関する研究 (厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 平成 21 年度 総括・分担研究報告書)』, 78-85 頁, 2010.3

『青森県がん体験者の語りデータベース構築のための調査研究報告書』(飯塚久子・和泉聡子・岩田光行・上間愛・大迫充江・大場良子・開沼博・梶原葉月・神田雅貴・向後裕美子・今野啓介・佐藤まなび・高野みどり・中川真美・橋本望・原田満里子・平野裕子・三品竜浩・安原千賀・横山葉子, 共著) 東京大学大学院人文社会系研究科・青森県健康福祉部医療薬務課, 全 54 頁, 2010.3

(4) 学会・研究会発表, 講演

「ストラウス/死の意識」健康と病の社会学研究会, 佛教大学四条センター, 2008.4.25

「質的研究について」日本看護研究学会・東海部会, 名古屋第二赤十字病院, 2008.8.9

「医療とメディアにおける〈良い死〉」第 35 回質的研究の会, 奈良女子大学, 2008.11.3

「ライフスタイルとしてのケア: ケアラー体験の把握とサポートシステムの創出」日本質的心理学会第 5 回大会, 筑波大学, 2008.11.29

“Rethinking Good Death: Insights from a case analysis of a Japanese medical comic”, Carnegie-Uehiro-Oxford Conference, University of Oxford, 2008.12.12

「グラウンデッド・セオリー・アプローチの苦難」第 1 回「書くための質的調査」研究会, 同志社大学, 2009.3.27

「MSM による性交渉の意味づけ——男性同性間性交渉による HIV 感染の予防介入にまつわる示唆」第 35 回日本保健医療社会学会大会, 熊本大学, 2009.5.17

「参与観察をめぐる交渉」第 2 回「書くための質的調査」研究会, 京都大学, 2009.6.26

「青森県民の胃がん・大腸がん・肺がんの予防にまつわる認識と行動」第 24 回日本保健医療行動科学学会学術大会, 甲南大学, 2009.6.28

「幸せに生きるとは」上越教育大学地域貢献フォーラム「生きがい感を高める教育とは」, 上越教育大学, 2009.7.4

「男性の死別悲嘆? ——死生学からの考察」第 5 回 GCC グリーフ・カウンセラー定例勉強会, グリーフ・カウンセリング・センター, 2009.7.18

「死と看取りの社会学: その問題圏」へのコメント」第 56 回東北社会学会, 東北学院大学, 2009.7.19

「ライフスタイルとしてのケアラー体験とサポートモデルの構築/配偶者との死別にまつわる悲嘆のプロセスの解明——死別悲嘆のジェンダー差とケアの在り方の検討」第 50 回 M-GTA 研究会, 立教大学, 2009.8.1

「質的研究における分析——M-GTA を中心に」質的研究勉強会, 京都大学, 2009.8.21

「立ち上がる【研究する人間】」日本質的心理学会第 6 回大会, 北海学園大学, 2009.9.12

「死生学教育に対する教育現場からの発言」聖学院大学 2009 年度第 4 回死生学研究会, 新都心ビジネス交流プラザ, 2009.10.24

「データの切片化と【研究する人間】——M-GTA の分析特性をふりかえる」2009 年 M-GTA 公開研究会, 聖隷クリストファー大学, 2009.11.14

「MSM によるハッテン場での性交渉の意味づけ——男性同性間性交渉による HIV 感染の予防介入にまつわる示唆」第 23 回日本エイズ学会学術集会・総会, 名古屋国際会議場, 2009.11.26

「データをめぐる競合と協働——参与観察調査を書くために」第 3 回「書くための質的調査」研究会, 龍谷大学, 2009.12.21

「幸せに生きるとは——日常の死生学から考える」第 13 回「いのち」をめぐる連続講演会, 新潟県立がんセンター新潟病院, 2010.2.26

「男性同性間性交渉における HIV 感染リスクをめぐる意味づけと行為の検討——生きづらさをてがかりに」第 39 回質的研究の会, 奈良女子大学, 2010.3.14

(5) 研究費の獲得状況

青森県がん対策推進事業費「がん予防意識調査」, 研究代表者: 山崎浩司 (東京大学), 2008 年度

青森県がん対策推進事業費「がん体験者の語りデータベース構築のための調査研究」, 研究代表者: 山崎浩司 (東京大学), 2009 年度

分担研究：文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 B 「「生きがい感」を高める教育の開発と科学的評価」
研究代表者：カール・ベッカー（京都大学），2009 年度～2012 年度
分担研究：文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 B 「ライフスタイルとしてのケアラー（介護・養育）体験
とサポートモデルの構築」
研究代表者：木下康仁（立教大学），2009 年度～2012 年度
分担研究：文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 B 「緩和ケアへの移行と実施の円滑化に向けた研究」
研究代表者：宮崎貴久子（京都大学），2009 年度～2011 年度
分担研究：文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 C 「家族における死者のメンバーシップ：死者の社会的
生を問う」
研究代表者：木村好美（早稲田大学），2009 年度～2011 年度
厚生労働省科学研究費補助金 エイズ対策研究事業、「インターネット利用層への行動科学的 HIV 予防介入とモタリ
ンゲに関する研究」
研究代表者：日高庸晴（関西看護医療大学），2008 年度～2010 年度

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

聖学院大学大学院人間福祉学研究科（2008 年度秋学期、2009 年度春学期：水 18:00～21:00）

新潟大学医学部保健学科（単発講義：2008.10.11）

神奈川県立保健福祉大学実践教育センター研究基礎講座（集中講義：2009.1.21、2010.1.16）

立教大学社会学部非常勤講師（2009 年度秋学期：水 16:30～18:00）

東京理科大学薬学部非常勤講師（4 コマのみ：2009.10.5・19・26・11.2）

滋賀県立大学看護学部（単発講義：2008.10.11）

(2) 学外組織（学協会、省庁を除く）委員・役員

青森県総合的地域診断手法に係る研究検討委員会委員

実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）研究会世話人

質的研究の会代表

日本マンガ学会若手研究者ネットワーク部会発起人

日本臨床死生学会第 15 回大会実行委員

《萌芽部門》

教授 **古井戸 秀夫** FURUIDO, Hideo

1. 略歴

1974 年 3 月 早稲田大学第一文学部演劇専攻学士
1976 年 3 月 早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻修士
1982 年 3 月 早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇専攻 博士退学
1981 年 4 月 早稲田大学文学部助手
1984 年 4 月 早稲田大学文学部専任講師
1987 年 4 月 早稲田大学文学部助教授
1992 年 4 月 早稲田大学文学部教授
2006 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

演劇学・舞踊学

b 主要業績

(1) 論文

「舞踊—近代から現代へ」、国立劇場企画編集『日本の古典芸能舞踊・演劇』（淡交社）、2009.2

(2) 予稿・会議録

基調講演、「歌舞伎・日本舞踊と狂言の舞踊」、2008.6.22、「『楽劇学』16」、2009.3

招待講演、「歌舞伎の18世紀」、2008.6.22、「『日本18世紀学会年報』24」、2009.6

招待講演、「江戸のお祭り」、邦楽、西洋とくらぶれば、紀尾井小ホール、2009

招待講演、「シェイクスピアの時代に歌舞伎は何を描こうとしたのか?」、新国立劇場 2009.11.11

招待講演、「江戸歌舞伎の劇場ならびに舞台の特色」、演劇舞台構造の国際比較研究会、早稲田大学、2009.12.12

(3) 書評

「服部幸雄『絵で読む歌舞伎の歴史』」、学術論文誌、『楽劇学16』、2009.3

(4) 監修

「国立劇場第262回歌舞伎公演『誦競艶仲町』監修」、2009.1

(5) 啓蒙

「『誦くらべ』の復活上演」、『国立劇場第262回歌舞伎公演解説書』、2009.1

「道成寺物の系譜③」、『日本舞踊振興財団会誌『NBF』35』、2009.1

「鶴屋南北の覆面」、学術論文誌、『日本演劇学会会報73』、2009

「三遊亭円朝『文七元結』と河竹黙阿弥『三人吉三』」、『歌舞伎座二月大歌舞伎筋書』、2009.2

「色悪の系譜」、一般雑誌、『演劇界3月号』、2009.3

「初代市川団十郎の『暫』と近松門左衛門の『毛剃』」、『歌舞伎座五月大歌舞伎筋書』、2009.5

「『正札付根源草摺』と『蝶の道行』」、『歌舞伎座六月大歌舞伎筋書』、2009.6

「歌舞伎の無頼」、『俳句雑誌『塵風』創刊号』、2009.6

「道成寺物の系譜④」、『日本舞踊振興財団会誌『NBF』36』、2009.7

「江戸の祭と子供たち」、『紀尾井小ホールパンフレット「邦楽、洋楽とくらぶれば」25』、2009.7

「『船弁慶』」、『歌舞伎座八月納涼大歌舞伎筋書』、2009.8

「清元『お祭』」、『歌舞伎座九月大歌舞伎筋書』、2009.9

「『操り三番叟』と『身替座禪』」、『歌舞伎座十二月大歌舞伎筋書』、2009.12

3. 主な社会活動

(1) 行政

「文化審議官（文化功労者選考分科会）」、委員、2009.1～2009.12

「文化庁」、芸術選奨選考委員（評論部門）、2009.1～2009.12

「国立劇場」、国立劇場舞踊公演専門委員、国立劇場舞踊公演専門委員、2009.1～2009.12

「国立劇場」、国立劇場復活上演候補作品検討委員会委員、2009.1～2009.12

「芸術文化振興基金」、芸術文化振興基金運営委員会（伝統芸能・大衆芸能専門委員）、2009.1～2009.12

「文化庁」、芸術団体人材育成支援事業協力者会議審査委員会（伝統芸能部門専門委員）、2009～

(2) 学会

「舞踊学会」、会長、2008.1～2009.12

「日本演劇学会」、理事、2008.1～2009.1

「楽劇学会」、理事、2008.1～2009.12

「文化資源学会」、理事、2008.1～2009.12

(3) 学外組織委員（学協会、省庁を除く）委員・役員

「日本舞踊協会」、顧問、2009.1～2009.12

「日本舞踊花柳流」、顧問相談役、2009.1～2009.12」

教授 **松村 一登** MATSUMURA, Kazuto

<http://www.kmatsum.info/introd/index.html>

1. 略歴

1995年 4月 東京大学文学部附属文化交流研究施設助教授
1996年 11月 東京大学文学部附属文化交流研究施設教授
1997年 8月 同 大学院人文社会系研究科附属文化交流施設教授
2004年 4月 同 大学院人文社会系研究科言語動態学講座教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

言語学、ウラル諸語、ロシアの少数言語のテキストの電子化、コーパスを用いた文法研究

b 研究課題

科研費（基盤研究）のプロジェクトを中心に、次のような研究活動を行った。

- (1) エストニア・タルト大学のコーパス言語学研究者と言語データやツールの交換を含む研究交流を行った。
- (2) フィンランド・トゥルク大学のマリ語研究者と言語データやツールの交換を含む研究交流を行った。
- (3) エストニア国会図書館の協力を得て、20世紀初めのエストニア語の言語資料（193万語）を電子テキスト化し、言語コーパスとすて利用可能なようにXML文書化した。また、このコーパスを含むエストニア語のコーパスを複数用いて、エストニア語の研究を行った。
- (4) スウェーデン北部、トーネ川流域のフィンランド語系少数言語・メアンキエリ語のコミュニティーを訪問し、メアンキエリ語の言語資料を収集するとともに、学校などを訪問し、現地の言語事情を調査した。

c 主要業績

(1) 研究報告書

「電子化された言語資料と個別言語研究」、2009.3

(2) 学会発表

「エストニア語の動詞 *joudma* の多義性について」、日本ウラル学会35回研究大会、2008.7.5

「エストニア語の動詞 *pruukima* 「必要だ；用いる」の多義性—コーパスと辞書の記述に基づく考察—」、日本言語学会137回大会、2008.11.29

「エストニア語の他動詞文における「接格+動詞 *mast* 形」構文」、日本ウラル学会36回研究大会、2009.7.11

「コーパスから見える統語的变化—エストニア語の不定詞構文—」、日本言語学会139回大会、2009.11.28

(3) 受賞

「Maarjamaa Risti IV klassi teenetemark」、The 4th class Order of the Cross of Terra Mariana、エストニア共和国政府、2009.2.23

3. 主な社会活動

(1) 学会

「日本言語学会」、役員・委員、会計監査委員、2007～

「Suomalais-Ugrilainen Seura [フィン・ウゴル学会]」、一般会員、2007～

「Suomalaisen Kirjallisuuden Seura [フィンランド文学協会]」、一般会員、2007～

「Societas Linguisticae Europae」、一般会員、2007～

「CONGRESSUS XI INTERNATIONALIS FENNO-UGRISTARUM」、役員・委員、国際委員、2008.1～

「日本ウラル学会」、役員・委員、理事、2008.1～2008.12

「日本言語学会」、役員・委員、評議員、2009.4～

1. 略歴

- 1974年3月 東京教育大学文学部史学科東洋史学専攻卒業
- 1977年3月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（東洋史学）修了
- 1980年3月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（東洋史学）中退
- 1980年4月 東海大学文学部文明学科西アジア課程専任講師
- 1987年4月 東海大学文学部文明学科西アジア課程助教授
- 1992年4月 東京外国語大学外国語学部中東語学科（トルコ語）助教授
- 1995年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 1996年4月 東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

中央アジア近現代史

b 研究課題

- (1) 19世紀末～20世紀初頭の中央アジアにおけるムスリム知識人の思想と運動
- (2) ソ連解体後にその歴史・文化的な広がりが見えるようになった中央ユーラシアの地域研究
- (3) 近現代中央アジアにおけるイスラーム復興

c 主要業績

(1) 著書

『イブラヒム、日本への旅：ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房、176頁、2008.10

(2) 論文：

「聖戦から自治構想へ：ダール・アル・イスラームとしてのロシア領トルキスタン」『西南アジア研究』69、59-91頁、2008.9

「中央アジアの動態を読む：GISによる地域研究の試み」水島司・柴山守編『地域研究のためのGIS』古今書院、95-112頁、2009.10（後藤寛との共著）

(3) 解説

「バルトリド：中央アジア史に不朽の業績」『興亡の世界史03 通商国家カルタゴ』月報、講談社、1-3頁、2009.9

(4) 啓蒙

「イスラーム復興の潮流とその行方」（公開シンポジウム：「シルクロード」は、いま——中央ユーラシアの現在をさぐる）『東西南北』2008、18-26頁、2008.3

「中央アジア 2008年夏：ソ連時代の記憶と現代のイスラーム復興」『イスラーム地域研究ジャーナル』Vol.1 (2009)、9-13頁、2009.3

(6) 学会発表

「中央ユーラシア研究の展望：現状と課題」日本中央アジア学会、松崎町商工会議所、2008.4.1

Historical Perspective of Central Eurasia: Central Eurasian Studies in Japan, Central Eurasia in World History, Seoul National University, 2008.4.18

A Pan-Islamist's Journey: Russia, the Ottoman Empire and Japan, Center for Pacific Asia Studies Seminar, Center for Pacific Asia Studies, Stockholm University, 2008.9.30

Historical Perspectives on Central Asian Studies in Japan, Workshop on Central Asian History: Vision and Revision, Stockholm University, 2008.10.1

Japonya'da Merkezi Avrasya Araştırmalarına Yaklaşımlar: Geçmiş be Bugün, International Conference on Central Eurasian Studies: Past, Present and Future, 17 March 2009, Maltepe University (Istanbul, Turkey), 2009.3.17

「イブラヒムの旅路：イスラーム世界と日本」日本大学史学会大会、2009年6月13日、日本大学文理学部百周年記念館

3. 主な社会活動

(1) 共同研究等

「NIHU プログラム イスラーム地域研究」東京大学拠点代表、2008.4～2010.3

(2) 他機関での講義等

学習院大学文学部非常勤講師、2008.4～2008.7

筑波大学非常勤講師、2008.10

(3) 学会

内陸アジア史学会常任理事、2008.4～2010.3

日本中央アジア学会理事、2008.4～2010.3

日本中東学会理事、2009.4～2010.3

教授 **下田 正弘** SHIMODA, Masahiro

1. 略歴

- 1981.03 東京大学文学部印度哲学印度文学専修過程卒業
- 1981.04 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）入学
- 1984.03 東京大学大学院人文科学研究科修士課程（印度哲学）修了
- 1984.04 東京大学大学院人文科学研究科博士課程（印度哲学）進学（-1989.3）
- 1985.07 インド・デリー大学大学院留学（文部省国際交流計画）（-1986.05）
- 1988.04 日本学術振興会特別研究員（-1990.03）
- 1994.06 博士（文学）（東京大学）
- 1994.10 東京大学文学部助教授
- 1995.04 東京大学大学院人文社会系研究科助教授
- 2006.04 東京大学大学院人文社会系研究科教授
- 2007.04 東京大学文学部次世代人文学開発センター兼任教授

2. 主な研究活動

a 専門分野 と b 研究課題

専門分野はインド仏教の教典形成史、および人文情報学。前者については *sutra*, *vinaya* の形成過程解明を通して初期仏教から大乘仏教にいたる思想史、社会背景史の解明を目標とする。目下の研究課題は(1)大乘仏教の形成過程および大乘仏教の特徴についての従来の研究のみならず、(2)仏教学を支える近代の仏教研究方法の問いなおし、および(3)仏教と現代の諸問題とのかかわりの考究という3点に集約される。西洋近代から生まれ、200年の歴史を有する仏教学を検証する視野のなかにこれら3点を据え、仏教学の進む新たな道を模索している。後者の課題、すなわち人文情報学については、仏教文献の電子化事業を進める過程で3年ほど前から本格的に着手。科学研究費基盤A「国際連携による仏教学術知識基盤の形成」のプロジェクトを中心に、次世代に向けた仏教学の国際的知識基盤づくりを始めた。

c 研究業績

(1) 著書

- 1. 編著（熊野純彦と共編）『死生学2 宗教と他界が照らす生』東京大学出版会、2008.12
- 2. 共著（聖心女子大キリスト教文化研究所）『仏教の人間観と現代』、春秋社、2009.2
- 3. 共著 *Acta Asiatica*, Bulletin of the Institute of Eastern Culture 96, 2009.2
- 4. 共著『戒律と倫理』、平楽寺書店、2009.7
- 5. 共著『宗教史とはなにか（下）』2009.12
- 6. 共著 *Indian Philosophy and Text Science*, Motiral Banarsidass, Delhi, 2010.2

(2) 論文

- 1. (永崎研宣と共著)「人文系データベース」における相互運用性をめぐる諸問題『人文科学とコンピュー

タシンポジウム論文集』 pp, 19-26, 2008.4

2. 「涅槃について——仏教における「いのち」」『東方』 24, pp.30-45, 2009.3

3. 「伝承というとなみ——実践仏教の解釈学」『親鸞教学』 93, pp.23-45, 2009.3

4. 「仏教の倫理を考察するための視点——縁起から二諦へ」『日本仏教学会年報』 74, pp.1-13, 2009.3

5. “Aspects of the Interoperability in the Digital Humanities,” *Digital Humanities* 2009, 2009.7

(3) 書評

1. 「藤田宏達『浄土三部経の研究』」『宗教研究』 362, pp.253-261, 2009.12

(4) 総説・総合報告

1. 「人文系データベースのゆくえと人文学」『明日の東洋学』（東洋文化研究所ニューズレター20） pp.3-6, 2008.10

2. 「戦前日本における仏教研究」『宗教研究』 363, pp.80-81, 2010.3

(5) 研究報告書

1. 「仏教学デジタルアーカイブの構築にむけて」『古写経研究の最前線』（国際仏教学大学院大学） pp.25-31, 2010.2

(6) 学会発表

1. “Mahayana as a Continuous Movement of Creating Sutras: Focusing on a Nirvana Sutra in the Ekottaragama Intermediate between the Main Stream and the Mahayana,” Stanford Lecture, Stanford University, 2008.2.7

2. “What Are the Nirvana Sutras and What Do They Tell Us, Nirvanasutra and Buddhism,” Columbia University, New York, 2008.3.17

3. 「仏典コーパスの誕生と仏教世界の出現——媒体の展開からみた仏教史——」PeSeTo 人文学会議、ソウル大学、2008.3.28

4. “Appearance of a Corpus of Buddhist Scriptures and Appearance of a World of Buddhism,” United Nations Day of Vesak Celebrations 2551/ 2008” (Hanoi, Vietnam) 2008.5.15

5. 「他なる故郷としての南アジア」(南アジア学会創立 20 周年記念シンポジウム)「可能性としての南アジア」京都大学、2008.6.21

6. 「仏教の倫理を考察するための視点」(日本仏教学会学術大会) 叡山学院、2008.9.11

7. 「仏教とサンガ」(真宗総合研究所講演) 大谷大学、2009.6.5

8. “How Can We Retrieve the Twofold Truth in This Secularized World? (International Symposium: Peace in the Buddhist Traditions of India and Tibet) University of Hamburg, Germany, 2009.6.19

9. “Aspects of the Interoperability in the Digital Humanities”, *Digital Humanities* 2009, Maryland, USA, 2009.6.21

10. 「大蔵経の現在」(特定領域研究「寧波プロジェクト」シンポジウム「大蔵経と東アジア世界」) 東京大学人文社会系研究科、2009.9.1

11. 「戦前日本の仏教研究」(宗教学会学術大会) 京都大学、2009.9.12

12. 「日本の仏教学の 120 年を回顧して」(仏教史学会 60 周年記念大会)、龍谷大学、2009.10.17

13. 「経典研究からみる大乘仏教研究の現在」(国際東方学者会議) 東方学会、2009.11.6

14. “Some Reflections of the Nirvanasutra in Mahayana,” *American Academy of Religion*, Montreal, 2009.11.10

15. 「念仏と仏性」(真宗学会学術大会) 大谷大学、2009.11.24

16. 「仏教における死生」(臨床死生学会 15 回大会) 東京大学、2009.12.5

17. 「自死、孤独死、安楽死——仏教思想の立場から」コルモス会議、京都、2009.12.26

18. “The Lotus Sutra as the Teaching in the Age of the Buddha’s Absence,” *International Seminar for Lotus Sutra*, RKK Retreat Center, Kona, USA, 2010.1.27

19. 「日本の人文系データベースの動向と海外」シンポジウム「文化とコンピューティング」、京都大学、2010.2.22

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

1. 武蔵野大学大学院非常勤講師 (2008.4-2010.3)

2. 東洋大学大学院非常勤講師 (2009.4-2010.3)
3. 國學院大學大学院非常勤講師 (2008.4-2009.3)
 - (2) 学外組織委員・役員
 - Eastern Buddhist* 編集委員、2008.10-
 - 「財団法人・東京大学仏教青年会」理事 2008-
 - 「大法輪石原育英会奨学金選考委員」委員 2008-
 - 「財団法人・仏教学術振興財団」理事・評議員 2008-2009.3
 - 「大蔵経データベース化支援募金会」委員 2008-
 - 「日本印度学仏教学会」常務委員 2008-
 - 「東方学会」評議員 2008-
 - 「日本仏教学会」理事 2008-
 - 「南アジア学会」常務理事 2008.4-2009.9、監事 2009.10-
 - 「日本宗教学会」理事 2008.4-2010.3
 - 「仏教思想学会」評議員 2008-
 - 「大蔵経テキストデータベース研究会代表」2008.4-2010.3
 - 「科学研究費委員会専門委員」2008.4-2010.3

准教授 **大稔 哲也** OTOSHI, Tetsuya

1. 略歴

- 1983年3月 早稲田大学第一文学部東洋史学専攻卒業
- 1983年4月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学専門課程）修士課程入学
- 1986年4月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学専攻）博士課程進学
- 1988年12月 エジプト・アラブ共和国カイロ大学文学部留学～1991年3月
- 1992年3月 東京大学大学院人文科学研究科（東洋史学専攻）博士課程単位修得退学
- 1992年4月 日本学術振興会特別研究員
- 1994年4月 山形大学教養部専任講師
- 1996年4月 九州大学文学部助教授
- 2000年4月 九州大学大学院人文科学研究員助教授
- 2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

西アジア史・中東社会史

b 主要業績

(1) 論文

「ムスリムの『参詣の書』より——エジプトの参詣案内記——」、『説話・伝承学』、第18号、40-56頁、2010.3

(2) 学会発表

「ムスリムの参詣案内記・巡礼記から」、説話・伝承学会 2008年度春季大会、名古屋大学、2008.4.27

「中東のキリスト教徒たち——エジプトのコプト・キリスト教徒を中心に——」、国際交流基金主催「中東理解講座：国境を越える人々：中東における宗教と民族の諸相」、国際交流基金、2008.10.30

「オールド・カイロの野帳から——庶民生活、伝統産業と墓地居住——」、西南アジア研究会総会、京都大学大学院文学研究科、2008.12.20

「イスラームへの招待——異文化理解に向けて——」、「世界史補講・時空絵の旅」特別編、小田原高校、2008.12.26

「エジプト死者の街における参詣のシャイフと参詣書」、国際シンポジウム 四国遍路と世界の巡礼 その歴史的諸相の解明と国際比較、愛媛大学、2009.10.31

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講師等

京都大学非常勤講師、2008.12

日本女子大学人間社会学部非常勤講師、2007.4～2010.3

筑波大学北アフリカ研究センター客員共同研究員、2007～

国立民族学博物館共同研究員、2008～

(2) 学会

「日本イスラム協会」、役員・委員、常任理事、2008.4～

「地域研究学会連絡協議会」、役員・委員、事務局長、2008.11～2009.11

「日本中東学会」、理事、2007.4～

「日本歴史学協会」、委員、2006.4～

「史学会」、編集委員、2007.6～、評議員、2010～

3 1 北海文化研究常呂実習施設

准教授 **熊木 俊朗** KUMAKI, Toshiaki

1. 略歴

1990年3月 北海道大学文学部文学科言語学専攻課程卒業

1990年4月 旭化成工業株式会社入社

1994年3月 明治大学文学部史学地理学科考古学専攻卒業

1996年3月 東京大学大学院人文社会系研究科考古学専門分野修士課程修了

1996年4月 東京大学文学部助手（附属常呂実習施設勤務）

2004年4月 北海道常呂町教育委員会社会教育課ところ遺跡の森主幹

2005年2月 博士（文学）学位取得 東京大学大学院人文社会系研究科

2006年4月 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

北東アジア考古学

b 研究課題

北海道を中心とした北東アジア地域の考古学的研究を専門とするが、特に近年は以下の2点を主要な課題として、北海道やロシア極東地域でフィールドワークを中心とした調査研究を行っている。

(1) アイヌ文化成立過程の考古学的研究

(2) 日本列島とアジア大陸の「北回りの交流」に関する研究

c 主要業績

(1) 編著書

『世界遺産と常呂遺跡』東京大学常呂実習施設、2008年7月（共編）

『千島列島先史文化の考古学的研究』東京大学常呂実習施設、2010年3月（共編）

(2) 論文

「続縄文期における北方文化の構図」明治大学文学部考古学研究室編『地域と文化の考古学2』六一書房、

39-54 頁、2008 年 10 月

「オホーツク土器の編年と各遺構の時期について」米村 衛編『史跡 最寄貝塚』網走市教育委員会、303-319 頁、2009 年 3 月

「サハリンの城郭」天野哲也ほか編『中世東アジアの周縁世界』同成社、271-274 頁、2009 年 12 月

「オホーツク土器の編年と地域間交渉に関する一考察」菊池徹夫編『比較考古学の新天地』同成社、709-718 頁、2010 年 2 月

「特集『続縄文文化の特色』 総論——最近の研究動向から——」『北海道考古学』第 46 輯、1-8 頁、2010 年 3 月

(3) 学会発表要旨

「マラヤガバニ遺跡における考古学的調査（2008 年度）」『第 10 回北アジア調査研究報告会』北アジア調査研究報告会実行委員会、5-8 頁、東京大学、2009 年 2 月（共同発表）。

「2009 年度クニャーゼ・ヴォルコンスコエ 1 遺跡の調査について」『第 11 回北アジア調査研究報告会要旨集』北アジア調査研究報告会実行委員会、石川県立歴史博物館、2010 年 3 月（共同発表）。

「北海道北見市トコロチャシ跡遺跡・大島 2 遺跡 調査報告（2008 年度・2009 年度）」『第 11 回北アジア調査研究報告会』北アジア調査研究報告会実行委員会、石川県立歴史博物館、2010 年 3 月（共同発表）。

(4) 海外調査

2008 年 7～8 月 マラヤガバニ遺跡発掘調査

2008 年 12 月 マラヤガバニ遺跡出土資料調査

2009 年 8 月 クニャゼボルコンスコエ 1 遺跡発掘調査

2010 年 2 月 クニャゼボルコンスコエ 1 遺跡出土資料調査

3. 主な社会活動

(1) 学会

北海道考古学会会誌編集委員（2007 年 5 月～）

(2) 審議会委員等

北見市文化財審議会委員会委員（2006 年 4 月～）

北見市史跡整備専門委員（2006 年～）

北見市常呂自治区社会教育推進会議副委員長（2006 年 4 月～）

北見市常呂まちづくり協議会委員（2006 年 6 月～2010 年 3 月）

網走管内博物館連絡協議会監事（2007 年度～）

